走り出した妹を慌てて追いかけようとする古城。そんな古城の背後で、誰かが駆け出す足音がした。アヴローラだ。凪沙の心ない言葉にパニックになって、衝動的に逃げ出してしまったのだ。

「――って、アヴローラ！　ああクソ、なんでこんな……待て、アヴローラ！」

ほんの一瞬悩んで、古城は、仕方なくアヴローラを追いかけた。自宅に戻ろうとしている凪沙よりも、行く当てもなく走り出してしまったアヴローラのほうが危険だと考えたのだ。紘神島の地理に疎いアヴローラは、放っておいたら確実に迷子になってしまう。

「……」

そんな古城たちを見送って、凪沙は黙って胸を押さえる。

心臓が激しく脈を打ち、呼吸が荒くなっていた。全身から冷たい汗が流れている。自分でも抑えきれない大きな力が、身体の中で荒れ狂っているのがわかる。凪沙がアヴローラから離れようとしたのは、魔族に対する恐怖だけが原因ではない。

「駄目だよ、古城君」

苦しげな呼吸を続けながら、凪沙が呟く。

「あたしとその子を会わせてしまったら、すべて終わりになってしまうよ……」

その声は、夕暮れの雑踏にまぎれて誰の耳にも届かない。

6

夜行性の魔族が多く暮らす紘神島では、多くの施設や飲食店が深夜まで営業を続けている。その一方で、ここは太平洋上に浮かぶ孤島であり、島の周囲に人工的な光は皆無。視界を遮るような高い建物もない。天体観測の舞台としては、恵まれた環境だといえるだろう。

特にアヴローラたちが根城にしているマリーナの周辺は暗く、頭上には満天の星空が広がっていた。天体観測の素人である古城たちが見ても、くっきりと星座の形がわかる。

深い海のように澄んだ夜空を、ぽつぽつと青白い流星が流れていく。

そんな贅沢な景色を見上げながらも、アヴローラの表情は暗かった。凪沙に拒絶されてしまったことが、予想外にこたえているのだろう。

「大丈夫か、アヴローラ」

夜食のカップ麺を用意しながら、古城が彼女に呼びかける。

「あのな……凪沙のことは気にするなよ。あいつはおまえのことを嫌ってるわけじゃなくて、魔族が恐いんだ。たぶん、テロリストに襲われたときの恐怖が無意識に残ってるんだと思う。ちゃんと説明しておかなかった俺も悪かったし」

「……彼の者に惨苦を与えしは我が罪過」

船上のデッキで、どんよりと膝を抱えたまま、ぼそぼそと自虐的に呟くアヴローラ。自分自身も記憶をなくしているくせに、生意気にも責任を感じているらしい。

「だからおまえのせいじゃねえって。ほら、いいから喰え」

そう言って古城は完成したカップ麺の蓋を剝がして、アヴローラの前に差し出してやる。

落ちこみながらも匂いにつられて、アヴローラがのろのろと顔を上げた。古城の箸から、白い湯気の立つラーメンをずるずると啜って、

「美味」

「だろ」

ようやく微笑んだアヴローラを見て、古城も安堵の息を吐いた。そのとき古城の死角から、怨霊めいた人影がぬっと浮かび上がる。

「……なにやってんのよ、あんたたち」

「おわっ!?」

不機嫌そうに眉根にしわを寄せ、立っていたのは浅葱だった。天体観測用の双眼鏡を粉砕しそうな勢いで握り締めたまま、密着状態の古城とアヴローラを見下ろしている。

「あーん、とかしちゃって、いやらしい。カップルか！」

「なんだよ。おまえも欲しいのかよ。ほら」

古城は呆れたように嘆息し、浅葱の前にカップ麺の容器を差し出した。そんな古城の反応が

意外だったのか、浅葱は軽く狼狽して、

「え、あ……ま、まあ、どうしてもって言うなら食べてやらないこともないけど……」

意を決したように独りごち、あーん、と口を開けて待つ浅葱。しかし古城とアヴローラは、おお、と夜空を見上げて声を出す。

「でかいの流れたな。今のって流星だよな。飛行機じゃなくて」

「儚きは堕ちゆく星々の煌めきか……！」

「無視すんなこら！　こっちのことも少しは気にしなさいよ、あんたたち！」

憤慨した浅葱が、古城の手からカップ麺を強引に奪い取って、それを一気にかっ喰らい始める。見る間に残量を減らしていく麺を眺めて、まだ一口も食べていない古城が悲鳴を上げる。オロオロとうろたえるだけのアヴローラ。騒がしくも不思議と愉しげな光景だった。

「やれやれ。ガキだねえ、どいつもこいつも」

桟橋の隅に寝転んでいた矢瀬が、船上で騒ぐ古城たちを見上げて苦笑する。

そして彼は、よっ、と腹筋だけで上体を起こして視線を巡らせた。

桟橋のたもとの岸壁に、若い女が立っている。メイド服の上にコートを羽織った、ブルネットの女吸血鬼だ。無邪気にはしゃぐアヴローラを眺めて、彼女は唇を噛んでいる。

「よお、ヴェルさん。戻ってきてたのか、バイト終わったんだな」

よっこらしょ、と立ち上がった矢瀬が、軽薄そうな笑顔でヴェルディアナに近づいた。
「ええ」
弱々しく微笑んで、ヴェルディアナがおざなりに首肯する。矢瀬は、おや、と眉を上げ、
「どうしたんだよ、疲れた顔して。いつもはノリノリでウェイトレスやってるくせに」
「ノリノリじゃない！　あれは生活のために仕方なくやってるだけなの！」
ギッ、と牙を剝いて睨み返してくるヴェルディアナ。ようやくいつもの調子を取り戻した彼女に、矢瀬は声を上げて笑ってみせた。
「アヴローラ、少し元気がないみたいだけど、なにかあったの？」
ヴェルディアナが、声を潜めて矢瀬に訊く。意外に鋭いな、と矢瀬は感心したように瞬きし、
「ああ、古城のやつが、アヴたんを凪沙ちゃんと会わせてみたんだと」
「牙城の娘と!?」
大きく目を見張って、ヴェルディアナが矢瀬に詰め寄った。
「どうなったの!?　十二番目の記憶は戻ったの!?」
「うんにゃ。凪沙ちゃんには近づくなって怒られて、それでアヴたんは落ちこんでる」
矢瀬は素っ気なく首を振る。
彼の胸元を締め上げていたヴェルディアナの指先から力が抜ける。
「駄目だったの？　そんな、どうして……！」

「……なあ、ヴェルさん。アヴたんの記憶って、そうやって無理に取り戻さなきゃいけないようなものなのか？」
深々と溜息をつきながら、矢瀬が子どもをなだめるような口調で訊いた。
「ザハリアスがイブリスベール王子を襲撃したせいで、ネラプシ自治領は〝滅びの王朝〟と戦争状態だ。連中も〝焔光の宴〟なんかやってる余裕はねえだろ。〝戦王領域〟はもともとネラプシと対立してたわけだし、ザハリアスの首には賞金だってかかってる。やつは放っておいても自滅するぞ。あんたの復讐は誰かが代わりにやってくれる」
「だから……なにもせずにここで見てろっていうの……？」
昏い光をたたえた瞳で、ヴェルディアナが訊き返してくる。
矢瀬はヘラヘラと無責任に笑い、
「紘神島の暮らしもそんなに悪くないだろ。今のアヴたんは、あんたに懐いてるし。ほかの知り合いだって増えたんじゃねーか？　なにが不満なんだよ？」
「……」
ヴェルディアナが、喉を引き攣らせた。反論の言葉を口にしたくて、しかしなにも言えないという反応だ。それに構わず矢瀬は続ける。
「そりゃまあ、お城で暮らしてたときよりは、貧乏で生活も大変なんだろうけど。だけど話を聞いてる限りじゃ、あんたの姉さんは復讐して欲しいなんて言うタイプじゃなさそうだけど

な」

「わかってるわよ……そんなこと……！」

ヴェルディアナが震える声を絞り出した。あっさりと彼女が折れたことに、矢瀬は逆に困惑の顔になる。

「ヴェルさん？」

「おまえなんかに言われなくてもわかっているの。ええそうよ、〝魔族特区〟の暮らしは嫌いじゃないわ。贅沢できなくても、そんなのちっとも気にならない。アヴローラだって、本当の家族みたいに思ってる。幸せだって感じるときもあるのよ！」

「だったら、もう――」

「だからよ！」

幼い少女のような頼りない表情で、ヴェルディアナが首を振る。

「だから私は復讐を忘れるわけにはいかないの！　私だけが、こんな縁もゆかりもない土地で、奪われた家名や領地のことも忘れて幸せになるなんて、姉様に申し訳が立たないわ。もういいから黙ってて。あなたになにがわかるのよ！」

「……そうだな。あんたの言い分ももっともだ」

矢瀬はそう言って息を吐く。ヴェルディアナは知らないが、矢瀬にも彼女の気持ちはわかる。家名や家族への想いに縛られて、不本意な生活をしているのは矢瀬も同じだ。矢瀬とて、好きこのんで親友を監視するような真似をしているわけではない。

「だけど薬はやめとけよ。そいつは最近〝魔族特区〟でも中毒者が多発して問題になってるやつだ。あんたみたいな上位の吸血鬼でも、乱用するとしんどいことになるぜ」

コートの袖に隠れたヴェルディアナの腕を指さして、矢瀬は何気ない口調で言う。

叱られた子どものような表情で、ヴェルディアナが身体を硬くした。

しかし矢瀬はそれ以上、なにも言わない。ヴェルディアナに背中を向けたまま手を振って、船上で騒いでいる古城たちの輪の中に戻っていく。

「わかってるの」

そんな矢瀬を見送って、ヴェルディアナがぽつりと呟いた。

冬の夜空を、星たちが音もなく流れ落ちていく。

7

ネラプシ自治政府は、東欧トラキア地方の一部を領有する匈鬼主要部族の合議機関である。

だがそれは表向きの建前でしかない。匈鬼の部族はそれぞれに根深い対立があり、議長であるバルタザール・ザハリアスがいなければ、自治政府などすぐにでも分解する。結局のところ、ザハリアス一人の存在によって保たれているだけの脆い組織なのだ。

そのザハリアスの立場すら盤石とは言い難い。
なぜなら彼は匈鬼ではない余所者だからだ。
ザハリアスは単なる兵器商であり、彼が供給する兵器に価値を認めているからこそ、匈鬼は彼に従っているのに過ぎない。それでもこれまで、彼らは上手くやってきたといえるだろう。
ザハリアスの支援によって、匈鬼は〝戦王領域〟にも対抗できる戦力を得た。そしてカルアナ伯爵領を占拠し、念願だった領地を手に入れたのだ。
しかし、その危うい均衡は、緩やかに崩壊を始めていた。
ほかならぬザハリアス自身の行動によって――

「二十時十五分零秒――ザハリアス卿、約束の時間だ」
匈鬼部族の長の一人が、ザハリアスの館を訪れる。
彼が身に着けた黒装束は、匈鬼の戦闘服だった。殺気立つ彼の背後には、同じく黒装束をまとった兵士たちの姿がある。彼らがいつザハリアスに銃を向けても不思議ではない。そんな一触即発の空気がある。
「やあ、ツィケル大佐。そういえば、直接会って話がしたいと言われてましたか」
しかしザハリアスはデスクに着いたまま、一人きりで悠然と彼らを出迎えた。彼の表情には焦りも怯えも感じられない。そのことを不可解に思いつつ、匈鬼の長は口を開いた。

「質問がある、ザハリアス卿」
「うかがいましょう。イブリスベール王子襲撃の件ですかな」
「そうだ」
重々しくうなずいて、ツィケルはザハリアスを睨めつける。
「先ほど――十八時四十二分二十七秒に、国連安全保障理事会によるネラプシへの制裁決議が、全会一致で採択された。各地の夜の帝国もこれに追随する動きだ」
「ふむ」
「なぜ〝滅びの王朝〟に戦争を仕掛けるような真似をした？　しかも議会に無断でだ。〝戦王領域〟との国境紛争が激化しているこの時期に国際的に孤立したら、ようやく手に入れたネラプシの領地が、再び失われることにもなりかねんぞ」
「なるほど。それはごもっともな懸念です」
敵意の滲むツィケルの言葉を、ザハリアスは平然と受け容れる。彼の狡猾そうな細い目は、むしろ愉しげに細められたままだった。
「それで私にどうしろと？」
「……イブリスベールから強奪した〝焔光の夜伯〟を渡せ」
「なぜです？」
「あれは我らには必要ないものだ」

「〝滅びの王朝〟に頭を下げて赦しを請うというのですか。しかし今さらそのような取り引きが成立しますかね？」

ザハリアスが真面目な顔で訊き返す。そのとき初めて、ツィケルの口元に笑みが浮かんだ。死にゆく相手を哀れむような冷笑だ。

「成立するさ。おまえの首とも引き換えだからな」

ツィケルの言葉が終わると同時に、荒々しい銃声が鳴り響いた。

生身の肌を突き破り、ツィケルの手首から突きだしていたのは銃口だ。体内に埋めこんだ銃を使って、ザハリアスを撃ったのだ。

弾丸はザハリアスの顔面を直撃し、彼の頭半分を吹き飛ばしていた。確認するまでもなく即死だった。ザハリアスは魔族ではなくただの人間だ。たとえ魔族であっても、この傷で生きていられるはずがない。

「二十時十九分八秒――ザハリアス元議長を処刑した。これよりザハリアスが秘匿する〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟の捜索を開始する」

ツィケルが、部下たちに向かって淡々と命じる。黒装束の匈鬼たちが、統制された動きで、館内へと散っていく。ザハリアスの活動拠点は世界各地に散らばっているが、虎の子の〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟を彼が手放すはずがない。間違いなく館内のどこかにあるはずだ。

「貴様には感謝していたのだがな、ザハリアス。眷獣を持たぬ我ら匈鬼が〝戦王領域〟に対抗できたのも、貴様が供給する資金と兵器があればこそ。だが、状況が変わったのだよ」

ザハリアスの死体を眺めて、ツィケルが蔑むように呟いた。

ネラプシはすでに領地を手に入れた。今はそれを護ることを考えるべき時期だった。略奪者としての歴史はもう終わりだ。そして兵器商であるザハリアスは、戦争のない場所では生きられない。いずれこうして袂を分かつ運命だったのだ。

「大佐、人形どもを確認しました」

やがて部下の一人が、〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟発見の報告を持って戻ってくる。了解した、とツィケルはうなずき、ザハリアスの死体を置き去りのまま移動する。

〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟の保管庫は地下だった。予想していたほど、丁寧な扱いがなされているわけではない。睡眠薬を投与して、棺桶状のケースの中に放置しているだけだ。ケースの数は全部で十二個。ただしその半分は空っぽだった。

「二十時二十五分四十秒――休眠状態の〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟を確保。総数六……十一番目、九番目、八番目、七番目、二番目……それに一番目か？」

ツィケルが小さく眉を寄せた。ザハリアスが集めた六体の〝焔光の夜伯（カレイドブラッド）〟のうち、五体までは専用の防護服が与えられている。だが、残された最後の一体――〝一番目（プローテ）〟が身に着けているのは、引き裂かれた粗末なドレスだけだった。

ドレスの胸元の裂け目から、今もまだ生々しい薄紅色の傷痕が見える。

肋骨を無理やりえぐり取ったような、大きな傷痕だ。

「大佐、こちらを！」

困惑するツィケルを、部下が呼んだ。部下が指さした先には、七人目の少女の姿があった。

しかし〝焔光の夜伯〟ではない。

くすんだ灰色の髪をした、みすぼらしい服装の幼い娘だ。特に外傷は見当たらない。だが、痩せさらばえたその姿は、絶命していると一目でわかる。病死か、あるいは衰弱死だろう。

その死体が腐らずに保たれていたのは、奇妙な結晶の中に浮かんでいたからだ。

直径六、七メートルにも達する、金剛石に似た宝石の結晶の中に。

「人間の女が……どうして……？」

ツィケルが油断なく周囲を観察しながら、透明な結晶へと近づいていく。そして結晶の表面に触れようと手を伸ばしかけたとき、

「――それに触れるな！」

怒気を含んだ男の声が、ツィケルを荒々しく制止した。聞き覚えのあるその声に、ツィケルは、驚きの表情で振り返る。ザハリアスの声だった。

薄暗い地下室の入り口に、血まみれのスーツを着た痩身の男が立っている。

「ご覧になって……しまいましたか……」

ザハリアスの声で、男が言う。ツィケルの部下たちが、体内に埋めこんだナイフを抜いた。

しかし彼らは動かない。果たして攻撃を仕掛けてもいいのかと戸惑っているのだ。

「二十時二十八分十二秒――ザハリアスの生存を確認……いや、貴様、その顔は……」

痩身の男を睨んで、ツィケルがうめく。

男の背格好はザハリアスと同じ。着ている服もザハリアスのものだ。しかし顔立ちがまったく違う。男の顔は、せいぜい十代の半ばほど。ザハリアスよりも遥かに若い。だが、そこには、わずかにザハリアスの面影が残っている。

「ああ、これですか。やれやれ、ここまで破壊されてしまうと整形からやり直さなければなりませんね。さすがにこの青臭い顔では商売相手に舐められてしまいますので」

血まみれの頬を撫でながら、痩身の男が苦笑した。その口調はまさしくザハリアスのものだ。

ツィケルによって吹き飛ばされたはずの彼の顔面が、若返った姿で復元している。

「吸血鬼!?　いや、血の従者か――！」

ようやく男の正体に気づいて、ツィケルがうめいた。ザハリアスは普通の人間ではなかった。吸血鬼によって不死の生命を与えられた血の従者――疑似吸血鬼だ。

「ご名答です、ツィケル大佐。あなたがた匈鬼に貸し与えた武器は、もともと私自身が使うために開発したものだったのですよ」

ザハリアスはそう言って、自らの体内に埋めこんだ無数の刃を出現させた。吸血鬼と同様の再生能力を持つ血の従者は、匈鬼と同じ装備が使えるのだ。

しかも頭部を吹き飛ばされても再生するザハリアスの回復力は、彼の主人が並の吸血鬼ではないことを示している。ザハリアスの主人は、神々による不死の呪いを受けた真祖か、それに匹敵する力を持つ者だ。その戦闘能力は、おそらくツィケルたち匈鬼の兵士をも凌駕する。

「二十時二十九分三十二秒――ザハリアスとの交戦開始。装備が同じでも、この人数差ならば、やつに勝ち目はない。取り押さえろ！」

ツィケルの命令に従って、部下の黒装束たちがザハリアスの周囲を取り囲む。

しかしザハリアスは、愉快そうに全身を揺らして笑った。

「おや、いつ私の装備があなたがたと同じものだけだと言いましたか？」

「ちっ――やれ！」

ツィケルがザハリアスを狙撃する。同時に彼の部下たちも、ザハリアスに斬りかかっていた。かつて古城に向けて放たれたものと同じ、魔力の炎を帯びた灼熱の斬撃だ。

だが、それはザハリアスの身体に触れる前に、透明な宝石の結晶に阻まれる。

ザハリアスを守護するように虚空から姿を現したのは、金剛石の肉体を与えられた途方もなく巨大な大角羊だった。眷獣だ。その凄まじい魔力の波動で、地鳴りのように大地が揺れる。大気が重苦しく密度を増して、匈鬼たちの動きを縛る。

「穢れなき絶対無謬の神の羊!?　一番目の眷獣だと!?　ザハリアス、まさか、おまえは……！」

「ようやくお気づきになりましたか」

愕然と叫ぶツィケルを見返して、若きザハリアスが獰猛に笑った。金剛石の結晶を撒き散らして神羊が咆吼。身じろぎにも似たそのわずかな動きで、黒装束の兵士たちが消し飛ばされていく。破壊力の次元が違う。もはや戦闘ではなく一方的な虐殺だ。

「そう。私は第四真祖の血の従者です」

ザハリアスが静かに告げる。だが、その呟きを聞く者はもういなかった。

ツィケルも彼の部下たちも、巨大な眷獣の攻撃によって原形すら残さず消滅している。地下室に残されたのは、ザハリアスと六体の〝焔光の夜伯〟。そして少女の死体だけだ。

「さて……手順が少し前後してしまいましたが、どうにか修正可能な範囲に収まりそうですね」

眷獣の召喚を解除したザハリアスが、眠り続ける一番目に近づいた。

そして恭しく片膝を突き、狂気の光を瞳に宿して宣誓する。

「〝宴〟の最後の支度を始めましょう――我が主よ」

8

その日、絃神島には雨が降っていた。

細い糸のように柔らかな春雨。優しく温かな四月の雨だ。

学校帰りにマリーナを訪れた暁古城は、桟橋の上にたたずむ小柄な影に気づいて走り出す。白いサマードレスを着た吸血鬼の少女が、傘も差さずに古城を見つめていた。敬虔な修道女を思わせる、どこか神秘的な光景だ。

「アヴローラ！　なにやってんだ、おまえ！　ずぶ濡れじゃねえか」

慌ててアヴローラに駆け寄った古城が、冷え切った彼女の手を引いて船の中へと連れて行く。

「わ、我に無為なる雌伏の時を強いるか、下僕よ」

怒っているような古城の剣幕にアヴローラはびくびくと肩を縮めるが、それでもめずらしく上目遣いで反論してきた。どうやら、待ちくたびれた、というような意味のことを言っているらしい。そんな彼女の金髪を、古城がタオルで乱暴に拭いてやる。

「……もしかして俺が来るのをずっと待ってたのか？」

「き、今日は、来てくれないかと、思った」

アヴローラが消え入りそうな弱々しい声でぽそりと言う。

見捨てられてしまったのではないかと、よほど不安に思っていたのだろう。もし古城があのまま来なかったらどうなっていたのか、想像するのも恐ろしい。

アヴローラと出会って半年近くが経った今でも、このあたりの彼女の性格は変わっていない。それ以外の部分では、紘神島の生活にもずいぶん適応したのだが。

「言っといただろ。新学期が始まったんだって。春休みはもう終わりだ」

びしょ濡れのアヴローラに、着替えてこいと命令しながら、古城が説明する。

アヴローラは船室の奥に入っていきながら、少し怯えたように振り返り、

「し、真の……餓鬼？」

「新学期。学校だ。高等部に上がるといろいろ面倒が多くてさ。模試やら進路指導やら――」

だらだらと愚痴りかけたところで、古城は、そうだ、と不意に思い出して話題を変えた。

「そういえば矢瀬に訊かれたんだけど、おまえ、学校に通う気はあるか？」

「……学校？」

着替え中のアヴローラが衝立の向こう側から、ひょいと顔を出す。

ああ、と古城はうなずいて、

「まだちょっと面倒な手続きが残ってるらしいんだけど、こないだ渡したおまえのＤＮＡサンプルで登録魔族として認められそうなんだってよ。そしたら学校にも通えるからさ。俺と同じとこに入れるかどうかは、ちょっとわからないんだけど」

「――い、行きたい、古城と同じ学校！」

ひどく興奮した表情で、下着姿のまま飛び出してくるアヴローラ。うお、と古城は危うく鼻血を噴きそうになり、頑張って彼女から目を逸らす。

「じゃあ那月ちゃんに頼んでみるか。あの人にはあんまり借りを作りたくないんだけどな」

「よ、よかろう！」

表情を明るくして、着替えを再開するアヴローラ。この調子でこいつが学校に通い始めたら、ますます気苦労が増えそうな気がする、と古城は若干どんよりした気分になる。

「ヴェルさんは、今日はバイトで遅いんだよな。晩飯、つき合ってやるよ。なんか喰うか？」

ようやく着替えを終えたアヴローラに、古城が訊いた。Tシャツの表と裏が間違っているような気もするが、指摘するのも面倒くさいので黙っておく。

「……な、凪沙は？」

怖ず怖ずと凪沙を気遣うような口調で、アヴローラが確認してくる。

当然といえば当然だが、普段、古城は自宅で凪沙の作った料理を食べている。だからアヴローラの夕食につき合うことは滅多にない。

彼女たち二人が仲良くなってくれれば、一緒に食事も出来るのだろうが、凪沙のあの態度を見たあとでは、もう一度アヴローラと会わせてみようとは思えなかった。

もっとも凪沙の立場なら、古城がアヴローラに会うこと自体を嫌がってもおかしくはないのだ。そうしないあたり、凪沙なりに負い目を感じているのではないか、とも思う。

「あいつは今日は病院だ。いつもの検査入院だとき」

アヴローラに気を遣わせないように、古城は素っ気ない口調で言った。

それでもアヴローラは落ちこんだように目を伏せる。凪沙の体調が回復しないのは、自分の記憶が戻らないせいだと、どうしても責任を感じてしまうのだ。

「おまえが気にすることはないって。それよりなにか喰いたいものはあるか？」

笑いながら古城が問いかける。アヴローラは、ハッと思いついたように身を乗り出して、キラキラと瞳を輝かせた。直視するのが眩しいほどの笑顔だ。

「い、凍てつく醍醐の滴を！」

「アイスかよ……まあ、いいか。晩飯にはまだ少し早いもんな。る家でいいのか？」

「ゆ、許す」

ふん、と鼻息も荒くアヴローラが立ち上がる。古城は苦笑しながら船を出た。やはりアヴローラは、この島の生活にもずいぶん馴染んできているようだ。

る家は絃神島各地に展開しているチェーン店だ。一部の銘柄はコンビニでも買えるし、このマリーナの近くにも小さなスタンドがある。欲望や執着というものをほとんど感じさせないアヴローラだが、甘い物だけは例外で、特にアイスには執心していた。

こうして普通に歩いているだけでも、アイスのことで浮かれているのがよくわかる。

だが、そのアイス屋の看板が見えてきたところで、アヴローラは不意に立ち止まった。

「……アヴローラ？」

古城が驚いて彼女を見た。いつも怯えてばかりのアヴローラの瞳に、はっきりと敵対心が浮かんでいる。その碧い瞳が見つめる先に、小柄な影が立っていた。

灰色の防護服を着た、金髪の少女だ。防護服の肩には〝Ⅸ〟のマーキングが刻まれている。

れを引きちぎるような力はない。縛られた自分自身の身体を、彼女はひとしきり見下ろして、

「古城？　なによこれ、どうなってんの？　あんたまさか、女子を縛って喜ぶ性癖が……？」

呆れ顔を浮かべた浅葱が、半眼で古城を睨みつけてくる。どうやら彼女は、この謎のシチュエーションを、古城の悪ふざけだと判断したらしい。

まさかの濡れ衣に古城は荒々しく首を振り、

「ねェよ、そんな歪んだ性癖は！　俺だって気づいたらここで縛られてたんだよ！」

「縛られてたって……」

ロープが本気で解けないことを再確認して、浅葱が怯えたような表情を浮かべる。目を覚ましたら見知らぬ場所で、全身を拘束されていたのだ。不安になるのも当然だろう。

「そういえば、ここ、どこ？　ていうか、あたし、なんで眠ってたんだっけ？」

「たしか凪沙のやつが学校で倒れたって聞かされて――」

起き抜けのぼんやりとした頭で、古城は朧気な記憶を辿る。

古城の妹、暁凪沙が倒れたと知らされたのは、昼休みのことだった。慌てて搬送先の病院に駆けつけたところで、襲撃を受けた。襲ってきたのは〝混沌の皇女〟　南北アメリカを統べる第二真祖だ。

暗黒の雷雲。灼熱の奔流。そして闇色の空間をたたえた骸骨の巨人　天災にも匹敵する過激な眷獣たちを自在に操り、病院を破壊しようとした彼女を、古城はかろうじて撃退した。

実際のところは、目的を果たした彼女が勝手に帰った、というのが真実に近い。

ともあれ、第二真祖の脅威は去り、あとには半壊した病院が残された。そして

「思い出した……！」

パイプ椅子をギシギシと乱暴に揺らして、浅葱が勢いよく振り返る。

「ちょっと古城！　どういうことなのよ、あんたが吸血鬼になったって！」

「あー……」

そっちの話か、と古城は気怠く溜息をついた。そう言えば古城が吸血鬼化したことが、第二真祖襲来のどさくさで浅葱にバレたのだった。

「第四真祖ってなによそれ!?　よくもあたしに今まで黙っててくれたわね……しかも姫柊さんはあんたの監視役で、あんたはあの子の血を吸いまくってたらしいじゃない！」

「い、いや……吸いまくってはない、と思う」

まくし立てる浅葱の剣幕に気圧されて、古城はボソボソと反論する。

古城が人間ではなかったという問題よりも、雪菜だけがその秘密を知っていたことのほうが、浅葱の中では重要なポイントらしい。

そして浅葱は古城の言い訳を、へーえ、と冷たく受け流し、

「少なくとも血を吸ったことは認めるわけね。どうせほかの女の子にも手を出してるんでしょ、煌坂さんとか、アルディギアの王女とか！」

「おまえ……九番目……!?」

「我が名を記憶に留めていたか、暁占城。褒めて遣わす」

アヴローラと同じ顔をした金髪の少女が、高圧的な口調で呼びかけてくる。アヴローラと違って、おどおどとした印象がないぶん、本気で偉そうだ。

「おまえ一人か。なんで、急に？」

古城が少しムッとして訊き返す。だが同時に、周囲にザハリアスたちの姿がないか、警戒することも忘れない。九番目自身はアヴローラの敵ではないはずだが、それでも彼女が危険な存在なのは間違いなかった。古城たちと初めて遭遇した夜に、彼女の暴走が生み出した被害を忘れてはいない。

「――契約の履行を要求する」

その九番目が、古城を見据えて言った。古城は怪訝顔で彼女を見つめ返す。

「……契約？」

「我に美味なる氷菓を捧げると誓ったな？」

「ああ、あれか。そういや、約束したな」

朧気な記憶を辿って、古城はうなずいた。その直後の騒ぎのせいで忘れていたが、たしかにそんなことを口走った気がする。

九番目は、そんな古城の答えを聞いて満足げに微笑むと、

「疾く務めを果たすがいい」

るる家のショーケースを指さして傲然と命じた。

それを隣で聞いていたアヴローラが、むーん、と不機嫌そうに頬を膨らませる。どうしてこんなやつの命令を聞くのか、と大変お怒りのご様子だ。

「……で、どれが喰いたいんだ？」

いちおう約束だから仕方ないな、と嘆息混じりに古城が訊いた。うむ、と九番目はうなずいて、

「至高のものを我に捧げよ」

「俺の好みで決めていいのか。じゃあ無難にバニラにしとくぞ？　アヴローラは？」

「ス、ストロベリー、キャラメル、生チョコレートのトリプル！」

対抗意識を剝き出しにして、アヴローラが店員に注文する。さすがに慣れたものである。

だがそこで、待て、と異議を申し立てたのは九番目だ。

「古城。何故、十二番目にのみ三度の選択を許す？」

「そういうメニューなんだよ。不満ならおまえも三段重ねにするか？」

古城がうんざりしながら説明する。もちろんそうなると値段も約三倍になってしまうのだが、

「四段だ」

「は？」

「十二番目が三段ならば我は四段重ねを要求する」
わけのわからない理屈で、無謀な要求を繰り出す九番目。古城は呆れ顔で首を振り、
「ねえよ、四段重ねとか。メニューにあるのは三段までだ！」
「む!?」
古城の説得が功を奏したのか、九番目が諦めの表情を浮かべかけた。しかしそのやりとりを聞いていた店員が、余計な口を挟んでくる。
「あ、できますよ、四段重ね」
「え!?　できるの!?」
驚いたのは古城だった。若い女性店員は、お茶目な表情で唇の前に指を立て、
「はい、公式には宣伝してない裏メニューってやつです。最高七段までいけますよ」
「は!?」
「な、七段！　七段！」
表情を引き攣らせた古城を押しのけて、アヴローラが主張する。そんなアヴローラの前に割りこんだのは九番目だ。
「無論、我もだ！」
「えええええっ!?　ちょっと待て、おまえら、そんなことしたらいくらかかると思ってんだ!?」
「ト、トッピングも！　ナッツとマカロン！」

「ふむ、我は全部だ。すべて載せよ！」
「おおおおおおおおおおっ!?　お、おまえら、悪魔か!?」
着々と積み重ねられていくアイスの代金を計算して、古城の顔から血の気が引く。味のわりにリーズナブルと評判のるる家のアイスだが、ここまで盛りまくれば、相応の価格になるのは必然だった。
しかし、絶望する古城の非難の言葉に、二人の〝焔光の夜伯〟は、きょとんと首を傾げて、
「あ、悪魔、違う」
「吸血鬼に決まっているだろう？」
「ああ、そうだな！　知ってたよ！」
自暴自棄になって古城は叫んだ。
そんな古城たちのやりとりに噴き出しながら、店員が出来上がったアイスを渡してくれる。ほんの少し定価よりも安くしてくれたのは、彼女なりの同情と気遣いなのだろう。
「……美味いな」
アイスを一口かじった九番目が、驚いたようにぽつりと呟いた。
「そうか。そりゃよかった」
やけに人間臭い九番目の言葉に、古城はホッとしたように笑う。あれだけ無茶な注文をしてくれたのだ。少しは喜んでもらわないと割に合わない。

すると九番目はなにを思ったのか、山盛りの巨大アイスを古城の前に差し出して、
「汝も味わってみるか、古城」
「じゃあ、一口な」
特になんの疑問を抱かずに、古城は九番目のアイスをかじる。なにしろこれだけの分量だ。九番目が一人では食べきれないと判断しても不思議でない、と思ったのだ。
「……!?」
そんな古城の行動を見て、アヴローラが大きく目を剝いた。古城と九番目の間に割りこんで、ぐい、とアイスを突き出してくる。
「ア、アヴローラ？」
「……ふーっ！　ふーっ！」
「おまえのも喰えっていうのか!?　ちょっと待て、そんな一気に冷たいモノを喰ったら……」
言い訳しようとする古城の口に、アヴローラが無理やりアイスをねじこんでくる。一匙丸ごと口の中に放りこまれて、その冷たさに古城がくぐもった悲鳴を洩らした。こめかみにキーンと激痛が走って涙目になる。もちろんアイスの味などわかるはずもない。
「……礼を言うぞ、暁古城。汝はたしかに契約を果たした」
古城がのたうち回っている間に、九番目はアイスを食べ終わっていたらしい。唇の端をぺろりと舐めて、満足そうに笑ってみせる。

「ザハリアスはもっと美味いものを喰わせてくれそうなものだけどな」
謙遜ではなく、単純に疑問に思って古城はそう呟いた。
九番目はなにも答えない。ただ黙って首を振るだけだ。そして彼女は防護服の腰のポーチから、一枚のカードを取り出した。ハガキよりも一回り小さな、金属製のプレートだ。
「受け取れ、十二番目」
そう言って九番目は、カードを放る。アヴローラはそれをどうにか落とさずに受け止めた。カードの表面には、古城の知らない文字で短い文面が記されている。アヴローラにはそれが読めるらしい。
「ザハリアスからの招待状だ」
九番目が、古城を見つめて静かに言った。
その言葉で、古城は彼女が、ザハリアスの命令に従っていただけなのだと思い知らされる。ザハリアスは、彼女をただのメッセンジャーとして派遣した。九番目がその役目に選ばれたのは、単純に彼女が古城たちの顔を知っていたというだけの理由なのだ。
九番目はザハリアスの支配から逃れてきたわけではない。今この瞬間も彼女は、ザハリアスが所有する兵器として扱われている。
「次の満月の夜に〝焔光の宴〟で再びまみえようぞ」
九番目が、そう言い残して歩き出す。

古城とアヴローラはその場に立ち尽くしたまま、呆然と彼女を見送った。

再び降り出した春の雨が、二人を冷たく濡らしていく。

宴の始まり。それは甘く優しかった平穏な日々の終焉だ。

アヴローラの頬にこぼれた水滴が、静かに流れて落ちていく。

涙のように、音もなく静かに。

幕間 iii

生徒たちが眠りについている。

鎖でがんじがらめにされた暁古城と、同じく椅子に縛りつけられている藍羽浅葱。銀色の槍を握ったままの姫柊雪菜は、絨毯の上に正座して、瞑想するように目を閉じている。

鉄格子の嵌まった窓の外は赤い。

鉄錆と乾いた血の臭いに満ちたこの空間こそが、監獄結界。

南宮那月の夢の中に構築された異世界だ。

「……っ！」

眠り続ける暁古城が、時折、苦悶するように表情を歪める。

彼は自分自身が過ごした時間を、夢という形で、新たに追体験しているのだ。固有堆積時間操作の魔導書〝No.014〟の応用術式である。

他人が経験した時間を奪う魔導書――と聞けば、ひどく便利に思えるが、それと比例するように支払う代償も大きい。他人の時間の追体験とは、それによって受けた心の傷や苦痛をも、自分のものとして受け容れる、ということでもあるからだ。ましてや追体験する心の傷が、過去の自分自身であれば尚更だ。

「……」

夢にうなされる教え子たちを見るのに飽きたのか、那月は、足元の魔法陣へと視線を移した。深緋色の絨毯に描かれた紋様が、ほのかな魔力の輝きを帯びて、脈動するような不気味な明滅を繰り返している。古城の魔力の暴走から、彼ら自身を護るための魔法陣。雪菜にはそう説明したが、実際のところ、その効果は副産物のようなものだった。

那月がこの魔法陣を構築した目的はほかにある。

暁古城の時間の中で、彼が最後まで体験することがなかった記憶

彼の知らない〝アヴローラ〟の知識。それを手に入れることが那月の真の目的だ。

魔導書に記された叡智を使って、那月が高次術式を組み上げていく。その術式を駆動するのは暁古城の――第四真祖の膨大な魔力だ。巨大な粒子加速器を使って微量元素の分析を行うのと同じ理屈で、時間の澱に残された〝彼女〟のわずかな痕跡を、無理やり炙り出していく。

やがて那月の眼前に浮かび上がったのは、ぼんやりとした少女の姿だった

情報が劣化しているせいか、完全には形が安定しない。それでも彼女の輪郭はわかる。逆巻く炎のような金髪と、青白く輝く焔光の瞳。妖精めいた容姿の小柄な少女だ。

「……汝は……誰ぞ？」

曖昧な輪郭だけの少女が、口を開く。ノイズ混じりの聞き取りにくい声だ。

「直接顔を合わせるのは初めてだったな、〝原初のアヴローラ〟――」

那月の呼びかけに、少女はゆっくりと微笑んだ。自分自身が何者なのか、ようやく思い出したとでも言いたげな愉快そうな表情だ。

『魔女か。黄金の悪魔と契約した空隙の魔女……』

ふむ、と金髪の少女は、自分自身の曖昧な両手を眺めて呟く。

『この身体は？』

「残留思念に形を与えた。今の貴様は幽霊のようなものだ」

『死者と言葉を交わすか、魔女』

嘲るような口調で、少女が訊く。

「ここは私の夢の中だ。多少の融通が利くのでな」

那月は無感動に答えると、右手に持っていた扇子を広げてみせた。その直後、虚空から吐き出された無数の鎖が、少女の肌すれすれをかすめて、彼女を取り囲む。

今の少女は、蜘蛛の巣に囚われた非力な蝶。あるいは鎖で吊られた操り人形だ。

『我になにを望む？』

身動きを封じられた金髪の少女が、それでもどこか愉しげに問いかける。

「訊きたいことがある」

『なにか？』

「貴様のことだ、人工の真祖よ、貴様はなんのために造られた？」

『我は兵器だ　それ以上でも以下でもない。おまえは戦場で拾った銃弾に、それぞれ造られた目的を聞いて回るのか、〝空隙の魔女〟？』

那月への回答をはぐらかすように、少女が曖昧な輪郭を揺らして笑った。

「ならば質問を変えよう、〝原初のアヴローラ〟――〝聖櫺〟とはなんだ？」

那月が静かに問いかける。その言葉が〝鍵〟になっていたかのように、金髪の少女の雰囲気が変わった。彼女の足元の魔法陣が輝きを増し、金髪がゆらゆらと舞い上がる。

『ふ……ふふ……ふふふふふ……ふはははははははははははは！』

美しい唇を歪めて少女が笑い出す。世界のすべてを哀れむように、蔑むように、呪うように。

「そうか、〝原初〟……おまえは……！」

人形のように端整な顔をしかめて、那月がうめいた。

少女を囲む鎖が、次々にちぎれ飛ぶ。直視することができないほどに魔法陣が輝きを増し、洩れ出した魔力が世界を歪め始めていく。

怨嗟に満ちた少女の笑い声が、監獄結界に鳴り響く。

亡霊の笑い声が、いつまでもいつまでも響き続けている――

深夜の夜

1

何鬼部族連合がネラプシを名乗り、自治独立を宣言したのはわずか十数年前のこと。
日本と彼らの間にはいまだ国交もなく、ネラプシの存在自体を知らない人々も多い。〝魔族特区〟絃神島においてさえ、その不可解なニュースに注目した人間はほとんどいなかった。
かつてネラプシと接触した経験を持つ、ほんの一握りの者たちを除いては――

「ネラプシ自治区で……大規模感染の徴候……？」
消し忘れたテレビに映る奇妙なテロップに、古城は偶然目を留めた。
早朝の暁家のリビングだ。トーストに塗ったバターの匂いが、部屋の中に立ちこめている。
朝のワイドショー番組が流していたのは、画質の粗いホームビデオの映像だった。異国の街にあふれ出した暴徒の群れが、無差別に周囲の人々を襲っている。ゾンビのドキュメンタリーを見ているようなショッキングな映像だ。
「新種の吸血鬼感染症なんだって。恐いよね」
制服にエプロン姿の凪沙が、トマトを齧りながら答えてくる。
不安を感じていないわけではないのだろうが、凪沙の口調には余裕があった。伝染病が発生

しているとはいえ、日本から遠く離れた外国での出来事だ。現実感が乏しいのだろう。
ネラプシという言葉に聞き覚えがなければ、古城も同じ反応をしていたはずだ。
「……吸血鬼感染って、どういうことだ？　吸血鬼に血を吸われたら、吸血鬼になるってのは迷信なんじゃなかったのか？」
「世界保険機関でも、まだよくわかってないらしいよ。ネラプシって最近あちこちと戦争してたし、生物兵器の流出じゃないかって説もあるみたい。これ以上は感染者が増えないといいんだけどね」
古城の疑問に凪沙が解説する。情報があまり多くないのか、ワイドショーのアナウンサーも、だいたい同じようなことを繰り返しているだけだった。
曰く、感染源はいまだ特定されていない。人間にも魔族にも無関係に感染し、発症した患者は理性を失って周囲の者を無差別に襲い始める。そしてただひたすらに感染者を増やしていく。
症状そのものはG種と呼ばれる吸血鬼に近く、感染者に多く見られるのは筋力や、嗅覚などの身体能力の向上。一方、時間が経つにつれて感染者は記憶の欠落が顕著になり、やがては完全に知性を失い、生命活動の維持すら困難になるという。
単なる伝染病なのか、それとも未確認の新たな魔族の出現なのかも不明。原因が特定できないため、治療法も確立していない。このままでは世界的流行の恐れもある――
そこまで説明したところでワイドショーはCMに突入し、CMのあとはスポーツコーナーだ

った。古城はトーストをかじりながら、ぼんやりと昨夜のプロ野球のダイジェストを眺める。

「じゃあ、古城君。あたし、先に行くね」

その間に身支度を終えた凪沙が、スポーツバッグを片手に声をかけてきた。登校するには、まだ少し早過ぎる時間帯なのだが、

「あー……チア部の朝練か。あんま無理すんなよ」

「大丈夫、大丈夫～最近は体調も良くなったし。古城君も遅刻しないでね」

おう、と適当に妹を見送り、古城はソファにだらしなくもたれた。

指先についたバターを舐め取りつつ、アナウンサーの言葉を反芻する。

「第一、第二、第三のいずれの真祖の型にも該当しない吸血鬼……か……」

眩い朝陽に目を細めながら、凪沙はマンションの外に出た。

時刻は午前六時半。さすがにこの時間帯はまだ、モノレールの駅に続く道路も空いている。

ひと気のない坂道を吹き抜けていく朝の風が心地好い。

調子の外れた鼻歌を口ずさみながら、凪沙は駅へと向かって歩き出す。

犬の散歩をしている夫婦とすれ違った以外、特に誰かと会うこともなく、徒歩十分の道のりを半分ほど過ぎて交差点に差しかかる。

見知らぬ女性に呼び止められたのは、その交差点を渡り終えた直後のことだった。

「暁凪沙さん？」

「あ、はい」

名前を呼ばれて咄嗟に答えてしまったが、そこに立っていたのは奇妙な人々だった。

目立たない地味なスーツ姿の男女が四人。見た目の印象も世代もバラバラの、よくわからない集団だ。やけに画一化された迷いのない目つきが少し恐い。

「あの……どちら様、ですか？」

いつの間にか四方を取り囲まれていることに気づいて、凪沙は声を上擦らせた。

警官という雰囲気ではないし、両親の知り合いとも思えない。深森や牙城の友人は変人揃いだが、皆、どこか凪沙を安心させるような空気を漂わせているものだ。

だが、ここにいる四人はそうではなかった。見た目こそまともだが、人間として大切なにかが欠落したような印象がある。自分たちの意見に賛同しない相手は、死ねばいい。そんなことを言い出しかねない、余裕のない空気を感じる。

「心配しないで。私たちは人類救済機構〝楽園の護り手〟の闘士よ。善良な市民の生活を守るために魔族を根絶する活動をしているの」

口元だけの笑みを浮かべて、女が言った。油汚れがよく落ちます、という程度の気安さで、魔族を根絶すると口にする彼女に、凪沙は生理的な恐怖と嫌悪を覚える。

「差別……主義者……？」

「そんな風に私たちを非難する連中もいるわね。でも、ね、正直にあなたは魔族のことをどう思っているの？　彼らが恐いとは思わない？」

「そ、それは……」

恐い、という言葉を凪沙は呑みこむ。たしかに凪沙は魔族恐怖症だが、それは過去の個人的な体験に根差したもので、自分が恐いというだけの理由で相手を弾圧していいとは思わない。

そして女は、凪沙の返事など最初から聞く気がなかったかのように、一方的な主張を続けた。

「聖域条約が締結されて魔族による凶悪犯罪は減ったっていうけれど、それは政府による印象操作の大嘘よ。彼らは本当のデータを隠蔽して、捏造した資料を流しているの」

「あの……あたし、学校に行かなきゃいけないから……」

女の言葉を遮って、凪沙はこの場を逃げ出そうとする。

しかし女は、凪沙の行く手を遮るように両腕を広げて微笑んだ。

「ごめんなさい。大丈夫よ、時間は取らせないわ」

彼女が、スーツの懐からなにかを取り出す。それは小さな拳銃だった。映画の小道具でよく見かける、短銃身のリボルバーだ。

「私たちの用事はすぐ済むから。第四真祖の復活を阻止するために、お願い。死んで」

にっこりと笑いながら、女が凪沙に銃口を向けてくる。ふと気づけば、残る三人も同じように銃を構えていた。彼らの瞳には凪沙への同情も憐憫もなく、ただ自分勝手な正義を盲信する者に特有の昂揚感だけが浮かんでいる。

「人間が……人間を殺すの？」

凪沙が震える声で訊き返す。その瞬間、初めて女の表情に敵意が浮かんだ。

「同情を惹こうと演技をしても無駄よ。異端の巫女が人間を名乗るなんて厚かましい！」

唐突に叩きつけられた猛烈な悪意に、凪沙はどうしようもない絶望を覚える。

おそらく女にとっては、凪沙が魔族の敵でも味方でも、そんなことは関係ないのだ。彼女たちが求めているのは、自分たちのプライドを満足させることだけ。今はたまたま魔族に対して敵意を抱いているが、その矛先がいつほかのものに向けられるかはわからない。最初から話の通じる相手ではなかったのだ。

「た……助けて……誰か……古城君……！」

スポーツバッグを抱いたまま、凪沙が弱々しく呟いた。

「抵抗しなければ、楽に死なせてあげるわ」

形式的な手続きをこなすような口調で無感動に言い放ち、女は引き金に指をかける。

轟音が凪沙の耳を打ち、眩い閃光が視界を白く染めた。

そして光は衝撃と化して、主義者たちの集団を打ちのめす。

「――愚か」

「な、なんで知って……!?」

思わず呟いてしまったあとで、古城は己の失言に気づく。無感情な瞳で、冷ややかに古城を睨みつけてくる浅葱。古城はじっとりと掌に汗を滲ませて、

「ま、待て、違う。それは、いろいろと事情があって仕方なく……」

「吸血鬼が血を吸いたくなるのって、たしか欲情したときなのよねえ？」

怒りを押し殺しているかのような、淡々とした口調で浅葱が訊いてくる。

古城は、ぐっ、と喉を詰まらせた。緊急時の魔力補給を別にすれば、吸血衝動の引き金になるのは性的欲求。つまり吸血鬼が誰かの血を吸うのは、主に性的に興奮したとき、ということだ。魔族特区育ちの浅葱なら、当然持っている基礎知識である。

実際、古城が雪菜たちの血を吸ったとき、単なる吸血行為以上の肉体的接触があったことも事実なので、それを責められると言い訳できない。が、

「……調子狂うな」

古城は気が抜けたような表情を浮かべて、縛られた状態のまま肩をすくめた。

「なにがよ？」

「いや、吸血鬼の真祖っつったら、普通もっと恐がられたりするものなんじゃねーか？」

「は？　なんであたしが今さらあんたを恐がらなきゃいけないのさ」

心底不思議そうな態度で訊き返されて、古城は咄嗟に返事に困る。

浅葱とは、古城が絃神島に来て以来の長いつき合いだ。ただでさえ魔族慣れしている彼女にしてみれば、そんな旧知の友人が吸血鬼だったという程度で、怯える理由もないのだろう。

「まあ、たしかに今さらだよなァ」

「そうよ。だけど、そんなことになっちゃってる理由は、もちろん説明してもらうわよ」

不意に真剣な表情になって、浅葱が古城を見つめてくる。

浅葱と最初に出会ったときの古城は、たしかに普通の人間だった。そして人間として生まれた者が、途中で吸血鬼に変化することは、あり得ないこととされている。

そもそも吸血鬼の真祖とは、血族の始祖たる最古の吸血鬼なのだ。

その真祖の力を、ただの人間が引き継いだという状況は、魔族と人間の境界を覆す異常事態だといえる。浅葱が疑問に思うのも当然だ。

「ああ、だからそれはアヴローラのやつが……」

そう言いかけたところで、古城は目眩に襲われた。

足元が崩れていくような不快な感覚と、脳が軋むような激しい頭痛。

以前、雪菜に説明しようとしたときと同じだ。続けるべき言葉が出てこない。甦ったはずの過去の記憶が、再び闇の中へと沈んでいく。

「アヴローラって、病院の地下にいた女の子のこと？　氷漬けになって眠っていた――」

沈黙する古城を訝しむように、浅葱が確認しようとする。だが、言いかけた彼女の言葉も、

閃光の正体は、銃撃ではなく稲妻だった。稲妻をまとっているのは、十四、五歳程度の小柄な少女だ。金髪を男子のように短く刈り込んで、金の縁取りを施した白金の鎧をまとっている。倒れた差別主義者たちを睥睨しながら、鎧の少女は、道路沿いの街灯の上に立っていた。

小柄な女騎士という風貌だが、彼女の手の中に剣はない。代わりに彼女が握っているのは、青白く輝く雷光の槍だ。

「ぺ……五番目……!?」

差別主義者の一人が路上に転がったまま、ひぃっ、と情けない悲鳴を上げた。

その声で我に返ったスーツの女が、凪沙に向かって発砲する。

しかし撃ち放たれた銃弾が、凪沙の身体に届くことはなかった。凪沙の眼前に現れた第三の少女が、周囲の空間ごとえぐり取るようにして、銃弾を消滅させたのだ。

美しい面立ちを歪めて少女が笑う。

彼女の左右の掌に載っていたのは、空間をもえぐり取る漆黒の球体

ツインテールに結んだ長い髪が、蛇のようにゆるやかにうねって揺れている。彼女の眼球は、左右で色の違う金目銀目だ。

「……三番目っ……！」

凪沙を庇うように立つ少女を見上げて、スーツの女は拳銃を落とした。もはやそんな非力な武器で、凪沙を傷つけることは不可能だと悟ったのだ。

脚をもつれさせながら立ち上がった差別主義者たちが、我先にその場から逃げ出そうとする。

そんな彼らの前に立ちはだかったのは、霧をまとって虚空から現れた三人目の少女だった。

小柄な身体を重厚な鎧に包み、美しい顔立ちを半分以上、兜で覆い隠した少女である。

視界を塞ぐように立ちこめた銀色の霧が、瞬く間に差別主義者たちを包みこんだ。

「……四番目まで!?　そんな……！」

最後に一人だけ残った女が、這いずるようにして逃げ惑う。

しかし霧に追いつかれた彼女の身体は、さらさらと音もなく崩れ出していた。

その霧の正体は彼女自身だ。女の肉体そのものが、実体を失って霧へと変わっているのだ。

やがて風に吹かれて霧が晴れたとき、差別主義者たちの姿は、もうどこにも残っていなかった。霧の中に呑みこまれ、彼らは跡形もなく消えたのだ。

「ご無事ですか」

白金の鎧の少女が、地上に降り立って凪沙に訊く。

残る二人の少女たちも、同じように凪沙を見上げて地面に片膝を突いた。

「あなたたちは、誰……？　今の人たちをどうしたの……!?」

凪沙が呆然と問いかける。

不思議と恐怖は感じない。だが現実の出来事とも思えない。凪沙の命を救った、というには、少女たちの力は圧倒的すぎた。彼女たちの存在は、まるで天災そのものだ。地震や竜巻に巻き

こまれて犯罪者が死んでも、災害に感謝する、という発想は普通出てこない。
その天災そのものの化身というべき少女たちが、凪沙の前に恭しく跪いている。
まるで王女に忠誠を誓う騎士たちのように――
「そう……か……あなたたちは……」
不意になにもかも理解した、というふうに凪沙がぼそりと呟いた。
虹彩の開ききった凪沙の瞳からは、感情の光が消えている。
「見てたんだね……ずっと……あたしたちのことを……」
凪沙の言葉に、少女たちが首肯する。
丁重に顔を伏せたまま、白金の鎧の少女が口を開いた。
「十二番目の〝柩〟が開いてしまったのは、我らの落ち度。お許しを」
それは自らの失態を報告するような口惜しげな声だった。しかし同時に凪沙に対する慈愛と畏怖も感じられた。天災の化身である少女たちが、凪沙の存在を恐れているのだ。
そして凪沙は、彼女たちを見下ろして悠然と告げた。
「許す――」
凪沙が何事もなかったかのように、再び駅に向かって歩き出す。
金髪の少女たちは、そんな彼女を無言で見送った。
眩い〝魔族特区〟の朝の陽射しが、街に濃い影を落としている。
ゆっくりとなにかが狂い始めている。

2

暁牙城の研究室があるのは、絃神市立大学の敷地に建つ、取り壊し寸前の古いビルだった。
牙城は大学で客員教授の肩書きを持っている。教授待遇といいつつ、実際には用心棒を兼ねたお飾りの役職で、給料も安い。しかし大学教授の肩書きは、異国を旅することの多い牙城にはなにかと便利だ。それに家族と別居中の身としては、寝泊まりできる研究室があるのも地味にありがたい。
ワンルームマンションに似た小さな研究室には、所狭しと古びた書物や文献が積み上げられて、そのわずかな隙間に置かれたソファの上に、牙城はだらしなく寝そべっていた。
こけた頬は薄く無精髭に覆われて、徹夜続きの目元には隈が浮いている。
牙城の手元に置かれているのは、第四真祖について記された異国の古い文献だった。
娘である凪沙を救う方法を探し続けて、ようやく辿り着いた貴重な資料だ。
だが、そこに記されていた情報は、牙城の絶望をより深くするだけのものだった。〝焔光の

〝宴〟の謎はほぼ解けた。アヴローラがゴゾの遺跡に封印されていた理由も、凪沙に憑いているモノの正体もわかった。そしてその真実が、牙城を絶望させるのだ。

文献をテーブルの上に投げ出して、牙城は気怠く目を閉じた。そしてようやく三日ぶりの睡眠を取ろうとした矢先、研究室のドアが勢いよく開けられた。

「――牙城！」

ノックもなしに飛びこんできたのは、黒いメイド服姿のヴェルディアナだった。髪を振り乱す彼女の手の中には、しわくちゃになった英字新聞が握られている。

「よう、ヴェルディアナ。どうしたんだ、血相変えて。今日はバイトはお休みか？」

鬱陶しく伸びた前髪をかき上げて、牙城がのろのろと身体を起こした。そんな牙城の胸元に、ヴェルディアナが新聞を押しつける。

「どういうことなの、牙城！　ネラプシ自治区でなにが起きてるの!?」

「ああ……これか」

記事を一瞥して、牙城が目を眇めた。

ネラプシで発生した吸血鬼感染症については、紙面の片隅に小さく掲載されているだけだ。事態の深刻さを理解していないわけではなく、情報が少なすぎるのだ。

だが、この大規模感染の原因を、すでに理解している者もいる。牙城もその中の一人だった。

〝ザハリアスの野郎がようやく本気を出したってことだろ〟

牙城がつまらなそうな口調で言った。ザハリアスが旧カルアナ伯爵領を占拠し、〝焔光の夜伯〟を手に入れたときから、いつかこうなるのはわかっていたことだ。むしろ動き出すのが遅かったといってもいい。

「この吸血鬼感染症って……まさか〝焔光の宴〟と関係しているの？」

ヴェルディアナが、かすれた声で訊く。知らなかったのか、と牙城は意外そうに眉を上げた。

〝采配者に聞かなかったか。〝宴〟の選帝者の資格は、一定規模の領地を収めていることひいては、十分な数の領民を所有していることだ〟

「それと感染症になんの関係があるの？　たしかに選帝者の領地は第四真祖が完全覚醒すれば、新たな夜の帝国になるとは聞いていたけど――」

そう言いかけたヴェルディアナが、不意に驚いて言葉を切った。なにか思い当たることがあったのだろう。彼女の顔がしだいに青ざめていく。

「まさか……逆なの……!?」

「そうだな。第四真祖が覚醒することで、選帝者の領地が夜の帝国に変わるわけじゃない。選帝者とは、第四真祖を覚醒させるための儀式魔術の実行者だ。自分の領地に住んでいる数十万の人々を、生け贄として使う儀式のな」

「生け……贄!?」

牙城が口にした無情な言葉に、ヴェルディアナが肩を震わせる。

現在、ネラプシ自治区と呼ばれているのは、かつてカルアナ家が治めていた土地だった。
そこで暮らしているのは、数百年間にわたって、先祖代々、ヴェルディアナの生家に従ってきた忠実な領民たちである。もちろんその中には、ヴェルディアナの顔見知りもいるだろう。
そして彼らの命は、新型感染症によって危機に晒されている。
その状況を仕組んだのはザハリアスだ。
ネラプシ自治区に、魔法陣を敷いたの？　ザハリアスが匈鬼たちを使ってカルアナ伯爵領に侵攻したのは、儀式魔術に必要な土地を手に入れるためだというの!?　そんなことのために父様は殺されなければならなかったの……!?　牙城、あなたはそれを知ってたの!?」
「……俺にそのことを教えてくれたのは、おまえさんの姉さんだ」
荒々しく責め立ててくるヴェルディアナを、牙城はたったひと言で沈黙させる。
書物の山を乱暴に崩して、牙城が取り出したのは一冊の資料。ヴェルディアナの姉――リアナ・カルアナがまとめたレポートだ。そこには、〝焔光の宴〟と呼ばれる儀式魔術についての真実が記されていた。それを乱暴に、ヴェルディアナの前に放ってやる。
信じられないというふうに頭を振って、ヴェルディアナはふらふらと壁際まで後退した。
「リアナ姉様が……じゃあ、姉様が十二番目を手に入れようとしたのは……」
「ザハリアスが敷いた魔法陣を逆に利用して、第四真祖を覚醒させるつもりだったんだろう。リアナは自分が選帝者になるつもりだったんだ」

「姉様が……カルアナ伯爵領の領民たちを生け贄にするつもりだったというの……!?」
焦点の合わない瞳を揺らして、ヴェルディアナが呟いた。
〝焔光の宴〟の正体は、第四真祖を完全覚醒させるための儀式魔術。その触媒となるのは、数十万人を超える膨大な数の生け贄だ。世界最強の吸血鬼に相応しい、壮大な覚醒の儀式だといえないこともないだろう。
リアナはそれを知った上で、第四真祖の復活を望んでいた。
つまり彼女は、領民たちを犠牲にする覚悟を決めていたということだ。
「リアナには、ほかにザハリアスから領地を奪回する手段がなかった。それに放っておいてもザハリアスは儀式を強行したはずだ。どのみち被害が出るのは避けられないな」
牙城がリアナを庇うように言った。
しかしヴェルディアナは、追い詰められたような表情で激しく首を振る。
「……私が、止めた。こんなことになるとわかっていたのなら、もっと早く！」
「ザハリアスを殺してか？」
「そうよ！」
ヴェルディアナが、濡れた瞳で牙城を睨みつけてくる。その瞳に宿っていたのは、狂気にも似た激しい使命感だ。危険な徴候だ、と牙城は心の中で舌打ちする。今のヴェルディアナは冷静ではない。かつての領民たちに対する責任感と焦りが、彼女の視野を狭めている。

「無理だな。それは自分でもわかってただろうに……」

いつになく厳しい口調で牙城が言う。少しでも彼女に冷静さを取り戻させようとしたのだが、その指摘はヴェルディアナを意固地にさせただけだった。

「刺し違えてでも殺してやるわよ……！」

ヴェルディアナが低い声で呪文のように呟く。牙城は不機嫌そうに唇を歪めた。

「だから、そう言い出すだろうと思って教えなかったんじゃねーか。リアナも」

「十二番目が――」

「……あん？」

「十二番目が記憶を取り戻せば、ザハリアスだって殺せる……第四真祖の眷獣を使って！」

ヴェルディアナが晴れやかな笑みを浮かべた。なにかに取り憑かれたような表情だ。

「おい、ヴェルディアナ！」

「わかっているの。凪沙でしょう。あなたちの娘が、彼女が十二番目の記憶を奪ってるんだわ。凪沙と直接会わせれば、きっと十二番目も力を取り戻す！」

「俺たちもそう思ってたんだ。アヴローラが目覚めるまではな！」

ヴェルディアナの肩に手を置いて、聞き分けのない子どもに言い聞かせるように牙城が叫ぶ。

「だが違った。勘違いをしてたんだ。俺たちは最初から間違ってたんだよ！」

「うるさい、黙れ！」

ヴェルディアナが衝動的に腕を振った。その細い指先が牙城の肉を裂き、力任せの一撃が、牙城の長身を吹き飛ばす。見た目はほっそりとした女性でも、ヴェルディアナの筋力は吸血鬼のものだ。いかな牙城でも耐えきれるものではなかった。

立ち上がろうとした牙城が、がくりと膝を落とす。歪めた口元から洩れ出したのは鮮血だ。ヴェルディアナの一撃が牙城の胸を裂き、内臓にまで傷が達しているらしい。

「あ……」

そんな牙城の姿を見て、動揺していたのはヴェルディアナのほうだった。牙城の血で濡れた自分の指先を見下ろして、放心したように息を吐く。

彼女の腕に残されていたのは、吸血鬼の回復力ですら癒しきれない無数の注射器の痕だった。濫用した薬のせいで、力の加減ができなくなっているのだ。

「もうあなたの言葉なんて信じないの……」

追い詰められた自分自身を正当化するために、ヴェルディアナが牙城に言い放つ。積み上げられた書物の山を乱暴にかきわけて、彼女はそのまま外へと向かった。

「ヴェルディアナ……！」

彼女を止めようとした牙城が、そのまま力尽きたように床に倒れ伏す。傷口から流れ出した鮮血が、牙城の周囲に血溜まりを作っていく。

牙城はそのまま仰向けになって、ぐったりと研究室の天井を見上げた。

出血が止まる気配はない。このままでは危険なことはわかっていたが、身体が動かないんだから仕方ねーな、と牙城は他人事のように考える。これまで散々死線をくぐってきた挙げ句に、吸血鬼のお嬢様の癇癪で命を落とすのかと思うと、あまりの間抜けさに苦笑するしかない。

凪沙を救えなかったのは心残りだが、牙城の役目は事実上すでに終わっている。娘のために牙城がしてやれることはもうなにもない。あとは次の役者に託すしかない。

せめて気の利いたダイイングメッセージでも残しておくかと、血まみれの指先を眺めながら牙城が思案を始めたとき、ふと誰かが傍に立つ気配がした。

「ふんふー……いいザマねェ、牙城君」

牙城を見下ろすように立っていたのは、しわくちゃの白衣を着た女性だった。寝癖のついた髪に半開きの瞼。十代の少女と見まがうくらいの童顔だ。だがしかし巨乳である。

血まみれで倒れた古城を眺めて、彼女は、なぜか愉しそうに笑っている。

「よぉ、深森さん。もしかして聞いてたか？」

皮肉っぽく唇を引き攣らせて、牙城も笑った。暁深森は、そんな牙城の隣に屈みこみ、

「だめよ。ああいう真面目で思い詰めちゃうタイプに、迂闊に手を出したりするからそういう目に遭うの。これで少しは反省するかしら」

「手は出してねェよ！　話を聞いてたんなら、そういう誤解は解けてるんじゃねーか？」

牙城がめずらしくムキになって反論するが、深森は冷ややかに目を細めるだけだ

「だけど、利用したんでしょ」

「……まあな」

苦々しげな表情で、牙城がうなずく。衰弱する凪沙を救うためには、どうしてもカルアナ伯爵家に伝えられた〝柩〟の鍵が必要だった。その在処を知っていたのは、伯爵家唯一の生き残りであるヴェルディアナだけ。だから牙城は彼女に接触し、紘神島へと連れてきたのだ。

彼女を騙したつもりはないが、カルアナ家再興というエサを使って、利用していた印象は否めない。その代償だと思えば、彼女に殺されかけたことにも、まあ諦めがつく。

「面倒な女の子ばかり寄ってくるのよね。古城君があなたに似ないといいんだけど」

不安だわ、と深森が真剣な口調で言った。

「古城か……まさか最後の最後であいつに頼ることになるとはな」

まだ少し頼りない息子の顔を思い出しながら、牙城はクックッと愉快そうに笑う。

牙城の役目はもう終わった。今となっては、凪沙を救える可能性があるのは古城だけだ。第四真祖の従者と化した古城の存在は、〝宴〟の唯一の不確定要素だからだ。

ザハリアスにとっての不確定要素ではない。裏から糸を引いている連中――獅子王機関にとっての不確定要素だ。

最悪の場合、牙城は子どもたちを二人とも失うことになるが、それでも今は古城に期待するしかない。それにプレゼントのひとつも用意していないわけではない。

「深森さん……その辺の書類の中に段ボールが一個埋まってると思うんだが……」
「んふ？」
「もしかしたらその中身が必要になるかもしれない。そんときは占城に渡してやってくれ」
「段ボールって、これかしら？　差出人は……アルディギア王宮？」
国際郵便の伝票を睨んで、深森がにこやかに微笑んだ。
「そういえば、あの国の王妃様ってすごい美人なのよね？」
「ああ、そうだな。こないだ久しぶりに会ったんだが、見た目は変わってなかったな。中身はとんでもない跳ねっ返りで腹黒なんだけどな。まあ、いい女なのは間違いな……いっ!?」
「ふーん」
満面の笑みを維持したまま、深森が牙城の傷口近くを、ぐりぐりと靴の爪先で踏みつける。
牙城は、土気色になった顔を激痛で歪めながら力無く笑って、
「あー……ところで深森さん。これ、そろそろ出血がシャレにならない感じになってるんで、いい加減、治療してもらえるとありがたいんですがねえ」
「ふふふ」
クーラーボックスからアイスを取り出した深森が、それをねぶるように舐め始める。嗜虐的な妻の微笑を眺めながら、牙城が深々と嘆息した。
「勘弁してくれ……」

3

電話口から聞こえてきたのは、丁寧だが無機質な人工知能の声だった。
「出張中？」
『はい。研究主任の暁深森は本日、島外に出張中です。ご用件があれば承りますが』
「あー……いえ、わかりました。なるべく早く俺……息子に連絡するように伝えてください」
お願いします、と言い残して占城は電話を切る。無意識に力が籠もっていたのか、握り締めた携帯が、手の中でギシギシと軋んでいる。
「クソ、どうなってんだよ!?　こんな肝心な時に両親揃って連絡が取れないってのは！」
吐き捨てるように呟いて、占城は乱暴に廊下の壁を殴りつけた。近くを歩いていた年輩の教師に睨まれるが、それを気にしている余裕もない。
九番目が知らせにきた〝宴〟とやらの指定日は、おそらく今夜　－四月最後の満月の夜だった。そのことはすでに牙城たちにも伝えてある。
無視しとけ、というのが牙城の答えで、それについては占城も同感だった。
馬鹿正直にザハリアスの誘いに応じる理由はなにもない。ザハリアスの都合が月齢に左右されるというのなら、むしろ積極的に逃げるべきだ。アヴローラが正式に登録魔族として認めら

れれば、特区警備隊の保護も受けられる。そうなればザハリアスも、アヴローラにおいそれと手を出すことはできなくなるはずだ。つまり今夜さえ乗り切れば、彼女の安全は確保できるのだ。

だが、ここに来て古城は不安を覚え始めていた。

それは今朝のニュースが原因だ。ネラプシ自治区で発生している謎の吸血鬼感染症――偶然で片付けてしまうには、あまりにもタイミングが良すぎると感じられた。

もしもあの大規模感染が、ザハリアスによって仕組まれたことなら、〝宴〟は古城たちだけの問題ではなくなる。同じような災害が絃神島でも起こらないとは言い切れないのだ。

「これはもう意地を張ってる場合じゃないかもな。那月ちゃんに泣きつくしかねえか……」

傍若無人なカリスマ担任教師の顔を思い出し、古城は無意識に顔をしかめた。

迂闊に彼女に頼ってしまうと、あとでどんな見返りを求められるかわかったものではないが、あれでも那月は学校専属の攻魔カウンセラーだ。警察や特区警備隊にも顔が利く。両親が頼りにならない今、古城の知り合いでザハリアスに対抗できそうな人材といえば、彼女以外に思いつかない。

それにアヴローラは近い将来、彩海学園の生徒になるかも知れないのだ。古城が土下座のひとつでもして頼みこめば、那月が力になってくれる可能性は高かった。

「いや……そうか……」

土下座する前に試してみるべき手段を思い出して、古城は表情を引き締めた。

ザハリアスに対抗できそうな人材は、あと一人いる。それはほかならぬアヴローラ自身だ。

彼女が九番目と同等の力を扱えるようになれば、ザハリアスも力ずくでアヴローラに危害を加えることはできないはずだった。

ただしそのためには、彼女が記憶を取り戻すことが前提になる。そのための鍵になるのは、

「凪沙……か」

結局そうなるのか、と息を吐き、古城は中等部のほうへと歩き出した。昼休みはもうすぐ終わりだが、凪沙と話をするくらいの時間はあるはずだ。

もう一度、アヴローラと会ってくれと凪沙に頼んでみる。前回のような不意討ちではなく、きちんと事情を伝えれば凪沙だってわかってくれるはず。少なくとも説得してみる価値はある。

「古城？　どこ行くの？」

いったん教室に戻って帰り支度を始めた古城に、声をかけてきたのは浅葱だった。

ちょうどいいところに、と古城は拝み倒すような姿勢で彼女に向き直り、

「悪い、浅葱。俺は午後の授業出ないから、なんか上手いこと誤魔化しといてくれ」

「ちょっ……あんた、どこに行く気よ!?」

制止しようとする浅葱を振り切って、古城は教室の出口へと向かった。そんな古城の態度でなにかを察したのか、浅葱の表情が険しくなる。

「アヴローラになにかあったの？」

静かな口調で問いかけられて、古城は足を止めた。振り返ると不安そうな浅葱と目が合った。浅葱はアヴローラが未登録魔族であることを知っている。その関係で彼女がトラブルに巻きこまれているのではないかと、心配しているようだった。なんだかんだで、浅葱はアヴローラの世話をずいぶん焼いてくれたのだ。

「いや、大丈夫だ。なにもねーよ。あってたまるか……！」

古城が強気に笑って首を振る。浅葱が、わかった、と肩をすくめた。納得したわけではないのだろうが、それ以上は追及しない、という意思表示だ。

「なにかあたしに手伝えることは？」

代わりに浅葱がそう訊いてくる。そうだな、と古城は少し考えて、

「パーティしようぜ」

「は？」

話の流れを無視した古城の提案に、浅葱が虚を衝かれたように目を大きくした。

「ああ、そう言えば、もうすぐ俺の誕生日なんだ。祝ってくれ。パーッと騒ごうぜ」

「あんたの誕生日って五月じゃん」

「よく覚えてたな」

少し不思議な気分で古城が訊き返す。古城の誕生日は五月の頭。ゴールデンウィークの真っ

直中だ。そのせいで、これまであまり友人たちに祝ってもらった記憶がない。

「た、たまたま思い出しただけよ、たまたま！」

「そういうわけで、頼んだ」

「なにがそういうわけなのよ、もう」

狼狽を引きずるように赤面したまま、浅葱は、古城を追い払うように手を振った。

古城はそのまま中等部の校舎へと向かう。

幸運なことに、渡り廊下の途中で顔見知りと遭遇した。

黒髪眼鏡の見るからに委員長っぽい風貌の女子生徒だ。入院中の凪沙を見舞いに来てくれたときに、古城とも何度か話した記憶があった。

近づいてくる古城に気づいて、彼女は不思議そうに立ち止まる。

「暁先輩？」

「甲島さん、だっけ。たしか今年も凪沙と同じクラスだよな？」

「はい」

特に萎縮するようなこともなく、甲島桜は事務的に答えてくる。委員長という役職柄か、上級生の相手をするのも慣れているらしい。

「悪いけど、凪沙のやつを呼んできてもらえないか。中等部の校舎はさすがに入りづらくてさ」

古城はそう言って頭を下げる。

ほんの数週間前まで毎日のように通っていた校舎だが、高等部に進学してしまうと、途端に足を踏み入れるのに躊躇してしまう。なんとなく場違いな気がしてしまうのだ。

しかし桜は、そんな古城を無表情に見上げて首を振った。

「ご存じないんですか？」

「え？」

「凪沙は早退しましたよ。さっき病院の人が迎えに来て」

「……病院？」

古城が間の抜けた声で訊き返す。

凪沙が病院に呼ばれているという話は聞いていない。彼女が体調を崩して運ばれたのなら、真っ先に古城に連絡があるはずだが、それもない。救急車で搬送されたというのならともかく、病院関係者が凪沙を迎えに来るというのも奇妙な話だ。

「いったい、誰が……？」

不意に足元が崩れていくような不安を覚えて、古城はうめく。

人工生命体を思わせる平坦な口調で、甲島桜が淡々と答える。

「ＭＡＲの方だと名乗っていましたけど。たしか……遠山さん、と」

4

指先にこびりついた鮮血を舐めながら、ヴェルディアナはマリーナに戻ってくる。途中で打った薬の効果が残っているのか、異様な高揚感が彼女を支配していた。

傾きかけた午後の陽射しを鬱陶しく思いつつ、ヴェルディアナはふらふらと桟橋を渡る。

その唇からは乾いた笑い声が止めどなく洩れ出し続けている。

「あはは……はは……ははは！」

ヴェルディアナの足取りは、酩酊してるかのように頼りない。

牙城を傷つけてしまったときに、自分の中でなにかが壊れたことをヴェルディアナは自覚していた。〝死都帰り〟などと呼ばれていても、牙城はしょせんただの人間に過ぎない。あれだけの傷を負った彼が、今も生きていられるとは思えない。

たとえ利用されていただけだとしても、牙城はヴェルディアナに生きる目的を与えてくれた唯一の男だ。不名誉な前領主の娘として、虐待を受けていた彼女を救ってくれたのも牙城だった。その恩人をヴェルディアナは無自覚に殺そうとした。もはやヴェルディアナを護ってくれる人間はどこにもいないのだ。

魔族登録証は途中で捨てた。牙城の死体を発見した誰かが、特区警備隊に通報していたら、

突然途切れた。縛られた身体を折り曲げて、苦悶するように息を吐く。

「痛ったあ……なにこれ、頭痛い」

「……浅葱？」

古城が驚いて振り返る。彼女の身に何が起きているのか、それを理解してゾッとした。

原因はわからないまでも、古城が記憶をなくすのはまだ納得できる。なにしろただの人間が、真祖の力を手に入れたのだ。肉体にも相当な負担がかかったはずだし、記憶の一部を失う程度の代償で済んだのは、むしろ幸運だったと思える。

しかし浅葱までもが記憶をなくしているというのなら、話はべつだ。

無関係なはずの彼女に影響が出ているのだとしたら、古城一人の問題では済まなくなる。

古城たちの記憶は、事故によって偶発的に失われたのではなく、誰かに意図的に奪われたということになってしまう。

もしかしたら浅葱自身も、第四真祖を巡る事件に巻きこまれていたのかもしれない。

おそらくは、古城の傍にいたせいで

「　やはり思い出せないんですね」

焦燥にとらわれた古城の背中に、静かな声が響いてきた。壁際の暗がりの中に、気配もなく立っていたのは、中等部の制服を着た小柄な黒髪の少女だった。

「姫柊!?」

登録証の位置情報でヴェルディアナの居場所が特定されてしまうからだ。

このまま絃神島に居続けることはできない。だからといって、ほかにどこか行く当てがあるわけでもない。今のヴェルディアナに残されたのは、ザハリアスに対する復讐心だけだ。

「殺してやる、ザハリアス……殺してやるの殺してやるの殺してやるの殺してやるの……」

呪詛のように口の中で繰り返しながら、ヴェルディアナはクルーザーに乗りこんだ。

この船はもともと牙城の持ち物だ。ヴェルディアナはもうここには居られない。だがここを立ち去る前に、回収しておかなければならないものがある。十二番目　十二番目の〝焔光の夜伯〟は、ヴェルディアナの所有物だ。

「……ヴェルディアナ？」

アヴローラは、船内の掃除をしているところだった。それは出かける前にヴェルディアナが彼女に頼んだことだ。記憶喪失で、しかも不器用なアヴローラだが、命令されれば律儀にそれを果たそうとする。誰かに必要とされることが、嬉しくてたまらないのだろう。

だが、今のヴェルディアナには、彼女のそんな純真さが煩わしい。幼いころの無知な自分を見ているようで、むしろ憎しみすら感じてしまう。

「なんなの、これ」

テーブルの上に置かれていた金属プレートに気づいて、ヴェルディアナが訊いた。刻みこまれているのは古い魔術文字。ヴェルディアナも完全には解読できないが、見覚えのあるいくつかの単語から、おおよその文面の見当はつく。

「〝宴〟の招待状……!?　差出人はザハリアス!?」

「あ……」

驚くヴェルディアナを見て、アヴローラが怯えたように身を竦めた。異教徒を匿っていたことを咎められた修道女のような、後ろめたさと真摯さが入り混じった表情だ。

「どうして私に隠してたの？」

ヴェルディアナが低い声で問い詰める。

「こ、古城が……我に進言を。召喚に応じるのは不要だと」

「なんですって!?」

「我も、望まぬ。行きたくない……」

頼りなく声を震わせながらも、アヴローラがきっぱりとそう言った。彼女が自分に反抗したと知った瞬間、ヴェルディアナの意識は沸騰したように真っ白になる。

「ふざけないで！」

激昂して怒鳴り散らしながら、ヴェルディアナはアヴローラの腕を強引につかんだ。抵抗する彼女を無理やり立ち上がらせて、船の外へと連れ出そうとする。

「そんなの許さないわ！　許さないわ！　あなたは私と一緒に来るの！　ザハリアスを殺すのよ！」

「……い、嫌……！」

「うるさい！　あなたは私の言うとおりにしてればいいの！」

ザハリアス主催の〝宴〟　それはヴェルディアナが彼に復讐する、千載一遇の好機だった。あの男が自らの居場所を明らかにした上で、警戒することなく懐に招き入れてくれるのだ。

もちろんザハリアスの周囲には、護衛の匈鬼がいるのだろうが、それはなんの障害にもならない。ヴェルディアナは最初から刺し違えるつもりなのだ。復讐さえ果たせば、あとのことはどうでもいい。

乱暴に壁に叩きつけたせいで、アヴローラは意識をなくしていた。そんな彼女を引きずって、ヴェルディアナは船の外に出る。

「――ヴェルさん!?」

桟橋に降り立ったところで、誰かが驚いたようにヴェルディアナを呼んだ。唖然とした表情で彼女を見ていたのは、制服姿の暁古城だ。

「なにやってんだよ、あんた……アヴローラになにをした!?」

気絶しているアヴローラに気づいて、古城の顔つきが険しくなる。

ここまで懸命に走ってきたのか、よく見れば古城の息は弾んでいた。どうやら彼のほうでも、なにか問題があったらしい。だが、ヴェルディアナにしてみれば今さらどうでもいいことだ。

「あなたは関係ないの。黙ってて」

ヴェルディアナが冷たく言い放つ、突き放すようなその口調に、古城が戸惑う気配がある。

「ヴェルさん!?　なにを言って……!?」

「あなたも知ってるでしょう、古城。ネラプシ自治区で今、なにが起きてるのか。あの土地は、私の故郷なの。あそこに住んでいるのはカルアナの領民だった人たちなのよ！」

涙混じりに叫ぶヴェルディアナを見て、古城が立ち尽くしたまま絶句する。憎悪のこもった眼差しで彼を睨んで、ヴェルディアナは犬歯を剥いた。

「私はザハリアスを許さない。私から父様も姉様も奪って、その上、領民まで奪おうとしているあの男を。殺してやるわ……絶対に殺してやる！」

「……そのために、アヴローラを利用するのかよ!?」

ヴェルディアナの憎悪に圧倒されることなく、古城が冷静に言い返す。

一瞬、ぐ、と息を呑み、そしてヴェルディアナは艶然と微笑んだ。

「なにを馬鹿なことを言ってるの？」

気絶したアヴローラの髪をつかんで、モノを扱うようにぞんざいに持ち上げる。

「当然でしょう。だってこれは兵器なのよ。殺して壊すために造られたんでしょう？」

「――っざっけんな、てめえ！」

荒々しく吼えた古城が、岸壁を蹴ってヴェルディアナへと殴りかかってくる。その予想外のスピードにヴェルディアナは戦慄した　人間の筋力で引き出せるような速度ではない。古城の身体能力は、並の吸血鬼を明らかに凌駕している。

やはり彼は第四真祖の血の従者なのだと実感する。

だがそれでも、正統な吸血鬼であるヴェルディアナの敵ではない――！

「――〝ガングレト〟！」

古城の前に出現したのは、炎をまとう魔犬だった。巨大な前肢が古城をとらえ、そのまま彼の胴体を引きちぎる。鮮血と肉と内臓を撒き散らして、古城は呆気なく吹き飛んだ。地面に叩きつけられて動かなくなる。

「はは……あはははは……あなたが悪いのよ、暁古城。あなたが私の邪魔をするから……！　あはは……あはははははははははは！」

頬を伝う涙を拭って、ヴェルディアナが哄笑する。恐怖も後悔も哀れみもなにも感じない。ただ空虚で大きな穴が、ぽっかりと胸に空いたような不思議な感覚だ。

金髪の少女を引きずって、彼女は再び歩き出す。

〝宴〟の夜が近づいてくる――

5

夕陽の眩しさにうなされて、目が覚めた。

海面スレスレに浮かぶ太陽が、横たわる古城の頬を赤く染めている。

自分の身になにが起きたのか、思い出すまでに時間がかかった。凪沙が遠山に連れ去られたと聞かされて、MARの付属病院に向かったのが数時間前のこと。しかし遠山は失踪しており、MARでも彼女の行方はわからないと言われてしまったのだ。

仕方なく向かったマリーナで、気絶したアヴローラを運んでいるヴェルディアナと遭遇した。そして彼女の眷獣に身体を引き裂かれ、そこから先の意識が途切れている。

「生きてるのか……俺は……？」

手脚が動くことを確認して、古城は無理やり身体を起こした。予想していた傷の痛みはない。血まみれの制服には、右肩から左の脇腹にかけて、巨大な爪に引き裂かれた跡が残っている。しかし古城の身体に傷はなかった。代わりに、かさぶたが剝がれた直後のような、真新しい皮膚が全身を覆っている。一度破壊された肉体が、再生したことを証明するように

「これが血の従者の力ってやつか……参るな……」

勘弁してくれ、と古城が首を振る。本当に自分が人間ではなくなったのだ、という実感が、今ごろになって湧いてくる。

不思議なほどに動揺はなかった。それはおそらく、やるべきことがわかっているせいだ。死んでしまえば、凪沙とアヴローラを助け出すこともできなくなる。そのことを思えば、不死身の身体というのは悪くない。

問題は、この〝不死身〟が、どのくらいアテになるのかわからないことだった。肉体の再生

にはある程度の時間がかかるし、吸血鬼の眷獣が相手では瞬殺されてしまうことも証明済み。期待したほど便利な能力ではなさそうだ。

ヴェルディアナは、おそらくアヴローラを連れてザハリアスに会いに行ったのだろう。そして凪沙とアヴローラの関係を考えると、遠山も同じ場所にいる可能性が高い。

兵器開発部門を持つMAR社員の遠山と、兵器商のザハリアス　彼らの間に、なんらかのつながりがあってもそれほど不思議はないからだ。それどころか、遠山がザハリアスに雇われたスパイだった可能性も十分に考えられる。

「〝焔光の宴〟か……行くしかないか」

古城は、東地区の外れにある連絡橋の方角へと歩き出す。

ザハリアスが〝焔光の宴〟の開催地として指定したのは、絃神島・旧南東地区だった。文字どおり、絃神島本島の南東海上に浮かぶ、人工島の一区画である。

もともとは実験的に構築された試作人工島であり、その後は主に絃神島本島を造るための建設基地として使われていたエリアだ。住民の多くは、絃神島の建設に直接関わる、都市設計者や建設作業員とその家族。かつては絃神島の中心だった旧南東地区だが、東西南北の四基の人工島が完成したことで役目を終え、ここ最近では人口も減り続けている。

また絃神島本島に比べると小型で設備も劣っていることや、人工島本体の耐用年数が迫っていることから、現在は廃棄エリアに指定され、数年以内に解体されることが決まっていた。

老朽化が進む廃墟の人工島

死の商人たるザハリアスが主催する〝宴〟の舞台に、これほど相応しい場所もないだろう。その旧南東地区に渡るには、絃神島本島と接続されている二本の連絡橋か、またはフェリーを使うのが一般的だ。

しかし血まみれの服を着た今の古城が、フェリーに乗せてもらえるとは思えない。必然的に古城の足は、手近なほうの連絡橋へと向かうことになる。

その連絡橋の入り口が見えてきたところで、古城は異変に気づいて足を止めた。

「特区警備隊……？　いったいなにをやってるんだ？」

連絡橋のたもとでは、小さな騒ぎが起きていた。橋を完全に塞ぐような形で、装甲車によるバリケードが築かれている。さらには、武装した機動隊員や、対細菌・化学兵器用の防護服を着た人々の姿もある。まるで内戦中の都市を見ているような物騒な光景だ。

『人工島管理公社より、絃神島住民の皆様にお知らせします　』

古城の疑問に答えるように近づいてきたのは、上空を旋回する特区警備隊の無人広報ヘリだった。小型ラジコン機に埋めこまれたスピーカーが、無感動な人工音声を流し続けている。

『本日、人工島・旧南東地区において、新型感染症の疑いのある患者が発見されました。感染拡大の恐れがありますので、予防措置として、安全が確保されるまで、旧南東地区への往来を禁止。連絡橋を封鎖いたします』

「な……」

飛び去っていくラジコンヘリを見上げて、古城は目眩にも似た焦燥を覚えた。

このタイミングでの新型感染症――ネラプシ自治区に発生したものと同じタイプだと考えて間違いないだろう。そして、そのどちらにもザハリアスの存在が絡んでいる。

『現在、旧南東地区への一切の渡航を禁止しています。また旧南東地区に立ち寄った船舶は、寄港せずに沖合で待機。検疫官の指示に従ってください。違反者には罰則が科せられます。繰り返します――』

「くそ……船も駄目ってことか」

路上に呆然と立ち尽くしたまま、古城はギリギリと奥歯を鳴らした。

問題は感染症だけではない。ヴェルディアナは、すでにアヴローラを連れて旧南東地区に辿り着いているはずだ。連絡橋が封鎖されてしまったら、アヴローラを取り戻すことができなくなってしまう。

絶望に打ちひしがれて、古城はふらふらと歩き出す。その直後、古城の目の前に現れたのは、一台の自転車――派手な蛍光色のクロスバイクだった。

「うおっ！」

激しいブレーキ音が鳴り響き、激突する寸前で自転車が停止する。硬直している古城までの距離は五センチ足らず　本当に間一髪だ。

……あ、暁先輩だ」

自転車に乗っていたのは、ジャージ姿の少女だった　血まみれの古城の姿を見て、びっくりしたように目を見開いてる。手脚がすらりと長く、日焼けした肌にショートヘアがよく似合う。見覚えのある女子中学生だ。

「ああ、女バスの……進藤、だっけ」

自転車少女の正体は進藤美波だった。中学時代のバスケ部の後輩だ。学年は古城よりもひとつ下だが、部活の雑用のついでに世間話をする程度の顔見知りだった。

「先輩、どうしたんですか、その怪我……!?」

「ああ、これは気にすんな。見た目ほどたいした怪我じゃないから」

「いや、でも――」

さすがに進藤もすんなりとは納得してくれない。夕闇で誤魔化せるかと思ったが、古城の見た目は、予想以上にスプラッタなことになっているらしい。

「進藤はどうしてこんなところにいるんだ？　おまえん家ってこっちじゃないだろ？」

動揺している後輩を無視して、古城は強引に話題を変えた

進藤は、少し照れたように微笑んで、背負っていたバックパックを指さした。

「紋神島で吸血鬼感染症の患者が出たって聞いてます？　うちの父ちゃ……父親は検疫検査局の技師なんですよ　これから旧南東地区に調査に行くから、船まで着替えを持ってきてくれ

って頼まれて」

「……船？」

「あっちに泊まってる〝アシュヴィン〟って検疫船です」

「へえ……親父さんも大変だな、こんなことになって」

後輩の家族を気遣いながらも、古城はべつのことを考えていた。旧南東地区への渡航は禁止――だが、専門家を乗せた検疫船は例外だ。

突然の感染症対策に追われている検疫船の乗員が、密航者を警戒している可能性は低い。どうにかして船内に潜りこむことができれば、旧南東地区に移動することができるはず。

「悪かった、進藤。邪魔したな」

後輩の少女に手を振って、古城は港のほうへと走り出す。

「あ……先輩……！」

「ん？」

古城を呼び止めた進藤が、物言いたげに唇を震わせた。だが、結局、彼女はなにも言わずに、礼儀正しく頭を下げただけだった。

「いえ、なんでもないです。あの……また学校で」

6

クォーツゲートは、旧南東地区の中央に位置する巨大な建造物だ。建物の主要部分は六階建てで、かつては絃神市の市庁舎や、人工島管理公社の本社がここに置かれていた。

外壁には魔術的に強化された透明なアダマスガラスが積極的に採用されており、建物全体が巨大な宝石の宮殿に見える。宮殿の中央に位置するのは、六角水晶に似た巨大な時計塔だ。

極東の〝魔術特区〟絃神島の技術を世界中に知らしめた、歴史的な魔術建造物である。

しかし旧南東地区の解体が決定したことで、そのクォーツゲートも廃棄されることになる。

現在のクォーツゲートは、一般人の立ち入りが禁止された無人の廃墟だ。

美しくも空虚なガラスの城――

ザハリアスが〝宴〟の舞台として選んだのは、そのクォーツゲートの中央広場だった。

ガラス張りの天井に覆われた広場の中央に、十二個の棺桶が扇状に並べられている。

その半数にあたる六個の棺桶に、六人の少女たちが眠っていた。

十一番目、九番目、八番目、七番目、二番目、そして一番目――

ザハリアスが所有する六体の〝焔光の夜伯〟だ。

彼女たちの中心に置かれているのは、宝石の結晶に包まれた灰色の髪の少女。痩せさらばえ

た彼女の遺体を、ザハリアスは無言で眺めていた。

時計塔が夜九時の鐘を打ち鳴らす。

それが合図になったように、静かな女の声が聞こえてきた。

「お待たせしました、ザハリアス卿――」

ザハリアスがゆっくりと振り返る。スーツを着た彼の顔立ちは若い。灰色の髪をした、十代半ばの少年のものだ。狡猾そうな細い目だけが、かつての兵器商の面差しを残している。

「ご協力、感謝します。ミス遠山。それに暁凪沙嬢も、ようこそ、我が〝焔光の宴〟へ――」

ザハリアスが向けた視線の先には、MARの遠山美和と、制服を着た暁凪沙の姿があった。

協力的な表情とは言い難いが、凪沙は縛られているわけではない。おそらく遠山は、凪沙の家族の安全を楯にとって、彼女を連行してきたのだろう。その証拠に、遠山を見上げる凪沙の目には、あからさまな敵意が宿っている。

「あなたは、誰？」

その凪沙が、ザハリアスを見据えて攻撃的に訊いてきた。

ザハリアスは胸元に手を当てて、深々と礼をする。

「申し遅れました　バルタザール・ザハリアス　第四真祖の血の従者です」

「真祖の……従者……？」

気丈に振る舞っていた凪沙の瞳が、恐怖に曇る。

凪沙が魔族恐怖症だという情報は、すでにザハリアスにも伝わっている。青ざめる彼女を安心させるように微笑んで、ザハリアスはその場に片膝を突く。

「あなたに危害を加えるつもりはありません。どうぞ怯えないでください、暁凪沙。私はただ、かつてあなたが行った奇跡を、もう一度、再現して欲しいだけなのです」

「奇……跡？」

「然様。死者の蘇生です」

ザハリアスが深々とうなずいて顔を上げる。凪沙は、なにを言われているのか理解できない、と首を振るだけだ。ふむ、とザハリアスは目を細め、

「そうですね　まずは私の故郷の話から始めましょう　私の故郷は、今はもう存在しないバルカン半島の小さな街です　かつて〝戦王領域〟と〝滅びの王朝〟、そして西欧教会の〝三つ巴〟の争いに巻きこまれて消滅しました。今から七十年ほど前のことです」

そう言って、ザハリアスは左端に置かれた棺桶を見た。

棺桶に眠っているのは、胸にえぐられたような傷を持つ金髪の少女だ。

「……戦争を仕掛けてきた人々の目的は彼女でした。私の故郷に封印されていた〝一番目の〟焔光の夜伯〟です」

「……っ!?」

世界最強の吸血鬼――〝焔光の夜伯〟の噂話は、当然、凪沙の耳にも入っているのだろう。彼女の幼い顔立ちが驚愕に引き攣った。

そんな凪沙の反応を、どこか懐かしげに眺めて、ザハリアスは視線を巡らせた　彼が次に指さしたのは、宝石の中に浮かぶ灰色の髪の少女だった。

「彼女はヴラスタ。私の妹です。そして一番目を守護する巫女でした」

笑顔を絶やさないザハリアスの瞳の奥に、かすかに憎悪の光がよぎる。彼の唇が小さく歪む。

「そして吸血鬼どもに殺されました。私はヴラスタを護ろうとして、同じ場所で殺された。そして私だけが生き返った。ヴラスタが私を生き返らせたのです。〝一番目の血の従者〟として――あなたが、あなたの兄にしたように！」

「……兄？　古城君？」

凪沙が驚いたように訊き返す。ここで古城の名前が出てきたことに、彼女ははっきりと動揺していた。用心深い蛇のような眼差しで凪沙の反応を観察し、ザハリアスは薄く苦笑した。

「やはり覚えていらっしゃらないのですか。あなたがやったことですよ。あなたがお兄さんを真祖の血の従者に変えたのです。不老不死の怪物に！」

「嘘だよ……そんなの……！」

凪沙が激しく首を振って叫んだ。彼女にしてみれば当然の反応だ。ザハリアスは、彼女の兄を怪物だと言ったのだ　彼女が恐れる魔族の従者だと

「あたしにそんな力なんて……ない！」

「ええ。そうでしょうとも　わかっています　いかに優れた巫女であろうとも、死者を生き返らせることはできない。それが可能なのは、穢れた土地より甦りし死者の王、世界の理から外れた殺神兵器。無限の負の生命力を操る人造の吸血鬼　第四真祖だけだ！」

ザハリアスが大きく両腕を広げて、空を仰いだ。

「あなたの力で目覚めさせてください。完全な第四真祖を。幸いなことにここにはすでに、六体の〝焔光の夜伯〟が――第四真祖の素体の半数が揃っています。彼女たちには、ネラプシ自治区の生け贄から吸い上げた魔力が充塡されている。覚醒の呼び水としては十分なはずだ！」

「……そんなこと……そんなことさせるものか……！　ザハリアス！」

ザハリアスの弁舌を遮って、広場に姿を現したのは、血まみれのメイド服に身を包んだ女吸血鬼だった。絹糸のようなブルネットの髪は乱れ、怒りをたたえた目は赤く血走っている。

そして彼女に引きずられるようにして、金髪の小柄な少女が立っていた。

十二番目の〝焔光の夜伯〟――アヴローラだ。

「……アヴローラ……さん……」

怯える金髪の少女を眺めて、凪沙が呆然と呟いた。

凪沙は、かつてアヴローラに会っている。そのときアヴローラを呼び寄せて、凪沙に紹介したのは古城だった。そしてザハリアスは、その古城を真祖の血の従者だと言った。

軽い貧血を起こしたように、凪沙が上体をふらつかせる
凪沙に第四真祖を目覚めさせろと命じるザハリアスの姿が、自分をアヴローラに引き合わせようとしたかつての兄の姿に重なる　どうして、と凪沙は口の中で呟く
いったいなにが起きているのか
自分はいったい誰なのか。
自分の中にいる彼女は、いったい
「これはこれは、お待ちしておりましたよ――」
待ちわびていた賓客の登場に、ザハリアスが口元がほころばせる。
それは、交渉が計算どおりに運んだことを喜ぶ商人の顔だ。
ヴェルディアナが自分を殺そうとしていることを、ザハリアスは知っていた。だからこそ、招待状をアヴローラに託したのだ。あの招待状の存在を知れば、ヴェルディアナは、必ずアヴローラを連れてここに来る。あの厄介な〝死都帰り〟や、暁古城に逆らってでもだ。
ヴェルディアナの思考や感情は、すべてザハリアスの掌の中にある。
彼女の怒りや憎しみまでも――
「我が〝焔光の宴〟の会場へようこそ、ヴェルディアナ・カルアナ、わざわざ七体目の素体を連れてきていただけるとは恐悦至極　歓迎いたしますよ」
「黙れ！」

ヴェルディアナが怒号とともに、二体の眷獣を召喚した　炎をまとう魔犬と、凍える息を吐く双頭犬。今のヴェルディアナが扱える最大の戦力だ。この距離ならば、護衛のいないザハリアスを仕留めるなどわけもない。
「死になさい、ザハリアス！　父様の無念と領民たちの苦しみ、思い知れ――！」
勝ち誇った晴れやかな表情で、ヴェルディアナが叫ぶ。
それを遮ったのは、ザハリアスの声だった。いかなる動揺とも無縁な酷薄な声だ。棺桶の中に横たわる〝番日〟と手を取り合って、彼は静かに命令する。
「疾く在れ、〝神羊の金剛〟――」
その刹那、ザハリアスを守護するように、虚空から巨大な眷獣が出現した　あり得ないほど強大な桁外れの怪物が――
それは金剛石の肉体を持つ大角羊だ。眷獣の周囲には数千、数万もの宝石の結晶が浮かび、それらが楯となってザハリアスを護っている。
「第四真祖の……眷獣!?　そんな……っ!?」
ヴェルディアナの表情が絶望に染められていく。彼女の眷獣たちの攻撃は、宙を漂う宝石の防護壁に、傷をつけることすらできない。そして弾丸のように撃ち放たれた宝石の雨が、ヴェルディアナの眷獣を跡形もなく蹴散らして、消滅させていく
最初からわかっていたことだ。ヴェルディアナの眷獣では、真祖の力には歯が立たない

〝焔光の夜伯〟に護られたザハリアスは斃せないのだ。

「アヴローラ！　お願い、力を貸して欲しいの！」

追い詰められたヴェルディアナが、アヴローラを無理やり前に引きずり出す。アヴローラは萎縮して動けない、呆然と立ち竦んでいるだけだ。

「あなたなら、あの眷獣にも対抗できる！　あいつを殺して！　ザハリアスを殺してよ！」

ヴェルディアナが絶叫した。

そんな彼女の胸元に、パッと大きな薔薇が咲く。

薔薇の正体は飛び散った鮮血だ。血と肉の花弁を撒き散らして、ヴェルディアナの身体が、ぐらりと揺れる。

「……ひっ……！」

温かな返り血を全身に浴びて、アヴローラが頬を引き攣らせた。ヴェルディアナが手を放したせいで、アヴローラの小柄な身体は反動で地面に倒れこむ。

「ザハリアス……っ！」

ヴェルディアナが吐血しながら、兵器商を睨んだ。

ザハリアスの手の中に握られていたのは拳銃だ。あえて銃を使ったのは、〝神羊の金剛〟の威力では、アヴローラまで傷つけてしまうという判断なのだろう。護身用のリボルバーといえども、装塡された銀イリジウム合金弾は、吸血鬼に致命傷を与えるだけの破壊力がある。兵器

商であるザハリアスなら、貴重な対魔族用特殊弾を入手するのも容易なことだ。

立て続けに銃声が鳴り響いた。撃ち放たれた五発の銃弾が、狙い違わずヴェルディアナの胸元に吸いこまれる。ヴェルディアナはその場に膝を突き、そのままゆっくりと倒れていった。

「アヴ……ローラ……どうして……」

虚ろな瞳で金髪の少女を見上げたまま、ヴェルディアナが呟いた。

それきり彼女は動かなくなる。鮮血を浴びたアヴローラは、ただそれを呆然と見つめている。

「あ……ああ……」

少女の喉から声が洩れた。悲鳴とも怒声ともつかない壮絶な絶叫だ。

だがその声を発しているのはアヴローラではなかった。

風沙だ。

両腕で頭を抱えた彼女が、人間のものとは思えない絶叫を放っている。

「あああああああああああああああっ！」

大気がビリビリと震動し、クォーツゲートの建物が揺れた。

アヴローラはもちろん、ザハリアスまでもが唖然として、その異様な光景を眺めている。

「これは……すべての〝焔光の夜伯〟が共振している……!?」

唯一、冷静さを残した遠山が、周囲を見回して呟いた。

棺桶の中に横たわる六体の〝焔光の夜伯〟　アヴローラを除くすべての素体が、風沙の感

「ずっと疑問に思っていたんです。先輩が第四真祖になったことに、どうして周りの人たちが誰も気づかなかったのかと。先輩本人が忘れているのは、まあともかく、藍羽先輩のように、すぐ近くにいた人たちまでもが変化に気づかないのは不自然ですから」

銀色の槍を握った姫柊雪菜が、足音もなく前に進み出る。

普段と違う彼女の雰囲気に、古城は少し戸惑った。

幼さを残しつつも端整な、しなやかな強靭さを感じる美貌。固く結んだ唇が、出会ったばかりのころの彼女を連想させる。剣巫の肩書きに相応しい、硬質で近づきがたい雰囲気だ。

縛られた古城と浅葱を見下ろして、事務的なよそよそしい声音で雪菜が続ける。

「でも、これで謎が解けました。先輩だけではなくて、ほかの人たちも同じなんですね」

「記憶が操作されてる、ってことか……？」

「はい。封印されているだけなのか、奪われたのかはわかりませんが」

淡々と答える雪菜の姿に、古城はなぜか不安を覚えた。

古城と浅葱が縛られているこの状況で、どうして雪菜だけが無事なのか。そもそも彼女は、なぜ縛られている古城たちを見ても驚かないのか――

「まあいいや。それはそれとして、ここがどこなのか教えてくれないか、姫柊？　そもそも、なんで俺たちは、こんなところで縛られてるんですかねえ？」

なるべく雪菜を刺激しないように、古城はやんわりと質問してみる。雪菜は無表情に古城を

眺め、居心地の悪さを与える程度の短い沈黙を挟んだあとで、ようやくぽつりと返事をした。

「先輩方は気絶したんです。ＭＡＲ付属病院で、氷漬けの吸血鬼を見た直後に、お二人とも」

「気絶した？」

「はい。おそらく彼女のことを思い出そうとしたせいではないかと」

「アヴローラか……」

そういうことか、と古城は唇を噛んだ。ＭＡＲ付属病院の地下に安置されていた、巨大な氷の柩と、その中で眠っていた先代の第四真祖――アヴローラ・フロレスティーナ。

彼女の姿を見たときに、一瞬だけ古城は記憶を取り戻した。そして、その直後に意識をなくして倒れた、というわけだ。やはり彼女の存在は、古城たちの失った記憶と密接に絡んでいると思って間違いないだろう。

「それで姫柊が、俺たちをここに連れてきたのか？」

「そうですね。ベッドが使えなかったので、とりあえず椅子で。すみません」

雪菜が感情のこもらない口調で謝罪する。古城は、顔をしかめながら彼女を見上げて、

「いちおう事情はわかったけど、この鎖と手錠はなんなんだよ？」

さっさと外せ、と古城は無言で訴えるが、雪菜は素っ気なく首を振るだけだった。

「すみませんが、先輩方には、もうしばらくそのままでいてもらいます」

「なんでっ!?」

情に呼応するように目を開ける。

おお、と感極まったように、ザハリアスが叫んだ。

「1日覚めるのですね、ついに真なる第四真祖が！　素晴らしい！　素晴ら……っ!?」

興奮して喚き散らしていたザハリアスの声が、糸が切れたように唐突に消える。

彼の口から血塊がこぼれ出す。

兵器商の胴体が、巨大な斧で薙ぎ払ったように横一文字に裂けていた。

白分自身の血で真紅に染まった両腕を、ぽかんと見下ろして彼は首を振る。

「……な……!?」

なぜ、と口に出すこともできないまま、ザハリアスはその場に音を立てて倒れた。

彼を攻撃したのは、翼だった。

刃のように研ぎ澄まされた鉤爪を持ち、赤黒い血管を剝き出しにした　吸血鬼の翼。

その翼がザハリアスを襲って、彼の肉体を両断したのだ。

「凪沙……さん……」

遠山がかすれた声で名前を呼んだ。無感動な彼女の瞳にも、今は間違いなく恐怖の色がある。

魔力で紡いだ黒い翼を、背中に広げていたのは暁凪沙だ。

結い上げていた長い髪を解いて、彼女が笑う。

その瞳は、炎のように青白く燃える熔光の輝きを放っていた

7

旧南東地区の港からクォーツゲートまでは、本来なら徒歩でも一時間足らずの道のりだ。

だが今夜に限っては、血の従者と化した古城ですら、その二倍以上の時間が必要だった。

大規模感染のせいである。

旧南東地区で発生した吸血鬼感染症は、わずか半日足らずの間に数万人規模の患者を発症し、感染規模は拡大の一途を辿っていた。人間離れした運動能力で、次々に人を襲う感染者。

彼らから逃げ惑う非感染者。そして感染者を隔離して、感染拡大を阻止しようとする特区警備隊　それらの勢力が一斉に押し寄せたことで、港周辺は大混乱になり、そこから抜け出すのに予想外の時間を奪われてしまったのだ。

そして古城が辿り着いたとき、クォーツゲートでは、すべてがもう終わっていた。

あるいは、すべてがそこから始まろうとしていた。

古城の手が届かない場所で、すべてが――

ガラスの天井に覆われた広場の中央　満月の光に照らされて、二人の少女が立っている。

長い黒髪の少女と、虹色に輝く金髪の少女。暁凪沙とアヴローラだ。

「アヴローラ！」

妹ではなく吸血鬼の少女の傍に駆け寄ったのは、単純に近くにいたから、というのが理由のひとつ。そしてもうひとつの理由は、凪沙が、明らかに尋常ではない気配を撒き散らしていたからだ。迂闊に近づくことを許さない、圧倒的な威圧感を、だ。

「古城……」

近づいてくる古城の姿を認めて、アヴローラが頼りなく唇を震わせた。

崖から滑り落ちる途中でつかんだ小枝に、必死でしがみつこうとしているような表情だ。

「なにがあった!?　ヴェルさんは!?」

アヴローラの細い肩を両手で支えて、古城が訊く。ひうっ、と小さく呟いて、アヴローラが視線を地面へと落とした。

そして古城はそれを見た。銃弾を浴びたヴェルディアナが、血まみれの姿で倒れている。

ヴェルディアナの隣に屈みこんでいるのは、遠山だ。ＭＡＲの医師でもあるはずの彼女は、しかし、手の施しようがない、というふうに無言で首を振る。

「遠山さん……いったいなにがあったんです？」

古城が圧し殺した低い声で訊く。彼女が無断で凪沙を連れ出したことは忘れていない。今の遠山は信用できない。しかしそれでも、この状況を説明できるのは、おそらく彼女だけだ。

「〝焔光の宴〟です」

その遠山が、扇形に並べられた十二個の棺桶を眺めて言う。

棺桶たちの中央には、灰色の髪の少女を取りこんだ巨大な結晶が置かれていた。氷の〝柩〟で眠っていたかつてのアヴローラを連想させる光景だ。

「ザハリアス卿が仕組んだ第四真祖の覚醒の儀式のことです。ネラプシ自治区に居住する一般市民は約二百六十万人。そのうちの約十五パーセントが、すでに大規模感染によって疑似吸血鬼化しているといわれています。彼らから供給される魔力で、第四真祖を覚醒させたのです」

「じゃあ、紘神島で発生した感染症も……」

「儀式魔術の余波でしょう。今のところ、この旧南東地区のみでどうにか抑えていますが」

なにもかもを見透かしたような口調で、遠山が答える。この人は何者なんだ、と古城は初めて本気で疑問に思った。凪沙を連れて旧南東地区に移動しながら、島外の情報もつかんでいる。ザハリアスの仲間かと疑ったが、そういうわけでもないらしい。

「……どうして凪沙を巻きこんだ？　あいつは〝焔光の夜伯〟とは無関係なはずだろ!?」

別人のように酷薄に笑う凪沙を指さして、古城が遠山を問い詰める。

遠山は、そんな古城を不思議そうに見返した。

「お気づきになっていなかったのですか？」

「なにをだよ……!?」

「凪沙さんが第四真祖だったのです。素体ではない、本物の第四真祖です」

「なにを、言って……!?」

予期せぬ言葉に、古城が声を上擦らせる。月光の下で黒髪をなびかせた凪沙の笑みが、かすかに暗さを増した気がした。

「世界最古の〝魔族特区〟ゴゾ島で封印されていたのは、あなたの知っているアヴローラ十二番目ではありません。彼女はただの監視者に過ぎない」

古城の動揺を無視して、遠山は続けた

「……監視者?」

「遺跡に封印されていたのは『魂』。それこそが第四真祖の本体です。三人の真祖と〝天部〟の人々が協力して生み出した、人工の〝呪われた魂〟。我々はそれを仮に〝ルート〟と呼んでいます。原初のアヴローラと」

「凪沙に取り憑いているのは、そいつか……原初のアヴローラ……!」

ようやく話がつながった、と古城は感じた。

同時に自分自身の誤解を知る。

古城は、ずっと間違っていた。勘違いをしていたのだ。おそらくは牙城やヴェルディアナも正しく理解してはいなかった。

アヴローラは記憶喪失ではない。彼女は、最初からなにも知らされていなかった。〝原初のアヴローラ〟を護衛、あるいは監視するために造られた、空っぽの人形だったのだ。

十二体存在する〝焔光の夜伯〟の中で、なぜアヴローラだけが、世界最古の〝魔族特区〟ゴゾに封印されていたのか

それは彼女が、監視者だったからだ。

本物の第四真祖の魂、〝原初のアヴローラ〟の眠りを護るための、人の形をした道具。それが十二番目の正体だ。

凪沙に憑いていたのは、アヴローラの人格の一部などではない　第四真祖の魂そのものだ。その魂を受け容れてしまった凪沙こそが第四真祖だったのだ。

「やはり……そういうことでしたか……」

古城の死角、広場に置かれた棺桶の陰から、血まみれのザハリアスが起き上がる。

彼の腹部には、真っ二つに切り裂かれたような深い傷が刻まれていた。

まともな人間なら生きていられるはずもない重傷だ。だがその傷は、逆回転のスロー映像のように、ゆっくりと治癒を続けている。まるで不死の呪いを受けた吸血鬼の真祖のように。

「ザハリアス……なのか? なんだ、その姿……」

若返っていたザハリアスに気づいて、古城がうめく。

苦しげに傷を押さえながら、ザハリアスは嘲るように笑った

「なにを驚いているのです、暁古城。あなたは私の同類ではないですか……」

「……同類? そうか……ザハリアス、おまえも、血の従者……だったのか」

ヴェルディアナに一度殺された自分自身のことを思い出して、吉城は奥歯を噛んだ。

ふふ、と愉快そうに笑いながら、ザハリアスが立ち上がる。唇の端から流れる鮮血を拭って、彼はよろめく足を凪沙のほうへと踏み出した。

「目覚めていたのなら、話は早い。さあ、〝原初のアヴローラ〟よ。ヴラスタを生き返らせてください。あなたの巫女である私の妹を――」

「愚かなる男よ、ザハリアス」

凪沙の口から、凪沙ではない何者かの声がする。〝原初〟と名づけられた魂の声が。

蔑むような彼女の声に、兵器商の表情が引き攣った。

「……ぬ!?」

「我は世界最強の吸血鬼。〝聖殲〟のために造られし殺神兵器。不死にして不滅。一切の血族同胞を持たず、支配を望まず、ただ災厄の化身たる十二の眷獣を従え、人の血を啜り、殺戮し、破壊する者ぞ。我は何者にも屈せず、何者の支配をも受けぬ」

「私の願いを聞く気はない……と!? あなたの血の従者である私の願いを!? 選帝者として、あなたに生け贄を捧げたのは私ですぞ!?」

ザハリアスが必死の形相で訴える。

しかし凪沙が浮かべたのは、汚らわしい毒虫を見るような冷笑だった。

「愚かなる男よ、その娘を殺したのは汝自身ではないか」

「わ、私が……なにを……!?」

「永遠の命を得んがため、自らの祖国と妹の命を対価に、一番目より肋骨を簒奪した汝が、何故、妹の復活を我に祈る？ 貴様の望みは妹ではなく、我であろう？ ヴラスタとやらの体内に貴様が仕組んだ魂魄捕獲の術式、我が気づかぬと思ったか？」

「ぐ……ぬ!?」

ザハリアスが弱々しく言葉を呑みこんだ。〝原初〟が、彼の目論見を正確に言い当てたせいだろう。彼女が青白く輝く瞳を向けると、ヴラスタを包みこんでいた宝石の〝柩〟が砕け散った。灰色髪の少女の遺体が、光に包まれ、塵となって消えていく。

それはザハリアスの野望が潰えたことをも意味していた。兵器商であるザハリアスにとっては、妹の亡骸すら、ただの道具――より価値のある商品を手に入れるための材料でしかなかったのだ。

「薄汚い俗物め。暁凪沙の存在を知り、貴様はさぞかし妬み、羨んだのだろうな。故に、この娘と同等の力を持っていたはずのヴラスタとやらを復活させ、我を憑依させ、第四真祖の力をいいように操ろうと思ったか――？」

「ち……違う。違うのです……私はただ、あなたの価値をもっとも高めることができるのは、この私だと自負していただけで……」

欺瞞に満ちたザハリアスの言葉に、もはや最前までの力はない。拠り所を失った兵器商が、

怯えたように後ずさる。

そんな彼に向けて〝原初〟が手を伸ばす――

「戦う意思を持たぬ汝に、殺神兵器たる我の従者たる資格はない　その力、返してもらうぞ、ザハリアス」

「ひっ⁉」

白らの背後に現れた新たな影に気づいて、ザハリアスが表情を凍らせた。

彼の退路を阻むように立っていたのは、胸に深い傷を持つ金髪の少女　一番目と呼ばれていた〝焔光の夜伯〟だ。

彼女の白く細い腕が動いて、鋭い刃のようにザハリアスの左胸へとめり込む。兵器商の体内で、めきめきと骨が軋む音がした。

一番目が、ザハリアスの肋骨をえぐり取ろうとしているのだ。

「よ……よせ、やめろ……一番目……やめろおおおおおおおおおおっ！」

「ザハリアス　！」

鮮血にまみれた少女の腕が、引き抜かれた。

古城たちが見ている前で、肋骨を奪われた兵器商の身体が、木屑のようにボロボロと朽ち果て、崩れていく。固有堆積時間の逆流だ。

ザハリアスの「肋骨」は、第四真祖の魔力を受け取る、触媒の役割を果たしていたのだろう

その「肋骨」を奪い取られたことで、ザハリアスの不死の呪いは解けた。彼が体験した時間の重みが、一気に流れ込んで肉体を崩壊させていく。

やがてザハリアスの身体は完全に崩れ去り、わずかな黒い灰だけが残された。

ふ、と無関心に息を吐き、〝原初のアヴローラ〟が、広場に残された棺桶のほうへと歩き出す。そんな彼女を出迎えるように、眠っていた〝焔光の夜伯〟たちが次々に起き上がった。

彼女たちの接触がどんな意味を持つのか、魔術に疎い古城ですら、直感的に理解していた。おそらく覚醒した〝原初のアヴローラ〟は、〝焔光の夜伯〟たちを取りこむことで本来の力を取り戻すのだ。世界最強の吸血鬼の力を。

「――待てよ、〝原初〟！」

そんな〝原初のアヴローラ〟の歩みを妨げたのは、古城だった。彼女の行く手を遮るように前に出て、黒髪の少女を正面から睨めつける。

「凪沙を返せ」

「……ふむ？」

〝原初のアヴローラ〟と化した凪沙が、冷厳な瞳で古城を見た。見るだけで人の魂を凍りつかせる焔光の瞳。それでも古城は怯まない。今、この瞬間を逃してしまえば、暁凪沙という存在は、未来永劫失われてしまう。そんな予感が古城を衝き動かしている

「おまえが何者で、なんのために造られたかなんてどうでもいい。だけど、その身体は凪沙の

ものだ。おまえには必要ないだろうが！」

「なるほど。汝はザハリアスとは違うようだ……どちらも愚かであることに変わりはないが」

〝原初〟が、赤い唇を吊り上げて小気味よさそうに笑った。

第四真祖の力を手に入れるために妹の亡骸すら道具として利用したザハリアスと、妹を救うために〝原初〟の存在を不要だと言い切る古城。その対比を愉快に思ったのだろう。

「なんにせよ、貴様の望みは聞けぬな。我が魂には器が必要だ」

「どうして凪沙の身体を奪う!?　そこにいる〝焔光の夜伯〟たちが、おまえの身体じゃないのかよ!?」

「〝焔光の夜伯〟……？」

寒々しい冗談を聞いた、というふうに〝原初〟が不快そうに眉を寄せた。

「教わらなかったか。〝焔光の夜伯〟とは計画の名前だと。それらは計画の一部として生み出された我が分身に過ぎぬ」

「……分身？」

「神の似姿として造られた人の肋骨の数は十二対。そして神が男の肋骨から女を生み出したのと同様に、我が十二対の肋骨からは、十二体の素体が造られた。眷獣の宿り木としての素体が」

「眷獣の宿り木……だと？」

「そう。異界からの召喚獣たる眷獣を、この世界に留め置くための仮初めの器。人形だ。それは我の監視者たる十二番目とて例外ではない」

凪沙の顔をした少女が、無言で立ち尽くすアヴローラを一瞥して、残酷に微笑んだ。

古城は、ただ唇を噛んで絶句する。

その可能性を想像しなかったわけではない。危険すぎるという理由で封印された第四真祖は、なぜ十二体に分割されなければならなかったのか。

〝天部〟の人々は彼女の復活を恐れたのだ。

だからこそ〝原初〟の力の源を世界各地に分散して隠した。第四真祖が従える十二体の眷獣を、彼女が自由に召喚できないように、それぞれに人の形を与えて、この世界につなぎ止めた。

〝焔光の夜伯〟が、人造の吸血鬼として生み出された理由は簡単だ。吸血鬼の眷獣を封印できる物体が、吸血鬼の肉体以外になかったからだ。九番目や、番目は、第四真祖の眷獣を操っていたわけではない。彼女たちこそが眷獣だったのだ。

「アヴローラたちの正体は、眷獣に操られた人形……ってことか」

「いかにも……そう。すなわち我が覚醒した今となっては、もはや不要な存在ということだ」

凪沙の姿をした少女が、大きく両腕を広げた。

長い黒髪が翻り、彼女の背中に巨大な翼が生える。鋭い鉤爪を備えた吸血鬼の翼が

翼の数は一対六枚。それぞれが意思を持つ蛇のようにのたうって、その翼が、六体の〝焔光の夜伯〟の胸へと突き刺さった。翼の表面に浮き上がった赤黒い血管が、ドクドクと力

強い脈動を始める

十一番目、九番目、八番目、七番目、二番目、そして一番目　六体の〝焔光の夜伯〟の全身が光に包まれ、翼の中へとゆっくりと消えていくのが見える。

引き裂かれた自分自身の分身を喰らって、〝原初〟が、眷獣の支配を取り戻そうとしている。

素体たる〝焔光の夜伯〟の消滅によって、真の第四真祖が覚醒する

「翼の……色が……」

その凄まじい光景を、古城は放心したように見つめていた。漆黒だった凪沙の翼が、鮮やかな光に包まれて虹のように色を変えていく。淡く美しい輝きは、まるで極光を見ているようだ。

その極光の翼が、古城を目がけて刃のように伸びた。

〝原初〟が、古城を喰おうとしたわけではない。彼女の目当ては、古城の背後にいたアヴローラだ　七体目の眷獣の力を取り戻すために、目障りな障害物を薙ぎ払おうとした。〝原初〟にしてみれば、その程度の意味しかなかったはずだ。

しかし彼女の目的が果たされることはなかった。

古城を護るように地面から突き出た無数の氷柱が、極光の翼を弾いたのだ

氷柱を操っていたのは、アヴローラだ。第四真祖の十二番目の眷獣である彼女が、自らの意思で初めて力を使おうとしている〝原初〟の意思に逆らって、古城を護るために

「……なんの真似だ、十二番目？」

凪沙の姿をした少女が、不機嫌そうにアヴローラを睨む。
瞳を炎のように輝かせたアヴローラが、恐怖に足を竦ませながら前に出た。
そして古城を庇って、両腕を広げる。
思いがけない彼女の行動に、古城ですら驚きを隠せない。
「眷獣に操られた人形ごときが、宿主たる我に逆らうか――」
〝原初〟が放つ鬼気が圧力を増した。解き放たれた魔力は暴風となり、クォーツゲートのガラスの壁を軋ませる。しかしアヴローラは引き下がらない。眷獣の傀儡であるはずの彼女が、宿主である第四真祖の意思に逆らい、彼女に従うことを拒んでいる。
「よかろう。せいぜい我を愉しませよ」
新しい玩具を手に入れた子どものように、〝原初〟は歓喜の表情で言い放った。
極光の翼が荒れ狂い、巨大な鞭と化して辺り一面を薙ぎ払う。膨大な魔力が竜巻を生み、ガラス張りの天井を砕いて、破片の雨を降らせる。
純白の閃光が炎となって、古城と、古城を庇うアヴローラを呑みこんだ。
「――――っ！」
そこで古城の意識は途切れた。
古城が最後に聞いたのは、凪沙の姿をした少女の甲高い笑い声。
そして重々しく鳴り響く、時計塔の鐘の音だった。

幕間 iv

鎖が、弾けた。
曖昧な輪郭しか持たない金髪の少女が、南宮那月を睨んで獰猛に笑っている。
彼女の背中に生えていたのは、魔力で紡がれた漆黒の翼だ。
翼の数は五対十枚。その一枚一枚が巨大な鎌と化して、彼女の動きを縛っていた鎖を断ち切ったのだ。
『ふはははははははははははははははははっ……はは っ！』
曖昧な輪郭の少女が、炎のような金髪を揺らして笑う。
青白く燃えるような瞳が那月を睨む。背中の羽が鞭のようにしなって、魔導書を握る小柄な魔女を引き裂こうとする。空間を波紋のように揺らして、那月は跳んだ。空間制御の魔術による瞬間移動。漆黒の翼は、那月が直前まで立っていた場所に殺到し、彼女の残像だけを貫いた。
「そういうことか、〝原初のアヴローラ〟――」
再び空間を揺らして、那月が、金髪の少女の左側に出現する。
那月が操る金色の鎖が、槍のように虚空から吐き出されて少女を襲った。漆黒の翼を旋回させて、少女はその鎖を撃ち落とす。常軌を逸した凄まじい攻撃の応酬だ。しかし攻防を続ける

二人の表情は冷静で、互いの口元には冷ややかな笑みすら浮かんでいる

「いや、違う……貴様は、〝論理爆弾〟か　〝原初のアヴローラ〟の中に埋めこまれていた、機密保持のための安全装置――第四真祖の秘密にアクセスしようとした者を、無差別に殺戮するように設計されたダミーのプログラムというわけだな」

曖昧な輪郭の少女を見つめて、那月が言う

少女の正体は、魔導書によって再現された〝原初のアヴローラ〟の亡霊ではない。第四真祖の〝呪われた魂〟の中に仕組まれた魔術的なウィルスだ。〝原初のアヴローラ〟になりすまして、彼女の秘密を探ろうとする敵を消滅させる自爆装置なのだろう

「おかげでよくわかったぞ、〝論理爆弾〟――第四真祖には、我々が知らない秘密があるのだな。〝天部〟の連中が、そこまでしてでも隠そうとした秘密が」

『ははははははは……は壊破壊破壊破壊破壊破壊破壊……消去消去消去消去……実行する実行する実行する！』

那月の呟きを聞きつけて、少女の攻撃が激しさを増す。

濃密な魔力をまとった翼の斬撃は、分厚い石造りの壁を切り裂き、天井を砕いた。撒き散らされる魔力の余波で、監獄結界を構成する異空間が揺らいでいる　このまま彼女の攻撃が続けば、いずれ空間そのものが破壊されてしまうのも時間の問題だ

だが、奇妙なことに、〝論理爆弾〟の背後にある魔王城の一室はまったくの無傷　陣の中では、

城や城郭が、なにも起こらなかったかのように元どおりに残っている

魔法陣が彼らを護っているわけではない。少女が慎重に攻撃を避けているのだ

なぜなら彼女が攻撃に使っている魔力そのものが、その魔法陣から供給されているからだ

〝論理爆弾〟の魔力の源は、ほかならぬ第四真祖　暁　古城なのである

「暁に寄生して魔力を供給させているのか……つくづく妙な女につきまとわれる男だな」

那月が呆れ顔でうんざりと呟いた

世界最強の吸血鬼が持つ無尽蔵の魔力を使った〝論理爆弾〟の攻撃力は、控え目にいっても圧倒的だった　漆黒の翼の一枚一枚に、真祖の眷獣とほぼ同等の威力がこめられている

しかし、那月はその攻撃を余裕で受け流す。

那月の魔力が、第四真祖のそれを上回っているわけではない。〝論理爆弾〟の力が弱められているのだ　深い海の底に囚われた弾丸のように、魔力が大幅に減衰している　今の〝論理爆弾〟の攻撃力は、彼女本来の姿からはほど遠い。

「言ったはずだぞ……ここは私の夢の中だ　多少の融通は利く、とな」

那月の背後の空間を引き裂いて、巨大な腕が現れる。黄金の鎧に身を包んだ、機械仕掛けの悪魔の腕だ　それは〝論理爆弾〟の翼をつかんで、道端の雑草を摘み取るように無造作に引きちぎる

『消去消去消去！　実行する！　実行する……っ！』

翼の多くを失って、〝論理爆弾〟が後退した。彼女が向かったのは魔法陣の内側だ。無防備に眠り続ける浅葱の身体を、楯にするように回りこむ。

なるほど。藍羽を人質にする気か。その状態で、そんな戦術的判断が出来るとは、さすがは〝天部〟の遺産といったところか」

那月が感心したように眉を上げた。勝ち誇る〝論理爆弾〟を眺めて、〝空隙の魔女〟は少し残念そうに首を振り、

「だが、迂闊だったな、〝論理爆弾〟　私が、なぜ過去の暁古城とは無関係な獅子王機関の小娘を、わざわざ連れてきたと思っている？」

『ジッ……!?』

那月の言葉の意味を処理できない、というふうに、〝論理爆弾〟の動きが一瞬鈍くなる。

そんな彼女の背後で、ゆらり、と立ち上がる影があった。銀色の槍を構えた、小柄な影だ。

「獅子の神子たる高神の剣巫が願い奉る――」

踊るように槍を旋回させながら、姫柊雪菜が祝詞を詠み上げる。

膨大な霊力を流しこまれた銀色の槍が、仄白い輝きに包まれた。魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く、神格振動波の輝きだ。

「破魔の曙光、雪霞の神狼、鋼の神威をもちて我に悪神百鬼を討たせ給え！」

『……!?』

迎撃しようとした漆黒の翼が、ぬるくなったゼリーのように無抵抗に斬り裂かれた。無造作に突き出された槍の穂先が、輪郭の曖昧な少女を音もなく貫いて、純白の輝きを流しこむ。

金髪の少女の姿をした亡霊は、その瞬間、呆気なく霧散して消滅した。

あとには、ボロボロになった監獄結界の建物と、光を失った魔法陣だけが残される。

「本当に世話の焼ける吸血鬼ですね、先輩は……」

眠り続ける古城の横顔を眺めて、雪菜が疲れたように溜息をついた。

記憶をなくしているのは、べつにいい。魔力の暴走も、まあ許そう。過去の追体験が危険な術式だということは最初からわかっていたことだし、だから雪菜も待機していたのだ。

だがしかし、記憶の中の女の子にまで取り憑かれて、あまつさえ魔力を吸われて好き勝手に利用されていた、となると、さすがに呆れるしかない。女に甘いにもほどがあるだろう。

やはりこの少年から目を離すのは危険だ。これからはもっと厳しく監視しなければ、と雪菜は決意を新たにする。

「まったく派手に暴れてくれたものだ。この魔導書も限界か」

破壊された監獄結界の建物を眺めて、那月が不機嫌そうな声を出す。彼女の手の中に握られていた魔導書が、魔力の負荷に耐えかねたように薄く煙を噴き上げていた。本の装幀が解けて、色褪せた紙がバラバラとこぼれ落ちていく。〝論理爆弾〟の実体化を維持していたことで、逆流してきた真祖の魔力に、魔導書が耐えきれなかったのだ。貴重な固有堆積時間操作の魔導書

「まだ少し準備に時間がかかりそうなので」

そう言って雪菜は、ゆっくりと歩き出す。古城たちの周囲に、円を描くような足取りだ。

そのときになって古城は気づく。床を覆う深緋色の絨毯には、古城たちのいる場所を中心に、奇妙な紋様が描かれていた。幾重もの同心円で構成された幾何学模様と魔術文字。やけに禍々しい気配を漂わせた魔法陣である。

その図形の具合を確かめるように、雪菜は無言のまま、ゆっくりと古城の背後に回る。彼女の奇怪な行動は、魔法陣そのものよりも不気味に感じられた。

「……準備って……いったい何を……」

かすれた声で古城が訊くが、死角に回りこんだ雪菜の返事はない。代わりに口を開いたのは、それまで黙りこんでいた浅葱だった。

「ねえ……さっきから気になってたんだけど、あの壁にかかってるやつって……」

浅葱の視線の先にあるのは、石壁に金具で吊された奇妙な道具たちだった。びっしりと棘を植えこんだ椅子や車輪、ノコギリや鋏、人体を押し潰すための巨大な万力、鉄仮面――

正確な名前はわからないが、その不吉な形状を見るだけで、それらが非人道的な目的のために作られたことは容易に想像できる。赤錆の隙間にこびりついたどす黒い染みが、いっそうそれらの気味悪さを強調しているように思われた。インテリアとしての趣味は最悪だ。

「罪人用の拷問器具ですね。中世に実際に使われていた本物だそうです」

そして雪菜は、なんの感慨もない口調でそう答えた。その平静さが逆に恐ろしい。

「ご、拷問器具って……」

浅葱がごくりと固唾を飲みこむ。

意識をなくした古城と浅葱を、ひと気のない部屋に閉じこめて拘束。そして無数の拷問器具。それらを使って雪菜がなにをしようとしているのか、思いつくのはろくでもない可能性だけだ。

「ちょっと、古城、どうなってるのよ!? 薄々そんな予感はしてたけど、あの子、もしかして嫉妬深くて思い詰めちゃったりするタイプ?」

「た、たしかに姫柊はストーカー体質だし、思いこみの激しいところもある気はするが……」

「あたしが古城の秘密を知っちゃったから、消されるってこと? 古城を独占できなくなると思って、それで? ああもう! あんたが後先考えずに面倒くさい子に手を出すから!」

「俺はなんもしてねえよ! 向こうが勝手につきまとってただけで!」

追い詰められた古城と浅葱が、声を低くしてコソコソと怒鳴り合う。と、

「お二人が普段、わたしのことをどういう目で見ているのかよくわかりました」

それをしっかり聞いていた雪菜が、傷ついたような表情で呟いた。意外にも冷静な反応だ。

「なにか失礼な想像をされているようですけど、ここにある器具は、ただの魔術的な触媒です。実際に拷問に使うわけではありません」

「魔術の触媒って……なんでわざわざこんなものを」

が一冊、完全に失われてしまったことになる。

「だが、まあいい。最低限、必要な情報は手に入ったことだしな」

「はい」

那月の言葉に、雪菜がうなずく。二人の真祖たちと〝天部〟が造り上げた第四真祖には、やはり秘密が隠されているのだ。古城自身もまだ知らない秘密が。

その秘密を解く鍵となるのは、〝聖殲〟だ

「そろそろ夢から醒める時間だな。起きろ、生徒ら。現実がお待ちかねだ」

仲睦まじく眠り続ける古城と浅葱を見下ろして、那月が尊大に言い放つ。

魔導書が失われたことで、古城たちが見ていた夢も終わった。

不完全な形で途切れた過去の記憶は、おそらく歪に断片化して、それらの多くは、二度と思い出せない無意識領域に再び沈んでしまうことになるだろう。

そのことを知りながら、どこか安堵している自分に気づいて、雪菜は少し驚いていた

自分が知らない過去の古城と、一緒に過ごしていた誰かがいる。そんなあたりまえのことを今さらのように実感して、胸の奥が小さく疼く。おそらく単なる気のせいだろうと、その疼きに気づかないふりをして、雪菜は静かに目を閉じた。

監獄結界の扉が開く

失われた過去が終わりを告げ、目覚めの時間が訪れる

1

視界が小刻みに揺れていた。道路の継ぎ目を越えるたびに、突き上げるような震動が襲ってくる。唸り声に似た低い騒音は、車輪を駆動する電気モーターの音だろう。

「ここは……？」

車の荷台に載せられているのだ、と気づいて、古城はゆっくりと目を開ける。

ぼやけた視界に映ったのは、狭いスリット状の窓の外を流れていく景色だ。

分厚い鋼板に覆われた車内。座り心地の悪そうな平たい座席。電磁警棒などの物騒な装備品。どうやら特区警備隊所属の装甲車両の中らしい。

ふと顔を上げると、不安そうに古城を見下ろしている金髪の吸血鬼と目が合った。同じ顔の少女を何人も見てきたはずなのに、彼女だけは一目で見分けがつく。アヴローラだ。

「よう、無事か……？」

「わ、我に、仔細なし」

かすれた声で古城が訊くと、金髪の少女があたふたと答えてくる。ホッとしたように微笑む彼女の服はボロボロで、乾いた血がこびりついていた。もっともそれは古城も同じだ。

どうやら〝原初のアヴローラ〟の攻撃に巻きこまれて、お互いに重傷を負い、その後、再生したということなのだろう。古城たちが普通の人間なら、間違いなく死んでいた。

いや――たとえ再生できたとしても、あのままでは、無事ではいられなかったはずだ。降り注ぐ瓦礫の下敷きになるか、あるいは感染者たちに襲われて、意識が戻らないまま喰われていたかもしれない。おそらく負傷した古城たちを救出して、旧南東地区から連れ出した者がいるのだ。

「気がつきましたか」

古城の意識が戻ったことに気づいて、誰かが声をかけてくる。遠山美和の声だった。

人間味の乏しい事務的な口調はいつもと同じだが、心なしか息苦しそうな印象がある。

「……遠山さん、どうして？　あんたが助けてくれたのか？」

起き上がった古城が、声のした方向に目を向ける。そして古城は息を呑んだ。

遠山の全身が、無惨な傷に覆われていたからだ。

ひどい火傷と無数の裂傷。包帯が巻かれていない場所を探すのが難しいほどに傷だらけだ。その包帯のあちこちが、滲み出る鮮血で紅く染まっている。

「遠山さん……その傷、まさか俺たちを助けるために……」

「手当ては済ませました。問題ありません」

震える古城の声を遮って、遠山が言う。その瞳の奥には、確固たる信念の光があった。

遠山はザハリアスのような欲望や、個人の損得で動いているわけではない。彼女の不可解な

行動の裏には、なにか理由があるのだと確信できる。

「あなたはいったい……何者なんです!?」

傷だらけの遠山を見つめて、古城が訊いた　彼女が単なる医師や研究者ではないことは、古城にももうわかっている　戦闘技能を持たない普通の人間が、意識をなくした古城たちを連れて、吸血鬼感染者がひしめく旧南東地区から生還できるはずがない

「私は、獅子王機関の攻魔師です」

これ以上は隠す必要もないと判断したのか、遠山はあっさりと自らの身分を明かした　聞き覚えのない組織の名前に、古城とアヴローラが顔を見合わせる

「獅子王……機関？」

「国家公安委員会に設置されている特務機関です　大規模な魔導テロや魔導災害を阻止するための捜査官だと思ってください」

「捜査官……か」

遠山の説明は、古城にとっても納得できるものだった　潜入捜査官という肩書きは、遠山の雰囲気に相応しく思えたし、特区警備隊の装甲車を彼女が手配できた理由もわかる

「MARも……うちの母親も最初から知ってたのか？」

「はい　我々は契約関係にありました　獅子王機関はMARに対して、封印された十二番目の古有権を認めるかわりに、監視役の受け入れと情報提供を求める　今回の事件に関しては、

暁、深森と我々の利害は、ほぼ一致していましたから」

遠山が淡々と質問に答えた　監視役というのは、つまり遠山自身のことなのだろう

「利害が一致してたのなら、どうしてあんたはザハリアスなんかに協力した？」

語気を強めて、古城が遠山を問い詰める　遠山が無理やり〝宴〟に連れ出さなければ、凪沙が第四真祖として覚醒することはなかったはずだ

「目的はもちろん第四真祖の覚醒です」

遠山が、表情も動かさずに説明を続ける

「だから、どうして!?」

「我々の目的は、魔導災害の阻止だと言いました」

「答えになってないだろ！　あんたたちが災害を起こしてどうする!?」

遠山は一瞬の沈黙を挟んで、溜息混じりに首を振った　自分たちの無力さを嘆いているような表情にも見える

「今回の我々の任務は、地震対策のようなものでした」

「地震対策？」

「人類の科学では地震が起きるのを止めることはできない　ならば被害を最小限に抑えるしかない、ということです」

「あれが、最小限の被害だと!?」

〝原初のアヴローラ〟が引き起こした破壊を思い出して、古城が唸る。さらにはザハリアスの儀式魔術によって、数十万人単位の大規模感染が起きているのだ。それでもまだ被害規模を抑えたと言い張るつもりなのだろうか――？

「我々の最優先の目標は、覚醒した第四真祖が日本国外に流出するのを阻止することです」

非難するような目つきを浮かべた古城に、遠山が冷厳とした口調で言った。

「ザハリアスの言葉どおり、第四真祖は兵器です。いずれの国家が手に入れても、世界の軍事バランスを崩すことになります。かろうじて妥協できるとすれば、専守防衛を標榜する我が国の、それも〝魔族特区〟が彼女を手に入れること。それ以外にはあり得なかった」

揺るぎのない遠山の視線に、古城が気圧されそうになる。

ほんの一瞬、〝原初〟の力を垣間見ただけだが、第四真祖の恐ろしさは、古城の身体にも嫌というほど刻みつけられていた。抑えていた魔力を解放しただけで、巨大なクォーツゲートを半壊させるほどの圧倒的な暴威。本来の力を半分しか取り戻していない状態で、あれほどの驚異的な破壊力を持っているのだ。

一流の攻魔師が束になってかかったところで、彼女は歯牙にもかけないだろう。あれは人間がどうこうできる存在ではない。戦略兵器、あるいは一国の軍隊にも匹敵する怪物だ。

第四真祖の存在は、確実に争いの火種となる。ネラプシのような新興勢力ですら、第四真祖を招き入れるだけで、新たな夜の帝国の地位を手に入れるのだ。そうなれば、〝戦王領域〟や

〝滅びの王朝〟を巻きこんだ世界大戦が起きてもおかしくはない。

いかなる国家や勢力が手に入れても、第四真祖は、世界を確実に不幸にする。

その例外的な安全地帯が、紘神島だ。

聖域条約に基づいて、あらゆる魔族の受け入れと政治利用の禁止を規定された〝魔族特区〟ならば、第四真祖を安全に「隔離」することが可能なのだ。

第四真祖が自ら紘神島を支配して、他国に戦争を仕掛ける心配もない。なぜなら、紘神島は太平洋上に建造された人工島であり、食料や生活物資の搬入が止まれば、たちまち干上がってしまうことになるからだ。それは――少なくとも建前上は　第四真祖の存在を恐れる他国を納得させる十分な説得材料になるだろう。古城にも、その程度のことは理解できる。

だからといって、その状況を実現するために、あらゆる手段が正当化されるわけではない。

「旧南東地区の人たちは、そんな理由で犠牲になったのか？」

古城の静かな反論に、遠山がかすかに視線を泳がせた。

「すでに廃棄が決定されている旧南東地区の昼間人口は、二万八千人。紘神島全人口の五パーセント以下です。ネラプシ自治区の被害状況と比較すれば、微々たる損害だといえるでしょう」

「そんなの……数字で比較できるようなことかよ」

遠山の精いっぱいの言い訳を、古城はばっさりと切り捨てる。つらそうに目を伏せながら、

それでも、と遠山は弱々しく続けた

「疑似吸血鬼化した人々のすべてが、必ず死に至るわけではありません　おそらく数日中に感染症は沈静化します　〝原初のアヴローラ〟の目的は彼らの命ではなく、記憶だけですから」

「……記憶？」

遠山が口にした意外な言葉に、古城は少し戸惑った

第四真祖が、復活のために生け贄を求めるのは理解できる　だが、必要なのが命ではなく、記憶だといわれてもピンと来ない。

「魔術の世界において、長い歳月を経てきたものは、それだけで強い力を持つ　というのはご存じですか？」

「……いや。そうなのか？」

「ええ。吸血鬼の真祖たちが強大な力を誇っているのは、彼らが最古の吸血鬼だからです　不老不死である彼らが蓄えた膨大な固有堆積時間が、彼らの力の源泉なのです　ですが……」

「そうか……第四真祖にはそれがない……」

「はい　造られた真祖である第四真祖には思い出が……過去の歴史の蓄積がありません　だから彼女は、他者の記憶を喰うことで、覚醒に必要な魔力を賄おうとしているのです」

古城は無意識にアヴローラの横顔を見る　〝原初〟は、アヴローラと一緒に何百年もあるいは、何千年もの間、封印されていたのだ　アヴローラが過去の記憶を持たないのと同様に、〝原初〟にも、魔力の源である固有堆積時間が欠けている

世界最強の吸血鬼として造られた第四真祖にとって、それは致命的な弱点だ

だからこそ、〝原初〟は生け贄を欲した　彼女は自分自身の記憶の代わりに、他人の記憶を手に入れようとしているのだ

「それが〝焔光の宴〟の正体か……じゃあ、生け贄になった人たちは……」

「記憶を、それも本人にとって大切な記憶の多くを失うことになるでしょう　それは私たちも例外ではありませんが」

「え……？」

「たとえ疑似吸血鬼化しなくても、〝原初〟と接触した人間は、その思い出を足がかりにして、記憶を奪われてしまいます　第四真祖に関わる記憶のほとんどを失う、ということです　第四真祖が幻の吸血鬼であり続けた理由は、その記憶摂取能力が原因です」

「みんなが……凪沙のことを忘れるっていうのか？　アヴローラのことも……!?」

古城は、背筋が凍るような恐怖を覚える。

第四真祖と接触した者は、第四真祖のことを忘れてしまう

ならば、第四真祖そのものと化した凪沙や、〝焔光の夜伯〟であるアヴローラのことは、真っ先に忘却の対象となるはずだ　そして古城は、あまりにも多くの時間を彼女たちと共に過ごしてきた　その思い出のすべてが、失われてしまうというのだろうか

「はい。予想では今から二、三日以内に」

遠山の言葉が、容赦なく古城を打ちのめす。

「あなたのご両親、暁牙城博士と深森主任が、凪沙さんとの接触を慎重に避けておられたことにお気づきでしたか？　凪沙さんを救おうとしている彼らは、凪沙さんとの思い出を絶対に失うわけにはいかなかった。だからこそ、離れて暮らすことを選んだのです」

「……ふざけんな……なんだよ、それは……！」

一年の大半を海外で過ごす父親と、職場に泊まりこんで滅多に帰らない母親。古城と凪沙はそれに慣れていた。仕方のない両親だという諦めもあった。だが、違った。

彼らは最初から知っていたのだ。凪沙の記憶が奪われてしまう可能性を。

たった一人、古城だけをカヤの外にして

「どうかご両親を責めないでください。彼らは、たとえ記憶が奪われたとしても、そのほうがあなたが苦しまずに済むと考えたのです。妹さんを護れなかったと、自分を責め続けてきたあなたに、これ以上の重荷を背負わせることがないようにと」

「そんなことっ、納得できるわけないだろうが！」

装甲車の内壁を、古城が乱暴に殴りつける。その音に驚いたように、うっ、とアヴローラが身を竦める。痛ましく荒れる古城の姿を眺め、遠山が静かに溜息をついた。

「……深森主任は、この二年間、ありとあらゆる手段を尽くして、凪沙さんの衰弱を喰い止めようとしていました。〝原初〟の魂を十二番目の肉体に移し替えれば、凪沙さんが助かるとわかったのは最近のことです。ですがその試みは成功しなかった」

それは当然のことだと、今なら古城にもわかる。

なぜなら十二番目は、〝原初〟の監視者。彼女の復活を阻止するために造られた、封印のための素体だからだ。凪沙との接触によってようやく封印から逃れた〝原初〟が、再び眠りにつくことを望むはずもない。

「〝妖精の柩〟で眠る十二番目の封印を解くのは、最後の賭けでした。凪沙さんにはもう、時間が残っていなかったのです。覚醒した十二番目なら、〝原初〟の魂を受け容れることができるかもしれないと我々は考えた。結局それも失敗に終わってしまいましたが」

「だから、凪沙を第四真祖にしたのか……？」

はい、と遠山がうなずいた。

「完全な第四真祖として覚醒すれば、彼女は確実に助かります。たとえ人間ではなくなって、人々の記憶から消え去ることがあったとしても……それに凪沙さんの魂が、〝原初〟を駆逐する可能性もゼロではない」

「……〝同族喰らい〟……上書きか」

「そうです。存在を喰われた吸血鬼が、自分を喰った相手の存在を逆に奪い取る。本来は吸血鬼同士でしか発生しない現象ですが、同じ肉体を共有している彼女たちならば、あるいは……

ほとんど絶望的な確率ではありますが」

遠山が冷ややかに事実を告げる。

凪沙が〝原初〟に支配されることなく、逆に彼女の能力を奪い、意識を保ったまま第四真祖となる。今となっては、それが古城たちが望む最善の結末だろう。

だがそれは、奇跡でも起きない限り、決して実現することのない未来だ。いくら凪沙が優れた巫女でも、たった一人で、第四真祖の〝呪われた魂〟に勝てるはずがない

「……アヴローラは、これからどうなるんだ？」

古城は、ふと顔を上げて、隣にいる金髪の少女に視線を向けた

アヴローラは、まるで自分が責められているかのように、服の裾を握って唇を噛んでいた。

〝原初〟の監視者の役目を果たせなかったことに、責任を感じて苦悩しているのかもしれない。

「第四真祖が取りこんだ〝焔光の夜伯〟は、ザハリアスが所有していた一番目、二番目、八番目、九番目と、十二番目の六体です　それらの支配権を完全に掌握し終えたら、すぐにも七体目を――十二番目を回収に来るでしょう」

「アヴローラも、取りこまれてしまうってことか。九番目たちのように……」

遠山の予想に納得して、古城は苦々しげに舌打ちした。

血の従者と化した今の古城なら、凪沙のことを忘れないのではないかと、内心かすかに期待していたのだ　だが、どうやら甘かった

一番目の従者だったザハリアスをあっさり処分したように、〝原初〟はおそらく古城のことも不要と見なすだろう　どのみちアヴローラが、〝原初〟に取りこまれてしまったら、古城の血の従者としての資格は失われる

「十二番目はもともと第四真祖の一部という考え方もあります。ですが、我々としては、彼女を取り引きの材料に使いたいと考えています」

「……取り引き？」

古城は少し警戒して、遠山を睨んだ。この期に及んでアヴローラを利用する気なのか、という不信感と苛立ちがこみ上げてくる。

だが、一方で古城も理解はしていた　力を取り戻した今の〝原初〟が興味を示す交渉材料は、もはや彼女の分身である〝焔光の夜伯〟だけだろう。

「――我々は、第四真祖と平和条約を締結するつもりです　絃神島にはすでに〝戦王領域〟や〝混沌界域〟からの使者が到着しています。彼らが所有する残り五体の〝焔光の夜伯〟とともに」

「平和条約……か……」

当然だろうな、と古城は思う。

政府の特務機関で働く遠山の立場では、日本という国家の安全確保が最優先だ　アヴローラ一人の犠牲でそれが叶うなら、迷わず彼女を差し出すだろう。だが、

「もし交渉が決裂したら？」
「第四真祖を、滅ぼします」
なんのためらいもなく、遠山は断言した。傷だらけの頬を歪めて、彼女は誇らしげに笑う。
「獅子王機関には、吸血鬼の真祖をも滅ぼし得る切り札がある。だからこそ我々が采配者として選ばれたのです」

2

絃神島本島に着く前に、遠山は意識を失った。凄まじい精神力で気丈に振る舞ってはいたが、やはり彼女の肉体は限界だったのだ。特区警備隊の隊員が、遠山を病院に搬送するどさくさにまぎれて、古城とアヴローラは車を降りた。そしてそのまま古城の自宅に向かう。
特区警備隊は、アヴローラの正体について、なにも聞かされていなかったのだろう。そうでなければ、監視もつけずに古城たちを逃がすはずがない。
感染症騒ぎで、絃神市民の多くが外出を控えていたのも、古城たちにとっては幸運だった。血まみれの服を着た古城とアヴローラは、どうにか誰にも見咎められずに、無事に暁家のマンションに辿り着く。そして、
「……此方が汝の住処か！」
リビングに案内されたアヴローラが、好奇心に目を輝かせて部屋中を見回している。出会ったばかりのころを思い出す懐かしい姿だ。
「そうか。おまえをここに連れてくるのは、初めてだっけか」
凪沙や深森と鉢合わせになることを恐れて、これまでアヴローラをこの部屋に呼んだことはなかった。今になってそのことを少し後悔する。こんなことで喜んでくれるのなら、何度でも連れてきてやればよかった、と思う。
「な、汝の匂いを感じる」
「そりゃそうだろ」
ベッドに顔を埋めるアヴローラを眺めて、犬みたいなやつだな、と古城は苦笑する。それほど嫌がってないところを見ると、不快な臭いではないのだろうが。
「其方は？」
「ああ、そっちは凪沙の部屋だ。勝手に入るなよ。怒られる」
隣の部屋を指さすアヴローラにそう言って、古城はそっと唇を噛んだ。凪沙はもう二度と、ここには帰ってこないかもしれない、そのことを思い出したのだ
そんな古城の横顔を見上げて、アヴローラが儚げに微笑んだ。
「長い歳月を共有したのだな」
「まあ、兄妹だからな」

「古城」

ベッドの上に座ったままのアヴローラが、綺いっぱい背筋を伸ばして古城を見た

「……な、汝に問う。わ、我は何者か？」

「ん？」

質問の意味を理解しかねて、古城は黙ってアヴローラを見返した。

自信なさげな表情で、おっかなびっくりと彼女は続ける。

「我は真祖に非ず　眷獣に非ず　記憶を持たず、魂もなき、人形と呼ばれし仮初めの器」

「……おまえはアヴローラ・フロレスティーナだろ。自分でそう言ったんじゃねえか」

あっさりと古城が答えたことに、アヴローラは驚いて硬直していた。今にも泣き出しそうな、そんな笑顔を作って視線を逸らす。

古城はそんな彼女の手の甲に、自分の掌を重ねてみせた　ひんやりとした彼女の手を、強く握る。アヴローラが碧い双眸を見開いて、びっくりしたように古城と目を合わせた

相変わらず妖精のように現実感のない美貌だ。だが――

「ほら、ちゃんとここにいるだろ　俺と同じだ。なんも変わらねーよ。だいたい今は人工生命体にだって、ちゃんと準魔族としての権利が認められてんだ　人工の吸血鬼だろうが、眷獣だろうが堂々としてればいいんだよ」

「古城……」

感極まって喉を詰まらせたように、アヴローラが小さなしゃっくりを洩らす

柄にもないことを言ってしまった、と古城は照れたように顔をしかめて頭をかき、それからクローゼットのほうに向き直った　無造作に突っこんであった紙袋を引っ張り出して、アヴローラの胸元に放ってやる。

「忘れるところだった。これ、やるよ」

「……我の……装束？」

ごそごそと紙袋の中を漁って、アヴローラがそれを引っ張り出す　それはビニールに包まれた新品のセーラー服だった　彩海学園の女子の制服だ

最初に出会った日に、アヴローラに渡したのも同じ制服だった　あのときと違うのは、借り物ではないということだ。これは正真正銘、アヴローラのための制服だ。

「浅葱に注文しておいてもらったんだ　さすがに俺たちと同じ学年ってのは無理があったから、中等部のやつだけどな　そのうち正式に編入が認められたら、使ってやってくれ」

血まみれの制服を脱いで、古城はTシャツの上にパーカーを羽織る　これから海を渡らなければならないのだ。上着の一枚くらいあったほうがいい。

「おまえは俺が帰ってくるまで、この部屋で待ってろ　親父たちには俺から連絡しとく　その代わりに、あの船をちょっと貸してもらうからさ」

「……征くのか……凪沙の許に」

「このままあいつのことを忘れるのを、ぼーっと待ってるわけにはいかないからな。それに、おまえを〝原初〟のやつに渡すのも癪だ。ま、できる限り足掻いてみるわ」

そう言って古城は、ぽふ、とアヴローラの頭に軽く手を置いた。

遠山は、古城が凪沙のことを忘れると言った。あるいはその前に、〝原初〟がアヴローラを回収に来るかもしれない。どちらにしても、古城は大切な肉親と友人を失ってしまうというわけだ。このまま手をこまねいている限り、確実にそんな運命が訪れる。

だからその前に、こちらから攻める。

古城は元バスケ部員。カウンターの速攻は得意中の得意だ。今からすぐに旧南東地区へと戻る。そして今度こそ、凪沙を取り戻す。

問題は、決め手となる攻撃手段をなにも思いつかないことだ。なにしろ相手は、不完全とはいえ世界最強の吸血鬼。まともに戦って勝ち目などあるはずもない。が、

「……アヴローラ？」

突然、制服を包んでいたビニールを破り始めた彼女を見て、古城は少し戸惑った。そんなに制服が嬉しかったのだろうか、と間の抜けた感想を抱いてしまう。

「って、おまえ、なにやって!?」

そしてアヴローラの次の行動に、古城は軽く度肝を抜かれた。古城が目の前にいるにもかかわらず、彼女はいきなり服を脱ぎだしたのだ。

狼狽する古城を無視して、アヴローラは真新しい制服に袖を通し、前ボタンが留められずに、ううっ、と頼りない声を洩らした。そしてなぜか胸を張り、

「……な、汝に戒めの鋲を穿つことを許そう！」

怖ず怖ずと古城に呼びかけてくる。古城はそんなアヴローラを呆然と見返した。

「おまえ、まさか、俺と一緒に来るつもりなのか？」

驚きよりも、困惑のほうが大きかった。古城は、〝原初〟に会いに行くのだ。そしてアヴローラにとって〝原初〟は、いわば捕食者だ。アヴローラの中に眠っている眷獣を、彼女は取り返そうと狙っている。次に〝原初〟と対峙したら、彼女は、九番目たちと同様に喰われてしまう可能性が高い。だが、

「わ、我が汝の望みを叶えよう……凪沙の救済を……！」

「アヴローラ……そうか……」

彼女の言葉で、古城も気づく。

攻撃手段は存在する。ひとつだけ——たったひとつだけ、残されているのだ。凪沙を救い、アヴローラも消滅させない。そんな方法が。

アヴローラを危険にさらすことになる。成功する可能性は高くない。だが、なにもせずに奇跡を願うよりはいくらかマシだ。試してみる価値はある。

「行くか」

まだ少し不安げな口調で、古城が訊く。雪菜は深々と溜息をついて、

「魔術の分野では原則的に、長い歳月を経た古い道具ほど強い力を持つとされているからです。作り手や持ち主の想いが堆積することで、ただの物体が魔導器としての属性を得る――この場合は持ち主の想いというより、犠牲者の怨念というべきかもしれませんが」

なるほど、と古城はいちおう納得する。〝旧き世代〟の吸血鬼たちが、強大な魔力を身につけているのと同様に、神器や魔具と呼ばれるものたちの多くも、長く祀られているものほど強い力を持つのだろう。しかし、

「いやだから、そんな物騒なアイテムを使っておまえはなにをするつもりなんだよ!?」

「やっぱり古城を独占しようと思って、それで――」

「違います！」

古城と浅葱にそれぞれ疑惑の視線を向けられて、雪菜が拗ねたように頬を膨らます。

「いやでも、この状況でそういうことを言われても――」

困惑の表情で言いかけて、古城は不意に言葉を切った。雪菜が古城たちを閉じこめている部屋の正体に、唐突に気づいてしまったのだ。

「……古城？」

浅葱が心配そうに声をかけてくる。しかし古城は、無言で奥歯を噛みしめるだけだ。

古めかしくも荘厳な石造りの建物。その中に漂う独特の空気。そして周囲に充満した濃密な魔力。そのすべてを古城は一度体験していた。建物の形そのものは違っているが、それはこの世界においてはなにも不思議なことではない。この夢の中の世界では

「姫柊……まさか、ここは……」

「はい」

雪菜が、古城を見返して重々しくうなずいた。

たしかにこの場所ならば、おぞましい拷問器具が置かれていることも理解できる。

なぜなら、ここは本来、罪人たちを収容するための建物だからだ。通常の刑務所では閉じこめておけない、危険な犯罪者を監禁するための。

そして万一、古城の魔力が暴走するようなことがあっても、紋神島には被害は出ない。

古城たちが、この閉ざされた空間にいる限り。

「先輩たちにはこれから記憶を取り戻してもらいます」

銀色の槍を握りしめた雪菜が、動揺する古城たちを見つめて言う。

そして彼女は、その言葉を口にする。

「――この監獄結界で」

「う、うむ」

どちらからともなく手を取り合って、古城がアヴローラを立ち上がらせた　彼女の身だしなみを整えてやり、そのまま玄関へと向かう。

そして古城は足を止めた　いつの間にか玄関前に、ぼろい段ボール箱が置かれていた　古城たちが帰ってきたときには、置かれていなかったはずのものだ

不気味に思いながら、古城が箱に手を伸ばす　国際郵便の伝票が、大量に張りつけられた怪しい箱だ　さすがに爆弾ということはないだろうと、乱暴に封を破って中をのぞきこむ

「……なんだ、これ？」

そして古城はますます混乱する。

箱の中身は、表面に奇妙な文字を刻んだ、銀色の細い杭

そして三枚の安定翼を取り付けた、金属製の薬莢だった。

3

吊り橋を支える橋台（アンカーレイジ）の上に、奇妙な集団が立っていた。

一人は翡翠色の瞳を持つ、緑色の髪の少女　一人は白いコートをまとった長身の青年だ　そして鎖をまとった少女が二人　彼女たちの全員が、逆巻く炎のような金髪の持ち主だった

「ザハリアスが逝って、第四真祖が覚醒したか　一

不機嫌そうに呟いたのは、翡翠色の瞳の少女だった　第三真祖、ジャーダ・ククルカン〝混沌の皇女（ケイオスプライド）〟の異名で知られた、夜の帝国の盟主である。

彼女が見つめる先にあるのは、絃神島・旧南東地区（アイランド・オールドサウスイースト）だ。儀式魔術〝焔光の宴（うたげ）〟によって、二万人近くが疑似吸血鬼化し、区内では今もパニックと狂騒状態が続いている。

一方で、人工島の中心部にある時計塔の周辺は、不可解なほどに静まり返っていた。

まるで荘厳な結界を張り巡らせたように、そこに近づこうとする者はいない。

凶暴化し、知性をなくした疑似吸血鬼たちですら本能的に気づいているのだ

そこに彼らの〝王〟が降臨していることを――

「歯がゆいものだな　なにもかもが采配者どもの掌の上というのは」

威厳に満ちた口調とは裏腹に、ジャーダの頬に浮かんでいるのは、お気に入りの遊具を取り上げられた子どものような、いじらしく拗ねた表情だ

〝原初のアヴローラ〟が目覚めることも、眷獣たちが彼女に取りこまれることも、ザハリアスが彼女に殺されることも、すべて事前の予想の範囲内だった　大規模感染の犠牲者数は、最悪を想定した場合の半分以下　絃神市内に限っていえば、全人口の一割にも満たないわずかな数字だ。

それが不服というわけではない。だが、退屈という印象はぬぐえない。不老不死の呪いをか

けられた真祖にとって、第四真祖の覚醒とは、数千年をかけて熟成した極上の酒のようなもの。遠い過去に滅びた古代超人類――〝天部〟が残した最高の娯楽であるべきだ。

ザハリアスが〝滅びの王朝〟に攻め入ったときは、少しは面白くなるかと期待したのだが、蓋を開けてみれば、拍子抜けするような順当な結末だった。

そのことがジャーダを落胆させている。

だが、そんな彼女をなだめるように、長身の青年貴族が不意に笑い出す。

「まだそう悲観したものではなさそうですよ――」

「なんのことだ、ヴァトラー？」

ジャーダがムッと眉を寄せて青年貴族を睨む。ディミトリエ・ヴァトラーは、気障な所作で肩をすくめて、ジャーダをはぐらかすように微笑んでみせた。

「獅子王機関が見落としていた不確定要素が、動き出したようです」

「ふむ……十二番目の血の従者か……」

港に泊まった小さなクルーザーを眺めて、ジャーダも興味を惹かれたように笑みを浮かべる。

冷静に考えれば、たった一体の眷獣の器と、その従者ごときがなにをしようと、第四真祖を斃せるはずがない。彼らも自らの行為の愚かしさを理解していないわけではないだろう。

だが、それでもあえて斃せるはずのない〝原初のアヴローラ〟に挑むというのなら、彼らの選択は最後まで見届ける価値がある。

なぜなら、その愚かしき行為こそが第四真祖の本質だからだ

第四真祖は殺神兵器。決して殺せない〝神〟を殺すために造られた特異点だ。そんな世界最強の吸血鬼を斃せる者がいるとすれば、やはりそれは、世界の理から外れた特異点であるはず。

「まあそれはいいとして、どこに行く気だい、キミたちは……？」

機嫌を直してほくそ笑むジャーダの隣で、ヴァトラーが背後を振り返る。

そこにいたのは鎧をまとった二人の少女だ。旧南東地区に向かって歩き出そうとしていた彼女たちが、ヴァトラーの問いかけに足を止めた。

一番目、四番目、五番目　貴様が絃神島で放し飼いにしていた〝戦王領域〟の〝焔光の夜伯〟か……」

くふ、とジャーダが、愉快そうに息を洩らした。ヴァトラーは、金髪の少女たちを睨んで、獰猛な笑みを浮かべている。彼が撒き散らす強烈な殺気に、二人が全身を硬直させた。

「キミたちは第四真祖との交渉材料だ。暁凪沙に同情するのは勝手だけれど、そろそろ夜遊びは控えて欲しいね」

「……っ！」

ヴァトラーの言葉に逆らって首を振り、二人の少女は、それぞれの眷獣を召喚しようとした。だがその前に、虚空から出現した蛇たちが、彼女たちの全身に絡みつく。

愕然と振り返った少女たちが見たのは、夜空を覆い尽くすように浮かぶ漆黒の渦だ。

直径十数メートルにも達するその渦は、絡み合いもつれ合う何千もの蛇の集合体　その無数の蛇たちが巻きついて、少女たちを渦の中に呑みこもうとする。

「残念だけど、今のキミたちでは、ボクには勝てないヨ」

ヴァトラーが、少女たちを哀れむように告げた。

魔力を蛇たちに喰われているせいで、少女たちは眷獣を喚び出すことができない　非力な彼女たちの筋力では、蛇を振り払うこともできない

絶体絶命の窮地の中で、それでも少女たちは闘志を失っていなかった。邪魔をするな、と言わんばかりに、殺気のこもった眼差しでそれぞれがヴァトラーを睨めつける。

「ははははっ……いい覇気だ。それでこそ自由にさせておいた甲斐がある」

そんな彼女たちの視線を浴びて、ヴァトラーが歓喜の表情を浮かべた。自分に敵意を向けてくるものの存在を、心底歓迎しているのだ。

「爺さんの言いつけがなければ、第四真祖より先にキミたちを喰うのも面白そうだけど、勝てるとわかってる戦いは退屈だしね」

ヴァトラーが眷獣の召喚を解除する　蛇たちの拘束から解放されて、少女たちが空中に投げ出された。二人は、そのまま受け身を取ることもできずに路上に落下し、苦痛にうめく

「好きにすればいいサ　続きはキミたちが本来の力を取り戻してからにしよう」

突き放すようにそう言って、ヴァトラーは二人に背中を向けた

そんな彼の行動を、興味深そうに眺めていたのはジャーダだった

「くふっ……愉快な男だな、ディミトリエ・ヴァトラー……貴様のおかげで、此度の〝宴〟、もうしばらくは楽しめそうだ。覚えておくぞ、貴様のことは」

緑色の髪を持つ少女の姿が、虚空に呑みこまれるように薄れて消えた

そんな彼女を愉しげに見送って、ヴァトラーは優雅に一礼する。

「それは光栄ですよ、ジャーダ陛下――いずれまた」

金色の霧に変じて、彼の姿も消滅した

傍観者たちが闇に溶けこんで、〝宴〟は終焉に向けて動き始める

4

折り畳まれた弓を開いて、弦を張る　ライフル銃に似た銃身にはガイド用の溝が掘られており、薬莢部分に装着された安定翼が、ぴったりと嵌まるようになっていた。

「やっぱり、これか」

金属製のクロスボウを構えながら、古城が呟く。

ＭＡＲの医療棟で、ヴェルディアナに渡されたクロスボウだ　すっかり存在を忘れていたが、暁家に届けられていた銀色の杭は、このクロスボウ用の矢だったらしい　正確には、杭を撃

ち出すための道具として、クロスボウが用意されたのかもしれない。

「い、忌まわしき〝柩〟の鍵よ」

離れた場所から銀色の杭を、嫌そうに睨んでいるのはアヴローラだ。彼女の目には露骨な不安の色が浮かんでいる。

「これがなにか知ってるのか、アヴローラ」

「真祖殺しの聖槍、魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く」

「……そうか……ヴェルさんは、こいつでおまえの封印を解いたのか……使えそうだな」

相変わらずの大袈裟な言い回しのせいで、アヴローラの言葉は、どこまで信用できるのかわからない。だが、あの氷の〝柩〟を砕いて、医療の建物を半壊させたのがこの杭なら、それなりの威力があると思って間違いないだろう。〝原初のアヴローラ〟に通用するかどうかはともかく、なにかの役には立つかもしれない。

古城はクロスボウをもう一度折り畳んで、杭と一緒にベルトに引っかける。腰の辺りがゴツゴツとして歩きづらいが、荷物がかさばるよりはややマシだ。

「で……どうやれば、動かせるんだ、この船は？」

そう言って古城は、クルーザーの操縦席に視線を向けた。アヴローラたちが住居として使っていた〝りあな号〟だ。連絡橋が封鎖されている今となっては、この船を動かす以外に、旧南東地区に渡る手段がない。

とは言え、もちろん古城は船舶免許など持っていないし、船を操縦した経験もない。操縦席の周辺は見たこともない計器類やレバーで埋め尽くされており、正直、古城は途方に暮れていた。注意書きはすべて外国語で、なにが書かれているやらさっぱりだ。

「……わ、我が理解の及ばぬ鋼の文明の申し子か」

困っているのはアヴローラも同じだ。彼女は船内で寝泊まりしていただけで、この船が実際に動くところは見たこともないのだ。半年以上も放置されて、そもそもまともにエンジンがかかるのかどうかも怪しいものだ。と、

「まったく、見てられないわ。そんな有様で、旧南東地区まで辿り着くつもりだったの？」

唐突に聞こえてきた苦笑混じりの声に、古城たちは驚いて振り返った。

そこに立っていたのはヴェルディアナ・カルアナだ。ブルネットの髪の女吸血鬼が、血まみれの服を着て、だらしなくデッキの柱にもたれている。

「……ヴェルさん……!?　あんた、生きてたのか？」

呆然とヴェルディアナを見つめて、古城が訊く。

あれだけの傷を負っていたヴェルディアナが、あの状態のクォーツゲートから生還できたとは、本人を目の前にしても信じられない気分だった。

「吸血鬼の生命力を舐めないで。あの程度で殺されてなんかやらないわ」

プライドの高い彼女らしい、強気な口調でヴェルディアナが言う。しかし彼女が弱り切って

いることは明白だった　彼女の唇に血の気はなく、支えがなければ立っていることもできない意識を保っているのが精いっぱいという有様だ。

「……ヴェルディアナ……汝の血の泉はすでに……」

「大丈夫よ、アヴローラ　私なら、大丈夫」

震えながら声をかけるアヴローラに、ヴェルディアナは優しく首を振る。

「ザハリアスはもういないぜ　今さらあんたがアヴローラになんの用だ？」

ようやく驚きから立ち直った古城が、低い声でヴェルディアナに訊いた　ヴェルディアナが生きていたことを嬉しく思わないわけではないが、古城には彼女に殺されかけた恨みがある　それに彼女がアヴローラを無理やり連れ去ったことは忘れていない

「……許して欲しいとは言わないわ　私は、ザハリアスをどうしても許せなかった　あいつを殺せるならなにを失ってもいいと思ってたの。だけど……」

睨みつける古城の瞳をしっかりと見返して、ヴェルディアナが力無く微笑んだ

「だけど、ザハリアスもネラプシも利用されているだけだったと知って、わからなくなった自分が今までなんのために生きていたのか……だから、せめて最後まで見届けさせて」

「……俺たちを旧南東地区まで、連れて行ってくれるのか？」

思いがけないヴェルディアナの申し出に、古城は複雑な感情を覚えた

彼女の言葉を疑っているわけではない　アヴローラを攫ったときのように、思い詰めた挙げ句に暴走するようなことはもう……ヴェルディアナは他人を騙したりはできない性分だ

彼女の提案も素直にありがたい　不安に思っているのは、それよりも彼女の負傷のことだ

「少なくともあなたたちより操縦は上手いはずよ」

「だけど、その出血じゃ……」

「時間がないんでしょう？　もたもたしてると、凪沙を助けられなくなるわよ」

ヴェルディアナの言葉に、古城は沈黙する　古城たちがなにをしようとしているのか、どうやら彼女も理解しているらしい。

「……許す」

迷っている古城の代わりに、そう呟いたのはアヴローラだった　握り締めていたクルーザーの鍵を、彼女がそっとヴェルディアナに手渡す。

「任せて」

鍵を受け取ったヴェルディアナが、ふらつきながら操縦席に座った　不慣れな手つきでエンジンを始動させ、照明などのスイッチを入れていく

「係留索は？」

「オッケー　じゃあ、いくわよ！」

妙に気合いの籠もった口調でそう言って、ヴェルディアナが乱暴にレバーを入れた　途端、

船が予想外の方向へと動き出し、隣に泊まっていた別の船に激突する。
「おい……ヴェルさん!?　あんた本当に操縦できるのか!?」
危うくデッキから投げ出されそうになって、古城が怒鳴った。アヴローラは蒼白な顔色で、必死に手すりにしがみついている。
「ちょっとくらいぶつけたって沈まなきゃいいのよ！」
乱暴な口調でそう言い放ち、ヴェルディアナが強引にハンドルを回した。ガリガリと嫌な音を残して船が旋回、どうにかマリーナを離れていく。
揺れは、想像よりも酷かった。外洋で波が高いせいというよりも、単純にヴェルディアナの操縦が下手なのだ。それでも途中でコツをつかんだのか、ふらついていた船体も少しは安定し、旧南東地区方面へと加速する。ロクにメンテナンスもせずに放っておかれたわりに、船の調子は悪くなさそうだ。
渡航禁止の影響で、海上にほかの船舶がいないのも幸運だった。そうでなければ古城たちの船は、あっという間に他船に衝突して海の藻屑になっていただろう。
だが、航行を続けて旧南東地区の全景が見えてきたあたりで、その幸運も終わりを告げた。無断で接近してくる古城たちに気づいて、黒塗りの警備艇が集まってきたのだ。
「特区警備隊だ、ヴェルさん！」
「突っ切るわ！　つかまってて！」

船体が跳ねるのも構わず、ヴェルディアナが目いっぱいエンジンを回した。激突をも恐れないヴェルディアナの無茶苦茶な操船に、特区警備隊が翻弄される。
しかしそれも一瞬のことだった。態勢を立て直した警備艇が、統率のとれた動きで旋回し、ジリジリと左右から古城たちを追い詰めるように近づいてくる。
そして彼らの船上で、突然、青白い火花が散った。闇を裂いて飛来した銃弾が、海面に無数の飛沫を散らす。スピーカーからの停船勧告の声に混じって、絶え間ない銃声が鳴り響く。
「――撃ってきた!?　マジか!?」
「い、威嚇射撃でしょ!?」
いや……たぶんエンジンが狙われてる！　動けなくして拿捕するつもりだ！」
古城たちが動揺する間に、警備艇が距離を詰めてきた。機関銃の照準が正確さを増して、〝りあな号〟の船体に、穴が空く。このままでは航行不能になるのも時間の問題だ。
「――お願い、〝ガングレト〟！」
焦ったヴェルディアナがシートの上に立ち上がり、突然、眷獣を召喚した。海上に出現した二つ首の魔犬が、足元の海面へと炎を叩きつけ、その衝撃で警備艇が大きく進路を逸らす。
「なっ!?」
古城はぽかんと目を丸くして絶叫した。
「正気かアンタ!?　特区警備隊相手に眷獣をぶっ放すなんて!?」

「ああでもしなきゃ逃げられなかったでしょ！」

「完璧に犯罪者じゃねえか……退学モノだな」

無意識にそう呟いて、古城は不意に笑い出した　これから古城は世界最強の吸血鬼に戦いを挑もうとしているのだ　生きて帰れるかもわからない　それなのに学校のことを気にしている自分がおかしく思えたのだ。

「愉しいわね、古城」

ふと見れば、ヴェルディアナも笑っていた　憑きものが落ちたように清々しげな彼女の横顔は、血まみれで苦しげだったけれど、今までで一番幸せそうに見えた

「本当に、愉しいわ　今まで認めるのが恐かったけど、あなたやアヴローラと出会って、絃神島で過ごした時間は、愉しかった　もっと早く、それを受け容れられたらよかった」

「ヴェルさん……まさか……」

微笑むヴェルディアナを見つめて、古城がうめく。

彼女が召喚した眷獣が、弱々しい輝きを残して消滅した　ヴェルディアナからの魔力の供給が途絶えて、実体を保てなくなったのだ

ハンドルを握りしめたヴェルディアナの身体が、銀色の霧に包まれてさらさらと崩れていく　実体を保てなくなっていたのは、彼女も同じだ　彼女の肉体は、ザハリアスの銃撃ですでに致命傷を負っていた　魔力を使って強引につなぎ止めていた命が、尽きようとしているのだ

旧南東地区の岸壁が見えてくる。直線距離では、数百メートル足らず。

だが、そこに辿り着く前に、船が止まる。特区警備隊の銃撃で、機関部がやられたのだ。

「くそ……ここまで来て……！」

船体を荒々しく殴りつけて、古城がうめいた。あとほんの少しで旧南東地区に辿り着けるのだ。それなのに、ここで特区警備隊に拘束されたら、今度こそ凪沙を救い出す機会は完全に失われてしまう。

どうすればいい、と古城がもう一度、拳を固めたとき、ひんやりとした小さな手が、それを頼りない力で包みこんだ。

「古城、我が手を……」

「アヴローラ？」

金髪の吸血鬼の少女が、指と指を絡ませるようにして、古城の手をしっかりと握ってくる。

そして彼女は、その手を海面に向けて突き出した。

古城の右の肋骨が熱を帯びる。彼女の想いと魔力が流れこんでくる。

そして放たれたのは、膨大な凍気だ。

古城たちの船を中心にして、海が純白に染まっていく。波の形もそのままに、海面が凍りついたのだ。いかなる高位魔導師の氷結魔法でも再現不可能な、圧倒的な凍気

それは眷獣の力だった。眷獣の器としてのアヴローラに封印された、第四真祖の十二番目の

脊獣。それをアヴローラが解放したのだ。

驚いて目を見張る古城を見返して、アヴローラは泣きそうな表情で微笑んだ。

「早く行きなさい、古城……！　アヴローラを救ってあげて……」

ぐったりとデッキに座りこんだままの姿で、ヴェルディアナが古城を見上げて言った。

古城は無言で首肯する。そしてアヴローラの手を引いてデッキを降りる。

海面は完全に凍りついている。氷の厚さは、数メートルはあるだろう。その氷の上を進んで行けば、旧南東地区は目の前だ。

「……あ、ありがとう、ヴェルディアナ！」

最後にヴェルディアナを振り返って、アヴローラが叫んだ。

彼女を優しく見送って、ヴェルディアナは目を閉じる。

「それは、私の台詞よ……アヴローラ……ありが……と……」

満足げな微笑を浮かべたヴェルディアナの全身が、銀色の霧に包まれた。

柔らかな月光の下で煌めきながら、霧はやがて闇に溶け、静かな風に乗って消えていった。

5

アヴローラが放った凍気は旧南東地区の岸壁にまで達して、周囲を白く染めていた。美しい景色といえなくもないが、それを観賞している余裕は古城にはない。

「……」

岸壁には多くの人影があった。そのほとんどすべてが疑似吸血鬼化した感染者たちだ。視界に入るだけでもその数は千人を超えている。

彼らの八割ほどは、新たな生け贄を求めて島内を徘徊している。

だが、残る二割は、地面にうずくまったまま動かない。彼らの目は無気力に見開かれたまま、なんの感情も映していなかった。その原因を古城は知っている。第四真祖――〝原初〟のアヴローラ〟による記憶の搾取だ。記憶を根こそぎ奪われたことにより、彼らは生きる気力までも失って、ただぼんやりと死の訪れを待っている。それが第四真祖に捧げられた生け贄の姿。〝焔光の宴〟の真実だ。

「……こいつらが全員、疑似吸血鬼か」

古城とアヴローラの接近に気づいて、感染衝動に衝き動かされた疑似吸血鬼たちが、一斉に視線を向けてくる。まだ動ける感染者だけでも数百人。しかも感染者たちの身体能力は、血の従者である古城と比べても遜色ない。〝原初〟に再び会うためには、そんな彼らの包囲を突破しなければならないらしい。

かといって、アヴローラの脊獣を使うわけにもいかない。威力が大きすぎるからだ。この状況で脊獣を喚び出したら、千人近い感染者たちを皆殺しにしてしまう。

「……し、仔細なし。憂慮は無用」

躊躇する古城の手を引いて、アヴローラが歩き出す。

彼女の姿を見た感染者たちが、ざわり、とどよめいた。アヴローラが一歩足を踏み出すたびに彼らが後ずさり、道が出来るように人波が割れていく。

第四真祖に捧げられた生け贄たちは、第四真祖の分身たるアヴローラに対しても、攻撃を仕掛けることができないのだ。整列した彼らの間を歩くアヴローラの姿は、まるで近衛騎士たちに傅かれた姫君のようだった。もっとも、おどおどと震えている彼女の態度は、姫と呼ぶにはあまりにも威厳が足りないが。

「凪沙は、どこだ？」

疑似吸血鬼たちの包囲を抜けて、古城たちはクォーツゲートへと向かう。

半壊したガラスの城の周囲には、やはり人の姿はない。〝焔光の宴〟の祭壇として張られた結界がまだ生きているのだ。

「か、彼方に！」

アヴローラが指し示したのは、六角水晶に似た背の高い時計塔だった。その尖塔の頂上に、世界のすべてを見下ろすような傲慢な表情で、凪沙の姿をした少女が立っている。

「……〝原初〟！」

瓦礫で埋め尽くされた広場に立って、古城は少女を見上げて叫んだ。

それが合図になったかのように、時計塔の鐘が鳴り始める。低く、重く。まるで古城たちを迎え入れる葬送の鐘のように。

「戻ったか、十二番目。もっと無様に逃げ惑うかと思ったが」

〝原初〟が、アヴローラを冷たく睥睨する。古城は、怯えたように震えるアヴローラの手を強く握って前に出た。

そして黒髪の少女を見上げて命じる。

「凪沙の身体を返せよ……〝原初のアヴローラ〟」

「人形の従者が、我に命令するか」

凪沙の姿をした少女が、どこか呆れたように呟いた。そして美しく冷ややかに笑う。

「だが、良い。従者よ、汝の働きで、十二番目はよく育った」

「……育った？」

古城がアヴローラの横顔を盗み見る。

不老不死である吸血鬼の肉体が、半年かそこらで成長することはあり得ない。事実、アヴローラの容姿は、古城と最初に出会ったころのままだ。

「強い感情が伴わぬ記憶は、水で薄めた酒のようなもの。生け贄どもが我に捧げた記憶だけでは足りぬのだ。我が忌まわしき封印によって長き眠りを強いられる間、〝天部〟が、眷獣どもに人の形の器を与え、世に放ったのはなにゆえであろうな？」

「……固有堆積時間ってやつを手に入れるためか」

〝原初〟の問いかけに古城が即答する。それが意外だったのか、凪沙の姿をした少女は愉快そうにうなずいた。

「いかにも。しかし単に長き時を過ごすだけでは無意味。強い感情と想いの積み重ねが眷獣の力を増す。宿主たる我に逆らうほどの強い想いがな」

「……」

アヴローラは恐怖に目を背けることなく、〝原初〟をしっかりと見据えている。

眷獣とは異界からの召喚獣であり、意思を持つ魔力の塊だ。そして眷獣の器として造られた十二体の人形たちにも、それぞれの自我が与えられていた。

封印された眷獣は、人形たちと感情を共有して、自分の力に変える。

だからこそ〝原初〟は、アヴローラの反抗を喜んでいる。

宿主に反抗するほどの強い感情を手に入れたことで、彼女の眷獣は力を増した。そして眷獣が力を増すということは、宿主である〝原初〟の力が増すことでもあるからだ。

「しかし貴様の役目は終わりだ、従者よ。十二番目を置いて去るがいい」

凪沙の姿をした少女が、鬱陶しい蠅を見るような眼差しを古城に向けてくる。彼女が古城を見逃すのはほんの気まぐれだと、その瞳が言外に告げていた。

しかし古城は彼女を見上げて、嘆息混じりに呟いた。

第1章 逃犯们
The Fugitives

うるせェよ」[1]

「……なに？」

およそあり得ないはずの古城の反応に、〝原初〟が表情を引き攣らせる。

古城は腰に提げていたクロスボウを握って、折り畳まれていた弓を広げた。血の従者の筋力にものを言わせて片手で弦を引き、薬莢を嵌めた銀色の杭を装塡する。

「言ったはずだぞ。凪沙を返してもらうってな」

クロスボウの銃身を〝原初〟に向け、古城は荒々しく犬歯を剝いて笑った。

「凪沙は取り返す。アヴローラは喰わせない。吸血鬼化した人たちも解放する。おまえが世界最強の吸血鬼だろうが、殺神兵器だろうが知ったことか！　アヴローラのためでも、凪沙のためでもない――ここから先は、俺の戦争だ！」

「それが汝の望みか。従者風情が……！」

古城の挑発に、〝原初〟が吼えた。

曲がりなりにも血の従者とはいえ、格下の人間ごときに喧嘩を売られることなど、造られて以来、考えたこともなかったはずだ。彼女が激昂するのも当然だ。

凪沙の姿をした少女の背中に、極光色の翼が生える。その中の一枚が姿を変え、巨大な幻獣の形を生み出した。美しい女性の上半身と、巨大な蛇の下半身。流れ落ちる髪も無数の蛇。青白き水の精霊――水妖だ。

「眷獣か！」

水妖が撒き散らす水流に触れただけで、クォーツゲートの残骸が砂のように崩れて溶けた。その異様な破壊の光景に古城は絶句した。水妖の攻撃を浴びたガラスは珪砂や水や炭素へと、コンクリートは土塊へと戻る。そして鉄骨は、人の手によって加工される前の形――原子レベルにまで分解されていた。〝原初〟が喚び出した眷獣は、まるで時間を巻き戻したかのように、すべての文明を無に還す怪物なのだ。

不老不死の吸血鬼とて、あの水妖に触れればひとたまりもないだろう。古城一人でどうこうできる相手ではない。そう、古城一人では――

「古城！」

アヴローラが伸ばしてきた右手を、古城がつかんだ。その手を前に突き出して、二人同時に声を振り絞って絶叫する。

「疾く在れ――〝妖姫の蒼氷（アルレシャ・グラキエス）〟！」

アヴローラの中に封印されていた眷獣が、今度こそ完全に姿を現した。

全長十メートル足らずの美しい眷獣だ。上半身は人間の女性に似ているが、下半身は魚の姿である。背中には透明な翼を生やし、指先は猛禽のような鋭い鉤爪になっている。

氷の人魚、あるいは妖鳥。膨大な凍気を従えた妖鳥は、激流をまとう水妖へと突撃した。激流を凍気が氷結させ、その氷が再び水へと再生される。二体の眷獣の能力は互角。ただ、

膨大な魔力の余波だけが、旧南東地区の人工の大地を揺らしている。
「従者の分際で、我が眷獣を従えるか」
凪沙の姿をした少女が、嘲るように呟いた。彼女の瞳が爛々と輝き、背中の翼が輝きを増す。
「だが、哀れ。汝らの敗北は必定ぞ」
極光の翼を三枚使って、彼女は新たに三体の眷獣を召喚した。一体は金剛石の肉体を持つ神羊、一体は琥珀色の巨大な牛頭神だ。そして最後の一体は、陽炎のように揺らめく緋色の双角獣だった。
無数の宝石をまとった神羊が、その宝石を散弾のように撃ち放つ。
水妖と互角の戦いを続けていた氷の妖鳥に、それを迎撃する余裕はなかった。宝石の弾丸を浴びた妖鳥が大きく揺らめき、アヴローラが苦悶の息を吐く。
「我が元に戻れ、十二番目。〝宴〟は終わりぬ――」
続けて〝原初〟が、次の眷獣に攻撃を命じた。琥珀色の牛頭神が大地を揺らし、巨大な戦斧を振り上げる。戦斧が帯びているのは、凄まじい魔力の輝きだ。その斧にもなんらかの特殊能力があるのだろう。
そして牛頭神の攻撃対象は、妖鳥ではなく、古城とアヴローラだった。まともな戦斧でも、当たれば無事では済まないだろうが、牛頭神の身長は十メートル以上。振り上げられた斧は、それよりも更に巨大だ。直撃せずとも、その衝撃だけで、古城たちを肉片に変えるはず。すでに眷獣を解き放っている古城たちに、それに対抗する手段はない――

「ぬ!?」
だが、驚きの声を洩らしたのは、古城ではなく〝原初〟のほうだった。
ゴウッ、という凄まじい爆音が、古城たちの頭上を突き抜ける。
それは気化爆弾の爆圧にも匹敵する、凄まじい衝撃波の弾丸だった。超音速で撃ち放たれた震動の塊が、牛頭神の巨体に直撃し、そのまま数十メートルも吹き飛ばす。
「な……何故、我に逆らう、九番目……!?」
凪沙の姿をした少女が、怒りで眉を吊り上げて叫んだ。
彼女が脱みつけていたのは、自らが召喚した深緋色の眷獣だ。凄まじい震動波を全身にまとう双角獣。その深緋色の眷獣が放った衝撃波が、牛頭神を攻撃し、古城たちを救ったのだ。
巨大な双角獣の威容を見上げて、アヴローラが息を呑む。
「〝双角の深緋〟……」
「九番目……だと？」
深緋色の眷獣は、古城たちを庇うように着地して、牛頭神を睨んでいる。その姿を、古城は呆然と眺めて首を振った。
「おまえ、まさか……アイスの借りを返してくれるのか!?　たったそれっぽっちのことで!?」
驚く古城をちらりと振り返り、双角獣は小気味よさそうに笑った　気がした。

それを見て古城は思い出す。眷獣の器として造られた〝焔光の夜伯〟には意思がある、そして彼女たちの想いを眷獣は共有しているのだ。

その想いで九番目は、古城を選んだ。本来の宿主たる〝原初〟ではなく、古城を護ることを選んだのだ。

強い感情の積み重ねは眷獣の力を増し、時として宿主に逆らうほどの強い想いを生む――それは〝原初〟自身が口にしたことだった。

「よかろう、眷獣ども。ならば、貴様らの従者を見事護ってみせよ！」

時計塔の上に立つ〝原初のアヴローラ〟が、空に向けて高々と手を伸ばした。

遥か頭上に異様な気配を感じて、古城も思わず顔を上げる。

「なんだ!?」

そこにあったのは流星だった。灼熱の炎に包まれた巨大な流星だ。いまだ雲の上にあるにもかかわらず、肉眼ではっきりとその姿が見える。

流星の正体は巨大な武器だった。三鈷剣と呼ばれる古代の武具。神々が使ったといわれる降魔の利剣だ。優に刃渡り百メートルを超えるであろう巨大な剣が、高度数千メートルの上空から重力に引かれて落下してくる。

落下の衝撃がどれほどの破壊をもたらすか、想像するだに恐ろしい。

「……〝夜摩の黒剣〟！」

アヴローラが表情を凍りつかせて、その名前を口にした。その間にも、三鈷剣は速度を増して、地上までの距離を減らしている。

「冗談……だろ。あれも眷獣なのか……!?」

古城の顔が絶望に歪んだ。意思を持つ武器などと呼ばれる眷獣の存在は、古城も知っていた。しかしあの黒い剣は、武器と呼べる範疇を超えている。むしろ神の裁きと呼ぶのが相応しい。

ひとたび落下すれば、半径数十キロの範囲に致命的な破壊を及ぼすであろう、裁きの剣――破壊のみに特化したシンプルな能力だが、それだけに防ぐのが難しい。氷の妖鳥や双角獣の力を借りたとしても、果たして迎撃できるかどうか。

そしてその一体は、〝原初〟のほかの眷獣を抑えるだけで手一杯だ。もはや古城たちに打つ手はない。

そんな古城の焦りを知ってか、裁きの剣が速度を増した。大気が不気味に震動していた。輝く剣が頭上を覆い尽くし、空が真昼のように明るくなる。

その光が落ちてくる。まるで空そのものが落ちてくるかのように――

ここまで近づけば、地上への到達はもはや一瞬のことだ。

しかし、恐れていた破滅の瞬間が、紘神島に訪れることはなかった。

「なっ……!?」

愕然と叫ぶ〝原初〟の声が、古城にははっきりと聞こえた気がした。

最初に生じたのは、黄金の輝き。

金色の稲妻を撒き散らして、巨大な雷光の獅子が現れる。落下を続ける黒剣へと向かって、その黄金の眷獣が咆吼した。地上から撃ち出された凄まじい雷が、旧南東地区上空に巨大な電磁場を形成する。

電磁場の中に突入した剣は、自らの移動速度によって強力な磁界に包まれた。

雷光の獅子が再び雷を放つ。急激に変化する電磁場が、裁きの剣を吹き飛ばす。

重力に引かれて落下する剣を、電磁誘導の原理で打ち返したのだと古城は気づいた。

剣に与えられた新たなベクトルは直角方向。落下の向きを変えた裁きの剣が大気を裂いて、水平線の彼方へと消えていく。

もはや裁きの剣が地上に落ちてくることはない。

だが、裁きの剣によって生み出された衝撃波は、完全に消滅したわけではなかった。

遅れて地表に到達した衝撃波が、旧南東地区を直撃する。

剣本体が落下したほどの威力ではない。だがそれは、人工島の基底部を粉砕するのに十分すぎるほどの破壊力を持っていた。

樹脂と金属に覆われた地表が陥没し、地下の最下層まで一気に露出した。

人工島のメインフレームが破断して、島全体が左右に分割されていく。

建物の窓ガラスは残らず砕け散り、ビルが次々に倒壊した。すべては一瞬の出来事だ。

旧南東地区が一気に沈没しなかったのは、人工島の基礎設計が優れていたからだ。それでも島内の各ブロックが次々に浸水を始めている。島が沈むのは時間の問題だろう。

だが、爆心地にいた古城とアヴローラは無傷だった。

彼らを救ったのは、銀色の霧。裁きの剣の落下点に生じた濃霧が、古城たちの身体を包みこみ、爆発の衝撃から護っていたのだ。

「おまえたちは……！」

傾いた時計塔の上に立つ〝原初〟が、地上を見つめて苦々しげに言った。

稲妻をまとう雷光の獅子と、濃霧に包まれた銀色の甲殻獣。

裁きの剣から古城たちを護った二体の眷獣が、敵対の意思をあらわに、〝原初〟の姿を睨んでいる。

「〝獅子の黄金〟……〝甲殻の銀霧〟……」

アヴローラが驚いたような表情で、眷獣たちの名前を呼んだ。どういうことだ、と古城は戸惑う。なぜ見知らぬ眷獣たちまでもが、古城たちに味方してくれるのか

古城は、ハッと顔を上げて〝原初〟を見た。凪沙の姿をした少女を。

「凪沙……か!?　こいつらも凪沙を救おうとしてるのか!?」

アヴローラの仲間でも古城の知り合いでもない眷獣が、〝原初〟と敵対する状況はひとつしかない。それは彼女たちが、凪沙の味方である場合だけだ。

理由はわからないが　もしかしたら、凪沙本人も自覚していないのかもしれないが、彼ら

は凪沙に懐いているのかもしれない。そして凪沙を助けるために、古城たちに力を貸してくれているのだ。少なくとも古城はそう信じた。とりあえず今はそれだけで十分だ。

「くっ……！」

予期せぬ状況に、〝原初〟が唇を歪めていた。覚醒した直後の〝原初〟は、まだ眷獣たちの支配権を完全に掌握してはいなかった。そのことが九番目たちの離反を招き、彼女を窮地に立たせている。古城たちの速攻には意味があったのだ。

そして追い詰められた〝原初〟の足場が、突然、崩れた。六角水晶を模した時計塔の根元が、ごっそりと空間ごとえぐり取られたように消滅している。

時計塔を破壊したのは、互いに絡み合う二匹の龍。

水銀の鱗に覆われた双頭の龍が、時計塔を喰らって〝原初〟を地上に引きずり降ろしたのだ。

「〝龍蛇の水銀〟！」

「――三番目かっ！」

アヴローラと〝原初〟が口々に叫んだ。落下を続ける〝原初〟は、最後に残された翼を引き抜いて、六体目の眷獣を召喚する。

それは灼熱の炎に包まれた怪物だった。鮫の歯と獅子の胴体、蠍の尾と蝙蝠の翼――人喰いの名で知られた幻獣だ。

だが、それでも〝原初〟に従う眷獣が、古城たちに味方する眷獣の数を上回ることはない。

水銀色の双頭龍が絡みつき、人喰いを〝原初〟から引き離す。

「――終わりだ、〝原初のアヴローラ〟！」

地上に降りた黒髪の少女を目がけて、古城が疾走した。すべての眷獣を解き放ったことで、今の〝原初〟は無防備だ。振り返った彼女の華奢な身体を、古城が無理やり押さえつけて動きを止める。

「従者ごときが！　わきまえよ！」

凪沙の姿をした少女の腕が、古城の脇腹へと突き入れられた。

ザハリアスを消滅させたときのように、古城の肋骨を奪うつもりなのだろう。だが、彼女のその行動こそが、古城が狙っていたものだった。

「効かねェな！」

古城が〝原初〟の腕をがっちりと押さえこむ。魔力はともかく、単純な力比べに持ちこめば、古城でも彼女の動きを止められる。そして完全に密着してしまえば、〝原初〟は黒い翼を使えない。強力すぎる黒い翼の攻撃が、凪沙の身体を傷つけてしまうからだ。

「ぬ!?」

動きを封じられたことに気づいて、〝原初〟の表情に焦りが浮いた。そんな彼女の背後に立ったのは、金髪の吸血鬼の少女だった。アヴローラだ。

「十二番目!?　貴様――！」

〝原初〟が振り返って絶叫する。そんな彼女に背後から寄り添い、白く細い凪沙の首筋へと、アヴローラが唇を押し当てた。鋭い牙が、柔らかな肌を刺し貫く。

「そうか……これが汝らの目論見か！　同族喰らいが！」

〝原初〟は、愕然としたように目を見開いていた。

その首筋を、鮮血が伝い落ちていく。

凪沙の身体から力が抜けて、古城を貫いていた腕がゆっくりと抜ける。

ぐったりともたれてくる黒髪の少女の身体を、金髪の少女が抱きしめた。そして――

そして、二人はひとつになる。

6

鐘が鳴り続けている。

壊れた時計塔の鐘の音だ。

彫像のように動きを止めた二人の少女を、古城は立ち尽くしたまま見つめている。

同族喰らい――

あるいは上書き。

一般的には、吸血鬼が吸血鬼の血を吸って、相手の〝血統〟や〝能力〟を、自分の中に取りこむことだと言われている。だが、相手を自分の中に取りこむということは、逆に自分自身を乗っ取られる危険がある。存在を上書きされてしまうのだ。

遠山は、凪沙が助かる唯一の方法は、その上書きだと言っていた。

凪沙が〝原初のアヴローラ〟の存在を乗っ取ってしまえば、凪沙自身の人格を保ったまま、彼女は第四真祖になる、と。

だが、それが実現できる可能性は限りなくゼロに近かった。ただの人間に過ぎない凪沙が、第四真祖を乗っ取ることなどできるはずがない。

では、もし上書きするのが普通の人間ではなく、吸血鬼ならどうか？

ましてやそれが、第四真祖の監視者として造られた、封印の器なら――？

それが古城たちの辿り着いた解答。凪沙とアヴローラの両方を救いうる、たったひとつの可能性だった。

アヴローラは、凪沙の首筋に牙を立てたままだ。凪沙の身体に憑いていた〝原初のアヴローラ〟を自らの体内に招き入れたのだ。

アヴローラは凍りついたように動かない。

今、彼女の内側では、ふたつの魂が能力の支配権を巡って激しく争っているのだろう。

「……」

古城はクロスボウに装塡した銀の杭を、ゆっくりとアヴローラの心臓に向けた。

彼女は、この杭を、真祖殺しの聖槍だと言っていた。その言葉が真実なら、これは第四真祖を滅ぼす最後の切り札になる。

アヴローラが、〝原初〟の魂を上書きできればそれでいい。だが、もしも逆に彼女が〝原初〟に喰われたら、そのときは古城が彼女を撃つ。

自分にアヴローラが撃てるかどうか、古城にもまだわからない。

だが、〝原初〟を野放しにしてしまえば、〝焔光の宴〟に巻きこまれた人々は、確実に大勢が死に至る。そして、おそらく凪沙も助からない。だから古城は撃たなければならない。たとえ撃てなくても撃つしかないのだ。と、

「アヴローラ……！」

時計塔の鐘が、もう一度鳴った。

その直後、意識をなくしているはずの凪沙が笑い出す。

凪沙本人の笑い方ではない。あからさまな嘲笑だ。

「駄目なのか!? アヴローラ……！」

古城がクロスボウの引き金に指をかけた。そして祈るような気持ちで、アヴローラの返事を待つ。凪沙は笑い続けていた。だが、その美しい声はしだいに途切れがちになっていく。

「おまえの……勝ちだ……」

凪沙は、満足げにぼそりと呟いた。そして眠るように目を閉じる。

脱力した凪沙の身体を支えて、アヴローラが古城を見た。

金髪の少女の唇は、凪沙の血で濡れている。

「〝原初〟か」

青白く輝くアヴローラの瞳を睨んで、古城が訊いた。驚いたように目を瞬いて、アヴローラが首を振る。どこか気弱げなその仕草は、古城がよく知るアヴローラのものだった。

「や、約束を果たそう……」

少しだけ誇らしげにそう呟いて、アヴローラは凪沙の身体を地面に横たえる。

彼女が口にした〝約束〟を古城は思い出す。

凪沙の救済――その願いを叶えると、彼女は古城に言ったのだ。

そして約束はたしかに果たされた。それがどんな結末を招くか、おそらくは理解した上で。

「〝原初〟と融合したんだな……アヴローラ」

「……」

古城の問いかけに、アヴローラは沈黙で答えた。

そうか、と古城はクロスボウを下ろして、彼女のほうへと一歩踏み出した。

アヴローラが無言で後ずさる。

彼女の周囲には、雪が舞い始めていた。常夏の人工島では、決して降るはずのない雪が。純白の凍気が彼女の周囲を取り巻いて、足元には霜が降り積もっている。

離れようとするアヴローラの傍に近づいて、古城は彼女の手を取った。

「古城……」

アヴローラが、なにか言いたげに口を開く。それを遮って、古城は言った。

「また眠りにつくつもりなんだろ」

「……っ！」

アヴローラが驚いて唇を噛む。その反応で、古城は自分の考えが当たっていたことを知る。

たしかにアヴローラは、〝原初〟の上書きに成功した。だが、それはおそらく一時的なものだ。〝天部〟が生み出した〝呪われた魂〟に、眷獣の器に過ぎないアヴローラは勝てない。いつか必ず〝原初〟は復活し、アヴローラを今度こそ完全に支配するだろう。

だから彼女は、自分自身を封印しようとしている。

眷獣の力を使って、自らを氷の柩に閉じこめる。かつて遺跡の中で眠りについていたころのように。何百年間も、あるいは何千年間も、たった一人きりで眠り続けるつもりなのだろう。

そんなことはさせない、と古城は思う。彼女を二度と一人きりにはさせない、と。

「つき合ってやるよ。おまえから目を離すのは、不安だからな」

「……古城？」

「次に目が覚めたとき、俺がいないと困るだろ。服のボタンを留めるときどうすんだよ」

冗談めかして笑いかける古城を、アヴローラが泣き出しそうな表情で見上げた。

そして彼女は、古城の手元に視線を落とした。そして不意に柔らかく笑う。真っ直ぐに古城を見返してくる彼女の瞳には、覚悟を決めた者に特有の奇妙な穏やかさがあった。

「……我は、汝の望みを叶えた……次は……次は、古城の番……」

「え？」

アヴローラの不可解な言葉に、古城は不意に恐怖した。

そんな古城の右腕が、意思に反してゆっくりと持ち上がる。その手に握られているのは金属製のクロスボウだ。装填を終えていた銀色の杭が、アヴローラの心臓へと向けられる。

「アヴローラ!?」

輝く彼女の瞳を見て、古城はなにが起きているのか理解する。古城は彼女の――第四真祖の血の従者だ。そして主人であるアヴローラが、古城の身体を操っている。

自分を撃てと命令しているのだ。

「やめろ……！　やめろ、アヴローラ！」

古城は必死に抵抗する。しかし身体が言うことを聞かない。血の呪縛に逆らえない。

そう。〝原初〟の復活を阻止する方法は、もうひとつあったのだ。それはアヴローラが

〝原初〟の魂を抱えたまま消滅することだ。吸血鬼の真祖には不死の呪いがかけられているという。だが、古城のクロスボウに装填されているのは、その真祖を殺すための破魔の聖槍だ。

「兵器として造られた〝呪われた魂〟は、我とともに、ここで消える……だが……」

アヴローラが、動けない古城の首筋へと牙を突き立てる。そこからなにかが流れこんでくるのを古城は感じた。それは〝力〟そのものだ。〝呪われた魂〟を完全に滅ぼすために、アヴローラは、第四真祖の〝力〟だけを切り離して古城に渡そうとしている。そして自分は〝原初〟とともに消滅する気なのだ。絃神島を、古城の世界を救うために――

「第四真祖の力のすべては汝に託そう。受け取れ」

「やめろ、アヴローラっ！」

古城の血をちらりと舐め取って、アヴローラは泣き笑いのような表情を浮かべた。

そしてそっと目を閉じる。彼女の意思に導かれるまま、古城の指が引き金にかかる。

「古城……」

彼女の唇が、最後に紡いだ言葉はなんだったのか――

撃ち出された銀色の聖槍は、羽毛のような軽い音を立てて、少女の胸に突き立った。

真っ白な光が、古城の視界を染めた。荒れ狂う魔力の奔流の中を、純白の雪が舞う。

そして古城は眠りに落ちる。

深い深い忘却の眠りに。

最後に古城が見たものは、砕けたガラスの破片に映る自分自身の瞳。

涙に濡れた真紅の瞳だった。

終章
Outro

1

港湾地区のカフェテラスで、彼女は海を眺めていた。

極東の〝魔族特区〟絃神市は、東京の南方海上二百二十キロ付近に浮かぶ人工島だという。

樹脂や金属、そして魔術で造られたまがい物の大地。亜熱帯の強烈な陽射し。見渡す限りの広大な海。東欧の内陸部で育った彼女にとっては、どれもが物珍しい光景だった。

それでも毎日のように眺めていれば飽きがくる。

もちろん悪い土地ではないのだろう、と思う。聖域条約が発効して四十年以上が過ぎたとはいえ、人間と魔族が、ごく自然に共存できる都市はまだ少ない。

建物は清潔だし、治安もまあ悪くない。そしてなによりも食事が美味い。

もっとも、暮らしやすいかと問われると、素直にイエスとは答えられなかった。

なにしろ物価が高すぎる。たとえば、カウンターに陳列されている一切れのチーズケーキ。遠く離れた彼女の故郷なら、同じ値段でホール丸ごと買ってもお釣りがくるだろう。

もちろん人工島である絃神島の食糧自給率は限りなく低く、本土からの輸送コストで食材が高くなる理由もわかる。とはいえ、客の立場で言わせてもらえば、この島の飲食店のメニューの価格は、理不尽以外の何物でもなかった。

「抗議よ……断固抗議するわ……いちばん安いコーヒー一杯しか注文しないのは、決して私が貧乏だからじゃなくて、そう、一種の政治的な抗議行動なのよ……」

自分自身にそう言い聞かせながら、彼女は、砂糖とミルクを飽和寸前までぶちこんだ甘ったるいコーヒーを啜った。半日ぶりに摂取する糖分が、餓えた身体にじんわりと浸み渡る。

「ううう……どうしてカルアナの娘である私がこんな……」

名門貴族の娘として何不自由なく暮らしていた過去の自分との落差に、思わず弱音がこぼれそうになったが、彼女は乱暴に首を振って、言葉の続きを呑みこんだ。

待ち合わせの相手が店に現れたのは、それから間もなくのことだった。

彼女の左手首に嵌められた金属製の腕輪――魔族登録証を目印に、背の高い女性が近づいてくる。短い髪。切れ長の鋭い目つき。隙なく着こなした濃紺のスーツと、高級ブランド製のキャリーバッグ。よく切れる鋭い刃物に似た、冷たい雰囲気を漂わせた美女だ。

「MARの暁深森研究主任ですね？」

飲みかけのコーヒーカップを置いて彼女は立ち上がり、スーツの美女に呼びかける。

MAR　マグナ・アタラクシア・リサーチ社は、東アジア地区を代表する巨大企業だ。

風邪薬から兵器まで手広く扱う、世界有数の魔導産業複合体である。

暁深森は、そのMARで主任研究員を務めているという女性だった。噂ではMAR絃神支社の保有特許の実に四割が、彼女一人の研究成果で占められているともいう。

沈む。渦巻く光の中に、意識がゆっくりと沈んでいく。

少女は、白く薄れていく意識の中で、碧い目を閉じて微笑んでいる。

かつて彼女の中に封印されていた〝呪われた魂〟は消滅し、それが従えていた〝力〟は一人の少年に――新たな第四真祖に受け継がれた。監視者たる少女の役目は、もう終わった。

永きにわたる彼女の眠りは、無駄ではなかった。

それがわかっただけで十分だ。少女は満足して、笑って消滅していける。

少年は、きっと自分のことを忘れてしまうだろう。

すでに実行された〝宴〟の代償は支払わなければならない。それは新たな第四真祖となった少年にとっても例外ではない。彼らは少女の存在を忘れる。少女と過ごした日々を。少女の名を。けれど暁凪沙の存在を、彼らが忘れることはない。なぜなら今の凪沙はもう、第四真祖ではないからだ。彼女に関する記憶は護られた。少年がそう望んだように。

自分は彼の望みを叶えた。そのことを少女は誇りに思う。

あとは光の中へ消えていくだけ。

そう、それだけのはずだった。だが、

――あなたは、本当にそれでいいの？

誰かにそう訊かれた気がした。

少女は黙って首を振る。

未練がないと言えば嘘になる。

あの島で暮らしていたかった。もっと彼の近くにいたかった。ただそれだけでよかったのだ。

――じゃあ、そうしようよ……

誰かがはっきりと少女に呼びかけてくる。あたしの中で眠ればいいよ、と。

白く染まった視界の中で、彼女に手が差し伸べられてくる。

それは黒髪の少女の手だ。

過去透視能力と霊媒の素養を併せ持ち、第四真祖の力すら受け容れる異能の巫女――

その手が少女の手首をつかむ。

行こ　古城君が待ってる。

その誘惑の言葉に少女の心が動く

差し出された細い手を、彼女は無意識に握り還す。

沈んでいた意識が、浮上する。
光の中へ。もう一度、青い真夏の空の下へと。
そして二人は再びひとつになる――

†

紘神島・旧南東地区が沈んだのは、二週間前。暁古城とアヴローラが、〝原初〟を滅ぼした翌日のことだった。

もともと解体が予定されていた廃棄エリアということもあって、人工島管理公社による情報操作は容易だった。予定されていた解体工事を、早めただけだと説明したのだ。新型感染症の拡大を防ぐため、という大義名分もあり、旧南東地区の消滅は、意外なほどあっさりと市民に受け容れられた。

人工島が沈むほどの被害にもかかわらず、死傷者が奇跡的なまでに少なかったのは、島内に残る人間のほとんどが疑似吸血鬼化していたからだ。吸血鬼の肉体が持つ頑健さと生命力は、あの大惨事にも耐え抜いた。皮肉なことに、〝焔光の宴〟がもたらした吸血鬼感染症によって人々は救われたことになる。

出現したときと同様に、吸血鬼感染症はあっさりと沈静化し、ほとんどの患者は元の平穏な日常を取り戻していた。彼らの多くは、大事な記憶のいくつかを失っていたが、それを本人が自覚することは少なかったし、心の空白はいつか埋まるものだ。

埋めてくれる誰かがいる限り――

「よお、気がついたかい、ヴェルさん……」

その日、矢瀬基樹が訪れたのは、人工島管理公社が管轄する魔族専用の医療施設だった。

病院というよりは研究所、あるいは実験室というほうが実体に近い。人体実験に近い危険性と引き換えに、実験段階の超高度な医療技術を提供する――〝魔族特区〟ならではの物騒な施設だ。

そこで治療を受けていた患者が、二週間ぶりに意識を取り戻したと聞かされて、矢瀬は花束を持って駆けつけたのだった。

「ったく、霧化した吸血鬼の回収なんて、やるもんじゃねえな。ちょっとばかり気流が操れる程度の、しょっぱい能力者には荷が重いぜ」

ベッドの上に上体を起こして、パジャマ姿の吸血鬼が座っている。ブルネットの髪をばっさりと切ったせいか、育ちの良さを感じさせる顔立ちが、以前よりもずいぶん幼く見えた。

それは彼女が、背負っていたものから解放されたせいかもしれない。

あの〝宴〟の夜に重傷を負い、実体すら保てなくなったヴェルディアナを回収したのは矢瀬

だった。そして彼女は、収容されたこの施設で、十日近くも生死の境を彷徨っていたのだ。

もっとも最終的に彼女を救ったのは、矢瀬でも〝魔族特区〟の医療技術でもなく、少し意外な人々の助力だった。

「ま、獅子王機関の鉄血皮ちゃんも、あれで少しはあんたを利用した負い目を感じてるんだろ。あんたを復活させたのは、けっこう大変だったらしいぜ。なんせ、どこぞの真祖に力を借りたって噂もあるくらいだからな」

逆立てた髪を撫でて、矢瀬が笑った。

とはいえ、獅子王機関にしてみれば、今回の出来事は、そう悪い結末ではなかったはずだ。本来望む形ではなかったとはいえ、彼らの目的は果たされた。第四真祖は日本に生まれ、その力は制御不能な〝呪われた魂〟の代わりに、普通の高校生の手元にある。

そう思えば、吸血鬼の小娘一人を救うくらいは、安いご祝儀ということだろう。

「あなた、誰なの……？」

皮肉っぽく笑っている矢瀬を見上げて、ヴェルディアナが訊いてくる。彼女の瞳に浮かんでいたのは、見知らぬ相手と対面したときのような、不安と警戒感が入り混じった光だ。

彼女は、矢瀬のことを覚えていないのだ。

「ああ、そうか。〝原初〟の記憶搾取能力の影響か……まあ、あんたの場合は、記憶を根こそぎ持ってかれても無理ねェな……アヴたんとの接触をなるべく避けてた俺でも、ごっそりいかれたくらいだからな」

「記憶？」

ヴェルディアナが、自分の両手を見下ろして訊いた。今の彼女には、ほとんどの記憶がないはずだ。家族の復讐のためだけに生きてきた彼女の記憶は、大半が第四真祖につながっている。それを足がかりにして、〝原初〟に記憶を奪われたのだ。

だが、それは不幸なことばかりではないはずだ。

記憶をなくしたことで彼女は第四真祖の呪いから解き放たれた。失ったものは戻ってこないが、新しく手に入れることはできる。それに彼女には帰るべき場所がある。彼女自身も気づいていないが、ヴェルディアナの帰りを待っている人々はいるのだ。

それは彼女が本来持っていたものに比べればちっぽけだが、伯爵家の威光や、第四真祖の力など借りずとも、ヴェルディアナが自分の力で手に入れたものだった。

「私は……誰……？」

ヴェルディアナが弱々しい声で矢瀬に訊く。矢瀬はニヤリと笑って答えた。

病室の花瓶に生けられた大量の花束は、矢瀬が持ちこんだものだけではない。

「あんたの名前はヴェルディアナ・カルアナ　－魔族喫茶〝獄魔館〟人気ナンバーワンの、ドジっ子ウェイトレスだよ」

矢瀬の言葉に、彼女は一瞬、面喰らったように眉を寄せ、少し拗ねたように半分だけ笑った。

病室の窓に映る絃神島の空は青い。
止まっていた時がゆっくりと流れ出す。

†

そして現在――
暁古城は病室のベッドの上で目を覚ます。
どことなく見覚えのある病室だ。MAR付属病院の中だろう。入院中の凪沙を何度となく見舞ってきたせいで、建物の雰囲気に妙に馴染みがある。
ただし、古城がいるのは凪沙のような個室ではなく、一般患者用の大部屋だった。普段は使われていない病室なのか、空気が少し埃っぽい。
べつに入院させられたわけではなく、単に古城が目を覚ますまでの間、空き部屋に適当に放りこんでおいた、という雰囲気だ。そういえば第二真祖の襲撃を退けた直後に、古城と浅葱は、意識をなくして倒れた、と誰かに聞かされた覚えがある。
病室に置かれたベッドの数は四台だが、寝かされていたのは古城だけだ。
ただし病室の中にはもう一人、しわくちゃの白衣をまとった女性の姿がある。
「ふんふー……起きた、古城君？」
鼻歌交じりに振り返ったのは、アイスの棒を口にくわえた、眠そうな顔立ちの女だった。古城の母親、暁深森だ。
「ここは？」
曲がりなりにも医者が患者の病室でアイスを喰うなよ、と古城はうんざりしながら訊き返す。
しかし深森は、そんな息子の不満はお構いなしに、空きベッドに堂々と腰掛けた。
「古城君たちがMARに来たときに、ちょうど落雷があったの、覚えてる？」
「……落雷？」
「それでびっくりして倒れたみたい。たいした怪我はないから、落ち着いたら帰っていいよ」
「……」
ニヤニヤと笑う深森を睨んで、それから古城は窓の外に目を向けた。
第二真祖〝混沌の皇女〟が使った眷獣は、巨大な雷雲の姿をしていた。MARの医療棟を破壊したのも、落雷のしわざだと言い張れば、それで押し切れないことはないだろう。自社製の警備ポッドの記録を改竄してしまえば、もう証拠はなにも残らない。事件は完全に揉み消され、なにもなかったことになるわけだ。
「地下にあった〝柩〟はなんなんだよ？　どうしてあれがMARにある？」

「そう……あれを見ちゃったんだ」

困ったな、というふうに深森が眉を上げた。二十過ぎの子持ちとは思えない妙に可愛らしい表情だ。

「実はね、古城君。あれは宇宙人の死体なの。墜落したUFOから回収したものを北米連合の依頼で密かに調査中だったのよ――」

「嘘つけェ！」

真面目に話を聞こうとしてた古城は、ちゃぶ台をひっくり返すかのように毛布を放り投げて絶叫した。あら、いいリアクション……と深森が感心したように言う。

「あんたこの状況でそういう適当なことを言うか普通!? 突飛な嘘ならなんでも信じてもらえるってわけじゃねーんだぞ!?」

「あのお姫様はね、地中海の遺跡で発掘された〝天部〟の遺産よ。人工島管理公社からの依頼でMARが管理してるの。ちゃんと正式な契約書もあるわよ」

「ぐ……」

反論の糸口を与えない深森の説明に、古城は沈黙した。考えてみれば、あの氷の塊が、いったん破壊されて眠り姫が外に出たという証拠はなにもないのだ。彼女に出会った人々の記憶は失われ、〝柩〟は運びこまれたときと変わらず今も同じ場所にある。

「あんた……どこまで知ってるんだ？」

母親を睨んで、古城が訊いた。古城の正体もなにもかも知った上で知らないふりをしているのか、それとも記憶を失っているのか――彼女がなにを考えているのか、古城にはわからない。

「ん、なんのことかな？」

クーラーボックスから新しいアイスを取り出して、深森がそれを口に含む。幸せそうな彼女の顔を見ているうちに、古城はなにもかもがどうでもよく思えてきた。

深森や牙城がなにを考えているにせよ、ひとつだけはっきりわかっていることがある。それは彼らが、凪沙を救うために行動しているということだ。それは昔からなにも変わらない。ならば今はそれでいい。それに両親に隠し事をしているのは古城も同じだ。古城だけが文句を言うのは、不公平といえば不公平だろう。

「あーあ……今日の後片付けは大変だわ。またしばらくおうちに帰れないかもしれないけど、凪沙ちゃんのこと、よろしくね」

「ああ。よくわからないけど、あんたも無理するなよ、歳なんだし」

立ち上がる母親を見上げて、古城が少し意地悪く言った。深森は、ふん、と傷ついたように唇を尖らせて、それからなにかを古城の前に差し出してくる。

それはキンキンに冷えた半透明の氷の塊だった。

「……アイス、食べる？」

悪戯っぽく目を細めて、深森が訊く。古城はやれやれと苦笑してそれを受け取った。

「――古城君！」

それから間もなくして、母親と入れ違いに病室に入ってきたのは凪沙だった。

彼女が着ているのは、制服ではなく体操服だ。そう言えば凪沙が学校で倒れたのは、体育の授業中だったという話だった。病院と体操服という取り合わせが、場違いで少し面白い。

「凪沙……身体は、大丈夫なのか？」

「え!?　どうしたの、そんな心配そうな顔して。倒れたのは久しぶりだったからびっくりしたけど、いつもと同じ、ただの貧血だよ。ちょっと点滴打っただけだし、あとでもっかい検査して、異常がなければ帰っていいって言われてるし……って、古城君、制服に血がついてる！　なにそれ、どうしたの!?　さっきの雷のせい!?」

凪沙がいつもと変わらない騒々しい早口で言ってくる。

古城は無言で立ち上がると、そんな妹を抱きしめた。子どもっぽさの残る華奢で小さな身体。しかし、そこにたしかに存在する体温を感じて安堵する。

凪沙は無事だ。古城たちが――古城と彼女が命を懸けて護ろうとしたものは、たしかにここにある。

「ちょ……ちょっとどうしたの、古城君!?　雷のせい!?　さっきの雷がそんなに恐かった!?」

古城の唐突な行動に、凪沙が少し慌てていた。しかし嫌がっているようには見えない。単純に照れているのだろう。

それでも途中で諦めたのか、凪沙は、よしよし、と古城の背中に手を当てて苦笑する。

「もう、しょうがないなあ、古城君は。みんな見てるのに」

「……みんな？」

凪沙の言葉に困惑を覚えて、古城はふと病室の入り口に目を向けた。

そこに立っていたのは、制服姿の少女が二人だ。一人は黒いギグバッグを背負った中等部の転校生。そしてもう一人は、やたらに目立つ華やかな髪型の同級生だった。

「シスコンがいるわ……」

凪沙を抱き寄せている古城を半眼で眺めて、浅葱が言った。

隣にいた雪菜も無表情のまま、妙に平坦な口調で同意する。

「本当にどうしようもないシスコンですね、先輩は」

「なっ……ち、違うだろ！　これはそういうんじゃなくて、感動の再会の場面だから！　ここに来るまでいろいろとあったから、それでだな！」

古城が慌てて妹から手を放す。解放された凪沙は、照れたように頬を赤らめながらも、満更でもない様子で古城を見上げて微笑んだ。

「じゃあ、凪沙は診察室に戻るね。帰りは深森ちゃんが車で送ってくれるって言ってたから」

「そっか……じゃあ、俺たちは先に帰るからな」
「うん。雪菜ちゃん、付き添ってくれてありがとう。浅葱ちゃんも、お見舞いありがとうね。二人とも古城君のことよろしく！」
雪菜たちの手を順番に握ったあと、凪沙は忙しない足取りで病室を出て行った。くるくるとよく動く愛らしい小動物を見ているようだ。
彼女の後ろ姿を見送っていた雪菜が、優しげな表情でクスクスと笑い出し、
「可愛いですね、凪沙ちゃん」
「ホントにね。あれなら古城がシスコンになるのもわかるわ」
「だからシスコンじゃねえっつうの」
しみじみと呟く浅葱の言葉に、古城が苛々と歯を剝いた。それはどうでしょうか、と雪菜は、まったく信用していない態度で古城を見つめている。
「でも、凪沙ちゃんが無事で本当によかったです」
「まあな……どっちかというと今回死にそうな目に遭ったのは俺らのほうだけどな……」
破壊の爪痕も生々しい医療棟を眺めて、古城は力無く息を吐く。
そして古城は帰り支度を始めた。
凪沙の無事も確認できたことだし、氷の〝柩〟の謎も解けた。今日のところはここから、一刻も早く離れたい、というのが古城の本音だった。

「それで記憶は戻りましたか、先輩――？」
病院を出て駅に向かう道すがら、雪菜が唐突に訊いてくる。
古城は少し驚いて、右隣を歩く雪菜を見返した。
「……やっぱり夢じゃなかったんだな。監獄結界のことは」
「はい」
古城の言葉に、雪菜がうなずく。
時刻は午後八時過ぎ。古城たちがMARで倒れてから、三時間あまりしか経っていない。
しかし古城たちが監獄結界で過ごした時間は、それよりもずっと長かった。だから、あれは全部、夢ではないかと疑っていたのだ。
しかしそれをいうならば、監獄結界そのものが南宮那月の夢の中に存在する空間なのだ。
現実世界とは、時間の流れ方が違っていても不思議ではない。
だがそれは、古城たちが夢の中で体験した事件が、すべて現実だったということでもある。
夢で見た人々との出会いも、彼らの死も、実際にこの島で起きた過去の出来事だと――
「今までよりは思い出せることが増えた気がするけど、正直あまり思い出したくない気分だ。大事なことが抜け落ちてるような気もするしな」
拳を強く握り締めて、古城は独り言のように呟いた。
頭の中に残っているのは、断片的な記憶の欠片だけ。それらがすべて事実なのかどうか今の

古城にはわからない。実感もない。

けれど、それらの記憶の欠片が、古城の感情を強く揺さぶるのも事実だった。

いつかきっとその感情を自分のものとして、きちんと処理できる日が来るのかもしれない。けれど今はまだ無理だ。鋭く尖ったガラスのように、触れるだけで心が血を流す。

「昔の自分の姿を見せつけられるのって、精神的にちょっと来るわよね。親戚のおばちゃんに子どものころの思い出話を延々と聞かされ続けた気分だわ」

浅葱がうんざりしたような口調で、古城の意見に賛同する。

彼女が追体験した記憶が、古城のものと同じとは限らない。しかし、きっと彼女には彼女の傷や苦悩があったのだろう。そうやって過ごした時間の上に、今の古城と浅葱は立っている。

「……姫柊は平気だったのか？」

他人事のような雪菜の態度を、ふと疑問に思って古城が訊いた。

すると雪菜は少し困ったように目を逸らし、

「わたしは、魔導書の効果の対象ではありませんでしたから。予定していた記憶の共有も、事情があって、失敗してしまいましたし」

「え、そうなの？」

「なんだそれ……ずりぃな」

浅葱と古城が、恨みがましく雪菜を睨む。自分たちだけが恥ずかしい過去を暴かれるような

体験をしたのかと思うと、なんとなく腑に落ちない。

「でも、昔の先輩のことをなにも知らないのも寂しい気がします」

雪菜が何気ない口調でぽつりと洩らす。

それをしっかりと聞いていた浅葱が、む、と警戒したように表情を険しくする。

そして雪菜は、自分の失言に気づいたように少し慌てて

「か、監視役の任務に支障が出るかもしれない、という意味ですけど」

どうせそんなことだろう、と古城は疲れたように嘆息する。

「べつにいいだろ。代わりに、おまえがこの島に来てからのことは俺がしっかり覚えてるし」

彼女が絃神島に来てからの三カ月ほどの間に、古城は何度となく死にそうな目に遭い、それをどうにかくぐり抜けてきた。その間ずっと雪菜は古城の隣にいたのだ。忘れようと思っても、忘れられるものではない。その程度の意味だったのだが、

「そうですね。そうでした」

なぜか雪菜は、いつになく上機嫌で小さくうなずいた。

一方、浅葱は少し面白くなさそうに片頬をぷっくりと膨らませ、

「そういえば、ひとつだけ古城に訊きたかったんだけど」

「なんだ？」

「あんた、結局、アヴローラのことはどう思ってたの？」

喉元に突きつけられた刃物のような浅葱の質問に、ごふっ、と古城が咳きこんだ。

詳しい事情は知らないまでも、浅葱は過去に何度もアヴローラと会っている。彼女が過去を追体験したのなら、間違いなくそれを思い出したはずだ。そして当時は訊けなかった質問も、今なら訊けると思ったのかもしれない。

「ど……どうって……？」

「好き、だったの？」

真っ直ぐに瞳をのぞきこまれて、古城は追い詰められた気分になる。どうにかさりげなく視線を逸らすと、今度は自分を凝視している雪菜と目が合った。

古城の背中にべったりと嫌な汗が浮く。ここでどんな返事をしても、彼女たちを納得させられる気がしない。

そうやって追い詰められていた古城の前に、不意に一枚のチラシが差し出された。

交差点でチラシを配っていたのは、タキシードに黒マントという奇妙な恰好をした登録魔族の男性だ。チラシの内容は喫茶店の開店二周年記念キャンペーンだった。かなりお得なセットメニューのクーポンがついている。見覚えがある店名だが、この際それは問題ではない。

「おお、そういえば腹が減ったな。なんか喰ってこうぜ。ほら、特典ついてるし！」

渡りに船とばかりにチラシを掲げて、古城が無理やり愉しげな声を出す。

そんな古城を呆れ顔で見つめて、浅葱と雪菜が溜息をついた。

「まあ、どうせこうなるとは思ってたけどね」

「ですね――」

二人の少女は互いに顔を見合わせて、どちらからともなく共犯者のように笑い出していた。

言葉に出来なかった想いを抱えて、第四真相の名を継いだ少年は再び日常へと戻ってくる。

彼とその仲間たちの姿を、青白く輝く月の光が静かに照らしている。

「戦王領域カルアナ伯爵領主　―故フリスト・カルアナの娘、ヴェルディアナです。お目にかかれて光栄です、マム」

彼女は自分から恭しく名乗って、スーツの美女に右手を差し出した。

しかし相手は無表情にヴェルディアナを見返して、居心地悪そうに嘆息する。

「私は助手の遠山です。主任の暁深森はこちらに」

「……え？」

言われてみるとスーツの美女の背後には、しわくちゃの白衣を着た童顔の女が立っていた。手入れがあまりよくないのか、伸ばした長い髪はぼさぼさだ。開ききらない瞼のせいで、寝起きのような印象を受ける。煙草の代わりに口にくわえているのは、食べ終えたアイスの棒らしい。異国人のヴェルディアナから見ても、だらしない系の大人だと一目でわかる。

「あ、あなたが、暁深森？　たしか情報では、一児の母親だと……!?」

ヴェルディアナは唖然として訊き返す。

冷静で有能な女研究者という勝手なイメージが、音を立てて崩れ落ちていく。白衣を着ている彼女自身が、まるで手のかかる子どものようで、子育ての経験者とはとても思えない。

しかし暁深森は迷いなくきっぱりとうなずいて、

「んふ、そうよ。古城君が中等部の三年生で、凪沙ちゃんがその一コ下」

「は、はあ……」

「初めまして、ミス・カルアナ。ヴィヴィと呼んでも構わない？　そうそう、お近づきの印に、これ、どうぞ」

深森はそう言って、携帯していたクーラーボックスから、新しいアイスを取り出した。

差し出されたアイスに一瞬、心が惹かれたが、隣にいる遠山の反応が恐い。多少の未練を覚えながらも、ヴェルディアナは弱々しく首を振った。

「いえ……せっかくですが遠慮します。喫茶店の店内だし」

「ふんふー……それもそうね」

暁深森は、あっさりと納得してクーラーボックスの蓋を閉じる。

ヴェルディアナと向かい合うように席に着き、店員への注文もそこそこに口を開いたのは、助手の遠山だった。

「ずいぶん派手にやってくれましたね」

露骨に非難するような視線を向けられて、ヴェルディアナは身をすくませた。

「―絃神島北地区の産業道路が陥没し、歩道橋が落下。周辺地区が最大四時間停電しました。資材の搬入に遅れが生じて、弊社の業務にも支障が出ています。警察への捜査協力で余分な人員も割かれましたし」

「ちょ……ちょっと待ってよ、あれは……」

「ペンプトス……五番目の〝焔光の夜伯〟の仕業、ですか。あなたは単に巻きこまれただけの

あとがき

この原稿を書いている現在は五月末。前の巻（七巻）からぶっ続けで作業していたせいで、いつの間にか日本は、真冬から春も初夏もすっ飛ばして、梅雨入り直前になっております。（本当は気づかないふりをしてただけなんじゃねーか、という説はさておき）花見の季節もゴールデンウィークも気づかないうちに終わってました。なんてこった。なにゆえ、このクソ暑い中、うちの部屋には冬物のコートや毛布やコタツが出しっぱなしになってるのか

そんな感じで私の中では、三カ月前くらいの時点で意識が止まってしまっているわけですが、結局なにが言いたいかというと、人間の記憶って曖昧だよな、というありふれた話です。数カ月間の出来事をなにも思い出せなかったりする一方で、何年も前の一瞬の失敗をずるずる引きずって後悔したりもしているわけで。古城たちが味わったのも、つまりそんな経験だったのかな、と思っております。本人には一緒にすんな、と怒られてしまいそうな気もしますが。

というわけで『ストライク・ザ・ブラッド8』をお届けしております。

この巻で過去編は一区切りです。最初から着地点が決まっていた物語だったので、とにかく、単純な悲劇にならないようにという部分だけ気を遣いました。読み終えたあとで、救いのある物語だったと思ってもらえたら幸いです。

今回とにかく苦労したのは分量でした。書きたいエピソードを好き勝手に羅列していったら、文庫四冊ぶんくらいの文章量になってしまったので、泣く泣く削り落としたパートがたくさんあります。特にアヴローラや彼女のお仲間たちには、もっと幸せな思いをさせてあげたかった。心残りといえば心残りですが、そんなふうに思えるキャラは自分でも久々だったので、書いてとても楽しかったです。書き足りないぶんはいつか別の形で補完できたらいいなあ、と。

次巻からは時間軸も通常に戻って、リスタートという感じになる予定です。

引き続き、楽しんでいただけたら嬉しいです。

さて、今回は執筆スケジュールが本気で遅れに遅れて、多方面にご迷惑をおかけしてしまいました。この場を借りてお詫びいたします。

イラストのマニャ子さん、今回も本当にありがとうございます。

またコミック版『ストライク・ザ・ブラッド』も無事に一巻が発売になったということで、TATE先生、お疲れさまでした。

それからもちろん、この本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三雲岳斗

被害者だと？」

「そ、そうよ」

ヴェルディアナは勢いよくうなずいた。

彼女が襲撃を受けたのは、ちょうど二十四時間ほど前のこと。暁古城という少年を観察していた途中に、凄まじい眷獣を操る吸血鬼に攻撃されたのだ。ヴェルディアナたちが五番目と呼ぶ、第四真祖の素体の一人に。

「あんな人目につくところで五番目が襲ってくるなんて、いくらなんでも想定外だわ。不可抗力よ。たしかに、非正規のルートであれを持ちこんだせいで狙われたことは認めるけど」

「あなたの主張はわかりました。もとより私たちも、あなたに謝罪や賠償を求めているわけではありません」

淡々とした遠山の説明に、ヴェルディアナは胸を撫で下ろす。どのみち損害賠償を請求されたところで、今のヴェルディアナにそれを支払うだけの財力はない。が、

「ふんふー……〝王〟自らが襲ってきたってことは、あなたが持ってる鍵は、本物だと信じていいのかしら？」

眠そうな目を更に細めて、暁深森がにこやかに訊いてきた。

ヴェルディアナは無言で顎を引き、コートの懐からそれを取り出す。

粗末な布に包まれた、金属製の棒だった。直径は二、四センチほど。長さは五十センチ弱。

片方の先端を尖らせた形は、小型の杭を連想させる。銀色に輝く表面には、細かな魔術文字が刻みこまれていた。

「ふーん……これが、〝柩〟の鍵？」

「はい。世界に二本しか存在しない〝天部〟の遺産　魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬り裂く〝真祖殺し〟の聖槍です」

ヴェルディアナが硬い声で言う。

この銀色の金属杭は、彼女の生家に、代々伝えられてきた貴重な品だ。今の彼女に残された、ほぼ唯一の財産である。

「これを使えるのは〝メトセラの末裔〟だけだと聞いたけど？」

「はい。そのようにいわれています」

暁深森の質問に、ヴェルディアナは目を伏せた。

この神器を起動するためには、純度の高い大量の霊力が必要だ。そもそもこの杭は人間ではなく、〝天部〟と呼ばれている亜神種族、有史以前に滅亡した古代超人類によって造り出されたものなのだ。いずれにせよ、魔族であるヴェルディアナが扱えるものではない。

ふう、と深森が困ったように唇を尖らせる。

「〝天部〟の因子を受け継いだ貴種の霊媒――となると、さすがに希少ね。この〝魔族特区〟でも滅多にお目にかかれる相手ではないわ」

み-3-39

ストライク・ザ・ブラッド8
愚者と暴君

三雲岳斗

電撃文庫

9784048917506

1920193006308

ISBN978-4-04-891750-6
C0193 ¥630E

ASCII MEDIA WORKS
発行● アスキー・メディアワークス
定価: 本体 630 円
※消費税が別に加算されます

今秋TVアニメ放送開始
少年はいかにして 大人気シリーズ第八弾!
世界最強の吸血鬼を殺し、
第四真相へと至ったのか!?
20th 大感謝プロジェクト 電撃文庫 ぶっちぎり!フェア開催中!!
特製グッズ大プレゼント実施中! 年間1万名様に当たる!
詳しくはオビ折り返しをご覧ください。

電撃文庫 20th

「ですが、牙城の娘さんは――」

「ん？　牙城……？」

ヴェルディアナの親しげな呼びかけを聞きつけて、ぴくり、と深森の耳が動いた。

にこやかに小首を傾げながら、深森がヴェルディアナを見つめてくる。

そんな彼女の笑顔に、わけもなく激しい恐怖を覚えて、ヴェルディアナは慌てて首を振った。

暁牙城は、暁古城の父親。つまり深森の夫ということになる。

ただし二人は別居中で、もう何年も会ってないらしい。そんな牙城のことをヴェルディアナが馴れ馴れしく呼び捨てにしたことで、浮気の気配を嗅ぎつけたのだろう。

もちろんヴェルディアナと牙城の間に不倫関係などはない。

だから堂々としてればいいのだが、あの男と知り合って以来、ちょっとしたハプニングが連続したことも事実で、微妙に後ろめたかったりするのだった。具体的には共通の敵に襲われて逃走する途中で、なぜか密着したり、裸を見られたり、彼の血を吸う羽目になったりという、そういう種類のハプニングだ。

「し、失礼。暁氏のご息女は、ゴゾの遺跡で、封印の遺跡を起動させたと聞きましたが――だらだらと脂汗を流しながら、ヴェルディアナはどうにか話を先に進める。

地中海に浮かぶ世界最古の〝魔族特区〟ゴゾ島――

そこは十二番目の〝焔光の夜伯〟の〝柩〟が発見された場所であり、そしてヴェルディアナの実姉――リアナ・カルアナが命を落とした土地でもあった。

「そうね。昔の凪沙ちゃんなら、たしかにそれを使えたかもね」

深森は目を閉じて溜息をついた。

「でも、駄目なの」

「駄目、とは？」

「凪沙ちゃんは、ゴゾの事件で力をなくしてるのよ。それどころか体調不良で今も入院中」

「あ……」

ヴェルディアナは己の失言に気づいて悔やむ。

ゴゾ島の遺跡では、獣人優位主義を標榜するテロリストの襲撃によって、ヴェルディアナの姉を含む多くの犠牲が出た。そしてその現場には、暁古城と凪沙の兄妹も居合わせたのだ。二人が負傷したことはヴェルディアナも知っていたが、その傷が原因で、暁凪沙が霊能力を失っているという事態は予想していなかった。

「〝妖精の柩〟を開けるいちばん確実な方法は、獅子王機関に頼ることでしょうね。彼らが以前から、〝メトセラの末裔〟を集めて育てているという噂は有名だもの。まあ、だからこそ、獅子王機関が〝宴〟の采配者を任されているわけだけど」

深森が、突き放すような口調で事実を告げてくる。

「獅子王機関……あいつらは……」

「協力を頼んだけど断られちゃった？　当然かもね。戦士領域カルアナ伯爵領は、すでに接収されて存在しない。支払う対価がなければ、賭けにはならないわ」

「で、でも、あなたたちの本社が力を貸してくれれば――」

「それに関しては、私からMARの公式見解を伝えます、ヴェルディアナ・カルアナ」

ヴェルディアナの言葉を遮って、遠山が冷ややかに口を開く。

「我々は、眠り姫を目覚めさせるつもりはありません」

「え……？」

ヴェルディアナの顔から血の気が引いた。眠り姫とは、MAR紘神研究所に保管されている十二番目の〝焔光の夜伯〟の通称だ。吸血鬼の真祖たちと〝天部〟によって生み出された世界最強の吸血鬼の――第四真祖の候補者。

しかし今の彼女は〝妖精の柩〟と呼ばれる氷塊の中に封印されている。ヴェルディアナは、彼女を目覚めさせるために、多くの犠牲を払って、この極東の〝魔族特区〟を訪れたのだ。

なのに――

「そんな!?　どうして……!?」

「彼女は貴重なサンプルとして、弊社に莫大な利益をもたらしています。不測の事態で、それが失われる愚は冒せない。営利企業としては当然の判断だと考えますが」

「う……」

遠山の事務的な通告に、ヴェルディアナは反論できなかった。十二番目の〝焔光の夜伯〟は、それ自体が〝天部〟の魔導技術の結晶だ。標本としての価値は計り知れない。このまま眠り続けてくれたほうが、彼らにとってはむしろ有益なのだ。

「なお、あなたが所有している〝鍵〟の価値についても、我々は高く評価しています。ここで買い受けたいと考えていますが、いかがでしょう。もちろん、あなたの言い値で構いません」

遠山が表情も変えずに続けた。ヴェルディアナの視界が怒りで赤く染まる。

「誰が売るものですか！　あなたたちのような守銭奴に！」

金属杭を強く握りしめ、ヴェルディアナは遠山を睨みつけた。

そんなヴェルディアナに、遠山は不思議な生き物を見るような視線を向けてくる。

「あなたがそれを持っていても無意味ですよ。魔族のあなたには、それは使えない」

「余計なお世話よ！」

「そうですか。では、交渉は決裂ですね」

残念です、と遠山が無感情な声で言う。

「ええ、そうね。無駄な時間をとらせて悪かったわ」

ヴェルディアナは乱暴に椅子を蹴って立ち上がり、捨て台詞を残して立ち去ろうとした。

暁深森が、場違いな明るい表情で手を叩いたのはそのときだ。

「あ、いけない。忘れてた。遠山、あれ。あれ出して」

「はい」

遠山がアルミ製のキャリーバッグを開けて、よれよれの細長い段ボール箱を取りだした。よほど辺鄙な土地から送られてきたものらしく、箱の表面には国際郵便の伝票がベタベタと何枚も貼られている。

「あなた宛に荷物が届いていたのよね、牙城君から」

「牙城から？」

ヴェルディアナは眉を寄せながら、差し出された箱を受け取った。深森の頬が再びピキ、と引き攣るが、気にせず箱を開封する。

段ボール箱の中に入っていたのは、黒光りする金属製の狩猟器具だった。ライフル銃によく似た物騒な形の弓である。

もうひとつ同封されていたのは、金属製の細長い筒だった。

長さは十五センチ足らずで三枚の小さな安定翼がついている。ヴェルディアナの持っている金属杭が、ぴったり嵌まる大きさだ。

「クロスボウ……と、これは？」

「薬莢よ。呪式銃のカートリッジと同じ原理で、霊力を封じこめた聖槍用の補助軸。一回きりの使い捨てだけど、理屈の上では、封入された霊力を使って鍵を起動することができるみたい。まったく、どこの巫女を騙して霊力を封入させたんだか――」

ふんふーん、と深森がうんざりしたように溜息をつく。

ヴェルディアナは、薬莢と呼ばれた筒を無言で持ち上げた。傍目にはただの金属の塊にしか見えないが、内部に凄まじい霊力が充塡されているのがわかる。

これだけの霊力があれば、〝柩〟の鍵を起動できる可能性は高かった。霊能力者の手を借りずに、十二番目の〝焔光の夜伯〟を目覚めさせることができるのだ。

ただし、至近距離で霊力の解放に巻きこまれたら、使った本人もただでは済まない。特に魔族であるヴェルディアナにとってそれは致命的だ。

離れた場所から、正確に〝妖精の柩〟に向けて撃ち出す必要がある。

そのためのクロスボウなのだろう。

「これがあれば……〝柩〟の蓋を開けられる……」

金属筒を握りしめて、ヴェルディアナは身体を震わせた。

追い詰められた今のヴェルディアナにとっては、願ってもない代物だ。しかし同時に困惑を覚える。協力を拒んだはずの深森たちが、どうしてこれをヴェルディアナに渡すのだろう。

「私たちは眠り姫を起こすつもりはないの。獅子王機関や、ほかの素体を敵に回すのも面倒だしね」

独り言のような口調で、深森が呟いた。そして彼女は悪戯っぽく目を細め、思わせぶりな表情でヴェルディアナを見つめる。

「でも、無断で研究所に侵入してきた部外者が、勝手に〝柩〟の蓋を開けちゃったとしたら、私たちにはどうしようもないわねえ」

「マム……あなたは……」

暁深森の真意に気づいて、ヴェルディアナはうめいた。

MARの研究所に侵入して、無断で〝柩〟を破壊する。不法侵人に器物損壊、威力業務妨害、いったいどれだけの罪に問われることになるのかわからない。だが、犯罪者の汚名を着ることを厭わなければ、十二番目の〝焔光の夜伯〟を目覚めさせることはできるのだ。それだけの覚悟がおまえにあるのか、と暁深森が無言で訊いている。

ヴェルディアナの答えは決まっていた。迷いはない。

どのみち彼女には最初から、それ以外の選択肢は残されていなかったのだから。

2

夕暮れの光が射しこむ小さな病室——

その中央に置かれたベッドの上で、暁凪沙は寝息を立てていた。

十三歳にしてはやや小柄で、少し幼い印象の少女だ。飾り気のない白いシーツの上に、長い黒髪が散っている。パジャマの袖口からのぞく細い腕には、点滴のチューブがつながれたままだった。

そんな彼女の横顔を眺めて、暁古城は溜息をつく。

学校で凪沙が倒れたと聞かされたのは、先週末のことだった。今年になって四度目の入院だ。二年前に大きな怪我をして以来、彼女は体調を崩すことが多い。〝魔族特区〟最先端の医療技術でも、彼女を完治させるのは難しいらしい。

「あれ……古城君？　いつからいたの？」

やがて古城の気配に気づいた凪沙が、ゆっくりと身じろぎして目を開けた。ふわ、と小さくあくびを洩らして、制服姿の古城を不思議そうに見上げてくる。

「ついさっきな。悪い。ちょっと遅くなった」

古城はそう言って顔の前で手を合わせた。

入院中の凪沙を学校帰りに見舞うのが、ここ最近の古城の日課だ。しかし今日は、間近に迫った波朧院フェスタの準備に巻きこまれて、到着が遅れてしまったのだ。面会終了時刻まで、もうそれほど時間が残されていない。

しかし凪沙は、そんな古城を責めるでもなく、愉しそうに笑って、

「そうなんだ。残念だったね。もうちょっと早く来てくれたら、蒸しタオルで、凪沙の背中を拭かせてあげたのに。特別大サービスで」

「それのどこに俺が残念がる要素があるんだよ」

古城は呆れ顔で息を吐く。生憎、古城には妹萌えの趣味はない。それでなくとも典型的な幼

児体型の凪沙に色気は無縁なのだ。

「今日は古城君だけ？　浅葱ちゃんは？」

あっさりと受け流されたことに頬を膨らませつつ、凪沙がのろのろと上体を起こした。古城は余っていた枕をクッション代わりに、彼女の背中にあてがってやる。

「浅葱のやつはバイトだとさ。これ、あいつから預かってきた。新刊だってよ」

「わ、ホントに!?　浅葱ちゃんにお礼言っといて。こないだから続きが気になってたんだよね、この麻雀マンガ。あとこれ、居酒屋グルメのやつ」

「……オッサンかよ、おまえらは……まあいいけど」

やけに渋い妹たちのマンガの趣味に、古城は顔をしかめて苦笑した。

口数の多さは幼いころからの凪沙の欠点だが、すっかり病弱になってしまった今でもそれはほとんど変わらない。そんな彼女の明るさに、古城たち家族が救われているのも事実だった。

「思ったよりも元気そうだな」

「うん。ごめんね、迷惑かけて。いつもの検査入院だから、来週には退院できると思うし」

へへ、と少し照れたように凪沙が笑う。

「なんでもいいけど無理するなよ」

「大丈夫だよ。病院にいると深森ちゃんも会いに来てくれるしね」

「まあ、あんなんでもいちおう主治医だからな……」

古城たちの母親、暁深森は、ＭＡＲの主任研究員だった。おまけに彼女は医療系の過適応能力者で、さらに医師の資格も持っている。

そのせいか深森は恐ろしく多忙で、週のほとんどをＭＡＲの研究所と、この付属病院に泊まりこんで過ごしていた。そんな母親と毎日顔を合わせられることが、凪沙の入院生活の数少ない慰めなのだろう。

「それよりも古城君のほうが心配だよ。凪沙がいないとすぐ窓を開けっ放しのまま寝ちゃうし、洗濯物は干しっぱなしだし、部屋は散らかすし、ゴミは溜めこむし。ちゃんと寝る前には歯を磨いて、宿題も忘れずにやるんだよ」

「幼稚園児かよ、俺は」

真面目な顔で妹に心配されて、古城は不満げに唇を歪めた。とはいえ、片付け魔の凪沙がいないと部屋が散らかってしまうのは事実なので、あまり強く文句も言えない。

「そういえば、テレビで見たよ。一昨日の爆発。凄かったんだね」

凪沙が不意に話題を変える。お喋り好きの彼女は、誰かとその話がしたくて、うずうずしていたのだろう。

「ああ、道路が陥没したやつな」

古城は渋面を作ってうなずいた。

二日前、このＭＡＲ付属病院のすぐ近くで、大規模な爆発事故があったのだ。

爆心地近くの歩道橋が跡形もなく消滅し、道路もごっそりと抉られたように陥没した。
たまたまその日、凪沙の見舞いに来ていた古城と浅葱は、道路が通行止めになったせいで深夜まで帰宅できずに、ひどい目に遭ったのだ。
「建設会社の施工ミスだったんだろ。地下のパイプに亀裂が入ってて、漏れたガスが溜まって、漏電の火花で発火したとか」
「え、そうなの？　あれって隕石じゃなかったの？」
「は？　隕石？」
凪沙の突拍子もない発言に、古城は唖然として訊き返す。なにかの冗談かと思いきや、凪沙は真剣な表情で古城を見上げ、
「しかも爆心地で未確認飛行物体の残骸が見つかって、宇宙人の死体が回収されたんだって。人工島管理公社がそれを隠蔽してるらしいよ。深森ちゃんがそう言ってた」
「……あの母親の言うことを信じるな。今どきネットでも、そこまでアホなデマを流すヤツは滅多にいないから」
「え、嘘なの？」
今度は凪沙が唖然とする番だった。騙されたことが恥ずかしいのか、うわあ、と叫びながら凪沙は毛布の上に突っ伏して、
「やー……凪沙も、おかしいとは思ったんだよね。でもでも、ほんの少し時間がズレてたら、

古城君たちも事故に巻きこまれてたんでしょ。気をつけてよ」
「気をつけてどうにかなるレベルとは思えないけどな。あんなのに巻きこまれたら……」
事故の現場を見てきた古城が、正直な感想を口にする。
「それでもどうにかして気をつけて！」
「はいはい、わかった。まあ、いくらなんでも、あんな事故はそうそう起こりゃしないだろ」
妹の無茶な要求を、古城は投げやりな口調で受け入れた。
火災報知器に似たサイレンが、施設内で鳴り響いたのは、その直後のことだった。
「――って、言ってるそばから、また事故かよ!?」
あまりのタイミングの良さに驚いて、古城は窓際に駆け寄った。
サイレンが鳴っているのは、凪沙が入院している病棟ではなかった。すぐ隣に立っている巨大な建物――ＭＡＲの研究所の方角だ。
ＭＡＲは、医療分野だけでなく、広汎な魔導製品を扱う巨大企業である。その研究所の中で事故が発生する、というのは、もしかしたらヤバい状況ではないのかと思う。どんな危険な物質が外に洩れ出すか、正直わかったものではない。と、
「凪沙!?」
不安になって振り返った古城が見たのは、苦しげに胸を押さえて倒れこむ妹の姿だった。
ただでさえよくない彼女の顔色が、完全に血の気をなくして青白くなっている。背中の震え

が止まらず、呼吸が荒い。

「だい……じょうぶ……ちょっと驚いただけ、だから」

「平気なやつの顔色じゃないだろ。待ってろ、すぐに誰か呼ぶから――」

必死で冷静さを保ちつつ、古城はナースコールのボタンを探した。

しかし古城がそれを押す前に、病室の入り口のドアが開く。

無表情なまま病室に入ってきたのは、白衣を着た背の高い女性だった。

「――遠山さん？」

「廊下にいたら古城さんの声が聞こえたので。凪沙さんは大丈夫ですか？」

ＭＡＲ研究員の遠山美和が、淡々とした口調で訊いてくる。彼女は暁深森の助手で、古城たちとも顔見知りだ。人間らしさを感じさせない取っつきにくい人物だが、こんなときは彼女の冷静さが頼もしい。

「今のサイレンはなんなんです？」

古城が、凪沙の診察を始める遠山に訊いた。彼女が情報を持っていると期待していたわけではなかったが、意外にも遠山はあっさり答えてくる。

「研究所本館の建物内部で、不審者の侵入が確認されたようです」

「不審者って……」

「警備員が捜索中ですが、今のところ病棟側の安全性に問題はありません。ただし、不審者がこちらに逃走してくることは考えられます。また、相手が爆発物などを所持している可能性も完全には否定できません」

「ば、爆発物……!?」

遠山の率直すぎる説明に、古城の全身が強張った。彼女はあくまでも、最悪の可能性の話をしているのだろうが、古城たちはその最悪を笑えない。なぜなら古城たちは二年前にも一度、爆発物を持ったテロリストの襲撃を経験したことがあるからだ。

「ですので、念のために凪沙さんを高度治療室に移送しようと思います。あちらは警備員が常駐していますし、なにか問題があれば優先的に対応できますから」

「あ、ああ。そういうことなら――」

古城は、表情を硬く強張らせたままうなずいた。凪沙を病院外に避難させることができない以上、遠山の提案は、おそらくベストの選択だろう。

「ごめんね、古城君。せっかくお見舞いに来てくれたのに」

凪沙が苦しげに息を吐きながら、弱々しく言った。

古城は、無理やりな笑顔を作って彼女の頭を撫で、

「気にすんな。落ち着いたら連絡するように、母さんに言っておいてくれ」

「うん」

「あと持って帰るように頼まれてた制服ってこれか？」

「うん。クリーニングよろしくね。西口の北極舎さんは水曜日に半額セールやってるから、忘れずに出してね。キッチンの引き出しのところにスタンプカードが置いてあるから」

「注文多いな……」

こんな状況でも口数の減らない妹に、古城は半ば感心しつつ溜息をついた。

その間に、遠山が呼んだ看護師たちが到着して、凪沙を担架に乗せ換える。彼女たちが凪沙を運んでいくと、病室には古城と遠山だけが残された。

その遠山がいきなり真顔で言う。

「院内の警備態勢を強化しています。しばらく外に出ないほうが安全かもしれません。どうぞ妹さんのパジャマを被るなり、枕の匂いを嗅ぐなりして自由にお過ごしください」

予期せぬ不意討ちに、グフッと古城は咳きこんで、

「真面目な顔で人に変態行為を強要しないでください！　俺にはそういう趣味はないんで！」

「……え!?」

「え、じゃないですよ！　なんでそんな意外そうな顔をしてるんですか!?」

無表情な遠山を睨んで、古城が喚く。深森の助手を務めているだけあって、この遠山という女性もかなりの変人だ。どこまで本気で言っているのか、まったくわからないのでタチが悪い。

「それでは、もしお帰りになるのでしたら、医療棟の通路を使ってください。こちらの通行証で通れます」

「あ、はい……わかりました」

匂いフェチ疑惑のフォローはないのか、と思いつつ、古城は通行証を受け取った。

医療棟と呼ばれる建物があるのは、研究所とは反対側のブロックである。たしかに不審者と遭遇する確率は低そうだ。医療棟には、研究員の家族といえども、部外者は入れないと聞いていたのだが、今回は非常事態の特例ということなのだろう。遠山がわざわざ凪沙の病室を訪ねてきたのは、実はこれを古城に渡すためだったのかもしれない。

それでは、と短く言い残して、遠山が立ち去る。

渡された通行証を制服のポケットにねじこんで、古城はやれやれと頭をかいた。

その直後、右脇腹の肋骨付近に激しい痛みが走る。

「ぐっ……!?」

痛いというよりも熱かった。鋭い槍を突き刺されたような衝撃だ。

古城はたまらず壁にもたれて苦悶する。同時に、異様な映像が脳裏に再現される。

巨大な氷塊の中で眠っている少女。そこに突き立てられる銀色の杭。眩い輝き。純白の凍気。

炎のように逆巻く髪が、舞い散る氷雪の中で虹色に色を変えていく。

そして美しい瞳が開く。青白く燃える焔光の瞳が――

「なん……だ!?」

額を押さえて、古城がうめいた。

その直後。

轟音とともに大地が揺れて、凄まじい衝撃が病院を突き上げた。

3

「くそ……」

古城はふらつく足取りで、医療棟へと向かっていた。

脳裏に流れこんでくる映像の奔流は消えている。だが、肋骨の痛みはひどさを増していた。心臓の鼓動が耳元で荒々しく鳴っている。

全身が焼けるように熱い。まるで身体中の血液が沸騰しているようだ。

「こっち……か……？」

自分がどこに向かっているのか、古城自身にもわかっていない。

ただ、誰かにずっと呼ばれている気がしていた。そのか細い声に衝き動かされるようにして、古城は歩き続けている。

手渡されたばかりの通行証を使って、古城は無人のゲートをくぐる。

建物の中は暗かった。さっきの爆発で停電しているのかもしれない。迷路のように入り組んだ見知らぬ通路。しかし古城は迷うことなく歩いていく。

粉塵が通路を舞っていた。ざらざらとした異臭が鼻を衝く。建物のあちこちがひび割れて、通路の一部が陥没しているのだ。

瓦礫に足を取られながら、古城はさらに建物の奥へと進んでいく。

通路にはほかに人影はない。闇と瓦礫が人の侵入を拒んでいるのだ。

いつしか闇の中に、ぼんやりと白い霧がかかっていた。

肌を刺すのは凍えるような冷気だ。

「氷……だと？」

通路の床や壁が氷に覆われて、継ぎ目の金属部分には分厚い霜がこびりついていた。花弁のような小さな雪の結晶が、霧に覆われた大気に混じっている。

地面に生えた無数の氷柱が、イバラのように鋭く尖って近づく者を阻んでいる。

そこで古城は足を止めた。

学校の教室ほどもありそうな、だだっ広い部屋だった。殺風景な室内に、無数の木箱などが積み上げられている。どうやら倉庫として使われている区画らしい。

倉庫の中央には地下に降りるための階段があり、周囲の床には大きな亀裂が走っている。その付近の凍気はひときわ強烈だ。爆発の中心地が近いのだろう。

急激な温度変化のせいか、足元のコンクリートが脆くなっている。これ以上の接近は無理だ

と判断して、古城はゆっくりと周囲を見回した。
いつの間にか身体の熱は引いていた。肋骨の痛みも消えている。だが、
「誰か、いるのか？」
古城の声が、白い霧の中に反響する。その呼びかけに応えるように、新雪を踏みしめるかすかな足音が聞こえてきた。
「……え!?」
振り返った古城は、呆然と目を見開いて動きを止める。
倉庫の天窓から降りそそぐ夕陽の中に、彼女は無言で立っていた。
妖精めいた儚げな容姿の、年若い少女だ。
手脚は幼い子どもようにに細く、肉づきも薄い。瞳の色は氷河のような薄い青。
髪の色は淡い金髪で、見る角度によって虹のように色が変わっていく。
西洋の絵画から抜け出して来たような、人間離れした美貌の持ち主である。本能的な畏怖を感じさせる種類の美しさだ。
「なんで……俺はあんたを知って……!?」
頼りなく立ち尽くしたまま、古城がうめいた。脳内に再び無数の幻覚が流れこんでくる。
古城は彼女のことを知っていた。
ここではないどこかで遠い昔に、古城は彼女と会ったことがある。

殺戮と暴力に彩られた、血塗られた遺跡で――
「ぐっ!?」
少女がゆっくりと前に歩み出た。純白の霧に包まれていた彼女の、ほっそりした全身があらわになる。その瞬間、古城の表情が焦りに歪んだ。
少女がなにも身につけていないことに、ようやく古城も気づいたのだ。
薄く浮いた肋骨も、かすかな胸の膨らみも、透き通るような白い肌も、全身余すところなく古城の眼前にさらけ出されている。完全な素っ裸だ。
「ま、待て……」
彼女を制止しようと古城は掌を向ける。しかし少女は足を止めない。
そして古城も彼女から目を逸らすことができなかった。女王に惹きつけられる蜂たちのように、彼女に魅入られて動けない。
「くそ……こんなときに……」
息苦しさが不意に古城を襲った。
金属の臭いが鼻を衝き、口の中に血の味が広がっていく。鼻血が噴き出したのだ。
原因はおそらく急激な気温の低下と、それにともなう気圧の変化。さらにはこの異常な状況に対する緊張だろう。少女の裸を見て興奮したわけではない、と思いたい。
そんな古城の姿を見て、少女がうっすらと微笑んだ。

ストライク・ザ・ブラッド 8

愚者と暴君

三雲岳斗
illustration マニャ子

妖精めいた容姿に相応しく綺麗な、だがどこか邪悪な笑みだった。
身動きができない古城の前に、意外なほどの素早さで彼女は歩み寄り、そして顔を寄せてくる。形のいい唇の隙間から、白く輝く牙がのぞく。
唇が押し当てられる柔らかな感触に、古城は為すすべもなく固まっていた。
やがて少女が古城から離れる。唇の端からこぼれているのは、艶やかな鮮血だ。彼女はそれを舐め取って、満足そうに目を細めた。
「俺の……血を吸って……!?」
目の前の少女の正体に気づいて、古城は声を震わせる。
彼女は魔族だ。それも桁外れに巨大な力を持つ、未登録の吸血鬼だ。
医療棟を襲った爆発も、凍てつく大気も、彼女の魔力が引き起こした現象なのだろう。〝魔族特区〟で暮らす古城ですら、これほどまでに強力な吸血鬼に遭遇するのは初めてだった。
このまま少女に殺されることを古城は覚悟する。未登録魔族である彼女に、〝魔族特区〟の法は通用しないのだ。島内に張り巡らされた監視ネットワークも、特区警備隊(アイフン・ガード)所属の攻魔師たちも、今の古城を護ってはくれない。
小柄な少女の姿をしていても、魔族の持つ身体能力は圧倒的だ。吸血鬼の眷獣を使うまでもない。彼女は素手で容易く古城を引き裂くだろう。
しかし少女の次の行動は、古城の予想外のものだった。

まるで目覚めた直後のように大きく瞬きすると、目の前にいる古城を見上げ、彼女は怯えたように後ずさったのだ。

「う……あ……」

裸の胸を両腕で隠して、少女が頼りない悲鳴を洩らす。古城が流した血を舐め啜り、禍々しく笑っていたさっきまでの彼女とは別人のようだ。今の彼女は外見どおりの、無力で頼りない子どもにしか見えない。

「おまえ……」

少女の突然の変貌に、古城は困惑を隠せない。

身に覚えのない謎の罪悪感と、激しい焦りに襲われる。知らない人間にこんなところを見られたら、古城が裸の少女を襲っていると、確実に誤解されそうだ。

そしてまさに古城が恐れていたとおりのタイミングで、背後に誰かの気配が出現した。

黒いコートを着た女性が、銃のようなものを構えて古城に怒鳴る。

「動かないで！」

「え!?」

古城は条件反射的に両手を挙げて振り返った。

そこに立っていたのは、ブルネットの髪をなびかせた若い女だった。彫りの深い端麗な顔立ちをしているが、意外に若い。古城よりも、二、三歳ばかり年上といったところか。

彼女が古城に突きつけているのは、金属製の黒いクロスボウだった。

ただし矢は装填されていない。単なる威嚇。虚仮威しだ。

「あんたも吸血鬼か。研究所に侵入した不審者ってのは、あんたたちのことなのか？」

古城が女を睨んで訊く。

不思議と恐怖は感じなかった。悪の女幹部めいた服を着ているが、彼女からは暴力的な臭いがしない。むしろ育ちの良さが滲み出た甘っちょろさが感じられる。隙だらけだ。

「いちおう確認しておくの。あなたが暁古城で間違いない？」

女は古城の質問に答えず、逆に質問を返してきた。古城は驚いて目を瞬く。名前がわかるようなアイテムを身につけていないか、思わず自分でも確認してしまう。

「どうして俺の名前を？」

「私はヴェルディアナ・カルアナ。戦王領域カルアナ伯爵領上の娘よ」

「カルアナ……って……」

古城は、彼女の言葉に戸惑った。目の前の女吸血鬼に会うのはもちろん初めてだ。

〝戦王領域〟の伯爵ということは、彼女は、第一真祖〝忘却の戦王〟の血脈に連なる純血の吸血鬼ということになる。ただの中学生に過ぎない古城が、おいそれと知り合える相手ではない。

それでも古城は、彼女に見覚えがある気がした。

正確に言えば、彼女によく似た別の誰かを知っているのだ。ブルネットの髪を短く切り揃え

た美しい女研究者。古城と凪沙を、命懸けで護ろうとしてくれた誰かを

「あなたがゴゾ島での記憶をなくしていることは知ってるの。思い出せないかもしれないけど、信じて欲しい。私はあなたの敵じゃない。MARに被害を与えるつもりもないの」

「被害を与えるつもりはないって……ここの地下を爆破したのはあんたじゃないのか？」

周囲の惨状を見回しながら、古城は呆れたように溜息をついた。ヴェルディアナと名乗った彼女は、バツが悪そうに視線を彷徨わせながら、

「わ、私はただ、囚われていたその子を連れ出したかっただけなの」

そう言ってヴェルディアナが指さしたのは、金髪の吸血鬼の少女だった。びくっ、と少女は肩を震わせて、なぜか古城の背中に隠れようとする。

「……囚われてた？　ここの入院患者ってことか？」

「どちらかといえば、実験動物という表現のほうが近いかもしれない」

ヴェルディアナは金髪の少女を眺めて、哀れむように目を細めた。

「MARの研究対象だったってことか？　こいつが吸血鬼だからか？」

「ええ、そう。その子が普通ではない、特別な吸血鬼だからよ」

古城に敵意がないと判断したのか、ヴェルディアナが構えていたクロスボウを下ろした。そんな彼女の右腕から、鮮血が流れ落ちていることに古城は気づく。

「その傷……警備員に撃たれたのか？」

「吸血鬼の回復力を舐めないで。この程度の傷、すぐに治るし」

左手で傷口を押さえて、ヴェルディアナが唸る。しかし相当痛むのだろう。よく見ると彼女は涙目になっていた。

古城はやれやれと首を振って彼女を睨み、

「……ただの傷ならそうかも知れないけど、ここは〝魔族特区〟だぞ。対魔族用の特殊な弾を使ってるに決まってるだろ」

「そうね。だから彼女を危険にさらすような真似は避けたいの」

ヴェルディアナは、意外にも素直に古城の言い分を認めた。そして折り畳んだクロスボウを古城の前に差し出してくる。

「お願い。協力して、暁古城」

「協力……？」

勢いでクロスボウを受け取ってしまったものの、彼女の真意が理解できずに古城は混乱した。そもそも矢のないクロスボウを渡されても、正直困る。

「彼女を連れて逃げて欲しいのよ。私が警備員を引きつけるわ。その隙にどうにかして彼女を連れ出して。あなたが牙城の息子なら、それくらいはできるはずなの」

「は？」

なぜそこで父親の名前が出てくるのだ、と古城はさらに困惑した。

だが、一方で納得できる部分もあった。この女吸血鬼が牙城の知り合いなら、彼女が古城の名前を知っていたことにも説明がつく。彼女の性格が少しばかりズレているのも無理はない、と思える。

そして古城の沈黙を肯定の意味だと受け取ったのか、ヴェルディアナは、古城たちを置き去りにして、そのまま外に出て行こうとした。

「彼女を安全な場所に匿っておいて。あとで必ず迎えにいくから」

「いや、だからっ！」

古城は慌てて彼女を引き止める。事情もわからないまま、素っ裸の女の子を押しつけられても困るのだ。

「少しはわかるように説明しろよ！　どうして俺があんたを手伝う前提なんだ――!?」

「説明してる時間がないの！」

ヴェルディアナが逆ギレ気味に古城を怒鳴りつけた。古城の背後で、金髪の少女がビクッと怯えたように震える。ヴェルディアナは苛々と嘆息して、

「でも、これだけは覚えていて。あなたには彼女を護る義務があるの」

「なんだよ、義務って」

「暁凪沙を救えるのが彼女だけだから、と言えば納得する？」

「……どういう意味だ？」

古城が表情を消してヴェルディアナを睨み返す。

妹の名前が出た瞬間、古城の雰囲気は一変していた。古城の瞳に浮かぶ殺気にも似た気迫に、女吸血鬼が言葉を詰まらせる。

「そ、そのままの意味なの。暁凪沙の衰弱は医学では治せない。〝魔族特区〟の技術でもね。むしろ彼女が今も生きていられることのほうが異常なの。いずれ遠からず彼女は死ぬ」

「凪沙が……死ぬ……？」

古城が、ぐ、と握りしめた拳を震わせた。否定の言葉を口にすることはできなかった。誰も口には出さないが、気づかなかったといえば嘘になる。

凪沙の体力は少しずつ、だが確実に衰えていた。

三年前の事故の傷は完治している。だが、体力だけが戻らない。見えない傷口から血を流し続けているかのように、彼女の生命力は、こうしている今も削られ続けている。

暁深森とＭＡＲの医療技術をもってしても、凪沙を延命させるだけで精いっぱいなのだ。

「こいつがいれば、凪沙を助けられるのか？」

金髪の少女を指さして、古城が訊いた。

なにも事情を知らない少女が、居心地悪そうに目を伏せる。そんな彼女をヴェルディアナが見つめて、

「十二番目の〝焔光の夜伯〟……アヴローラ・フロレスティーナというのが、彼女の名前よ」

「……アヴローラ？」

右脇腹の肋骨が鈍く疼くのを古城は感じた。脳裏に再び奇妙な幻覚がフラッシュバックする。氷塊の中に浮かんでいた少女。眠り姫。フロレスタン王の娘オーロラ――その名前を古城は知っている。

「我が王よ、しばしお傍を離れますことをお許しください」

ヴェルディアナが恭しく少女の前に跪き、自分が着ていたコートを彼女に差し出した。

「あ……う……」

少女は古城の背中に隠れたまま、弱々しい声を出す。やはり彼女は、自分が置かれている状況をまだ理解していないのだろう。ヴェルディアナが自分の味方かどうかすら、判断しかねているらしい。

それでもなにか言わなければ、と思ったのか、彼女は頼りなく口を開いて、

「ゆ、許す」

美しく澄んだ声を上擦らせてそう言った。

4

三分後に研究所の正面で眷獣を召喚する――

そう言い残してヴェルディアナは消え去った。単純な陽動作戦だ。彼女が派手に暴れて警備員を引きつけているうちに、古城は金髪の少女　アヴローラを裏から連れ出す。

なんの捻りもない戦術だが、侵入者が一人だと思われているこの状況では、それなりに有効かもしれない。遠山に借りた医療棟の通行証があるのも地味にありがたい。

しかもMARの敷地外に出てしまえば、警備員が古城たちを追ってくる心配はないらしい。アヴローラの存在を知っているのは、ごく一部の研究員だけだし、そもそも未登録魔族の監禁は立派な犯罪行為だからだ。

出会ったばかりの吸血鬼を信用するのはどうかと思うが、少なくともヴェルディアナが牙城の知り合いなのは事実らしい。それにこの気弱そうな少女を見捨てることにも抵抗がある。そして彼女が本当に凪沙を救ってくれるというのなら、それだけでも危険を冒す価値はあると思えた。

「とはいえ、その恰好じゃさすがにな。外に連れ出すにしても、せめて服くらい着せないと」

素肌の上に革コートを羽織っただけのアヴローラを眺めて、古城は軽く頭を抱えた。

ただでさえアヴローラの容姿は目立つのだ。そんな扇情的な服装の彼女を連れ回していたら、未登録魔族がどうとかいう以前に、古城が性犯罪者として逮捕されかねない。

そもそもヴェルディアナの殺し屋風コートは、肌を隠すのには不向きなデザインで、ほんの少し身動きするだけでも、アヴローラの胸元や太腿の付け根が見えそうになる。

そんな彼女の姿を眺めて、どうしたものか、と古城が悩んでいると、

「わ、我に淫らな視線を向けるな……！」

アヴローラが古城に背中を向けて、弱々しく抗議した。言葉遣いは高圧的だが、怯えたような頼りない口調のせいで、あまり偉そうには感じられない。

「ああ、悪い……」

いちおう恥ずかしいという感情はあったんだな、と古城は妙なところで感心する。

やはり古城の鼻血を舐め取ったときの彼女は、普通の状態ではなかったのだろう。

それにしても、吸血鬼とはいえ素っ裸の女子に唇を押し当てられた、という状況は、冷静に考えるととんでもない体験だったのではないかと思う。あれはキスとしてカウントされるのか、ということを古城は悶々と悩みそうになり、とりあえず今は忘れようと自分に言い聞かせた。

「そうか……たしか凪沙のやつが……」

古城は担いでいたスクールバッグを下ろして、その中に詰めこんでおいた荷物を取り出した。凪沙にクリーニングを頼まれていた彼女の制服だ。

彼女が学校で倒れたときに着ていたものだが、特に目立つ汚れは見当たらない。

「とりあえず、これ着とけ。うちの妹のだけど、素っ裸にコートよりはだいぶマシだろ」

「あ、う……よ、よかろう」

吸血鬼の少女が、ホッとしたような表情を浮かべて制服を受け取った。

凪沙は同世代の平均よりもだいぶ小柄だが、アヴローラもほとんど背格好は変わらない。着られないということはないはずだ。

しかし古城が背中を向けて待っていても、アヴローラの着替えはなかなか終わらない。

ヴェルディアナとの約束の時間まで、もうあまり余裕も残されていなかった。さすがに古城が苛立ちを覚え始めたとき、今にも泣き出しそうなアヴローラの声が聞こえてくる。

「あ、暁古城よ……な、汝に戒めの鋲を穿つことを許そう」

「は？」

おまえはなにを言ってるんだ、と古城は怪訝顔で振り返った。

アヴローラは制服の襟を握ったまま、怯えたような表情を浮かべている。どうやらボタンの留め方がわからずに、困り果てているらしい。

「ああ……ボタンを留めてくれってことか？」

アヴローラの謎言語の解読に成功して、古城は気怠く訊き返した。もう少しわかりやすく喋ってくれよ、と思わなくもないが、相手はおそらく外国生まれの吸血鬼だ。意思の疎通が出来るだけでもありがたいと思うべきだろう。

「なあ、おまえも吸血鬼なんだよな。さっきのヴェルなんとかさんみたいに、霧になって移動するってわけにはいかないのか？」

制服のボタンを留めてやりながら、古城はふと思いついて質問する。

霧化は、比較的多くの吸血鬼が身につけている特殊能力だと聞いている。アヴローラが霧になって姿を隠すことができるのなら、この建物からの脱出は圧倒的に楽になるはずだ。

しかし吸血鬼の少女は首を振り、ひどく申し訳なさそうに目を伏せた。

「わ、我が身に霧の恩寵は非ず」

「そうか……無理なら、仕方ないな」

いつの時代の日本語だ、と不思議に思いつつも、古城はあまり気にしないことにした。解読は面倒だが、彼女が言いたいことはどうにか伝わる。

「そろそろ時間だ。なるべく堂々としてろよ。たぶんそのほうが怪しまれずに済むと思う」

「よ、よかろう」

相変わらず言葉だけは偉そうだが、アヴローラは古城の制服を必死で握りしめたままだった。おかげで古城は、歩き出そうとした途端、背中を引かれてつんのめる。

「おまえな……！」

古城は振り返ってアヴローラを睨んだ。

ひう……と、吸血鬼の少女は、小動物のように怯えて身体を縮こまらせる。

医療棟の建物の中に、新たなサイレンが鳴り響いたのはその直後だった。

どうやらヴェルディアナが約束どおりに、脅獣を召喚して暴れ始めたらしい。急いでMAR の敷地から出ないと、万が一、門が封鎖されてしまっては元も子もない。

「たく、堂々としてろって言ったろ。そんなくっつかれたら、あからさまに怪しいだろうが！つか、歩きづらいわ！」

「ひ……う……」

古城に荒っぽく怒鳴られて、アヴローラはほとんど半泣きになっていた。大きな青い瞳に涙を浮かべ、それでも彼女は消え入りそうな声で言い返す。

「ア、アヴローラ……」

「あ？」

「おまえ、違う……アヴローラ・フロレスティーナ。た、尊き我が名……」

たったそれだけのことを伝えるのに、なけなしの勇気を振り絞ったのだろう。彼女の言葉の後半は、かすれてほとんど聞き取れなかった。

逆に言えば、弱気な彼女が、そうまでして古城に訴えなければならないほど、アヴローラという自分の名前に特別な思い入れがあるのかもしれない。

「わかった……悪かったよ。ごめん」

そう言って古城は、涙目の彼女に手を伸ばす。

またしても怯えて後ずさる吸血鬼の少女に、古城は軽く途方に暮れながら、

「ほら。行くぞ、アヴローラ」

その瞬間、初めて彼女が笑った気がした。

笑顔と呼ぶにはあまりにもぎこちなく、儚げな表情ではあったけれど、
アヴローラが、古城の手を怖ず怖ずと握り返してくる。
冷え切った彼女の手をしっかりとつかんで、古城は外へと歩き出す。
その先に待ち受けている運命を、今はまだ共に知らないままに

5

虚空を切り裂くようにして、巨大な獣が出現する。
炎を撒き散らす二つ首の魔犬。それは、自らの意思を持つ濃密な魔力の塊だった。
吸血鬼が自らの血の中に従える召喚獣――眷獣だ。
「〝ガングレト〟――お願い！」
全長三メートル近くにも達する魔犬を引き連れて、ヴェルディアナは研究所の正面ゲート前へと飛び出した。魔犬の前肢が、整然と並ぶ照明灯のポールを薙ぎ倒し、吐き出す炎が芝生を焼く。実際の被害はそれほどでもないが、少なくとも見た目だけは派手な破壊活動である。
ヴェルディアナの目的は、MARに損害を与えることではない。暁古城がアヴローラを連れ出すまで、警備員たちの注意を引きつけておくだけでいいのだ。適当に騒ぎを起こしたところで、撤退するつもりでいたのだが

「ふわっ!?」
周囲から容赦のない一斉射撃を浴びて、ヴェルディアナの表情が強張った。
研究所の建物や正面ゲートから、ゴミバケツのような形の機械が、続々と飛び出してくる。各種の銃器を内蔵した、自律制御の警備ポッドだ。
大口径の機銃弾やグレネードの弾幕が、雨のようにヴェルディアナへと降り注ぐ。
「は、話が違うわよ、暁深森！　警備を甘くしておいてくれるんじゃなかったの……!?」
自らの眷獣を楯にしながら、ヴェルディアナはたまらず泣き言を洩らした。
機関銃の弾丸程度で吸血鬼の眷獣を斃すことはできないが、だからといって、いつまでも魔犬の背後に隠れているわけにはいかない。このままではすぐに包囲されて、完全に退路を断たれてしまう。
しかも警備ポッドの台数は、刻一刻と増え続けていた。どうやって人工島管理公社の許可を取り付けたのかは知らないが、ちょっとした軍隊並の武装規模である。
「これだからお金を持ってる連中は嫌いなのよ！」
逆恨み気味のセリフを吐きながら、ヴェルディアナはじりじりと後退した。眷獣を防御に回しているせいで、反撃することもままならない。
ヴェルディアナは、研究所本館の裏側にある医療棟の建物をちらりと見る。予定の時間よりはだいぶ早いが、逃走するしかなさそうだ。

「上手く連れ出してよ、暁占城……あの牙城の息子なんでしょう！」

祈るような気分で呟きつつ、ヴェルディアナは研究所を取り囲む高い塀へと近づいた。眷獣を召喚した状態では、霧化の能力は使えない。とはいえ、吸血鬼の筋力なら、跳び越えるのもそれほど困難ではない高さだが――

「はうっ……!?」

突然、全身に痺れるような衝撃を受けて、ヴェルディアナは膝を突く。

白い色だった研究所の塀に、複雑な魔術文字と魔法陣が浮き上がっていた。侵入者捕獲用の結界だ。眩い黄金の輝きは、魔族の動きを縛る聖光だろう。

動けなくなったヴェルディアナを目がけて、警備ポッドが殺到してくる。魔犬は正面からの機銃弾を防ぐことに忙殺されて使えない。

「く……！〝ガングレティ〟――お願い、ぶち抜いて！」

ヴェルディアナは歯噛みして、新たな眷獣を喚び出した。彼女が従えている二体の眷獣の最後の一体――双頭の魔犬だ。

巨大な眷獣の突撃を受けて、研究所の防護塀が崩れ落ちる。左右に回りこんだ警備ポッドが、彼女に銃撃を浴びせるが、その前にヴェルディアナは身体の自由を取り戻し、塀の外へと這い出していた。

「思ったとおり……敷地の外までは追跡してこない……わね……」

ぜえぜえと荒い息を吐きつつ、ヴェルディアナは眷獣たちの召喚を解除する。

霧化して長距離を移動するだけの魔力は、今の彼女には残されていない。生まれて百年にも満たないヴェルディアナは、〝旧き世代〟と呼ばれるにはまだ未熟だ。同時に二体の眷獣を操るのは、さすがに無理がありすぎた。

おまけに身体中のあちこちに、銃弾がかすめた痕が残っている。致命的な負傷ではないが、出血がひどい。できればどこか安全な場所で休息したいところだ。

残されたなけなしの体力を使って、ヴェルディアナは街外れの海辺へと向かった。モノレールの高架下に人目につかない場所を見つけて、そこにぐったりと倒れこむ。

せめてベッドのある場所で眠りたかったが、今の彼女には魔族登録証がない。身分証の提示を求められたら、面倒なことになるのは目に見えていた。それ以前に、こんな血まみれの姿で人前に出るわけにもいかないが。

「魔族登録証なしじゃ、店にも入れないなんて……〝魔族特区〟が聞いて呆れるのよ。これだから昼側の人間の街は……！」

言いがかりだと自覚しつつも、ヴェルディアナは膝を抱えて愚痴る。

しかし最悪というほどの気分ではなかった。ひどい目に遭ったのは事実だが、無事に目的は果たせたのだ。アヴローラ・フロレスティーナを目覚めさせるという目的は。

「十二番目が目覚めた以上、采配者も、彼女を第四真祖の候補者だと認めないわけにはいか

ないはず……これで一族の無念が晴らせるわ……リアナ姉様……」

今は亡き姉の名前を独りごちて、ヴェルディアナは祈るように強く両手を握り締める。

結局、傷の再生には、二十分近い時間がかかった。

傷の痛みは残っていたが、出血はすでに止まっている。吸血鬼の超回復力の恩恵だ。失われた血や体力が回復したわけではないが、普通に歩く程度なら問題ない。

「まずは暁、古城と合流しなきゃ……待ち合わせ場所を決めておくんだったわ」

自分の迂闊さを悔やみつつ、ヴェルディアナは立ち上がる。

その彼女の右脚が、突然、鮮血を撒き散らして爆ぜた。

気づいたときにはバランスを崩して、ヴェルディアナは地面に倒れていた。なにが起きたのか理解できぬまま、彼女は呆然と傾いた景色を眺める。

激痛が襲ってきたのは、そのあとだ。

右脚の太腿が付け根から、ズタズタに引き裂かれてちぎれかけていた。大口径のライフルによる銃撃を受けたのだ。

「あ……ぐあああああああああっ！」

鮮血にまみれた右脚を押さえて、ヴェルディアナは絶叫した。

吸血鬼の生命力が、痛覚の麻痺を許さない。絶え間なく続く耐えがたい苦痛に、ヴェルディアナはのたうち回る。

そんなヴェルディアナを揶揄するように、どこからともなく芝居がかった声が聞こえてくる。

「ああ……いけません。いけませんねえ、嘆かわしい。落ちぶれたとはいえ、戦王領域の貴族たる吸血鬼のご令嬢が、そのようなはしたない声を上げてはいけません。淑女たるもの、手脚の一本や二本もぎ取られても、常に優雅に振る舞わねば」

「お、おまえたちは……！」

声の主を見上げて、ヴェルディアナが頬を引き攣らせた。

彼女を見下ろすように立っていたのは、カイゼル髭を生やした痩身の中年男性だった。上気色の肌と、感情の読めない細い目元。狡猾なキツネを連想させる男だ。

そして彼の両脇には、黒装束に全身を包んだ不気味な男たちが立っていた。

異常なほどに手脚が長く、肩の筋肉が不可解に盛り上がっている。彼らの顔面を覆っているのは、獣の頭骨を模した仮面だ。剝き出しの分厚い唇からは、異様に巨大な乱杭歯がのぞいている。

「ネラプシの匈鬼が、なぜ極東の〝魔族特区〟に……!?」

脚の痛みも忘れて、ヴェルディアナが叫ぶ。

匈鬼とは〝戦王領域〟に住む魔族の一種。脊獣を喚び出すことができない、下等な吸血鬼の

アウローラ・ラプロレスティーナ

『始祖の夜伯』Ego Ego

暁古城

『血の従者』Blood Servant

真祖に仕えし無自覚なる不死者

一族だ。暴力的で略奪を繰り返す彼らは、ヴェルディアナたち純血の吸血鬼にとって、侮蔑と嫌悪の対象である。

ネラプシとは、そんな匈鬼たちの自治領の名だ。そしてヴェルディアナの生家――カルアナ伯爵家は、彼らネラプシの匈鬼と、数百年に及ぶ領地の争奪戦を繰り広げていた。ヴェルディアナの父親は、その匈鬼との戦闘で命を落としたのだ。

「ふふ、気になりますか？　ええ、もちろん教えて差し上げますよ」

カイゼル髭の男が、勝ち誇ったような表情で言う。

「いや、なにね。くだらない噂を耳にしてしまいましてね。戦場での、あまりの不甲斐ない死に様ゆえに、戴くべき王はおろか、領地すら失ってしまった間抜けな貴族の末娘が、未練がましくも新たな〝焔光の夜伯〟を甦らせて、〝焔光の宴〟に参加するつもりなのだとか――いや、実に滑稽だ」

「……黙れ！　薄汚い匈鬼ごときが、父上を侮辱することは許さぬ！」

ヴェルディアナが、怒りにまかせて荒々しく吼えた。彼女が召喚した魔犬が、炎を吐き散らしながら男を襲う。

しかし魔犬の攻撃が届く前に、男の左右にいた匈鬼たちが動いていた。

下等とはいえ彼らもれっきとした吸血鬼だ。魔力の容量では他の魔族を凌駕する。そして眷獣が使えない代わりに、匈鬼たちは、魔力を増幅する魔器を、自らの体内に埋めこんでいた。

生身の肌を突き破り、彼らの腕や肩に内蔵されていた刃が次々に飛び出す。

魔力を帯びたその刃が、魔犬の突進を喰い止めた。消耗したヴェルディアナの眷獣では、彼らを蹴散らすことができないのだ。

「どうしました？　ご自慢の眷獣の力はこの程度ですか？」

カイゼル髭の男が、愉快そうに首を傾げて訊く。

「実を言えばね、我々はあなたに感謝しているのですよ、ヴェルディアナ・カルアナ。あなたが十二番目を復活させてくれたおかげで、我々は新たな殺神兵器を手に入れることができる」

「そんな……そんなことをさせるわけ……」

ヴェルディアナが指先を地面に突き立てて苦悶する。

匈鬼を従えた男の目的は、アヴローラの強奪だ。ヴェルディアナが彼女を目覚めさせるのを、彼らはずっと待ち続けていたのだ。そして邪魔になったヴェルディアナを、こうして処分しようとしている。それに抗う力はもう、今のヴェルディアナには残されていない。

「あなたの役目は終わりです。せめてもの感謝の形として、ご両親や姉上と同じところに送って差し上げましょう」

男が右側の匈鬼に目配せする。匈鬼は無言でうなずくと、手首に埋めこんだ銃口をヴェルディアナに向けてきた。そしてなんのためらいもなく発砲する。

横殴りの突風が匈鬼を襲ったのは、その直後のことだった。

「ぬ……!?」

突風に煽られて狙いの逸れた弾丸が、ヴェルディアナの眼前の地面を抉った。偶然にしては、あまりにも完璧なタイミングだ

「この風は……？　魔術というわけではなさそうですが」

ほう、と興味を惹かれたように、カイゼル髭の男が眉を寄せる。そして彼が再び視線を向けたときには、ヴェルディアナの姿は消えていた。

霧化で姿を隠したわけではない。虚空に溶けこんだかのように、跡形もなく消滅している。

「……空間制御術式……なるほど、そういうことですか」

カイゼル髭の男が、ふん、とつまらなそうに鼻を鳴らした。

ヴェルディアナは自力で逃げたわけではない。誰か彼女を助けた者がいるのだ。空間転送の魔術に長けた誰かが――

「ザハリアス卿……今ならまだ、血の臭いを辿れますが」

匈鬼の片割れが、顔を覆う仮面を押さえて言う。ザハリアスと呼ばれた男は、ふむ、と思案するように自分の髭を撫でつけた。

「いえ、やめておきましょう。相手が悪い。ヴェルディアナ・カルアナ一人のために、あえて魔女の巣に飛びこむ必要もありません」

そう言ってザハリアスは踵を返す。

「十一番目の確保を優先します。別働隊に指示を」

次の瞬間、黒装束に包まれた匈鬼たちの輪郭が歪み、彼らの姿は虚空に消えた。

日没の時刻が近づいていた。〝魔族特区〟を取り巻く夕闇が暗さを増していく。

6

制服を着た吸血鬼の少女を連れて、古城は海沿いの歩道を歩いていた。

MARからの脱出は呆気ないほど簡単に終わった。古城たちは誰にも見咎められることなく、医療棟の裏口からあっさりと外に出ることが出来たのだ。ヴェルディアナの陽動に、果たして意味があったのかと疑問に思ってしまうほどだった。

「ここまで来れば大丈夫か……意外とどうにかなるもんだな」

隣を歩くアヴローラの横顔を見ながら、古城は拍子抜けしたような気分で呟く。

夕焼けの中を歩く制服姿のアヴローラは、意外にも、吸血鬼ですらない普通の少女のように見えた。医療棟で拾ったナースサンダルを裸足につっかけているのも、案外似合っていて違和感はない。

そのアヴローラは、落ち着かない様子で、しきりに周囲を見回していた。ありふれたビルや道を行き交う自動車を眺めては、ふおお、と驚嘆したような声を出す。

「そこまで驚くほどの景色でもないだろ？」

いちいち足を止めるアヴローラを、呆れたように振り返って古城が言う。

しかし吸血鬼の少女は、そんなことはない、と懸命に首を振り、今度は海辺のフェンスへと駆け寄っていった。夕陽を反射する海面や、ありふれた海鳥たちを驚いたように見つめるその姿は、好奇心に満ちた幼児のようで、どことなく微笑ましい。

「そういえば地下に閉じこめられてたようなことを言ってたよな……」

もしかして外に出たのは初めてなのか、と古城は訝しむ。それならば彼女のはしゃぎようも、理解できないことではなかった。が、

「こら、あんま飛び跳ねんな。自分がパンツ穿いてないのを忘れるなよな」

フェンスから大きく身を降りだして、脚をばたつかせていた彼女を、古城は慌てて引きずり降ろす。制服のスカートが翻って、見えてはいけない部分まで見えそうになっていたのだ。

そのことを指摘されたアヴローラは、耳の先まで顔を赤くして、

「げ、下劣なる妄想は慎め、下僕！」

「いつから俺がおまえの下僕になったんだよ……」

涙目のアヴローラを呆れ顔で見返し、古城は深々と溜息をついた。

その瞬間、再び奇妙な映像がフラッシュバックする。氷の槍を持つアヴローラと、彼女の背後に浮かぶ巨大な妖鳥の幻影だ。

「なあ、アヴローラ……俺は前にもどこかでおまえに会ったことがあるのか？」

古城がふと真顔になって少女に訊いた。あう……とアヴローラが困ったように目を伏せる。たしかに、いきなりこんなことを訊かれても困るのかも知れないが。

「夢を、見るんだ。たぶんガキのころだと思うけど……俺と凪沙が知らない洞窟の中にいて、その奥に、おまえにそっくりの女が眠ってた。ばかでかい氷の塊の中で」

「……ナギサ？」

その制服の本当の持ち主。俺の妹だよ。今は事故の後遺症で、さっきの病院に入院してる」

古城はそう言って投げやりに苦笑する。

「俺たちが事故に遭ったのが、外国の遺跡に行く途中だったから、そういう夢を見るんだって母親には言われたんだけどな。現実と想像が混ざってる……って!?」

いきなりボロボロと涙をこぼし始めたアヴローラを見て、古城は激しくうろたえた。単なる同情とは思えない、見ている古城がドン引きするくらいの泣きっぷりだ。

「なんでおまえが泣いてんだよ!?　そういう話じゃなかっただろ!?」

「き、記憶の混乱……我が感情に予期せぬ干渉が……」

ずびずびと鼻水を啜りながらアヴローラが言う。どうやら自分でも泣いている理由がわかってないらしい。古城はポケットから引っ張り出したハンカチで、ぐしょぐしょになった彼女の顔を拭いてやりつつ、

「おまえの言ってることはマジでよくわからん……でもまあ、ありがとうな」
「れ、礼には及ばぬ」
鼻の頭を赤くしたアヴローラが、恥ずかしさに耐えかねたようにぼそぼそと返事をする。
そんな彼女を、古城は不思議そうに眺めて、
「そう言やヴェルなんとかさんは、おまえがいれば凪沙は助かるって言ってたよな。具体的になにをしてくれるんだ？　治療系の魔術を知ってるとか、特殊能力が使えるとか……」
「え、あ……」
アヴローラは困ったように下唇を噛みながら、知らない、というふうに首を振った。
どういうことだ、と古城は後ずさる彼女に顔を寄せ、
「だけどＭＡＲに捕まってたってことは、なにか理由があるんだろ？」
「わ、我が記憶はいまだ混沌の中に……永き封印の眠りより目覚めし直後ゆえ……」
吸血鬼の少女が、たどたどしい口調で懸命に説明する。
ふむ、と古城は口元に手を当てて、
「おまえも思い出せないってことか」
「い、遺憾……」
しょんぼりしたように肩を落とすアヴローラ。古城は苦笑混じりに息を吐く。
「いや、どうせそんなことだろうと思ってたしな。気にするな。あのアホ親父が絡んでるってだけで、だいたい察しはついてるから」
「……」
「ＭＡＲの研究所から脱走してきたのだ。しばらくは、どこか安全な場所に隠れていたほうがいいのだろう。
とはいえ、身元も定かではない吸血鬼の少女を匿える場所といわれても、そんな都合のいいものはそうそう思いつかない。
「……ったく、ヴェルさんも好き勝手なことを言ってくれるな。犬の世話くらいの気楽さで、未登録の吸血鬼を押しつけやがって」
今さらのように事態の深刻さに気づいて、古城は真面目に苦悩を始める。
どのみちもうすぐ陽が暮れる。このままいつまでも彼女を連れ回すわけにはいかない。
だからといって、このまま古城の自宅に連れて帰るのも、それはそれで問題だ。なにしろ、古城の母親はＭＡＲの主任研究員なのだ。
滅多に自宅に寄りつかないとはいえ、彼女とアヴローラがばったり顔を合わせてしまったら間違いなく面倒なことになる。せっかくアヴローラをＭＡＲから連れ出したのが台無しだ。
「仕方ねえな……いつまでもパンツ無しってわけにもいかないだろうし、いったん俺ん家で着替えるか。そのあとのことはヴェルさんと合流してから考えれば――」
面倒事は先送りにする、という妥当な結論に行き着いて、古城は再び歩き出そうとした。

聞いたときから、嫌な予感がしてたんだ」
古城は気を取り直すように顔を上げ、それからもう一度アヴローラを見た。
本人に緊張感がないせいで忘れていたが、彼女はＭＡＲの研究所から脱走してきたのだ。しばらくは、どこか安全な場所に隠れていたほうがいいのだろう。
とはいえ、身元も定かではない吸血鬼の少女を匿える場所といわれても、そんな都合のいいものはそうそう思いつかない。
「……ったく、ヴェルさんも好き勝手なことを言ってくれるな。犬の世話くらいの気楽さで、未登録の吸血鬼を押しつけやがって」
今さらのように事態の深刻さに気づいて、古城は真面目に苦悩を始める。
どのみちもうすぐ陽が暮れる。このままいつまでも彼女を連れ回すわけにはいかない。
だからといって、このまま古城の自宅に連れて帰るのも、それはそれで問題だ。なにしろ、古城の母親はＭＡＲの主任研究員なのだ。
滅多に自宅に寄りつかないとはいえ、彼女とアヴローラがばったり顔を合わせてしまったら間違いなく面倒なことになる。せっかくアヴローラをＭＡＲから連れ出したのが台無しだ。
「仕方ねえな……いつまでもパンツ無しってわけにもいかないだろうし、いったん俺ん家で着替えるか。そのあとのことはヴェルさんと合流してから考えれば――」
面倒事は先送りにする、という妥当な結論に行き着いて、古城は再び歩き出そうとした。

だが、アヴローラが着いてくる気配はない。

ふと見ると、アヴローラはガードレールにもたれて、ぐったりとうずくまっている。

「おい、アヴローラ……？　どうした？　どこか悪いのか!?」

彼女はＭＡＲの地下に隔離されていた。そのことを思い出して古城は焦る。研究所に囚われていたのではなく、彼女は病弱で外に出られない身体だった、という可能性も、当然予想しておくべきだった。

しかし動揺する古城とは裏腹に、アヴローラは意外に元気そうだった。自分の腹に手を当てたまま、彼女は世にも情けない表情を浮かべて、

「き、飢餓の衝動が、我を襲って……」

「……あ？」

古城の全身から力が抜ける。アヴローラは黙って俯いているだけだ。

「あー……要するに、あれか。腹が減って動けないと？」

「い、いかにも」

「そういえば、おまえ、目が覚めたばかりって言ってたか。吸血鬼もメシを喰わないと普通に腹が減るんだったよな……」

古城は顔をしかめながら、それでも周囲の街並みを見回した。

紋神島北地区は企業や大学の研究所街で、中学生が気安く入れる飲食店はあまり見かけない。

それでも道路沿いの看板に見慣れた文字を見つけて、吸血鬼の少女を抱き起こす。

「わかった。ちょっとつき合え、アヴローラ」

「う……」

怯えた顔のアヴローラを抱きかかえて、古城は近くの交差点を渡った。目的地は、ガラス張りのアイスクリームスタンドだ。凪沙お気に入りの『るる家』である。

最初は不安そうにしていたアヴローラも、ショーケースに陳列されたカラフルなアイスを見て、ふぉぉ、と興奮気味に小鼻をひくつかせた。

るる家の店員は、人間離れしたアヴローラの美貌に驚いたような表情を浮かべていたが、それ以上は特に怪しむこともなく、普通に接客してくれる。優柔不断なアヴローラの代わりに、「今日のおすすめ」と書かれたフレーバーを古城が選び、二人は連れ立って店を出た。

「……んっ！」

アイスを舐めたアヴローラが、ただでさえ大きな青い瞳を、こぼれ落ちんばかりに見開いた。どうやら彼女が想像していたものとは違う味わいだったらしい。

「美味いか」

目をキラキラとさせているアヴローラに、古城は笑いをこらえながら訊いてみる。

アヴローラは尻尾を振り回す子犬のように、小刻みに何度もうなずいて、

「ら、楽園の果実の如し！」

「そこまでか……!?」

大袈裟だな、と思わなくもなかったが、たかがアイスクリームとはいえ、そんなふうに喜んでもらえると悪い気はしなかった。物凄い勢いで食べ終えてしまったアヴローラに、古城は自分のぶんのアイスを、ほい、と差し出して、

「よかったら、俺のもやるよ。食べかけで悪いけど」

「う、うむ……ほ、褒めて遣わす！」

遠慮がちに怖ず怖ずと手を伸ばして、アヴローラはアイスを受け取った。

口の周りをベタベタにしている彼女を眺めて、古城はぼんやりと物思いに耽る。

ヴェルディアナは、この吸血鬼の少女のことを、十二番目の〝焔光の夜伯〟と呼んでいた。〝焔光の夜伯〟の名前は古城も知っている。第四真祖。世界最強の吸血鬼。一切の血族同胞を持たない、世界の理から外れた怪物。

しかし目の前にいる彼女は、とてもそんな化け物には見えない。むしろ普通の中学生と比較してもよっぽど頼りない。どうなってるんだ、と古城は気怠く頬杖を突く。

「あ……」

そんな古城のすぐ隣で、アヴローラが息を呑む気配がした。

彼女の反応で古城も気づいた。いつの間にか古城とアヴローラは、見知らぬ男たちに取り囲まれていた。不気味な黒装束を身にまとい、獣の頭骨の仮面をつけた男たちだ。

彼らの姿を見ただけで、明らかにまともな職業の人間ではないとわかる。

変態的なコスプレ集団か、さもなくば、顔を隠す必要のある犯罪者だ。

「……なんだよ、あんたたち」

アヴローラを庇って古城が立ち上がる。

その古城のこめかみを、横殴りの衝撃が襲ってきた。

そのまま古城は数メートルほど吹き飛び、コンクリートの堤防に激突する。黒装束の男に殴られたと気づいたのは、地面に横たわったあとだった。

手加減の形跡は一切ない。問答無用で殺すつもりの一撃だ。

「古城――！」

アヴローラが大きな悲鳴を上げる。

古城に駆け寄ろうとする彼女を、べつの黒装束の男が背後から捕まえた。

男たちの数は全部で二人。そのうちのリーダー格らしき男が、独り言のようにボソボソとなにかを喋っていた。どうやら喉の内側に、通信機を埋めこんでいるらしい。

「十六時二十八分四十四秒、十二番目と接触。同伴者一名。同伴者を無力化の上、十二番目を確保する」

仮面の下のぎょろりとした瞳が、冷ややかにアヴローラを睨めつけた。

アヴローラは必死に身をよじっていたが、吸血鬼である彼女の腕力でも、男の腕は振り解け

ない。黒装束の男たちもまた、普通の人間ではないのだろう。

「十六時三十九分十五秒　――確保完了。これより撤収に移る」

アヴローラが抵抗できないことを確認して、男たちのリーダーが部下に指示を出す。窓をスモークガラスで塞いだワゴン車が、ちょうど到着したところだ。

鮮血混じりの唾を吐き捨てながら、古城が立ち上がったのはそのときだった。

「おまえら……MARの警備員ってわけじゃなさそうだな……」

古城を殴った黒装束の男が、困惑しながら振り返るのが見えた。あれだけ派手に吹き飛んだ古城が、なぜ生きているのかと訝しんでいるような態度だ。

「十六時三十九分五十七秒――訂正。同伴者の抵抗を確認。再度、無力化を試行――」

リーダーが冷静な口調で報告を続ける。しかし彼がその通信を終える前に、古城は猛然と走り出していた。そしてアヴローラを捕らえている男を、力任せに殴りつける。

古城の予想外の行動に、相手の反応が一瞬遅れた。

仮面の覆われた男の顔が、がくん、と直角に揺れ動く。身体が吹き飛ぶような派手さはないが、脳には直接衝撃が伝わったはずだ。

「そいつを放せよ、変態マスク野郎！」

体勢を崩した男の手から、古城がアヴローラを引ったくる。

それを見て、黒装束の男たちの態度が変わった。ただの人間に過ぎない古城が、自分たちを

相手にここまで食い下がるとは想像していなかったのだろう。

古城自身、どこから自分にこんな力が湧いてくるのかよくわからない　ただアヴローラを護らなければならないという、盲目的な使命感だけがある。

「十六時四十分二十二秒　対象の脅威度をクラスCに修正。対魔族装備の使用を許可する」

リーダーの男が静かに告げる。次の瞬間、彼らの肌を切り裂いて、埋めこまれていた数本の刃物が出現した。

そのおぞましい光景に、古城とアヴローラが絶句する。たとえ〝魔族特区〟でも、ここまで危険な肉体改造を行う魔族は滅多にいない。こんな改造をする必要があるのは、日常的に戦闘や暗殺を行う職業軍人か犯罪者だけだ。

「逃げるぞ、アヴローラ！」

「う、うん」

古城がアヴローラの手を引いて走り出す。こんないかれた魔族とまともに戦う理由はない。だが、黒装束のリーダーは、化け物じみた跳躍力で古城たちを跳び越え、行く手を塞いだ。残る二人も古城たちの背後に迫ってくる。

「十六時四十一分二秒　対象の逃走を阻止。プラン・デルタを適用する」

黒装束の一人が、右腕に埋めこまれた刃物を振り上げた。刃渡り三十センチ近い両刃のナイフだ。魔術文字を刻んだ刃が赤く発光し、魔力の炎を噴き上げる。

「こいつら、いったい……!?」

古城は汗に濡れた掌を握りしめた。黒装束たちの目的はアヴローラの拉致だ。そして彼らは、邪魔者である古城を排除しようとしている。

そのごついナイフの攻撃を受けたら、さすがに今度こそ無事では済みそうになかった。

だが、どこにも逃げ場はない。絶体絶命だ。

黒装束は、無言のまま、古城を目がけてナイフを振り下ろす。が、

「ぐおおおおおおおっ！」

苦悶の声とともに仰け反ったのは、攻撃を仕掛けてきた男のほうだった。

ズダン、と鉄板を殴りつけたような轟音が路上に響き渡り、正面から放たれた透明な砲弾が、黒装束のナイフ使いを直撃したのだ。

骨を砕くような衝撃とともに、透明な砲弾が弾けて水飛沫に変わる。その水滴を全身に浴びて、さらに彼は悲鳴を上げた。そして、

「はは……こいつはすげえな！」

どこかふざけているような皮肉っぽい歓声が聞こえてきた。

声の主は、無精髭を生やした長身の日本人だ。身につけているのは、色褪せた革製のトレンチコートに中折れ帽。時代遅れのマフィアの一員か、売れない私立探偵という雰囲気の人物だ。

彼が構えているのは火炎放射器に似た奇妙な銃だった。
圧縮空気によって、高圧の水の弾丸を発射する放水砲。本来は消火用に開発されたものだが、その強烈な打撃力によって、世界各国の軍隊や警察も暴徒鎮圧用として採用しているという。
男が使用しているのは、それをさらに小型化し、弾丸のカートリッジ化によって携帯性を向上させたものらしかった。
「ルルド聖水入りのインパルス放水砲だ。さすがに効くだろ」
苦悶する黒装束を眺めて、男が笑う。放水砲の弾丸に使用されているのは、西欧教会特製の聖水。人体には影響を及ぼさないが、一部の魔族にとっては強酸にも等しい代物だ。
「十六時四十二分零秒――イレギュラーが発生。所属不明の戦闘員による急襲を受けている。迎撃を開始」
黒装束のリーダーは、新たな敵の出現にも至極冷静に対応した。
しかし彼らが反撃を開始する前に、男は放水砲のカートリッジを再装填。もう一人の黒装束をあっさりと撃ち抜いていた。
通常の弾丸が「点」ならば、放水砲の聖水弾は「面」となって標的を襲う。魔族の反応速度をもってしても、完全に回避するのは容易ではない。
「十六時四十二分二十六秒――所属不明戦闘員を〝死都帰り〟と推定。脅威度B＋――プラン・ミュー二に移行。撤退する」

黒装束のリーダーは、ついに作戦遂行を断念したらしい。苦悶にうめく部下たちを連れて、逃走を開始する。その見事な引き際に、中折れ帽の男が感心したように首を振る。
「おいおい、もう終わりか。つれないねェ……一匹ぐらい捕まえておきたかったのによ」
呑気な表情で敵の背中を見送ったあと、男は、立ち尽くす古城たちのほうへと振り返った。
どこか憮然とした表情の古城と、そんな古城の背後に隠れているアヴローラ。
二人の姿をしばらく眺めて満足そうに微笑むと、
「よう、小僧。よくアヴローラを護ってくれたな。意外に根性あるじゃねえかよ、古城だけに」
男は、いきなり寒々しいオヤジギャグをぶちかまして、一人で勝手に笑い出す。
意味がわからなかったのか、アヴローラがパチパチと不思議そうに目を瞬いた。
そして古城は、忌々しげに男を睨みつけ、なんで、と低く唸るような声を出す。
「――なんであんたがここにいるんだ、親父！」
考古学者、暁牙城は放水砲を肩に担いだまま、愉しげに笑い続けるだけだった。

幕間 i

「――監獄結界は、那月ちゃんの夢の世界？」

石壁に囲まれた城館の一室に、藍羽浅葱の声が反響した。

パイプ椅子に縛られたままの姿勢で周囲を見回して、彼女は建物の実在を確かめようとする。

「じゃあ、ここは魔術的に構築された仮想空間ってこと？　言われてみれば、那月ちゃんの趣味が反映されてる気がしないでもないけど……」

なにか腑に落ちるところがあったのか、浅葱が感心したように可愛く唸る。

そんな浅葱の淡泊な反応に、古城はなぜか置いてけぼりにされたような心細さを覚えて、

「意外にあっさり受け入れたな。俺はまだ今イチ実感がないんだが」

「そう？　邪悪な精霊や悪魔を異世界に閉じこめる話なんて、べつにめずらしくもないでしょ。千夜一夜物語のランプの精も似たようなものだし。それに仮想世界への没入といえば、どっちかといえば電脳技術者の領分だしさ」

それなりに筋のとおった浅葱の説明に、そういうものか、と古城も納得する。

根本的な原理は違っていても、南宮那月が扱う高度な魔術と最新のＩＴ技術には、互いに相通じる部分があるらしい。

「それはいいとして、どうしてあたしまで古城と一緒に縛られてるわけ？」

浅葱が不満そうな口調で、すぐ隣に立っている雪菜に訊く。

雪菜は困ったように小さく眉を上げて、

「藍羽先輩の周囲には防護結界を敷いているので、動かれると危険なんです。すみません」

古城の魔力が暴走しても大丈夫なように、ってことなんだっけ……やばいの？」

「はい。かなり」

深刻な表情の雪菜をじっと見つめて、浅葱は無言で肩をすくめた。不服がないわけではないのだろうが、いちおうは雪菜を信用することにしたらしい。

そして次の瞬間、ゆらりと波紋のように虚空を揺らして、音もなく新たな人影が現れる。

「ふふん。出来のいい生徒が相手だと、説明の手間が省けて助かるぞ、藍羽――」

石手にレースの扇子を広げてそう言ったのは、長い黒髪の小柄な女性だった。

顔の輪郭も体つきもとにかく幼く、遠目には人形と見間違いそうになる。しかし幼女のような外見とは裏腹に、赤と黒の豪奢なドレスを身にまとった彼女の姿は、不思議なカリスマ性を漂わせているように感じられた。警察局所属の国家攻魔官、そして彩海学園高等部の英語教師でもある自称、十六歳――南宮那月だ。

唐突に出現した担任教師に驚いて、浅葱は思わず声を裏返らせ、

「那月ちゃん……!?」

暁凪沙
『混成能力者』Re:Hybrid
真祖の器たる異能の巫女
藍羽浅葱

「ちゃんではない」

額を荒っぽくはたかれた浅葱が、痛た、と悲鳴を上げて仰け反った。

そして那月は、弧を描くようにゆっくりと歩いて古城の前に立つ。監獄結界の内部にいるせいか、普段、古城たちが目にしている那月とは、少しだけ印象が違っていた。

姿形に変化はないが、どちらかといえば、今のほうが表情が豊かで幼く見える。おそらくこちらの彼女のほうが、本来の姿に近いのだろう。

「えーと……まさか那月ちゃんが、俺の記憶を取り戻すつもりなのか？」

そんな那月を見上げて、古城が訊く。と、

「だから、ちゃん付けで私を呼ぶな」

そう言っていきなり扇子の持ち手で殴られた。鎖で縛られていて身動きとれないぶん、衝撃を逃がすことができずに、かなり痛い。それでも構わず古城は続ける。

「嫌な予感しかしないんだが、いったいどうやってやるつもりなんですかねえ？」

すると那月は無言のまま、壁際に陳列された拷問器具のほうへと近づいていった。ひとしきりそれらを見回したあと、調理用の肉叩きに似た金属製のハンマーにおもむろに手を伸ばし、

「殺しても死なない患者というのはいいな。力の加減に気を遣わずに済む」

「物理攻撃かよ!?　原始的過ぎるだろ！」

全身を縛る鎖をギシギシと軋ませ、古城が叫んだ。記憶喪失の患者の頭に強い衝撃を与えるというのは、絶対に真似してはいけない感じの間違った治療法だと思う。

「本気にするな　お茶目な大人のジョークだ」

つまらなそうに肉叩きを手放して那月が言った。

そして彼女は、古城を哀れむように目を細めて、美しく微笑んだ。

「もっとも、頭を殴られて思い出すなら、そのほうが幸せだったかもしれないがな」

「どういう意味だよ!?　恐ェよ！」

あんたが言うとシャレにならねーんだよ、と古城は大袈裟に顔をしかめた。

そのとき古城はふと気づく。那月の左腕に、一冊の古びた本が抱かれている。

「――その本!?」

「ほう、覚えていたか？」

那月が感心したように唇を吊り上げる。

「優麻の母親が持ってたやつだな……那月ちゃんを若返らせたときの」

そう、〝No.014〟……固有堆積時間操作の魔導書だ」

革張りの本の表紙を撫でて、那月が言った。

固有堆積時間とは、ある存在が生み出されてから現在までに過ごした時間の総和、すなわち魔術的に蓄積された個人の歴史そのものである。

経験、記憶、成長、変化　魔導書〝No.014〟は、それら他者の固有堆積時間を奪う。優

れた能力を持つ大人を無力な子どもに戻し、相手の知識や経験を自分のものにするという凶悪な魔導書だ。世界中の魔導書を蒐集する犯罪組織〝図書館〟でも、指導者である〝総記〟だけが持つことを許された危険な本だった。

「本来は仙都木阿夜がやったように、他人が経験した〝時間〟を丸ごと奪うための魔導書だが、さすがに吸血鬼の真祖が相手では、そこまでの効果は期待できまい。せいぜい貴様が過ごした過去の時間を再現して、共有できるかどうかという程度だな」

那月がなんのためらいもなく言い放ち、古城はその意味を理解するより先に不安を覚えた。

「俺の過ごした時間を……共有……？」

「魔術耐性の高い吸血鬼には、この手の魔導書は効きにくいのが相場だが、そのための監獄結界だ。ここは私の夢の中の世界だからな。ある程度は融通が利く。最悪の場合は、そこの転校生にも手伝ってもらおう。七式突撃降魔機槍を突き刺しておけば、抵抗力も落ちるだろう」

「そうですね」

銀色の槍を握った雪菜が、なんのためらいもなく同意する。〝雪霞狼〟と名づけられた彼女の槍は、魔力を無効化する真祖殺しの武器なのだ。

ちょっと待てェ、と古城はたまらず絶叫する。

「抵抗力がどうとかいう以前に普通に死ぬわ！　姫柊もあっさり同意してんじゃねえ！」

古城が前にその槍で刺されたときは、単に死ぬほど痛かったというだけでなく、吸血鬼の回復力をもってしても傷が治らずにひどい目に遭った。それを思い出して古城は震える。が、

「時間を共有って、どういうこと？」

本気で怯えている古城をきっぱり無視して、浅葱が淡々と質問した。

「文字どおりの意味だ。ここにいる人間全員が、暁古城が過ごした時間を追体験する。記憶をのぞき見る感覚に近いな。違うのは、本人が思い出せるかどうかに関係なく、実際にあった出来事をそのまま再現できるということだ」

「そっか……記憶が消えても、体験したという事実は残っているわけだしね。読み出せなくなったデータを、べつのディスクに移して復元するみたいなものか」

那月の説明を、すんなり受け入れて納得する浅葱。

古城は苛々と唇を歪めて那月を見上げ、

「好き勝手なことを言ってるけど、俺のプライバシーはどうなるんだ？」

「……おまえにそんなものがあったのか？」

那月が不思議そうに訊き返してくる。うおい、と古城は声を荒らげて、

「あるだろ！　誰にだって人に知られたくない過去のひとつやふたつ！」

「それって、あんたが中学生のときに部屋に隠してた本のこと？　巨乳特集のエロ雑誌」

「なんでおまえがそんなことまで知ってんだ!?」

いきなり恥ずかしい過去を暴露されて、古城は驚愕の眼差しを浅葱に向ける。

「凪沙ちゃんが部屋の掃除をしてるときに見つけちゃって、ショックを受けてあたしと基樹に相談しに来たのよね。まあ、結局、基樹があんたに貸した雑誌だったってオチなんだけど」

「うあああああああ……」

浅葱の説明に肺腑をえぐられて、古城は縛られたままガクリと背中を丸めた。妹にまで秘密を知られていたという事実に、暗い絶望が押し寄せてくる。

「巨乳特集か」

「巨乳特集……ですか……」

那月と雪菜がそんな古城を見つめて、普段よりもさらに冷たい声音で告げる。

「最低だな」

「最低ですね」

「うるせえな、中学生くらいの男子にはいろいろあるんだよ！」

開き直った古城がやけくそ気味に喚き散らす。浅葱が本気で呆れたように嘆息し、

「いろいろって、あんた、ほかにも隠してたの？」

「違う！　そういう意味じゃねえ！」

「まあ……先輩がいやらしい人だというのは最初からわかっていたことですし」

「それ、まったくフォローになってないからな！」

諦観したような雪菜の呟きに、古城は傷ついた表情を浮かべた。

そんな古城を噛るように、ふふん、と那月は扇子を翻して笑い、

「心配するな。おまえの私生活に用はない。復元するのは記憶の欠損した部分だけだ。つまり先代の第四真祖　アヴローラ・フロレスティーナに関連する部分ということになるな」

「そういうことができるんなら、最初からそう言ってくれよ」

余計な恥をかいたじゃねーか、と古城は恨めしげに那月を睨む。

そして那月は無感情な瞳で古城を眺めて、

「おそらく、つらい体験になるぞ。おまえたちにとってはな」

「ああ、わかってる」

古城が静かにうなずいた。

身体中に巻きつけられた鎖が、ずっしりと重い。

「わかってるんだ、それは」

Avrora, The Twelfth

1

月齢十八。臥待月の夜

展望塔に立つ小柄な影が、夕闇に沈む〝魔族特区〟を見下ろしている。

十二、三歳ほどの年若い少年だ。

少年はゆったりとした白い衣装をまとい、全身を黄金の装飾品で華やかに飾り立てている。

黒髪に褐色の肌。そして闇を見通すような金色の瞳。顔つきはまだ幼さを残しているが、その風貌には、若き獅子を思わせる圧倒的な威厳が滲んでいた。

そんな少年の背後に、不意に黄金の霧が立ちこめる。

霧は見る間に濃さを増し、一人の男の姿へと変わった。

純白のコートをまとった青年だ。金髪碧眼の吸血鬼の貴族である。

「――〝魔族特区〟紘神島ですか。いい景色ですね」

青年貴族の呼びかけに、少年は夜景を眺めたまま、ふ、と嘲るように失笑する。

「しょせんクズ鉄と魔術で生み出された紛い物の大地だ。ガラクタだな」

「ですが、途方もなく大仕掛けなガラクタです。これだから人間は面白い」

「なるほど……おまえか、ディミトリエ・ヴァトラー……」

気障な微笑を浮かべる青年貴族を振り返り、少年が金色の瞳を獰猛に細めた。

コートの胸元に手を当てて、ヴァトラーが慇懃に一礼する。

「お目にかかれて光栄です、イブリスベール・アズィーズ王子殿下。第二真祖直系のあなたが、よもや御自らこのような極東の〝魔族特区〟にいらっしゃるとは正直少し意外でした」

「七十年ぶりの余興だ。俺も相応の礼を尽くさねばなるまいよ。下賤の者どもだけに任せて、知らぬ顔を決めこむのも無粋であろう？」

唇から鋭い犬歯をのぞかせて、イブリスベールと呼ばれた少年が告げた。

長身のヴァトラーの隣に並ぶと、彼の姿は余計に幼く見える。だが、その小柄な体軀にまとう鬼気の圧力は、ヴァトラーに劣るものではなかった。

「ご賢慮、敬服いたします、殿下」

青年貴族が恭しく応じる。

そんなヴァトラーを不機嫌そうに眺めて、イブリスベールが舌打ちする。

「おまえこそなにを考えている、ヴァトラー。ここは戦場ではなかったはずだが？　第四真祖を喰いに来たのか？　それとも目当ては、この俺か？」

「お戯れを。今回のボクはただの立会人ですよ。彼女たちの引率です」

「彼女たち……？」

イブリスベールは訝しげに眉を寄せて、ヴァトラーを睨んだ。

「まさか人形どもを放し飼いにしているのか、ヴァトラー!?」
「せっかくの〝宴〟ですからね。愉しまなければ勿体ないでしょう」
ヴァトラーは涼しげに碧眼を細めて笑ってみせた。
黒髪の王子が、信じられない阿呆を見た、と言いたげな態度で首を振る。
「火薬庫に、爆弾を抱えた猛獣を投げこむつもりか？　聞きしに勝る戯けだな」
「……だが、それでこそ此度の〝宴〟も華やごうというものよ」
突然聞こえてきた新たな声に、男たちが振り返った。
残照の空を背景に虚空から出現したのは、淡い緑色の髪をなびかせた薄着の少女だった。
瞳は深い湖のような翡翠色。野生の豹を思わせる、愛らしくも力強い美貌の持ち主だ。
彼女は可愛らしく八重歯をのぞかせながら、人懐こい表情でヴァトラーたちに笑いかける。
「さすがは〝忘却の戦王（ロストウォーロード）〟　奇警な名代を送りこんできたものよな」
「なんと……!?　〝混沌の皇女（クイーズ・ファイト）〟……！」
くぐもった声でうめいたのはイブリスベールだった。緑髪の少女が放つ圧倒的な魔力の波動に、さすがの彼も動揺を隠せないでいる。
少女の正体は〝混沌の皇女〟。南北アメリカ大陸の夜の帝国〝混沌界域〟を統べる第二真祖だ。
「うちの爺さんが知ったらさぞ悔しがるでしょうね……まさか第二真祖自らのお出ましとは」

驚いているのは、ヴァトラーも同じだ。片膝を突き、深々と頭を下げながら、その口元には笑みがこぼれる。強敵との邂逅に浮き立つ歓喜の笑みだ。
「そのような仰々しい呼び名は好かぬ。ジャーダと呼ぶがよい」
最強最古の吸血鬼のひとり――〝混沌の皇女〟が、不敵な笑顔を浮かべて言った。
そして彼女はゆるりと視線を巡らせて、展望塔の片隅に立っていた第四の人影を睨めつける。
「貴様もな、〝静寂破り（ペーパーブレイズ）〟」
「――承知しました。では以降そのように、ジャーダ・ククルカン」
〝混沌の皇女〟の呼びかけに応えたのは、高校の制服を着た日本人の少女だった。
二つ編みの髪に、野暮ったい眼鏡。小脇に一冊の本を挟んだ地味な娘だ。
しかし彼女は、三名の強大な吸血鬼に、たった一人で平然と向かい合っている。その目に怯えの色はなく、緊張している気配もない。
「ふん。当代の獅子王機関三聖か。若いな」
イブリスベールが少女を見つめて、無感動に鼻を鳴らした。
少女は表情を動かさず、瞳の動きだけでイブリスベールに会釈する。
「閑古詠と申します　以後、お見知りおきを、アズィーズ殿下。第二真祖、およびアルデアル公のお二方も、今宵はお時間をいただき恐縮です」
古詠と名乗った少女が、吸血鬼たちのほうへと歩み出た。自然と全員の注目が、彼女一人に

集まる形になる。

「さて……残るはネラプシのザハリアスか」

展望塔に集った面々を見回し、愉しげな口調でジャーダが呟いた。

それを聞いて顔をしかめたのは、イブリスベールだ。

「忌々しい名を聞いたな。兵器商ごときが自治領を手に入れて領主気取りか」

幼さを残した端整な頬を歪めて、〝滅びの王朝〟の王子が吐き捨てる。

占詠は、かすかに目を伏せて首を振り、

「ネラプシ暫定自治政府、バルタザール・ザハリアス議長は欠席です。今宵の議題に関しては、皆様の決定に従うと」

「賢明だな。臆面もなく俺の前に姿を現せば、首をねじ切ってやるところだ。成り上がりめ」

いまだ怒りの感情を抱いたまま、イブリスベールが独りごちる。そして彼は、不機嫌そうな表情もそのままに占詠を睨みつけた。

「では訊こうか、獅子上機関。我らを呼びつけたのは何故か？　いかな采配者といえども、この非礼、返答如何によっては貴様の血で贖ってもらうぞ」

「皆様に奏上したき議題はひとつです」

脅迫めいた王子の言葉に、占詠は穏やかな口調で答える。

「十二番目が、目覚めました」

な、とイブリスベールが驚きに目を細めた　ざわり、とその場の空気が震える

「ほう……封印されていた十二番目の〝焔光の夜伯〟――アヴローラ・フロレスティーナか。面白い」

高価な琴を奏でるような美しい声音で、ジャーダが笑った。

「……眠り姫？　十二番目にわざわざ名前をつけたのか？」

第三真祖の言葉を聞きつけて、イブリスベールが怪訝そうに呟いた。フライドチキン用のニワトリにも名前をつけるのか、と言わんばかりの驚きの表情だ。酔狂な真似をする、と呆れたように嘆息しながら首を振る。

そして最後にぼそりと口を開いたのはヴァトラーだった。

「……MARが封印を解いたのか。それは少し意外だな」

三年前に発掘された十二番目を保有していたのは、マグナ・アタラクシア・リサーチだ。営利企業である彼らにしてみれば、十二番目には単なる実験体以上の価値はない。あえて封印を解く理由はないはずだ。

「十二番目を目覚めさせたのはヴェルディアナ・カルアナ元伯爵令嬢です。MARに不法侵入して〝柩〟の鍵を使ったと――」

ヴァトラーの疑問に、占詠が答える。へえ、とヴァトラーは愉快そうに唇を吊り上げた。

「不法侵入か……なるほど。そういうことにしておこうか」

含みのある笑顔で、青年貴族が小さくうなずく。古詠はなにも答えない。
「ともあれ、これで十二体すべての〝焔光の夜伯〟が揃ったわけだな」
ジャーダが華やかな口調で念押しする。異議を挟んだのはイブリスベールだ。
「だが、カルアナ家にはすでに領地がないはずだぞ。ほかならぬザハリアスめのせいで」
「はい。ゆえに彼女に選帝者としての資格はありません」
「ならばどう采配する、獅子王機関？」
古詠を試すように睨んで、イブリスベールが訊く。
眼鏡の少女は、よどみなく淡々と言葉を続けた。
「十二番目は宴に参加させます。ただしヴェルディアナ・カルアナを選帝者として認めることはありません。宴の舞台は、私たちが用意します」
「たかが極東の島国が、我ら夜の帝国と対等に張り合おうというのか」
イブリスベールが猛々しく微笑んだ。
「悪くない答えだ。だがそれは、おまえたちの国の政府が、それに見合う対価を用意するという意味だと受け取っていいのだな？」
「もちろんです。そうでなければ賭けにはなりませんから」
挑発するようなイブリスベールの瞳を、古詠が真っ直ぐに見返して答える。
「ならば問おう。おまえたちがなにを賭けるのか。忘れるな。俺たちはもとより、あの薄汚い兵器商ですら、己の国の命運を賭けている。それに見合うだけの対価であればいいがな？」
双眸を真紅に輝かせて、イブリスベールが笑いかける。普通の人間なら、その壮絶な鬼気を浴びただけで、狂乱状態になっても不思議ではなかった。しかし古詠はいかなる感情も表さず、ただ静かに右腕だけを広げてみせる。
「私たちが賭けるのは、この島です」
少女の背後にあるのは、巨大な人工島の夜景。〝魔族特区〟紘神島――
「この地と、そこに住む五十六万人すべての命を」

2

古城の父親、暁牙城という男は考古学者だ。ただし研究室に籠もって思索に耽るような、知的なタイプからはほど遠い。世界各国の紛争地帯を巡り、戦闘のどさくさに発掘品をかすめ取ってくるような、火事場泥棒と紙一重のフィールドワーカーだ。
そんな仕事の性質上、牙城は一年のほとんどを海外で過ごし、日本には滅多に戻ってこない。特に古城たちが紘神島に引っ越してからは、まともに会話を交わしたことすら、数えるほどしか記憶になかった。
そんな牙城が、なぜか古城とアヴローラを引き連れて訪れたのは、紘神島東地区にある小さ

な港だった。自家用の小型船舶を係留するマリーナだ。

桟橋には、小型のヨットやボートが五十隻ほど、畜舎につながれた牛のように整然と停泊している。牙城はその中の一隻に近づいて、誰はばかることなく勝手に乗りこんだ。

「早く乗れよ、小僧。遠慮すんな」

「べつに遠慮してるわけじゃねーけど……なんだよ、親父。この船は？」

見知らぬ白いプレジャーボートを眺めて、古城が訊いた。

全長十四、五メートルほどの小型クルーザーだ。船体側面には〝りあな号〟と書かれている。過酷な航海をくぐり抜けてきたのか、あちこち古びてはいるものの、それでも十分に高価そうな船だった。少なくとも貧乏考古学者の持ち物として相応しい代物ではないだろう。

しかし牙城は、我が物顔で船のデッキによじ登り、

「なかなかイカした船だろ。マカオで知り合った金持ちに賭けポーカーで大勝ちしてな、安く買い叩いてやったんだよ」

「賭けポーカーって……」

おまえはなにをやってるんだ、と古城はうんざりして息を吐く。

「家に帰ってこないと思ったら、この船でずっと暮らしてたのか？」

豪州あたりじゃ、ハーバーにつないだヨットで生活してる連中は多いぜ。定年退職した金持ちのステータスだったりするんだよ」

そう言って、牙城は船室から食料を運んでくる。パンとベーコン、コンビーフ、そしてキンキンに冷えた瓶ビール。船内には冷蔵庫やキッチンなどの、生活に必要な設備はひととおり揃っているらしい。

「あんたは定年退職したわけでも金持ちでもねーだろ」

「まあそうだが、紘神島じゃ、マンションを借りるよりも断然便利だからな。とりあえず喰え。腹減ってんだろ」

牙城が後部デッキのテーブルに食べ物を広げた。古城はやれやれと頭をかき、アヴローラの手を引いて船に乗りこむ。そして不機嫌な顔つきで、牙城と向かい合うように腰を下ろした。その隣にアヴローラが怖ず怖ずと座ってくる。

古城にぴったりと寄り添うアヴローラを眺めて、牙城は愉快そうにほくそ笑み、彼女の前に手製のサンドイッチを差し出した。フランスパンにレタスとトマト、肉厚のハムを挟んだだけのシンプルなものだが、悔しいことに美味そうだ。

「……わ、我に供物を捧げるか、人の子よ……！」

空腹を訴えていたアブローラが、目を輝かせてそれを受け取り、食べてもいいのか、と古城の顔色をうかがってくる。よく噛んで喰えよ、と古城はサンドイッチをアヴローラに手渡して、そして父親のほうへと向き直った。

「説明しろよ……」

「ああ、これか」

飲みかけのボトルを軽く持ち上げて、牙城が得意満面の笑みを浮かべる。

「こいつはアウストラシアの修道院で造ってる上面発酵ビールでな、生産量が少なくて市場にも滅多に出回らないから世間では幻のビールと呼ばれてる逸品だ。美味いぞぉ！」

「誰がビールの説明をしろって言ったよ!?」

古城は思わず父親を殴りつけたい衝動に襲われた。

「今までどこでなにをやってたんだよ。三年近くも、ロクに連絡も寄越さねーで！」

「ヴェルディアナには会ったんだろ？」

息子の怒声を素知らぬ顔で受け流し、牙城が何気ない口調で訊いてくる。

ああ、と古城は目つきを険しくして父親を睨み、

「あの吸血鬼は何者だよ？　あんたとはどういう関係なんだ？」

「お、気になるか？　気になっちゃうか？」

なぜか浮かれた表情で息子の顔をのぞきこんでくる牙城。正直言ってかなりウザい。

「ま、安心しろ、べつに愛人として囲ってるわけでも、ヒモとして養ってもらってるわけでもねえ。俺はもっとこう、おっぱいバインバインな感じじゃねえとダメなんだ」

「あんたの女の趣味は聞いてねえよ！　つか、そこは嘘でも妻、筋とか言っとくべきだろ！」

唇をねじ曲げて古城が怒鳴る。ふふん、と牙城はビールを一気にあおり、

「ヴェルディアナは妹だ。俺の古い知り合いのな。その女性は、おまえと凪沙とそこのお姫様を護って死んだ。三年前の話だ」

「……俺と凪沙が死にかけた事件のことを言ってるのか？」

古城は声を低くして訊いた。三年前といえば、凪沙が入院する原因になった列車爆破テロの起きた年である。しかし古城に、その事件の具体的な記憶はない。それにアヴローラは事件と無関係なはずである。

「死にかけたわけじゃねえ。正真正銘、おまえは死んだんだ」

困惑する息子を哀れむように眺めて、牙城が告げる。

「そして生き返った。第四真祖の血の従者としてな。事件に遭った前後の、おまえの記憶がないのはそのせいだ」

牙城は古いスクラップブックをどこからか取り出して、古城の前に放り投げた。色褪せた表紙には手書きのマジックで「第四次ゴゾ遺跡調査団」の文字が書かれている。

大きく膨らんだスクラップブックの中には、大量の写真がストックされていた。強い陽射しに炙られた褐色の岩肌。石造りの古い遺跡。そして氷塊。無数の霜と氷柱に護られた氷の柩。

「この写真……」

「見覚えがあるだろ。世界最古の〝魔族特区〟　ゴゾ島で発掘された〝妖精の柩〟だ。おまえらはここでテロリストの襲撃を受けた。自治領ローマの爆破テロに巻きこまれたってのは、

ヴェルディアナ・カルアナ
『伯爵令嬢』Earl's Daughter
故郷を奪われた天涯孤独の復讐者
矢瀬基樹
『過適応者』Hyper-Fit
時代を超えた、少女たちの双子の変化師

表向きの偽装だな。そういうことにでもしておかないと、いろいろ面倒になるからな」

牙城はそこで言葉を切って、深く静かに溜息をついた。皮肉っぽく茶化してはいるものの、古城が事件に巻きこまれたことに、責任を感じていないわけではないのだろう。

そんな父親の説明を、古城は呆然と聞いていた。自分が一度死んで生き返ったなどと突然言われても、まったくなんの実感も湧かない。

しかし牙城のいつもの悪ふざけだと、笑い飛ばすこともできなかった。なぜなら見覚えがあったからだ。スクラップブックに収められた写真の景色を、古城はたしかに知っている。この三年間、何度となく夢の中で見た光景だ。

「俺が……第四真祖の、血の従者……？」

「まったくおかしな話だよな。第四真祖ってのは、一切の血族同胞を持たない世界最強の吸血鬼だ。そいつが従者を造っただけでも驚きなのに、よりによってそいつが古城とはな。信じられなくても当然だぜ。その場に居合わせた俺だって同じ気持ちだ」

牙城が投げやりな口調で言う。

古城は半ば放心状態のまま、自分のこめかみに手を当てた。

血の従者とは、吸血鬼によって造り出される疑似吸血鬼だ。主人である吸血鬼の肉体の一部を受け入れることで、人間は吸血鬼の従者に変わる。忠実な部下として、あるいは伴侶として、主人と共に生きるために永劫の生命を与えられた者。限りなく魔族に近い〝人間〟――

「さっき殴られた傷、治ってるだろ？」

牙城が無造作に指摘した。古城の側頭部に傷はなかった。ほんの一時間ほど前に、黒装束の男に殴られたときの傷だ。浅い傷ではなかったはずだが、わずかな痕跡すら残っていない。

吸血鬼に与えられた超回復力の賜物だ。あれだけの衝撃を受けながら、平然と立ち上がれたことが、そもそも異常だったのだ。

「だけど、今まではこんなことはなかったぞ……部活で怪我したときだってべつに……！」

「ああ、そりゃアヴローラが封印されていたからだ。そのお姫様が目を覚ましたことで、おまえへの魔力の供給が再開されたんだろ」

息子の弱々しい反論を、牙城があっさりと論破する。

「もっとも第四真祖の従者っつっても、ちょっとばかり傷の治りが速いだけのただの人間だ。おまえに魔術の心得でもあれば話はべつだがな。つーわけで、あんま調子に乗るなよ、小僧」

「調子になんか乗ってねえだろ……」

古城が怒気の籠もる声で言い返す。そんな息子を、牙城は呆れたように見返して、

「なんだ、吸血鬼の従者ってのが気に入らないのか？　今ならまだ人間にも戻れるぞ？」

「そうなのか？」

「簡単な話だ。そこのお姫様を殺せばいい」

「な……!?」

物騒な父親の提案に、古城は表情を凍らせた。アヴローラが怯えたように竦み上がる。
そんな二人の反応を、牙城はどこか面白そうに眺めて、
「主人である吸血鬼が死ねば、血の従者も当然その資格を失う。何百年も生きてきた従者なら、その場で灰になるかもしれんが、おまえはまだ成り立てだからな。デメリットはないも同然だ。さあ、どうする？」
「どうするもこうするもあるか。俺がこいつを殺せるわけねえだろ！」
古城が乱暴にテーブルを叩いた。そして不安げな表情を浮かべるアヴローラを睨んで、
「おまえももう少し堂々としてろ。死にかけてた俺を助けてくれたのはおまえなんだろ。俺にはおまえを恨む理由はねえよ。むしろ命の恩人として感謝するべきところじゃねーかよ」
「し、真理は遥けき忘却の彼方に……」
アヴローラが頼りなく目を逸らして、ぼそぼそと答える。ああ、と古城は顔をしかめて、
「そうか。おまえも記憶がないんだっけか」
い、遺憾……」
アヴローラは気弱にうつむいた。記憶を失っている彼女にしてみれば、自分が命の恩人だと言われても自覚がないし、自信も持てないということなのだろう。
生き返った実感のない血の従者と、生き返らせた記憶をなくした吸血鬼。ある意味、お似合いの主従といえないこともない。

そういえば、と古城は頭を振って、父親に向き直った。
「ヴェルなんとかさんは、こいつが凪沙を助けてくれるって言ったんだが――」
古城に指されたアヴローラが、びっくりしたように目を大きくする。
もともと古城がアヴローラを護衛する気になったのは、あの女吸血鬼のひと言が発端だった。
暁凪沙を救えるのは彼女だけだと、ヴェルディアナは言ったのだ。
「まさかそっちも、一度殺して生き返らせるとかってふざけた話じゃないだろうな」
古城が、疑惑の眼差しを牙城に向けた。吸血鬼の従者にすることで、衰弱した凪沙を生き返らせる。まともな父親が考えることではないが、この牙城ならやりかねない。
しかし牙城は、あん、と不愉快そうに眉間にしわを刻んで、
「馬鹿言うな、おまえならともかく、凪沙を死なせるなんて俺が許すわけねえだろ」
俺はいいのか!?」
「だいたい凪沙をわざわざ殺す意味なんてねーんだよ。あいつの衰弱の原因は、自分自身の霊能力の暴走なんだからな」
「霊能力の……暴走？」
古城が、ぽかん、と口を開けて訊き返す。
たしかに凪沙は優れた巫女だった。父方の祖母から受け継いだ霊媒の素養と、母親から受け継いだ過去透視能力を併せ持つ、極めて稀少な混成能力者。だがそれは二年前までの話だ。

「そんなはずないだろ。凪沙は例の事件が原因で、巫女としての力をなくしたんだぞ」
「逆だ、小僧。凪沙はな、二年前から一瞬も休まずに霊能力を使い続けてるんだよ」
反論する古城を、牙城が獰猛に睨みつける。
「……え？」
「まあ、要するにだ。あいつは第四真祖に憑かれてるんだ、今この瞬間もな」
「第四真祖に……憑かれてる……だと？」
そうだ、と牙城は重々しくうなずいた。
「二年前、俺たちは十二番目の〝焔光の夜伯〟を目覚めさせるために、凪沙をゴゾに呼びつけた。当時の凪沙の巫女としての能力は突出していたからな。〝天部〟の遺産である〝焔光の夜伯〟との相性もよかった。よすぎるほどにな」
牙城がアヴローラに視線を向けた。凪沙に背格好のよく似た金髪の吸血鬼が、びくっ、と全身を縮こまらせる。
「予想どおり凪沙は〝妖精の柩〟で眠っていた十二番目――つまり、そこにいるアヴローラとの交信に成功した。それだけなら問題はなかったんだ。あとはゆっくり時間をかけて、アヴローラを覚醒させるだけだった」
だがな、と牙城はビールを不味そうに喉に流しこむ。
「その日、遺跡が襲われた。相手は黒死皇派――獣人優位主義者のテロリストだ。結論からいえば、遺跡調査チームはその日、壊滅した。調査員の半数が死んで、民間軍事会社の警備チームは全滅。おまえたちを護衛していたリアナ・カルアナ嬢も殺された」

リアナ・カルアナ、という言葉の響きに、失われたはずの古城の記憶が反応した。唐突にこみ上げてきた激しい哀しみに、理由もわかないまま胸が軋む。
「そのあとでなにが起きたのかは、俺も知らない。だが、まあ薄々は想像がつく」
牙城が空になった瓶を置く。そのときには古城もすでに気づいていた。どうして自分だけが吸血鬼の従者として生き返り、凪沙が生死の境を彷徨うことになったのか――
「凪沙が俺を生き返らせたんだな」
「そういうことだ」
牙城が自嘲めいた笑みを浮かべて言う。妹を護りきれなかったことを、古城が悔やみ続けていたのと同様に、子どもたちを護りきれなかった自分自身を、この男も責め続けていたのだろう。
「第四真祖におまえを助ける理由はない。おまえの生き返りを願ったのは、凪沙だ。あいつは殺されたおまえを復活させるために、無理やり第四真祖の能力を引き出したんだろう。そして真祖の眷獣を使って、テロリストどもを一掃したわけだ」
「その代償が、今のあいつの身体ってことか……」
古城は引き攣った喉を震わせてうめいた。
吸血鬼の眷獣は、召喚の代償として宿主の寿命を喰らう。だからこそ、無限の負の生命力

を持つ吸血鬼にしか使役できないといわれている。

実際、凪沙は桁外れに優れた霊能力者なのだろう。

しかし彼女の肉体そのものは、脆弱な人間の少女のものだ。吸血鬼の眷獣――それも第四真祖の眷獣の召喚に耐えられるはずがない。ましてや第四真祖そのものを操ることなど、絶対にできるはずがなかったのだ。それでも凪沙は、自らの肉体に第四真祖を憑依させて彼女を操った。

兄である古城を救うために、だ。

古城は自分が凪沙を護ろうとしたつもりだった。だが違った。

護られていたのは古城のほうだ。凪沙は死にかけた古城を生き返らせて、それと引き換えに今も入院生活を送っているのだ。

その絶望的な真実を突きつけられて、古城はただ呆然とすることしかできなかった。

怒り狂うことも泣き叫ぶこともできず、ただ必死に、唇を強く噛みしめる。そして、

「の、呪え……忌まわしき我が原罪を……」

涙をこぼしていたのは古城ではなく、その傍らにいる金髪の少女だった。

青い瞳から透明な滴を迸らせて、アヴローラが子どものように泣きじゃくる。まったく予想外の彼女の反応に、牙城までもが呆気にとられて固まっていた。

「だからなんでおまえが泣くんだ。おまえが責任を感じるようなことじゃないだろ!?」

嗚咽を続けるアヴローラの顔を、古城が仕方なく紙ナプキンで拭いてやる。

たしかに凪沙の衰弱は、第四真祖の力を使ったことが原因なのかもしれないが、アヴローラが責められるいわれはない。むしろ遺跡の封印を無理やり解かれて、絃神島で研究対象にされていた彼女も立派な被害者だ。

「あー、まあそういうことだな。それにお姫様が記憶をなくした原因も、あながち凪沙とは無関係じゃないからな」

バツが悪そうに頭をかきながら牙城が言った。古城は少し驚いて父親を見る。

「アヴローラの記憶喪失のことも最初から知ってたのか？」

「ああ、でなきゃ辻褄が合わないからな」

「……辻褄？」

「考えてみろよ、小僧。遺跡に封印されていたはずの第四真祖が今も凪沙に憑依したままだとしたら、ここにいるお姫様は何者だ？」

自分を試すような父親の問いかけに、古城は、そうか、と小さく呟く。

「第四真祖の人格の一部だけってことか」

牙城は満足そうに唇の端を吊り上げて笑い、

「おそらくそんなところだろうな。悪く言えば余り物。あるいは搾り滓って感じか」

「なんでわざわざ悪く言った!?」

「いくら凪沙が優れた霊能力者でも、さすがに第四真祖のすべてを受け入れるほどの容量はないんだろう。だからここにある身体のほうにも意識の一部が残ったんだ」

まだ少し涙目のアヴローラを眺めて、牙城が言う。

そして古城は、ようやく父親の目的を理解した。どうして彼がヴェルディアナに協力して、アヴローラを復活させたのか。どうして密かにアヴローラを護衛していたのか。

「そうか……凪沙に憑いてる第四真祖の意識を、本来の身体に戻してやればいいのか……こいつが吸血鬼としての能力やら記憶やらを取り戻せば、凪沙は助かるんだな？」

古城はアヴローラを見つめて呟いた。まだ理解が追いついていないのか、アヴローラ本人は、少し困ったような表情で、そんな古城を見上げている。

「まあ、そうだな。少なくとも、能力の暴走が収まれば、これ以上の体力の消耗は避けられる。多少時間はかかるだろうが、凪沙の容態も今よりは安定するはずだ」

たぶんな、と牙城は無責任に付け加えた。

「あんたたちはそのためにアヴローラを目覚めさせたのか」

古城が長い溜息をつく。牙城はおそらく、ずっと探し続けていたのだ。凪沙を救う方法を。そのために家族とも離れて世界中を駆けずり回っていた。そして彼はヴェルディアナに出会い、〝柩〟の鍵の存在を知ったのだ。

あるいは深森も、計画に絡んでいたのかもしれない。今にして思えば、深森の助手の遠山が、都合良く古城に通行証をくれたのも不自然だった。

しかし牙城は、どこか切なげに目を細めて、古城の頭を乱暴に撫でた。

「そうだな……まあ、それもある」

「どういう意味だよ？」

古城が不審げに眉を寄せるが、牙城はなにも答えない。鋭く細められた彼の目が、夜の埠頭を睨んでいる。

「やれやれ……もう来たか。意外に早かったな」

残っていたビールを飲み干して、牙城が気怠げに立ち上がった。彼がつかみ上げたのはブルパップ式のライフル銃だ。明らかな銃刀法違反だが、今さら突っこむ気にもなれない。

そのとき金髪の吸血鬼の少女が、なぜか小動物のように身体を震わせて、古城の腕にしがみついてきた。古城が困惑して彼女を見る。

「……アヴローラ？」

ひう、と頼りない声を洩らして、アヴローラは身体を硬直させていた。

そして古城も、彼女の恐慌の原因に気づく。

アヴローラが見つめているマリーナの岸壁に、見慣れない人影が立っている。

スーツを着た痩身の中年男性だ。彼の両脇には、黒装束の二人組が護衛よろしく立っている。先刻アヴローラを攫おうとした連中の仲間だろう。

しかし古城の視線は、その恐るべき黒装束たちではなく、彼らの背後に立つもう一人の姿に注がれていた。黒装束たちの肩にも届かない小柄な人影に。

「おまえは……なんで……」

驚愕にかすれた声で、古城がうめく。

黒装束たちの背後に立っていたのは、十三、四歳ほどの小柄な少女だ。

彼女が身につけているのは、飾り気のない、ライダースーツに似た強化繊維製の防護服。表面には無機質なローマ数字が印字されており、試作品の兵器を見ているような印象を受ける。

無感情に古城たちを見つめる少女の髪は金色。瞳は焔のような青白い輝きを放っていた。

妖精めいた儚げな美貌は、古城の隣で震える吸血鬼の少女によく似ている。

鏡に映したように、よく似ている。

「なんでアヴローラが……二人いるんだ……!?」

古城の呟きが大気を虚しく震わせる。

アヴローラと同じ顔をした少女は、そんな古城を、無感情に見つめ続けている。

3

ヴェルディアナ・カルアナは、見知らぬベッドの上で目を覚ました。

馬鹿馬鹿しく高価そうな天蓋付きのベッドだ。

部屋の内装も豪華だった。美しいアンティーク家具で統一されたインテリア。特注とおぼしき絢爛なカーテン。窓の外に見えるのは〝魔族特区〟の美しい夜景だ。

「ここは……？」

ぎこちなく上体を起こして、ヴェルディアナは周囲を見回した。

おそらく高級マンションの最上階近くの一室だ。監禁されているというわけではないらしい。着ていた服は脱がされて、代わりに身体中に包帯が巻かれている。傷の治りが遅いのは、対魔族用の特殊な弾丸を使われたせいだろう。それでも出血は止まっている。痛みはまだ少し残っているが、ちぎれかけた右脚も、どうにか動かせる程度には回復していた。

「気がついたか？」

いつからそこに立っていたのか、不意に誰かに声をかけられた。舌足らずだが、奇妙な威圧感のある口調だ。怪我人の容態を確かめているというよりも、臣下を問責する女帝のごとき、圧倒的な威厳を備えている。

その声の主は幼い少女のような外見をしていた。

長い黒髪と白い肌。そして西洋人形のごとき豪奢なドレス。

「く……〝空隙の魔女〟!?」

激しい恐怖に衝き動かされて、ヴェルディアナはベッドから飛び降りた。

〝空隙の魔女〟こと南宮那月は、欧州の魔族にとっては恐怖の代名詞だ。日本政府に雇われた国家攻魔官というよりは、無慈悲な虐殺者というイメージが強い。逃げ切れるわけがないと自覚しながらも、逃げなければという闇雲な思いに囚われる。

しかし傷ついた右脚に力が入らず、ヴェルディアナは、その場で大きくバランスを崩した。

「おわっ!?」

倒れこんできたヴェルディアナと激突しかけて、部屋にいたもう一人の人物が悲鳴を上げる。トレイに載せていたグラスを落っことし、床にぶちまける寸前で危うくキャッチしたのは、髪をツンツンに逆立たせた学生服姿の少年だった。

「あなた……基樹!?」

「うぃす。また会ったな、ヴェルさん」

グラスに注いだ冷水を差し出しながら、矢瀬基樹が馴れ馴れしく笑いかけてくる。

ヴェルディアナが、この過適応能力者の少年に会うのは二度目だった。暁古城の監視役である彼が、今回のヴェルディアナの行動を把握していたのは、考えてみれば当然のことだ。しかし皮肉っぽい笑みを浮かべた彼の瞳に、ヴェルディアナに対する敵意は感じない。

「やれやれ、血の気の多いことだ。その様子なら傷の具合も大丈夫のようだな」

床に座りこむヴェルディアナを見下ろして、那月が溜息混じりに呟いた。多少呆れてはいるものの、彼女の言葉にも攻撃的な響きはない。

「あなたたちが、助けてくれたの……？」

ヴェルディアナが恐る恐る訊いてみる。那月はどこか不機嫌そうに矢瀬を横目で眺め、

「出来の悪い教え子の依頼でな」

「教え子？」

攻魔師としての弟子ということだろうか、と勝手に想像してヴェルディアナは納得する。よりにもよってあの〝空隙の魔女〟が、中学生の英語教師をしている、とはさすがに想像できなかったのだ。

手渡されたグラスを傾けて、ヴェルディアナは一息に水を飲み干した。喉の渇きが癒えると、少しだけ冷静さも戻ってくる。

「ところで、私の服はどこ？」

下着と包帯だけしか身に着けていない身体を、シーツで隠しながらヴェルディアナが訊いた。那月は面倒くさそうにヴェルディアナを一瞥する。

「ああ、あの趣味の悪い服なら捨てた」

「捨てた!?」

「銃で撃たれて穴だらけだった上に血まみれだったからな。腐る前に捨てておいた」

「ど……どうしてくれるのよ!? 私の着替えは!?」

貧困にあえぐヴェルディアナにとって、あの黒革のスーツは貴重な一張羅だったのだ。そ

もそも服がなければ、ここから出て行くこともできない。
涙目で抗議するヴェルディアナを、那月は鬱陶しげに見返して、
「替えの服なら、そこのクローゼットに入っている。好きなのをくれてやろう。選べ」
「え？」
そう言われてヴェルディアナは、シーツを引きずりながらクローゼットへと向かったが、
「メイド服しかないじゃないの⁉」
「当然だ。そこにストックしてあるのは使用人用の制服だからな。そもそもおまえの体格では、私の服は着られないだろうが」
那月が平静な口調で言い返す。うぐ、とヴェルディアナは沈黙するしかない。戦王領域出身の女性としては比較的小柄なヴェルディアナだが、そんな彼女よりも那月はさらに、十センチ以上も背が低く、肩幅も狭い。
「それはたしかにそうだけど……うう、カルアナの娘である私がなぜ使用人の恰好を……」
小声で文句を言いながら、ヴェルディアナは仕方なく服を選ぶ。スカートの長さや袖の形など種類は豊富だが、とにかくすべてメイド服だ。
「ところでおまえには、ＭＡＲ襲撃の容疑もかかっていたな、ヴェルディアナ・カルアナ？」
ようやく着替えを終えたヴェルディアナに、那月が唐突に訊いてきた。リボンを結びかけた姿勢のまま、ヴェルディアナが、ぎくりと硬直する。

「ついでに市街地での眷獣召喚、それに魔族登録証の不携帯か」

「そ、それは……」

「このまま特区警備隊に突き出してしまえば面倒がなさそうだが、おまえの行動には少し興味がある。情報を提供するなら、処遇を考えないでもないぞ」

天鵞絨張りのチェストに腰掛けた那月が、悠然とした口調で呼びかけてくる。取り引きというよりも完全な脅迫だ。逆らうことなど思いつかない、逆らえる気もしない。

「いいわ……なにが聞きたいの？」

ヴェルディアナが悔しげに那月を睨む。那月は、長い睫毛に縁取られた目を細め、

「おまえを襲っていた連中、ネラプシの匈鬼だな。奴らを率いていた男は何者だ？」

「……バルタザール・ザハリアス。ネラプシ暫定自治政府の議長よ。もっともあいつの正体は、政治家なんかじゃないの。いわゆる死の商人。兵器商よ」

「聞き覚えのある名前だな。第四次匈鬼戦争の立役者か」

那月の言葉に、ヴェルディアナが全身を震わせた。激しい怒りに表情が引き攣る。

「そうよ。十四年前に、ネラプシが〝戦王領域〟カルアナ伯爵領に侵攻して戦争が始まった。そのときネラプシに武器と兵隊を供与したのがザハリアス。あの男のせいでカルアナの騎士団は壊滅し……カルアナ伯は戦死した……」

戦死したカルアナ伯とは、すなわちヴェルディアナの父だった　騎士団を壊滅させた不名誉は〝忘却の戦王〟の不興を買い、カルアナ伯爵家の領地は剝奪。ヴェルディアナも貴族の地位を失うことになる。すべては死の商人たるザハリアスの仕組んだことだ。

「その兵器商が、なぜ絃神島にいる？」

那月が不機嫌そうな声を出す。ヴェルディアナは、屈辱に耐えるように唇を噛んだ。

「戦争のどさくさで、あの男はカルアナ家に預けられていた九番目の〝焔光の夜伯〟を強奪したの。そして〝宴〟の開催を求めているというわけ」

「宴……？」

「〝焔光の宴〟よ。第四真祖を真の覚醒に導くための儀式だと聞いているわ」

ヴェルディアナの説明に、那月は侮蔑の表情を浮かべた。

「ふん……匈鬼が、真祖を王に戴くつもりか」

「そうよ。まったく馬鹿げているわ」

ヴェルディアナが憤慨したように言い放つ。

一方、矢瀬は、どこか感心したように低く唸って、

「けど、効果的だよな。第四真祖を手に入れれば、ネラプシは新たな夜の帝国の首都になるわけだし。周辺諸国も独立国の地位を認めないわけにはいかないだろ」

「そうだな。それに武器商人のザハリアスにしてみれば、世界最強の吸血鬼という名の商品は、さぞかし魅力的に思えるだろう。獣人優位主義者あたりに売りつければ、国のひとつやふた

つ簡単に消し飛ぶぞ」

那月が無責任な口調で同意する。そんな二人を、ヴェルディアナは眉を逆立てて睨みつけ、

「そんなことが許されるわけないでしょう!?」

「なるほどな。それでおまえは十二番目の〝焔光の夜伯〟を覚醒させて、対抗しようとしたわけか。あわよくば父親の仇が討てるとでも思ったか？」

「それをあなたに責められるいわれはないわ、魔族殺しの〝空隙の魔女〟！」

ヴェルディアナは、思わずカッとなって那月を怒鳴りつけた。そしてすぐに自らの失言を悟って青ざめる。こんなところで〝空隙の魔女〟の怒りを買ってしまったら、なぶり殺しにされても文句は言えない。

しかし那月は怒り狂うようなこともなく、躾の悪い犬を見るような、嗜虐的な視線をヴェルディアナに向けただけだった。そして彼女は手に持っていた扇子を静かに畳み、

「べつに責めはせんが……貴様の偉そうな物言いは不愉快だな。メイド服の分際で」

「痛っ！　なにその理屈!?　誰のせいでこんな服を着てると思ってるの!?」

デコピンを百倍増しにしたような謎の衝撃を額に喰らって、ヴェルディアナが涙声になる。

彼女たちのやりとりを他人事のように傍観していた矢瀬は、

「〝焔光の宴〟か……ヴェルさんの立場はわかったけどよ、まずくないか、那月ちゃん？」

「なに馴れ馴れしく呼んでるの!?」

「年上をちゃん付けで呼ぶな」

二人に同時に怒鳴られて、矢瀬が小さく肩をすくめた。

「だいたい十二番目の〝焔光の夜伯〟を目覚めさせるってのも、あんた一人で考えたことじゃないだろ。仕掛け人は古城ンとこの親父あたりか？」

「だ、だったらどうしたっていうの？」

「あんたは嵌められた可能性があるってことだよ。たしかに凪沙ちゃんを助けるには、ほかに方法がなかったんだろうけどよ」

「なんのこと……？」

急に不安を覚えて、ヴェルディアナが訊き返す。矢瀬はうんざりしたように歯を剝いて、

「あんたは自分が選帝者になって、ザハリアスって野郎に復讐するつもりだったんだろうが、たぶんそうはならねえって話だよ」

そして矢瀬は、腹立たしげに窓の外に目を向けた。

薄暗い夜空を背景にそびえていたのは、逆ピラミッド型の巨大な建物だ。

「畜生、幾磨あたりが考えそうなことだぜ……公社の理事会は最初からそのつもりだったんだな。それで俺を古城の監視役につけたのか」

「……基樹？」

ヴェルディアナが困惑したように矢瀬を見る。無言で壁を殴りつける矢瀬に代わって、言葉

ストライク・ザ・ブラッド
愚者と暴君 8

Contents

序章 Intro 11
第一章 逃避行 The Fugitives 29
幕間 i 94
第二章 十二番目のアヴローラ Avrora, The Twelfth 103
幕間 ii 160
第三章 血の従者 Blood Servant 163
幕間 iii 224
第四章 宴の夜 The Last Supper 229
幕間 iv 291
第五章 愚者と暴君 Tyrant and The Fool 297
終章 Outro 355
あとがき 376

デザイン 渡邊宏 *(有限会社ニイナナニイコオ)

を続けたのは那月だった。

「おまえは、ザハリアスに復讐するために十二番目の〝焔光の夜伯〟を目覚めさせたのだったな、メイド？」

「え、ええ……**ていうか、誰がメイドなの!?**」

「そのザハリアスが絞神島にいた理由はなんだ？　なぜそいつは、おまえが十二番目の封印を解くことを知っていた？　そもそもＭＡＲほどの企業が、貴重な十二番目の〝焔光の夜伯〟をあっさり手放したことを不思議に思わなかったのか？」

「誰かに仕組まれていたっていうの？　私が十二番目を目覚めさせたことも？」

ヴェルディアナが、あり得ない、というふうに首を振る。那月はそれを冷たく見返して、

「ＭＡＲには兵器の製造部門があったはずだ。武器商人のザハリアスなら、当然、なんらかのつながりがあると考えていいだろう。巨大企業のＭＡＲを間に挟めば、日本政府を動かすのも難しくはないはずだ」

「**でも……そんな……**」

「たとえ〝焔光の夜伯〟を手に入れたところで、領地を失ったおまえに〝宴〟の開催資格はない。十二番目が目覚めたことで、いちばん得をするのは誰だろうな？」

「嘘……」

ヴェルディアナは反論の言葉をなくして、その場に弱々しく膝を突いた。

4

そんな彼女を冷ややかに眺めたまま、那月が紅い唇を小さく歪める。

「第四真祖の復活の儀式か　まったく面倒なことに巻きこんでくれたものだな、暁、古城」

痩身の中年男性が、カイゼル髭を撫でつけながら古城たちのほうへと近づいてくる。

左右に黒装束を従えた男の姿は、観客を前に舞台に立ったサーカス団の団長を連想させた。困惑している古城たちを眺めて、彼は芝居がかった仕草で一礼する。

「やあ、皆様、おくつろぎのところをお邪魔して申し訳ありません。少しばかりお時間をいただいても構いませんでしょうか　ふふ、いい夜ですね」

朗らかに話しかけてくる男の目は、体温を感じさせない冷たい光をたたえていた。

その爬虫類めいた視線を避けるように、アヴローラが古城の背中に隠れる。彼女を庇うように身構えながら、古城は男たちを睨みつけた。

「**おまえら……さっきの……**」

古城の声が緊張でかすれる。

男の左右にいる黒装束たちは、間違いなくアヴローラを攫おうとした連中の同類だ。彼らの危険さは知っている。先ほどは牙城が彼らを蹴したが、あの戦闘は、あくまでも奇襲だった。

今度も同じように撃退できるという保証はない。

しかし牙城は、旧知の友人を迎えるように、ビールの空き瓶を掲げて気さくに笑い、

「悪いな、旦那。もう少し早く来てくれたら、冷えたエールをご馳走してやれたんだが。ご覧のとおりの有様でな」

「いえいえ、どうぞお気になさらず。こちらこそ手土産のひとつも持参しなかった不作法を、どうぞお許しください。我ら傭兵上がりの戦闘民族でありますので――」

カイゼル髭の男も、牙城の呼びかけに畏まって応じた。

ライフルを肩に担いだまま、牙城がふてぶてしく唇を吊り上げる。

「ネラプシのザハリアス議長か。おっかない噂はいろいろと聞いてるぜ」

「こちらこそ、〝死都帰り〟暁牙城博士の高名はかねがね存じております。先ほどは我々の同志が大変なご無礼をしてしまったそうで、申し訳ありません」

「……意趣返しに来たってわけでもなさそうだな？」

牙城の疑問に、ザハリアスと呼ばれた男は驚いてみせる。

「ええ。滅相もありません。むしろ〝宴〟の選帝者として、非礼を詫びに参上した次第です」

「ハッ……なるほどな。そういう事情か」

牙城は愉快そうにうなずいて、船の手すりに気怠く寄りかかる。

古城よ、そんな父親を訝しく眺めて、

「どういうことだよ、親父……。人で勝手に納得してないで説明しろ。どうしてアヴローラが二人いるんだ？」

「アヴローラ……？　ああ、十二番目に名前をつけたのですね。ふむ、そういう趣向もありでしょう。優れた兵器に銘や愛称はつきものですからな」

ザハリアスが腕を組み、感心したように深々とうなずいた。

「それでは僭越ながら、こちらも九番目を紹介させていただきましょう。〝戦士領域〟旧カルアナ伯爵領に囚われていたものを、我らネラプシの手で解放いたしました。九番目の〝焔光の夜伯〟です」

「九番目……？」

ザハリアスが伸ばした右手の先には、アヴローラと同じ顔の少女が立っている。

波打つ金髪と白い肌。素肌に張りつく強化繊維製の防護服が、彼女の華奢な体つきをいっそう強調していた。その姿はアヴローラと見分けがつかないほどよく似ている。

「知り合いか、アヴローラ？」

「わ、我が記憶に、斯様な鏡像の刻印は非ず……」

声を潜めて訊いた古城に、アヴローラが頼りなく首を振った。九番目と呼ばれた少女の出現に驚いているのは、むしろ彼女のほうなのかも知れない。

「おや、ご存じないとは、いまだ完全に覚醒していないということですか」

アヴローラの反応を見ていたザハリアスが、少し意外そうに眉を上げた。
ふむ、と彼は思案するように顎を撫で、
「よろしい、ではご説明いたしましょう　〝焔光の夜伯〟とは、新たなる真祖を生み出すための計画、そしてその計画によって造られた第四真祖の素体の総称です。三名の真祖たちと〝天部〟の技術によって生み出された、至高の殺神兵器ですよ」
「……兵器……だと？」
古城は唖然とした顔でザハリアスを見つめた。
アヴローラが不安そうに古城の背中にしがみつく。この気弱な少女が兵器だといわれても、普通なら信じる気にはなれないはずだ。だがそれでも、ザハリアスの言葉には奇妙な説得力があった。ただの吸血鬼だと断言するには、アヴローラには不可解な部分が多すぎる。
封印の遺跡。氷の柩。失われた記憶。そして九番目――もしもアヴローラが、人工的に量産された生体兵器だというのなら、それらの疑問のいくつかは消える。
然様。この九番目も、あなたの十二番目も、同じ目的、同じ技術によって造り出された兵器です。ですが誤算がありました。しばしば人間は過ちを犯す。それは古代超人類たる〝天部〟の人々も例外ではなかったようです」
そこでザハリアスは、オペラ歌手のように両腕を広げて、悲嘆に暮れた表情をしてみせた。
「すなわち、第四真祖として完成した〝焔光の夜伯〟は強力すぎたのですよ。兵器としては規

格外なまでに」
「……」
古城は無言でザハリアスの言葉を聞く。
そう、第四真祖とは世界最強の吸血鬼の名だ。一切の血族同胞を持たない災厄の化身。世界の理から外れた冷酷非情な化け物
人工的に造られた兵器に、これほど相応しい形容もないだろう。
「最古の吸血鬼である真祖をも超える、世界最強の吸血鬼、それが第四真祖です。その存在は、世界の均衡を崩し、秩序を乱す　ゆえに〝焔光の夜伯〟は封印されました　あるものは嵐の砂漠の中に、またあるものは氷の柩の中に」
「その封印が解けたのか……アヴローラと同じように、その子も」
九番目と呼ばれた少女を見つめて、古城が訊いた。
どこか得意げに目を細めて、ザハリアスが首を振る。
「解けたのではありませんよ、解いたのです」
「なんで……!?」
「兵器の封印を解く目的はひとつです、戦争に使うためですよ」
なぜそんな当たり前のことを訊くのか、とザハリアスは不思議そうに微笑んだ
あまりにもその口調が自然だったせいで、古城はなにも言い返せなくなる

「過去にも何度か、〝焔光の夜伯〟の封印が解かれた記録が残っています。大きな歴史の転換点には、必ずといっていいほど彼女たちは目覚めている」
「近い将来……どこかで大きな戦争が起きるってことか？」
アヴローラと九番目――二人の少女を見比べて、古城がうめく。
「そういうこともあるでしょう。世界中に紛争の火種は尽きませんからね」
ザハリアスは哀しげに目を伏せた。それは戦争の悲惨さ、残虐さを熟知した上で、なお戦争を利用しようとする狡猾な現実主義者の顔だ。
「九番目の〝焔光の夜伯〟と言ったな」
「たしかに」
「ほかにもいるのか。ここにいる二人のほかにも、第四真祖の候補者が」
「ええ、ここにいる二体のほかにも、ざっと十体ほど」
ザハリアスはそう言って、深刻そうに顔をしかめてみせる。
「それがどれほど危険なことか、あなたにも想像がつくでしょう。なにしろ第四真祖はほかの二名の真祖と同等以上の力を持っている。それが全部で十二体。不完全とはいえ、第四真祖の素体同士が争うような事態になってしまったら、もはや誰にもそれを止められません」
本気で恐れるように肩を震わせて、そしてザハリアスは笑ってみせた。
ですが、どうぞご安心を　私の本職は貿易業　主に兵器を扱っております　口さがない

輩は、死の商人などと非難しますが、兵器の取り扱いに関して、我らの右に出る者はいないと自負しておりますゆえ」
「兵器……商人……？」
古城はようやく、ザハリアスの饒舌さの理由に気づいた。彼が長々と第四真祖について語ったのは、古城に対する親切などではない。ザハリアスは商人だ。そして彼の言葉のすべては、取り引きの過程。商談の一部に過ぎないのだ。
「さあ、そこで本題です、暁古城殿」
「……本題？」
「はい、どうぞ私めに、そこにいる十二番目をお譲りいただきたい」
ザハリアスは、そのとき初めてアヴローラに真っ直ぐな視線を向けた。
その視線に射竦められたように、金髪の吸血鬼の少女が息を呑む
「あんたにアヴローラを売れって言うのか？」
低く圧し殺した声で、古城が確認する。ザハリアスは人仰にうなずいて、
「対価は、そうですね、二百億円でいかがです？」
「は……!?」
古城が驚きに目を剝いた。それを不服と受け取ったのか、ザハリアスは苦笑して、
「ふむ、足りませんか。ではその倍……いえ、三倍まで出しましょう。なにしろ商品は世界最

強の兵器です。金に糸目はつけない、と申し上げたいところですが、私の資産にも限りがありまして。不足分につきましては、なにとぞご容赦を」

「商品……か」

ザハリアスの言葉を反芻し、古城は小さく鼻を鳴らした。怯えるアヴローラを安心させるように笑いかけ、彼女を隠すように前に出る。

「悪いけど、こいつは兵器じゃねえし、兵器扱いするやつのところにやる気もねえよ」

「そうですか――」

ザハリアスがすっと目を鋭くする。彼の左右にいた黒装束が、かすかに重心を落とす気配があった。いつでも動けるように身構えたのだ。

だらしなく船に寄りかかる牙城の手元で、ライフルの安全装置が外れる音がする。

ただ一人、九番目と呼ばれた少女だけが、瞬きもせずに古城を見つめている。そして、

「残念ですのですが、気が変わったらいつでもお申し付けください。手遅れになる前に、ぜひ」

意外にもザハリアスは、取り引きを無理強いすることなく、あっさり引き下がった。力ずくで奪いに来ると思っていた古城は、その反応に少し拍子抜けする。

しかし張り詰めたような緊張感はそのままだ。

古城は、粘りつくような重苦しい空気に逆らって、ザハリアスの背後にいる少女を見つめ、

「九番目さん……だっけか。あんたも兵器扱いされるくらいなら、うちに来いよ。金は払えないけど、美味いアイスを喰わせてやるぜ――」

防護服に身を包んだ金髪の少女が、少し驚いたように瞳を揺らした。

その瞬間、九番目の周囲を凄まじい風が取り巻いた。

小規模な竜巻にも匹敵する暴風だ。

大気がうねって、激しく軋んだ。それは古城に対する彼女の怒り、あるいは得体の知れないものへの恐怖が、そのまま形を与えられたかのような強烈な衝撃波だった。

撒き散らされた震動が、破壊的な超音波となって無差別に周囲を破壊する。

激しい耳鳴りと頭痛に、古城は耳を押さえた。

海面が荒れ狂い、船が揺れる。桟橋に打ちつけられた床板が、無惨に剝がれて砕け散る。

そしてなによりも恐ろしいのは、これが九番目の攻撃ではない、ということだった。彼女は自身の眷獣すら召喚していない。感情の乱れによって洩れ出した、ほんのわずかな魔力の余波が、これだけの破壊を引き起こそうとしているのだ。

彼女の怒りが向けられた瞬間、古城は跡形もなく消滅する。誰に言われるまでもなく、古城はそれを理解していた。それが第四真祖の素体、九番目の〝焔光の夜伯〟の力なのだ。

だがその九番目の視線の先に、立ちはだかった影がある。

それは逆巻く炎のような金髪をなびかせた小柄な少女だった。アヴローラだ。

古城を庇うように両腕を広げて、アヴローラが九番目の前に立っている。

「――九番目（エナトス）！」

ザハリアスが、暴風に包まれた防護服の少女を叱責した。

その声が届いたのかどうかは定かではない　だが、その瞬間、九番目の周囲を取り巻いていた震動と衝撃波の壁が、嘘のように消滅する。

荒れ狂っていた大気がしだいに落ち着きを取り戻す。海面はいまだに激しく波打ち、桟橋につながれた船が揺れていたが、それ以上の致命的な被害はどうにか免れたようだった。

ヒュウ、と牙城が疲れたような息を吐く。黒装束の男たちも、どこか安堵したような気配を漂わせている。

腰を抜かしたようにその場にへたりこむアヴローラを、古城がギリギリで背後から支えた。

「大変失礼いたしました。ですが、素体どもの危険性、これでご理解いただけたでしょうか」

ただ一人、涼しげな表情のザハリアスが、恭しい仕草で一礼する。

「いずれまた、ご挨拶にうかがいます。そのときにはぜひとも色よい返事をお聞かせください」

それでは、とザハリアスが古城たちに背を向けた。

立ち去る彼らを、古城は無言で見送った。街灯が破壊されてしまったせいで、周囲は暗い。兵器商たちの姿はすぐに、闇にまぎれて見えなくなる。

ただ九番目の髪の輝きだけが、いつまでも古城の瞳に焼きついていた

虹のように色を変えていく鮮やかな金髪の輝きだけが

5

「はあ……」

牙城の船のソファに寝転んで、古城はぐったりと息を吐いた。全身が疲労で鉛のように重い。

九番目と呼ばれていた少女の力に対する、驚愕の余韻がまだ残っている。

挑発したつもりではなかったのだが、古城の何気ないひと言が彼女の感情を揺らし、魔力の暴走を招いてしまったのだ。その辻闘さを今さらのように反省する。

あれほどの力を持ちながら、彼女はただの素体に過ぎないのだ。第四真祖としての完全な力を手に入れたら、どれだけ凄まじい怪物に進化するのか想像もつかない　兵器商であるザハリアスが、彼女たちに固執する理由もわかる気がした。

一方、もう一人の素体であるはずのアヴローラは、そうやって落ちこむ古城の傍らに、飼い犬のように屈みこみ、

「は、褒めて遣わす！」

緊張でガチガチになりながら、声を上擦らせてそう言った。

顔を真っ赤にしている彼女に、古城は怪訝な視線を向ける。

「……あ？」

嬉しかったんだろうよ、おまえがお姫様をザハリアスに売り渡さなかったからな」

うつむいて沈黙するアヴローラの代わりに、牙城が投げやりに解説してくる

「ああ、なんだそんなことか」

古城はのろのろと身体を起こし、どういたしまして、とアヴローラの頭に手を置いた。

第四真祖の素体の危険性を思い知らされた今となっては、古城とて、自分の判断が正しかったと断言できるほどの自信はなかったのだ。アヴローラ本人が喜んでくれているのなら、それだけでもずいぶん救われた気分になる。が、

そんな古城のささやかな安堵をぶち壊すように、牙城が深々と溜息をつき、

「けど、馬鹿だねェ、おまえも。六百億円だぜ、六百億円。一生遊んで暮らせるどころの騒ぎじゃねえぞ。それをあっさり断っちまって」

「言うな。俺だって少しは未練を感じてるんだから」

古城が正直に告白する。

とはいえ、ザハリアスの提示した金額が大きすぎて、実感が湧かなかったというのも事実だ。もっと身近な、宝くじ程度の大金だったら、よっぽど真剣に悩んでいたはずだ。

「まあ、アヴローラを引き渡したところで、ザハリアスの野郎が本気で金を払ったかどうかは怪しいもんだけどな。用済みになった途端、殺されて埋められるパターンだろ、あれは」

「あ、ああ……そうだよな」

「そもそも、あんな舐めた取り引きに応じるような小賢しいガキは、俺が背中から撃ち殺して、現金も持ち逃げしてやるつもりだったけどな……」

「てめェ、本当に父親かよ!?」

やけにリアルな牙城の台詞に、半眼になって古城がうめく。今のが冗談に思えないところが、暁牙城の暁牙城たるゆえんだ。

その牙城は、しばらく一人で船内の荷物を漁っていたが、やがてライフルを詰めこんだ馬鹿でかいゴルフバッグを持って立ち上がり、

「さてと……ほらよ、古城」

そう言ってなにかを放ってきた。錆の浮いた安っぽいキーホルダーだ。

「なんだ、これ？」

「この船の鍵だ。設備の使い方は、まあ、なんとなくカンでわかるだろ。ていうか、わかれ」

一方的に言い残すと、牙城はそのまま古城たちを残して船を降りようとする。

「ちょっと待て、親父。どこに行く気だ？」

「俺はこれからやることがあるんだよ。深森のやつはいいとして、とりあえず凪沙の安全を確保しとかねえとな……ったく、どっかの小僧が考えなしにザハリアスに喧嘩を売りやがるから、余計な仕事が増えちまったじゃねえか」

牙城が面倒くさそうに説明する。む、と古城は唇を結んだ。

たしかに牙城の言葉にも一理ある　そもそも牙城がアヴローラを目覚めさせようとしたのは、凪沙の治療が目的だったのだ。アヴローラを狙っている兵器商のせいで、凪沙を危険にさらすようなことになったら本末転倒だ。が、

「アヴローラはどうするんだよ……？」

「任せた」

「は!?」

「この船はしばらく貸しといてやるよ。ま、柄にもなく商談を持ちかけてきたところをみると、ザハリアスの野郎も、ここではそう荒っぽい真似ばかりもできないんだろ。紘神島はあいつにしてみれば完全な敵地だしな」

「いや、だけど……」

父親の無責任な物言いに、古城はさすがに不満を覚える。なにしろザハリアスの部下の黒装束には、ほんの数時間前に危うく殺されかけているのだ。荒っぽい真似ができないという説も、どこまで信用できるか怪しいものだ。

しかし牙城は緊張感のない表情でヘラヘラと笑い、

「安心しろって。アヴローラだって、さっきの九番目たんと同格の素体なんだからよ。ザハリアスの野郎も、そのお姫様のヤバさはよく知ってる　おまえが懐かれてるとわかった以上は、

向こうもおいそれとは手は出せねえよ」

「そ、そうか……」

古城は渋々と父親の意見を受け入れた。牙城もまったく無根拠に安全だと判断したわけではないらしい。わかったかよ、と勝ち誇ったように牙城は胸を張り、

「それよりも記憶だ。あれこれ悩むより、アヴローラの記憶を回復させるほうが早い」

「まあ、それはそうなんだろうけどな」

きょとんとした表情のアヴローラを眺めて、古城は軽く途方に暮れる。

「でも記憶を回復させるって、どうやれば……？」

「知るか。俺は考古学者だ。医者じゃねえ。ちっとはてめえで考えろ」

「おまえ、やっぱり無責任過ぎるだろ！」

古城は忌々しげに舌打ちしてうめいた。

もちろん牙城ごときに、なにもかも任せて安心、などという馬鹿げた期待を抱いていたわけではない　アヴローラ本人が本来の記憶を取り戻さないことには、問題が解決しないというのもわかる　しかし肝心の、記憶の回復方法が無策というのは、いくらなんでも大雑把すぎた。

それでも牙城は悪びれもせず、

「頼まれもしないのに役に立たないアドバイスをするほうが、よっぽど無責任だろ　せいぜい刺激を与えてみればいいんじゃねえか。いろんなものを見せたり、他人に会わせたり」

「それは無責任なアドバイスじゃねえのかよ」

「細かいことはいいんだよ。とにかくザハリアスが本気で動き出すのは、まだ先だ。それまでせいぜいアヴローラと仲良くしとけ」

「……ああ」

古城は真顔になってうなずいた。

父親の言葉に従うのは癪だが、自分がアヴローラを放っておけないということは、骨身に沁みてわかっていた。古城が彼女の血の従者であるという事実や、凪沙との関係だけではない。なによりもこの気弱な記憶喪失の少女を見捨てるのは、寝覚めが悪い。悪すぎる。

「ああ、それとな。古城、おまえ、お姫様にパンツくらい穿かせてやれよ。いくらここが常夏の島だからって風邪ひくぞ」

そして船室を出て行く寸前に振り返った牙城が、思い出したようにアヴローラのスカートを指さした。古城は、げほっ、と咳きこんで、

「なんで穿いてないってわかった!?」

「ふっ……中年男の眼力を舐めんな」

妙に気取った表情でそう言って、今度こそ牙城は船を降りる。

古城はぐったりとソファにもたれて嘆息し、

「たく、久々に顔を合わせたと思ったらこれかよ……クソ親父」

「み、淫らなる血脈の源泉を感じる」

「俺のどこがあの変態に似てるんだよ!?」

頬を赤くしたアヴローラに横目で睨まれて、古城はうんざりと頬杖を突いた。

これまで連絡がなかったわけではなかったが、父親とまともに顔を合わせたのは二年ぶりだ。牙城の相変わらずの身勝手さが、腹立たしくもあり、懐かしくもある。

ともあれ、あの男が、凪沙を救うために、なにかしらの努力を続けていたことだけは素直に賞賛できた。多少の不満には目を瞑ってやろうという気分になる。

「まあ……下着のことは、たしかになんとかしないとな。服だっていつまでも凪沙の制服ってわけにはいかないだろうし。とりあえずその辺は明日考えるか」

「よ、よかろう」

アヴローラが心細げにスカートを押さえたまま同意する。

「なんにしても寝泊まりできる場所が確保できたのは助かったな。電気も来てるし、ここなら風呂やトイレの心配もなさそうだし」

そう言って古城は〝りあな号〟の船室を見回した。

小型船の内部とはいえ、生活するのに不自由のない空間である。キッチンにテーブル、ソファやベッド、冷蔵庫や電子レンジまで、必要なものはひととおりすべて揃っている。電気は港から供給されているし、下手に安いホテルを借りるよりも快適かもしれない。

アヴローラも満足したのか、ぎこちなくも嬉しそうに微笑んで、

「清浄なる秩序よ」

ああ、たしかに……あの親父が暮らしてたにしては、妙に片付いてやがるな」

瞬、本気で感心しかけて、古城はふと疑念に囚われた

記憶の中の暁牙城という男に、綺麗好きという印象はまったくない　あの男の私室も職場の研究室も、とにかく乱雑に散らかっていたはずだ。娘の凪沙が病的なまでの片付け魔になった原因のひとつが、そんな父親に対する反動ではないかといわれている。

唯一、牙城の部屋が片付いていたのは、彼の周囲に女性の影がちらついている時期だけだ。

そういえばこの船室からも、そこはかとなく香水の残り香のような芳香を感じる。

「まあいいか……」

俺はなにも気づかなかった、と古城は、自分自身に言い聞かせて目を閉じた。

ああ見えて深森は意外に嫉妬深いのだ。牙城がうっかりほかの女と仲良くすると、妻である彼女の怒りの矛先は、無差別に周囲に向けられることになる。ただでさえ面倒な状況なのに、この上、夫婦喧嘩のとばっちりを受けたらたまらない。

「さすがに今日は疲れたな。俺はそろそろ帰って寝るわ……」

船内の時計を確認して、古城はのろのろと立ち上がる。と、船室のベッドで遊んでいたアヴローラが、びっくりしたように顔を上げた

快適でも、しょせんは狭い船の中だ。相手が人間以上の力を持つ吸血鬼とはいえ、ほとんど初対面の少女と一緒に、夜を明かすことには抵抗がある　牙城の言葉を信用するなら、ザハリアスも当面はアヴローラに手を出さないはずだし、四六時中見張っていなくても問題はないと古城は考えたのだ。

しかしアヴローラは、捨てられた子猫のような瞳で古城を見上げ、必死で袖口にしがみついてくる。思いがけない彼女の過剰反応に、古城は少し戸惑って、

「アヴローラ？」

「……わ、我が魂の安寧のため、汝の掌に契約の輔を」

えーと……眠るまで手をつないでろ、ってことか？」

こくこく、と懸命にうなずいてくるアヴローラ。それを見てようやく古城は思い出す。

牙城に見せられたスクラップブックの写真、氷の柩の中に閉じこめられていた少女の姿を。

「そうか……おまえは今までずっと独りぼっちで眠り続けてたんだよな」

古城の呟きに、吸血鬼の少女が弱々しく目を伏せた。

記憶がなくても、その絶望的な孤独感は、アヴローラの心にトラウマのように刻みつけられているのだろう。彼女が一人で眠ることに恐怖を覚えるのも無理はない。

眠ったらまた独りぼっちになるのではないか。二度と再び目覚めることがないのではないか。

そんな不安を抱えているのかもしれないと古城は思う。

序章

intro

「わかったよ。今夜は一緒にいてやるから。でも寝る前にせめて顔くらい洗って歯を磨け」
「……ん！」
古城の言葉を聞いたアヴローラが、バスルームへと大慌てで走っていった。船内には小型のユニットバスが設置されており、シャワーも浴びられるようになっているのだ。
「ひうっ……！」
しかし顔を洗おうとしていたアヴローラは、そこで頼りない悲鳴を上げて尻餅をつく。洗面台に置かれていた石鹸皿や歯ブラシが、騒々しく床に撒き散らされる音がした。古城は怪訝に思いながらバスルームに近づき、そこでズブ濡れになっている吸血鬼を見た。
「アヴローラ？」
「ウ、水精の呪いが……！」
「あー……水道のコックがシャワーになってたのか……」
蛇口から水を出すつもりで、冷水のシャワーを頭から浴びてしまった、というオチだったらしい。ユニットバスに慣れていないと、現代人でもやらかしてしまいがちなミスである。
ましてや長いこと遺跡で封印されていたアヴローラが、シャワーの仕組みを知っているはずもない。説明しなかった古城の落ち度だ。
「ほら、これで大丈夫だから」
水を流し続けているシャワーを止めて、立てるか、と古城はアヴローラに手を貸してやる。

全身から水滴をこぼしつつ、悄然と立ち上がるアヴローラ。そんな彼女の姿から、古城は慌てて目を逸らした。水に濡れた制服が、素肌にピッタリと張りついて完全に透けている。
「古城？」
動揺している古城を見上げて、アヴローラは不思議そうに目を瞬いた。そして彼女は、濡れそぼった自分の姿に視線を落とす。その顔が沸騰したように耳まで赤く染まった。
「ま、待て、アヴローラ……落ち着け……！」
「う……ううー……忌まわしき不浄の瞳よ！」
呪われよ、と恨みがましく古城を見上げて、アヴローラが言う。吸血鬼の真祖になるかもしれない相手にぶつけられると、なかなか破壊力のある言葉だ。
勘弁してくれ、と古城は唇を歪めて、
「おまえが勝手に自爆しただけだろう——がっ⁉」
「なにをやっているの、この下平民っ！」
いきなり背後からの痛烈な蹴りを喰らって、古城はもんどり打って壁に激突した。
視界の片隅に映っていたのは、ブルネットの髪をなびかせた女吸血鬼だ。なぜかメイド服を着たヴェルディアナが、仁王立ちして古城を見下ろしている。
「ぐ……痛てて……ヴェルさん？　あんた、なんでこんなとこに……⁉」
「牙城から連絡があったの、アヴローラをここで保護してるって。そもそもこの船は私が牙城

から借りてたのよ。それなのに私がいないのをいいことにアヴローラにこんな狼藉を！」

ぐしょ濡れのアヴローラをタオルで拭きながら、ヴェルディアナが愚痴る。アヴローラは、突然の女吸血鬼の出現に驚いているのか、身体を縮こまらせて、されるがままになっている。

「ああ……そうか。それで……」

船内が片付いていた理由を理解して、やはり女がらみか、と古城は嘆息した。

「てか、なんでメイド服なんだ？」

「うるさい！」

なにかつらいことでもあったのか、メイド服に身をやつした自分自身を見下ろして、ヴェルディアナがわなわなと肩を震わせる。

「よりによってこんな下平民が十二番目の血の従者なんて。こんなことではカルアナ家再興の夢が……いえ、諦めては駄目よ、ヴェルディアナ！　姉様のためにも私がしっかりしないと！　アヴローラは私が護るのよ！」

自分の世界に没頭して、ぶつぶつとなにかを呟き始めるヴェルディアナ。そんな彼女を不安げに眺めつつ、タオルを被ったアヴローラが古城のほうへと近づいてくる。

「……古城？」

アヴローラが不思議そうに首を傾げたのは、古城が笑っていたからだ。

古城は心から安堵したように、腹を抱えて笑い続ける。

元伯爵令嬢だかなんだか知らないが、ヴェルディアナ・カルアナという吸血鬼は高飛車だし、そのわりに貧乏そうだし、精神面も未熟で、戦闘能力も高くはなさそうだ。しかし彼女は、本気でアヴローラを大切に思っている。思えば最初に出会ったときから、ヴェルディアナは、自分の身を危険にさらしてでも、アヴローラを安全に逃がそうとしていたのだ。

「いや。よかったな、お姫様。おまえを護ろうとしているのは、俺一人じゃないみたいだぜ」

アヴローラの頭を撫でながら、古城は優しく笑ってみせる。

彼女はもう一人ではない。孤独に怯えて眠る必要はもうないのだ。

そんな古城の真意が伝わったのか、金髪の吸血鬼の少女は、はにかむように下を向き、

「うむ」

消え入りそうな声でそう言って、幸せそうに小さく微笑んだ。

それはアヴローラ・フロレスティーナと呼ばれた少女が、暁古城に出会った日の出来事。

終わりに向かう物語の始まりだった。

幕間 ii

そこは意識と無意識の境界だった。
誰も入れない心の奥底。原初の海に似た優しい場所だ。
極光色の靄が漂う静かな世界で、二人は微笑みを浮かべている。
背格好のよく似た小柄な娘たちだ。長い黒髪の少女と、逆巻く炎のような金髪の少女。
剝き出しの幼い心のまま、二人はたゆたう。羊水に浮かぶ双子のように背中を丸め、細い指を絡ませながら、世界を漂い続けている。
「また会えたね……」
やがてゆっくりと目を開けたのは、長い黒髪の少女だった。
くすぐられている子猫のようにクスクスと笑い、懐かしそうに目を細める。
「汝と再びまみえたことに感謝しよう、幼き巫女よ」
金髪の少女も瞼を開いて、ぎこちない口調でそう応えた。
輝くような碧い瞳が、どこか物憂げに揺れている。
黒髪の少女はそれを見返して、少し困ったように苦笑した。
「そっか……あたし、また倒れちゃったんだね　バレー負けちゃったかな　参ったな、古城君が心配するよねえ　病院のご飯も美味しいんだけど、一人で食べるのは味気ないからな」
「……我がために汝が贖う代償を、我は憂う」
金髪の少女が、泣き出しそうな表情で目を伏せる。
黒髪の少女は、その長い髪をゆるゆると揺らして首を振った。
「あなたが謝ることはないよ。あたしを助けてくれたんだよね」
「然れど汝に残された刻限は尽きんとしている。我が亡骸に宿る魔力の残滓も今や寡少」
「……そうだね。わかってる。うん……わかってるよ」
金髪の少女の悲痛な告白に、黒髪の少女は穏やかに微笑んだ。
「古城君は怒るだろうね。あたしたちのことを知っちゃったら」
「呪われるべきは我。汝に咎はなし」
「あたしとあなたは同じだよ」
絡み合う指から、体温が伝わる。金髪の少女の肌は冷たい。宿り木をなくした幼鳥に似た弱々しい存在を、黒髪の少女がそっと抱きしめる。
「忝い」
金髪の少女の声が遠くなる。彼女の存在が淡い靄の中に溶けていく。
「またしばらくお別れだね」
黒髪の少女が寂しげに微笑んだ　海底に生まれた気泡のように、意識がゆっくりと浮上して

いく感覚がある。いまだ生者である彼女の肉体が、目覚めようとしているのだ　そして彼女の人格が、この世界でのやりとりを思い出すことはない。

「誇り高き巫女よ、願わくば汝の生に永久の平穏と祝福を」

遠い場所から残響のように、金髪の少女の祈りが聞こえてくる。

「あなたもだよ――――」

目覚めゆく少女が、声にならない声で呟く。

あなたもだよ、アヴローラ。

第二章 血の従者 Blood Servant

1

十一月第一週の教室は、生温い倦怠感に包まれていた。
紘神市独自の巨大な祭典〝波朧院フェスタ〟が終わった直後の月曜日だ　仮装パレードにステージイベント、屋台の売り子やバイトなど、怒濤のハイテンションで過ごした数日間の反動で、生徒たちの多くが燃え尽き症候群に襲われている。
そんなクラスメイトたちに混じって席に着いた古城は、一人きり、妙に真剣な表情で黙考を続けていた。そんな古城に気づいた藍羽浅葱が、怪訝そうに首を傾げて近づいてくる。
「どうしたの、めずらしく真面目な顔しちゃって」
「ああ。浅葱か」
どことなく思い詰めたような古城の態度に、浅葱が警戒したように眉を寄せる。
「……古城？」
「やっぱりおまえしかいないか。ちょっと頼みがあるんだけど、放課後、空いてないか？」
「な、なによ。あらたまっちゃって」
冗談めかして笑いながら、浅葱は古城の前の席に座った。少し緊張した面持ちで、古城の次の言葉に耳を傾ける　古城はそんな浅葱に真顔で顔を寄せ、声を低くして囁いた。

「ブラジャーが欲しいんだ。もちろん金は出す」
「……は？」
一瞬の沈黙を挟んだあと、浅葱は長い睫毛を揺らして大きく目を瞬いた。
次の瞬間、ゴッ、と鈍い音が響いて、古城の視界が揺れる。ノーモーションで放たれた浅葱の正拳突きが、古城の鼻骨を直撃したのだ。
古城はたまらず顔面を押さえて仰け反り、
「痛ェな!?　いきなりグーで殴るか!?」
「なんであんたにブラを売らなきゃならないのよ!?　あたしをなんだと思ってるわけ!?」
目の端に涙を浮かべて、浅葱が怒鳴る。
それを聞きつけたクラスの男子が、ザワッ、と一斉にどよめいた。
サバサバした言動のせいで、色気がないと揶揄されがちな浅葱だが、その華やかな顔立ちもあって、根強い潜在的なファンは多いのだ「藍羽のブラ!?」「売ってくれるのか!?」「お、俺はどちらかといえばパンツのほうが！」と何人かが迂闊にも声に出し、「売るかっ！」と浅葱に怒鳴られる。
「誰がおまえのブラを寄越せっつったよ　女物の下着を買いに連れてけって頼まれてるから、つき合ってくれって話だよ」
鼻の頭を押さえたまま、古城がくぐもった声で言い訳する。

浅葱は古城を不審げな目つきで睨んだまま、
「なによそれ？」
「悪いけど、さすがに俺一人じゃまずいだろ。凪沙のやつはまだ出歩けないし　だから頼む」
そう言って深々と頭を下げる古城。必要なのは、もちろんアヴローラのための下着だった。
コンビニあたりで適当に買えるパンツと違って、ブラの調達は困難だ。サイズの測り方もよくわからないし、古城一人でアヴローラを下着屋に連れて行くのもハードルが高い。人見知りかつ挙動不審なアヴローラを、一人で買い物に行かせるなど論外だ
そんなわけでしばらくアヴローラにはノーブラで過ごさせていたのだが、常夏の絃神島では、必然的に薄着になるので、それはそれでなにかと問題なのだった。健康的な中学生男子である古城には、いろいろと刺激が強すぎる。おまけにヴェルディアナの服装のセンスが当てにならないことは証明済み　こうして悩み抜いた挙げ句に、消去法で浅葱に頼んでみたのだが、
「凪沙ちゃんに頼まれたんじゃないの？　誰が使うのよ？」
「あー……最近知り合った吸血鬼がな。ついでに服も何着か買ってやらないと」
未登録魔族という情報だけ伏せて、それ以外は正直に話してみる。
しかし浅葱は、すぐに事情を察したらしく、
「島外から来た子ってこと？　なんかワケあり？」
「そうだな　複雑なんだかよくわからん事情がいろいろあってな

古城が頬を歪めて投げやりに答えた　実はそいつは第四真祖候補かもしれないのだ、とはさすがに口にするのがはばかられる
ふむ、と浅葱が、思案するように唇に指を当てた。
「もしかしてあんたが最近忙しそうにしてたのは、その子のせい？」
「まあな。なんか成り行きで面倒を見ろって押しつけられたんだよ」
「可愛い子なの？」
「そうだな……可愛いというよりは、可笑しい子だな、あれは一
さりげなく詮索してくる浅葱に、古城は正直な感想を述べる　見た目だけならアヴローラは妖精そのものだが、記憶喪失という条件を差し引いても、中身はポンコツ以外の何者でもない
まあ浅葱が無理ならほかを当たるわ。女子バスケ部の後輩とか、変なことを頼んで悪かった」
「待てコラ！　誰も無理なんて言ってないでしょうが！」
立ち上がろうとする古城の手首を、浅葱ががっちりと捕まえた。
「それよりもちゃんと連れてきなさいよ、その吸血鬼の女の子」
「……連れてこないとやっぱり駄目か」
浅葱の言葉に古城は軽く逡巡する。人見知りのアヴローラを、浅葱に直接会わせることには、多少の不安を覚えるのだが、

「当然でしょ、本人がいなきゃサイズが測れないでしょうが」
「ああ、そうか。そういうのもあるのか」
「まったくもう……」
浅葱が呆れ顔で息を吐く。
面倒くせェな、と早くもげんなりする古城。実際にはアヴローラの胸の起伏など、あってないようなものなのだが、それを口にするわけにもいかない。
「よお、なんか愉しそうな話をしてるな。古城が女の子を紹介してくれるんだって？」
そのとき、中途半端に話を聞きつけた矢瀬基樹が、無理やりな勢いで間に割りこんできた。
「紹介するのはべつに構わないけどな」
そう言って気怠く同意する古城。引っ込み思案なアヴローラと打ち解けるには、このくらい厚かましい男のほうが向いている気がする。
「え、マジで？」
あっさり許可が出るとは思っていなかったのか、逆に驚いた表情を浮かべる矢瀬。
そんな矢瀬に、幼なじみである浅葱がにっこりと笑いかけ、
「当然、お近づきの印として彼女の洋服代くらい出してくれるのよね、基樹」
「……え？」
「そうか、それは助かるな」

浅葱の提案の尻馬に乗って、古城は真面目な表情でうなずいてみせる。
実際、古城のなけなしの貯金では、アヴローラの服代が賄えるか不安に思っていたところだ。予算が増えるのは素直にありがたい。
しかし、そうやって油断した古城に、浅葱は攻撃的な視線を向けて、
「他人事みたいに言ってるけど、あんたもよ、古城。きっちりお礼はしてもらうからね。こ、今度はあたしの買い物にも、つ、つき合ってもらうから……！」
ぎこちなく古城を誘う浅葱に、おお、と感心した表情を浮かべる矢瀬。周囲の女子たちも息を殺し、目をキラキラと輝かせて古城の次の反応をうかがう。
「マジか……」
しかし当事者である古城は、今度はなにを奢らされるんだ、と本気で顔色を悪くして、
「そういや、おまえ、こないだから東地区の唐揚げ屋に連れてけってうるさかったよな」
「あ、それ！　今週末までバケツ入り唐揚げ二百パーセント増量セールやってるのよ！」
「わかったわかった。今度つき合ってやるから」
そう言って古城はぐったりと机に突っ伏した。
あたしにしてはまあまあ頑張ったわ、となぜか満足げな浅葱。そんな二人を眺めてクラスの女子全員が「唐揚げかっ！」と心の中でつっこみを入れ、やっぱり駄目だこいつら、と矢瀬が深々と溜息をつく。

それは中等部二年生の秋の出来事。束の間の平和な時間が過ぎていく――

2

「お帰りなさいませ、ご主人様」

薄暗い洋館の入り口で優雅に頭を下げたのは、黒ずくめのゴス風メイド服に身を包んだヴェルディアナだった。紅いルージュで濡れた唇を吊り上げて、威圧するように鋭い犬歯をこれみよがしに見せつける。が、

「ちが――――う！」

「ひっ」

突然大声で怒鳴られて、ヴェルディアナはビクッと竦み上がった。

ヴェルディアナの背後に立っていたのは、肩幅のがっしりとした中年男性だ。

黒のタキシードを着こなして、襟の高いマントをなびかせている。左手首に輝いているのは、魔族登録証だった。彼はヴェルディアナよりも更に高位の〝旧き世代〟の吸血鬼なのだ。絃神市内にオープンしたばかりの魔族喫茶〝獄魔館〟の店長である。

怯えるヴェルディアナを真紅の瞳で睨みつけ、その店長が甲高い声を出す。

「違うでしょ、カルアナちゃん。うちはメイド喫茶じゃないのよ。わざわざ〝魔族特区〟まで来てくださった濃ゆーいお客様に喜んでいただくのがあなたのお仕事よ。わかってる？」

「は、はい、すみません。でも具体的にどうすればいいのか……」

トレイを握り締めたまま、ヴェルディアナは額の汗を拭う。

お嬢様育ちのヴェルディアナにとって、接客業は未知の領域である。しかし学歴も職歴も特技もない彼女を雇ってくれる職場となると、必然的にこの手のイロモノ系になってしまうのは避けられないところだ。

「こうよ。よく見てて」

戸惑うヴェルディアナを見かねたように、店長が模範演技を始める。漆黒のマントを翻し、歌舞伎役者のように見得を切ると、ドスの効いた声で彼は高らかに笑い出し、

「〝フハハハハハ！　哀れなる仔羊どもよ、恐怖に彩られた惨劇の館へようこそ。その生命の滴を偉大なる闇の王の御前に捧げるがいい！　さすれば汝の望みを叶えようぞ！〟」

高位吸血鬼であるところの店長のデモンストレーションに、オオオッ、と店内の客たちが一斉に湧いた。カメラのフラッシュがあちこちで輝き、歓声と拍手が鳴り響く。

「え……と、その台詞で注文を取るんですか……？」

引き攣った表情で訊き返すヴェルディアナ。中世暗黒時代の封建魔族領主をイメージしたお仕事、とは聞かされていたが、予想以上の痛々しさだ。見世物にされるよりもよっぽどひどい。

「そうよ。あとは任せるわね。ほら、新しいお客さんもいらっしゃったわよ」

なぜかオネエ言葉でそう言い残し、店長は厨房のほうへと戻っていく。

「……カルアナの娘である私が……なぜこんな辱めを……！」

屈辱に打ち震えながら、ヴェルディアナはやけくそ気味の笑顔を浮かべた。ちょうど館の玄関ドアを開けて、学生とおぼしき四人組の客が、店内に入ってきたところだ。

もうどうにでもなれ、と食器置き場から銀のナイフを四、五本まとめてつかみ取り、ヴェルディアナはそれを恰好よく構えてみせた。スカートを翻しながら勢いよく振り返り、嗤然と立ち尽くす客たちに向かって哄笑する。

「フ……フハハハハ！　哀れなる仔羊どもよ、き、恐怖に彩られた惨劇の館へようこそ！」

「ひうっ!?」

そんなヴェルディアナの耳に聞こえてきたのは、怯えた少女の弱々しいうめき声だ。なぜか聞き覚えのある声だった。

「……ひう？」

硬直するヴェルディアナの前に、デパートの紙袋を両手にぶら下げた男子中学生と、小柄な金髪の吸血鬼の少女が立っている。**暁古城とアヴローラである。**

「あー……どうも」

居心地悪そうな愛想笑いを浮かべて、古城がヴェルディアナに会釈した。アヴローラは小刻みに全身を震わせながら、そんな古城の背中に隠れている。

「なに？　古城の知り合いなの？」

暁古城の友人らしき少女が、不思議そうに首を傾げてヴェルディアナを見つめる。小洒落たファッションに身を包んだ、華やかな顔立ちの女子中学生だ。

「……古城!?　なにをやってるの、あなた、こんなところで……!?」

ぽろり、と思わずナイフを落として狼狽するヴェルディアナ。古城はそのナイフを床に落ちる寸前で器用にキャッチして、

「あー……ほら、買い物の途中だったんだけど。服とか。そしたらアヴローラのやつが、ヴェルさんが働いているところを見てみたいって言い出したから」

「な……な……」

赤貧にあえぐヴェルディアナが、アルバイトを始めたのは二週間前。皿洗い中心の見習い期間を終えて、制服が支給されたのは昨日のことだ。ついつい昨晩そのことをアヴローラに自慢してしまった。それが裏目に出てしまった形だ。よもや〝焔光の夜伯〟の所有者の一人であるヴェルディアナが、下っ端バイトとして働いている姿を見られてしまうとは。

「さ、惨劇の館……!?」

完璧に怯えきった表情で、弱々しくうめくアヴローラ。無垢な彼女は、ヴェルディアナの口上を本気で信じてしまっているらしい。

涙目になった金髪の少女を、ヴェルディアナは必死でなだめようとして、

「ち、違うの！　ここは観光客向けの〝魔族喫茶〟で……要するに全部作り物で演技なの！」
「……カルアナちゃん？」
店内のムードをぶち壊しにするヴェルディアナの言葉を聞きつけて、店長がにじり寄ってくる。殺気を撒き散らしつつも、笑顔を崩さないのが逆に恐い。
「あ……」
店長のプレッシャーに圧倒されて、ヴェルディアナは表情を凍りつかせた。
「ち、違うんです、店長。これにはその、複雑な事情が……！」
「お黙りなさい。早く仔羊ちゃんたちを生け贄の祭壇に案内して！」
「え!?　あ、はい……こちらのお席へどうぞ！」
ヴェルディアナは半泣きになりながら、古城たちを席へと案内する。おどろおどろしい店内の雰囲気にアヴローラは完全にビビっていたが、古城のフォローでどうにか事なきを得る。
なんでこんなことに、とヴェルディアナは壁にもたれて溜息をつく。
そんな彼女に、こっそりと話しかけてきたのは、首にヘッドフォンを引っかけた男子中学生だった。矢瀬基樹だ。
「いやぁ、さっきのヴェルさんはノリノリだったな。さすがは本場の貴族様。その衣装もよく似合ってるぜ」
「基樹……あなたねぇ！」

茶化すように笑いかけてくる矢瀬を、ヴェルディアナはふて腐れた顔で睨みつける。
この態度から察するに、矢瀬は、最初から彼女の仕事内容を知っていたらしい。とはいえ、バイト店員に身をやつしているヴェルディアナを、馬鹿にしているわけでもないのだろう。
紘神島の生活に馴染んだ吸血鬼の元貴族令嬢を、矢瀬はむしろ安心したように見つめて、
「ま、働き口が見つかって、よかったんじゃねーの。近頃は〝魔族特区〟も就職難だからさ。正式な就労ビザももらえたんだろ」
「そうね……」
ヴェルディアナは苦々しい表情で、矢瀬の言葉を肯定する。
十二番目の〝焔光の夜伯〟　アヴローラを手に入れれば、それだけで父や姉の仇が討てるような気がしていた。第四真祖として覚醒したアヴローラの家臣として新たな夜の帝国を統治し、カルアナ伯爵家を復興する。それがヴェルディアナが思い描いていた未来予想図だった。
だが現実はそうではなかった。アヴローラが真の第四真祖として覚醒することはなく、獅子王機関に、正式な選帝者として認められたわけでもない。それどころか日々の食費にも窮する始末で、結果、アルバイトに明け暮れる毎日だ。
それを不幸だと感じているわけではない。自分が少しずつ今の暮らしに慣れつつあることを、ヴェルディアナ自身も自覚している。そのことにヴェルディアナはかすかな罪悪感を覚える。
カルアナ伯爵家唯一の生き残りである自分が、安らぎを覚えていることに

冷気が、闇を満たしていた。

金属の構造材を剝き出しにした、殺風景な地下室だ。無数のチューブや絶縁ケーブルが、のたうつ蛇のように壁や床を這い回り、生物の体内にも似たカオスな空間を作り出している。

おそらくは最先端の研究施設　それも、まともな研究者なら決して足を踏み入れることのない、隔離された気密区画なのだろう。近寄りがたくも静謐なその光景は、高貴な遺体を安置する霊廟のようにも、あるいは忌まわしき魔物を封じこめるための檻のようにも見える。

非常灯の輝きが、立ちこめる純白の霧を透かして弱々しく揺らいでいた。

その霧が不意に濃さを増す。

渦巻く濃い霧は密度を増し、やがて実体化して、人の女の姿になった。

黒革のコートを着た女吸血鬼だ。見た目の年齢は十七、八前後。髪の色は艶やかなブルネット。少女の面影を残した顔立ちに、暴力的な匂いは感じられない。何気ない動作の端々には、かすかな気品すら滲み出ている。

そんな彼女の表情も、今は緊張で固く強張っていた。

真紅の双眸が見つめていたのは、地下研究室の中心部。

金属製の台座に載せられた、透明な氷の塊だ。

氷塊の直径は六メートルを超えているだろう。美しくカットされた宝石に似た、複雑で人工的な多面形である。

その氷塊の中心部には、膝を抱えて眠り続ける小柄な人影が浮かんでいた。

妖精めいた美貌の少女である。

色素の淡い長い金髪が、見る角度によって虹のように色を変えていく。

どこか禍々しさを感じさせる美しい妖精だ。冷たい氷の柩の中で、彼女は静かに眠り続けている。魔女の呪いを受けた眠り姫のように――

「……」

ブルネットの女吸血鬼が、氷の柩を睨んで、ゆっくりと右手を上げた。

彼女の手の中に握られていたのは、折りたたみ式の黒いクロスボウだった。

クロスボウの銃身には、すでに矢が装塡されている。銀色に輝く金属製の矢だ。直径四センチ近くにも達するそれは、矢というよりは杭というイメージに近い。表面には細かな魔法文字がびっしりと刻まれ、ほのかに青白い輝きを放っている。

「……許して……」

女吸血鬼は目を閉じて、懺悔するように弱々しく呟いた。

「アヴローラ・フロレスティーナ……十二番目の〝焔光の夜伯〟よ……許して……あなたを目覚めさせる私たちを、どうか……」

唇を強く噛みながら、彼女はクロスボウの引き金に指をかける。

彼女の腕が小さく震え、弦が激しく鳴った。

「だけど私は、こんなことをするために〝魔族特区〟に来たわけじゃないの。違うのよ」

自分自身に言い聞かせるように、ヴェルディアナは呟いた。

聞こえるはずのないその声に、矢瀬基樹が振り返るのが見える。気遣うような彼の視線に、あえて気づかないふりをして、ヴェルディアナは逃げるようにその場を立ち去った。

3

アヴローラが注文したのは『禁断の聖骸布』と名づけられたメニューだった。

ものものしい名前だが、中身は普通のホットケーキである。しかし初めて目にするご馳走を前にアヴローラは困惑し、とりあえず上に載せられていた角切りバターを、丸ごと口に放りこもうとして古城に止められる。

「違う、それはそういう食べ物じゃねえ」

「……う？」

「ほら。フォークとナイフの使い方はわかるな？」

「う、うむ」

幼い子どもの面倒を見るように、アヴローラのホットケーキを切り分けてやる古城。さらに古城は付属のチョコレートペンの封を切り、

「あと、これをこうやってな」

「ふぉおお！」

パンケーキの表面に古城がチョコで描いた不格好な猫のイラストを見て、アヴローラが興奮気味に目を輝かせる。古城の手からチョコレートペンを奪い取り、アヴローラはさっそく見よう見まねで落書きを始めた。それを保護者気分で見守る古城。そんな仲睦まじい古城たちの様子を眺めて、浅葱は膨れっ面でブクブクとジュースを泡立てている。

やがて遊び疲れたアヴローラは、ドリンクバーで注いできたホットコーヒーを啜った。その瞬間、妖精めいた美貌が絶望したように情けなく歪んで、

「お……おおお……黒き復讐の魔女の呪いが……！」

だーっ、と唇からコーヒーをこぼしつつ、アヴローラは苦さにのたうち回る。古城と同じものを飲むと言い張った彼女だが、実はコーヒーがどんなものかわかっていなかったらしい。

「大丈夫か、アヴローラ……ったく、無理してそんなもん飲むから」

やれやれ、と古城はこぼれたコーヒーを拭いて、近くのドリンクバーコーナーへと向かった。そしてグラスにメロンソーダを注いで戻ってくる。

「ほら、おまえはこっちにしとけ」

「う……」

いかにも人工的に着色された感じの緑色の液体を、アヴローラはしばらく警戒するように眺

めていたが、やがて怖ず怖ずとグラスに口をつけ、ぎょっと目を見開いた。

「至高の美味！　甘露の顕現!?」

炭酸の刺激で目を潤ませつつ、一息でメロンソーダを飲み干すアヴローラ。未練がましくストローをズルズルと鳴らしながら、けふっ、と可愛らしくげっぷをする。世界最強の吸血鬼の素体とは、とても信じられない姿である。

さらなるおかわりを求める彼女は、古城を追ってドリンクバーコーナーへと向かい、

「ふん。まだ甘いな、アヴローラ。俺はさらにこれをこうする！」

古城は得意げに胸を張りながら、二種類のドリンクを混ぜ合わせてみせた。

「弾ける混沌の渦が……！」

純白の乳酸菌飲料と黒いコーラが混ざり合う様に、アヴローラが息を呑む。幼稚園児のようにはしゃぐそんな、人を遠目に眺めながら、浅葱が不機嫌そうな溜息を洩らした。

「まあ、たしかに可愛い子よね」

ふて腐れた表情を浮かべていても、浅葱の口調は冷静だ。

客観的に判断して、アヴローラは文句なしの美少女だといえるだろう。言葉遣いは偉そうだが、無邪気で悪意のない性格には好感が持てる。現代人とは思えないほど世間知らずだが、順応性はあるし、学習意欲も高い。古城があれこれと世話を焼きたくなる気持ちはよくわかる。

「あの見てくれは、吸血鬼にしてもちょっと反則だわなあ。マジで妖精かと思ったわ」

焦る浅葱に追い打ちをかけるように、矢瀬が言う。浅葱は反射的にムッとして、

「で、でも吸血鬼ってことは成長も遅いわけだしね」

それはそうなんだが、古城にはシスコンの素養があるからな」

「や、やっぱり？」

矢瀬の適当な呟きを、浅葱は真面目に取り合ってしまう。両親が不在がちな家庭の事情や、凪沙が病弱という理由もあるのだろうが、古城がやたらと妹を気に懸けているのは事実だ。過保護といっても差し支えないだろう。

「気持ちはわかるぜ。凪沙ちゃんは可愛いからな。そういやちょっとあのアヴローラって子も、雰囲気似てるな。背格好とか」

矢瀬の無神経な発言に、う、と浅葱が眉をひくつかせる。浅葱が撒き散らす負の気配に気づいたのか、矢瀬は急に掌を返して、

「あ、いや、おまえもそんな捨てたもんじゃないと思うぞ。とりあえず胸のサイズでは勝ってるだろ。今度、古城には乳のでかい女の良さを叩きこんでおいてやるから」

「うるさい！　べつに落ちこんでないわよ！」

そう言って浅葱は、幼なじみの顔面におしぼりを叩きつけた。もちろんアヴローラあたりと比較すればスタイルに恵まれている浅葱だが、しょせん中学レベルである。べつに巨乳というわけでもないのだ

「でも、あの子、なんだかちょっと不思議な感じがするのよね」

だらしなく頬杖を突きながら、浅葱はアヴローラの横顔を眺めて言う。

ああ、と矢瀬も同意して、

「記憶喪失って言ってたな」

「うん、そのせいなのかもしれないけど、場違いな感じ。中身と器が一致してないっていうか、人工島管理公社のスーパーコンピューターで二十年前のレトロゲームをやってるみたいな」

「……おまえの喩えはさっぱりわからん」

「だから不思議な感じって言ってるじゃん」

唇を尖らせて浅葱が言い返す。そして彼女は、ふと思い出したように視線を矢瀬に戻して、

「そういえば、昔、本土の動物園でライオンの赤ちゃんを抱っこしたことがあるんだけどさ」

「おう」

「そのとき、やっぱり猫とは違うな、って思ったのよ。脚とかぶっといし」

「だろうなあ」

あまり興味なさそうに矢瀬が相槌を打つ。うん、と浅葱はうなずいて、

「でしょ。つまりそういうこと」

「どういうことだよ!?」

脱力したように姿勢を崩して訊き返す矢瀬。

「ああ、もう。いいわよ、忘れて」
説明するのも面倒になって、浅葱は乱暴に手を振った。
「そういや古城のやつ、あの子は第四真祖かもしれないって言ってたな」
「ああ……十二番目の〝焔光の夜伯〟だっけ」
浅葱が無関心な口調で言う。古城自身、いちおうそういうことを言ってるやつらがいる、という程度の認識で、本心から信じているわけではなさそうだった。
たしかにアヴローラが、一般的な吸血鬼とは少し違っているのは事実だが。
「そうは見えんな」
「……全然見えないわね」
矢瀬と浅葱が口々に呟く。
そのころ肝心のアヴローラは炭酸飲料を注ぎすぎて、あふれ出す泡に呆然としていた。
「こ、古城！　水泡の膨張が留まるところを知らぬ……！」
「馬鹿、入れすぎだ！　揺らすな！　振るな！」
グラスの縁からこぼれる泡に、泣き出しそうな顔でうろたえるアヴローラ。そんな彼女を、苦笑混じりに眺めて、浅葱はもう一度溜息をついた。
「まさかね」

4

〝滅びの王朝〟は、広く中東を支配する魔族自治領。第二真祖〝滅びの瞳〟が統べる夜の帝国だ。
総人口は約二千五百万。錬金術や魔術が非常に盛んな土地柄で、魔獣の放牧が行われるなど、独自の文明を築いている。東西交易の要衝にあるため、商業も盛んだ。一方で暗黒大陸の諸都市や中央アジア〝十六大国〟と緊張状態にあるなど、軍事バランスの不安定な土地でもある。
魔族自治領たる夜の帝国といえども、魔族の血を引く者は総人口の一パーセントにも満たず、純血の魔族となるとさらに少ない。それでも彼らが支配階級として認められているのは、魔族の持つ高い戦闘能力に、帝国の軍事力の大半を依存しているからだ。
帝国領内にある王族の居城は、すべてが軍事施設を兼ねており、最新鋭の装備で固めた陸戦部隊が常駐していた。〝滅びの王朝〟第九王子イブリスベール・アズィーズの居城も、そんな軍事城塞のひとつである。
担当区域はコーカサス地方。〝戦王領域〟との国境にも近い極めて重要な戦略拠点だ。険阻な地形のせいで大規模な兵力を動かすことは困難だが、そのぶん練度の高い屈強な兵士たちが集中的に配備されている。

そのコーカサス城塞が急襲を受けたのは、吹雪に見舞われた十二月の夜のことだった。

「騒々しいな。何事だ、爺」

寝室でチェス盤を眺めていたイブリスベールが、慌ただしく駆けこんできた老吸血鬼に不機嫌な視線を向けた。繰り返される爆発に、巨大な城塞が鈍く震えている。

「敵襲です、殿下。西側の城門が破られました」

「戦王の軍の侵攻というわけでもあるまい……姉上あたりが性懲りもなく、どこぞの傭兵でも雇ったか？」

「申し訳ありません。他の王族の動向は把握していたつもりだったのですが」

チェスの駒を握り潰して笑うイブリスベールに、老吸血鬼が頭を下げる。

王族であるイブリスベールにとって、もっとも身近な脅威とは他国の軍ではなく、身内の王族だ。過去に何度も謀略を仕掛けられ、そのたびにイブリスベールはそれを撃破している。おそらく今回も姉弟の誰かが、暗殺者を派遣してきたのだろうと考えるのが妥当だ。が、

「ふむ。たしかに、この杜撰な襲撃、キシャル姉様のやり口とは思えぬな……紅海方面の軍に動きは？」

「いえ、今のところ特には」

「そうか、ならば良い　どのみちカラクムの兄上たちに俺を殺しに来るだけの度胸はあるまい。

そういうことであれば、ほかに心当たりがある」

「殿下、どちらに？」

「来客の出迎えだ。丁重にもてなしてやらねばな」

豪奢な真紅のローブをまとって、イヴリスベールは城主の間へと向かった。

絶え間ない銃声と爆発音で、城内は騒がしい。眷獣が召喚されているのだろう。洩れ出した魔力の影響で空が澱んでいる。中でも桁外れに強大な魔力の気配がひとつある。王族の眷獣にも匹敵する強力な個体が暴れているのだ。

「――城内に侵入されたのか!?　近衛部隊はなにをしている!?」

破壊された城の回廊に気づいて、爺と呼ばれていた老吸血鬼が叫ぶ。

轟音を残して天井を支える石柱が崩れ落ち、立ちこめる土煙が城主の間まで洩れてくる。そんな中、イブリスベールは、堂々と雛壇に立って周囲を睥睨していた。

「下がれ、爺」

瞳を真紅に輝かせて、イヴリスベールが静かに告げる

「殿下!?　しかし――」

困惑して振り返る老吸血鬼。

分厚い金属製の扉を破って、招かれざる客たちが侵入してきたのはその直後だ。

侵入者の数はわずか十名足らず。獣の頭骨を模した仮面を被る、黒装束の兵士たちが数人。

彼らに護衛された痩身矮躯の男。そしてフードで顔を隠した小柄な少女――それだけだ。

「匈鬼だと……!? ネラプシ解放軍か！」

黒装束の男たちを睨んで、老吸血鬼がうめいた。

ネラプシは、国際的には国家とすら認められていない新興の匈鬼領。〝滅びの王朝〟と直接的な戦争状態にあるわけではないが、正統な吸血鬼種族にとって、好戦的で粗暴な匈鬼に対する嫌悪感は根深い。彼らごときに攻めこまれたという屈辱的な事実に、憤りを覚えているのだろう。老吸血鬼のこめかみに血管が浮かぶ。

そんな老吸血鬼の怒りを平然と受け流して、痩身の男が前に出た。

「突然の訪問をなにとぞお許しください、イブリスベール・アズィーズ王子殿下。今宵は拝謁の栄に浴し、このバルタザール・ザハリアス、歓喜の念に打ち震えております」

襲撃者には似合わぬ慇懃な口調で、男が言う。

壇上に立つイブリスベールが、獰猛な笑みを浮かべてそれを見下ろした。

「やはりおまえであったか、ザハリアス。薄汚い匈鬼どもを連れて、俺の前に出てくるとは、いい度胸だ。それほどまでに地獄が恋しいか、兵器商」

「此度の無礼の償いにつきましては、いかようにも。然れど我が本分は商いにありますゆえ、まずは我らの申し出をご一考いただきたく」

「下賤の兵器商ごときが、この俺と取り引きしようというのか」

物怖じしないザハリアスの言葉に、ハッとイブリスベールは歯を剝いて笑った。

「面白い。その蛮勇に免じて、聞くだけは聞いてやろう。話せ」

「それでは単刀直入に――殿下が管理しておられる〝滅びの王朝〟所有の〝焔光の夜伯〟を、我らにお譲りいただきたいのです。すなわち七番目と十二番目を」

「ふん……成り上がりめが、よくぞ調べたものよ」

イブリスベールが感心したように呟いた。〝滅びの王朝〟が一体の〝焔光の夜伯〟を保有していること。それらを管理しているのがイブリスベールであること。いずれも真祖と、限られた重臣だけが知る機密事項だ。

だが、分をわきまえぬ望みは身を滅ぼすぞ、兵器商。今すぐに俺の領地から失せるがいい。それとも力ずくで人形どもを奪ってみるか？」

「それが殿下のお望みとあらば」

ザハリアスが、唇を吊り上げて笑う。その不遜な態度に激昂したのは老吸血鬼だった。

「蛮族が！」

白髪を振り乱して老吸血鬼が怒号を上げ、眷獣を召喚しようとする。それに気づいたイブリスベールが、咄嗟に制止しようとした。だがその前に、老吸血鬼の全身が跡形もなく四散する。見えない巨大な魔力の砲弾が、彼の肉体を撃ち抜いたのだ。

「爺！」

攻撃の余波で、城の壁が砕け散る。その様子を平然と眺めているザハリアス。正当防衛です、とでも言いたげな、先に手を出そうとした老吸血鬼を非難するような表情だ。

降り注ぐ瓦礫を撥ねのけながら、イブリスベールが咆吼した。

「それほどまでに死に急ぐか、下郎！　擂り潰せ、〝ドゥアムトエフ〟――！」

イブリスベールの小柄な身体から、凄まじい規模の魔力が吐き出される。その魔力が大気を歪ませて、虚空から巨大な眷獣を喚び寄せた。それは牙を剝く黄金のジャッカルだ。

王族であるイブリスベールの眷獣は、巨大な戦艦をも一撃で沈め、この城塞を丸ごと消し飛ばす程度の破壊力を持つ。本来ならば、個人相手に召喚するような眷獣ではない。それがひとたび喚び出されたからには、ザハリアスは肉片ひとつ残さず、この世から消滅することになるだろう。神々しい巨体が煌めく閃光と化して、ザハリアスたちを薙ぎ払おうとする。

だが黄金の眷獣の攻撃が、武器商人の身体を傷つけることはなかった。

ザハリアスを庇うように出現したのは不可視の防壁だ。強大な震動と衝撃波の壁が、眷獣の攻撃を阻んでいる。

「……九番目！　貴様の自信の根拠はそれか、ザハリアス！」

イブリスベールの表情が険しさを増した。

ザハリアスが連れていた小柄な少女が、フードを脱いで顔を見せている。逆巻く炎のような金髪と、輝く焔光の瞳を持つ少女だ。彼女が身に着けた防護服には、兵器に施すような無機質

な書体で、〝Ⅸ〟の文字がマーキングされていた。

「戯けが！　素体ごときで、この俺に敵うと思ったか！　その慢心ごと砕いて潰せ、〝ハピ〟！　〝ケベフセヌエフ〟！」

イブリスベールが新たに二体の眷獣を召喚した。

〝焔光の夜伯〟である九番目は、第四真祖と同等の眷獣を召喚できるといわれている。たしかにそれだけの力があれば、十人足らずで、この城塞を襲撃しようなどと増長するのも無理はない。

しかし第二真祖直系の王子であるイブリスベールの眷獣も、並の吸血鬼のものとは桁違いの魔力を誇る。それが三体。本来の第四真祖が操っているならまだしも、不完全な素体ごときに召喚された眷獣を圧倒するには十分だった。イブリスベールの力を見誤ったザハリアスの失策だ。

「ふふ、いけません。いけませんねえ、殿下」

しかしザハリアスは、むしろ余裕の表情で両腕を広げて笑う。そんな彼の背後から歩み出たのは、九番目と同じ顔をした二人の娘たちだった。彼女たちの防護服に刻まれたマーキングは〝Ⅱ〟と〝Ⅷ〟――

「商人に慢心などありません。商機とは常に変動するものでありますれば――」

「〝焔光の夜伯〟!?　二番目と八番目……だと!?」

イブリスベールの顔が驚愕に歪む。ザハリアスが保有していた素体は、九番目だけではなかったのだ。彼はこれまで何十年もかけて、密かに〝焔光の夜伯〟を買い集め、あるいは強奪してきたのだろう。かつてカルアナ伯爵領に攻めこみ、封印されていた九番目を奪い取ったように。

そして今、彼は〝滅びの王朝〟を敵に回してでも、新たな素体を手に入れようとしている。

「ザハリアス、まさか、貴様の目的は――!?」

新たに召喚された一番目と八番目の眷獣が、イブリスベールの三体の眷獣を消し飛ばす。凄まじい魔力の奔流は、そのままイブリスベールの小柄な身体をも呑みこんだ。彼の居城の半分を巻きこんで、跡形もなくその姿を消滅させる。

巨大な城塞が崩壊を始めた。

熔け落ちた石壁が異臭を放ち、魔力の余波が熱風となって吹き荒れる。

これほどの攻撃をまともに受けて、生き残れる者がいるとは思えなかった。だがそれでも、ザハリアスは残念そうに小さく溜息をつく。

「ふむ、仕留め損ないましたか。さすがは〝滅びの瞳〟直系の王子……ですが、これでついに六体。宴の支度は滞りなく進んでいるようです」

眷獣たちの攻撃で消滅した城塞の地下には、無傷で横たわる二人の少女の姿があった。

九番目たちと同じ顔をした、第四真祖の素体。金髪の少女の吸血鬼。

彼女たちを回収するように匈鬼に命じて、ザハリアスは静かに笑い出す。

防護服に身を包む三体の〝焔光の夜伯〟は、そんなザハリアスを無感動な瞳で眺めていた。

5.

部活帰りの凪沙と待ち合わせしたのは、冬休み最後の日曜日のことだった。

正月気分をまだ少し引きずった駅前広場、夕焼けに照らされた馬の銅像の前に、黒髪を結い上げた私服姿の凪沙がいる。

「古城君、こっちこっち。おーい、おーい！」

帰宅ラッシュの人波に押し流されそうになっていた凪沙が、ぴょんこぴょんこ、と飛び跳ねて古城を呼ぶ。コートにマフラー、黒タイツという服装は、亜熱帯気候の絃神島では真冬でもめずらしい重装備だ。そんな妹に古城は手を振って、

「おお、悪い。ちょっと遅れた」

「ちょっとじゃないよ！　待ち合わせは五時のはずだったでしょ。二十五分も過ぎてるよ。おかげで家出少女と間違えられて二回もナンパされそうになったよ」

「……ナンパ？　おまえを？」

小学生といっても通用しそうな小柄な凪沙の全身を、まじまじと見つめて古城が訊いた。露

骨に驚く古城の背中を目がけて、凪沙は握っていた大きなボストンバッグを叩きつける。
「なにその疑いの眼差し!? ふんぬー!」
「だから悪かったって。つか、そんな大荷物持ってるから、家出と間違われたんだろ」
「暖かい恰好してこいって古城君が散々うるさく言うからじゃん。古城君こそ、そんな薄着で大丈夫なの？　夜は冷えるよ。港のほうは特に」
「おお、まあ。なんとかなるだろ」
薄手のパーカーを羽織っただけの古城は、そう言って軽く肩をすくめてみせた。
きょろきょろと周囲を見回しながら、凪沙は不思議そうに首を傾げて、
「あれ、そういえば浅葱ちゃんや矢瀬っちは？　今日は二人も来るんでしょ？」
「あいつらはマリーナに直接行くってよ。食料の買い出しも頼んどいたから」
「そっか。楽しみだな、入院してるときは夜遊びなんてできなかったし」
「天体観測は、夜遊びってのとは少し違う気がするが」
「あれ、そうなの？　なんで？」
そう言って、凪沙は嬉しそうに笑う。古城もつられて微笑んだ。たしかに凪沙と連れ立って出かけるのは、ずいぶん久しぶりのことに思える。
アヴローラの封印が解けたせいなのか、ここ最近の凪沙はいつになく元気だ。体調を崩して寝込むようなこともなく、見学主体とはいえ、チアリーディング部の練習にも参加している。

もっとも遠山の説明では、体力が完全に回復したわけではないらしい。巫女としての能力が、戻っていないのがその証拠だ。凪沙にはアヴローラの人格が憑依したままなのだ。
牙城や深森は今も治療法を探しているらしいが、はかばかしい成果は上がっていない。
それでも凪沙の体調が安定したことで、多少の余裕が出来たのも事実だった。
だからこそ、荒療治を試してみようという気にもなったのだ。
「この季節に流星群が見られるのって、七十年ぶりなんだよね？」
「ああ。なんとかって彗星が太陽系を横切った影響らしいな。エー……エー……」
「エーリゲネイア彗星」
「そう、そんなやつ」
うろ覚えの知識で適当に話を合わせる古城を、凪沙が呆れたようなジト目で見上げてくる。
実際、古城はそれほど天体に詳しいわけではない。流星群を見に行くというのは単なる口実で、本当の目的はほかにある。
「じゃあ、行こ。ていうか、なんで浅葱ちゃんたちだけマリーナで待ち合わせなの？」
「待った、凪沙。その前におまえに会わせたいやつがいるんだ」
「え？」
さっそく歩き出そうとする凪沙を、古城が止めた。そして古城は、離れた場所で待機させていた金髪の少女を手招きする。柱の陰に隠れていたアヴローラが恐る恐る顔を出し、不安げな

表情で古城たちのほうへと歩き出した。

「誰？」

アヴローラの姿を無表情に眺めて、凪沙が小さく呟いた。いつもの人懐こい凪沙とは別人のような硬い声だ。拒絶の気配を敏感に察して、アヴローラがたまらず足を止める。

「あのな、凪沙。こいつはアヴローラっていってさ」

予期せぬ二人の反応に戸惑いながらも、古城は懸命にフォローを試みた。

凪沙を完全回復させるためには、彼女に憑いているアヴローラの人格を引き剝がさなければならない。そのためのもっとも確実な方法は、アヴローラ本人が、その人格を自分の中に受け容れることだ。それはアヴローラが吸血鬼としての知識や能力を取り戻すことにもつながり、ザハリアスに狙われている彼女の安全を確保することにもなる。

アヴローラと凪沙を直接会わせるのは、危険を伴う賭けだった。

上手くいけば、この接触で、一気に人格の統合が進むかもしれないが、逆に凪沙の体調が悪化する可能性もある。ましてや魔力の暴走でも起きたらシャレにならない。

凪沙の体調の安定を待って、彼女たちを屋外の開けた場所に連れ出したのは、危険を最小限に抑えるための配慮のつもりだった。しかし凪沙がアヴローラとの接触を拒否することまでは、古城もさすがに予想していなかった。

「……吸血鬼……」

アヴローラを睨みつけたまま、凪沙がじりじりと後ずさる。その表情に浮かんでいるのは、怒りや嫌悪ではなく純粋な恐怖だ。三年前の事故以来、凪沙は、魔族全般に対して根深い恐怖を抱いている。彼女は後天的な魔族恐怖症なのだ。

「まあ、そうなんだけど、でも、おまえは前にも一度こいつに会ったことが――」

「来ないで！」

凪沙に怒鳴られるまでもなく、アヴローラは足を止めたまま動かない。

古城は、自分の迂闊さを思い知らされて歯噛みする。

魔族登録証を持たないアヴローラの正体は、すぐには見抜けないだろうと思っていたのだが、甘かった。たとえ霊能力を失っていても凪沙は巫女だ。普通なら気づかない程度のわずかな違いから、アヴローラの正体に一瞬で気づいてしまったらしい。

それでなくてもアヴローラの容姿は妖精じみている。普通の人間だと言い張ることに、そもそも無理があったのだ。

「近づかないで！　離れてよ！　出て行って、この島から！　早く！」

「おまえ、そんな言い方って――」

古城が凪沙の腕に手を伸ばす。凪沙はその手を乱暴に払いのけ、駅のほうへと顔を向けた。

「あたし、帰る」

「凪沙！」

放たれた銀色の矢は、凍てつく大気を裂いて氷の柩に突き刺さる。
その瞬間、眩い閃光が視界を染めた。
解放された魔力の爆発的な暴走に、張り巡らされていたチューブやケーブルが弾け飛び、コンクリートの天井が崩れ落ちていく。
轟音と共に氷塊が砕け散る。吹き荒れる純白の凍気の中に、少女の髪がゆっくりと舞う。
逆巻く炎のように輝く、虹色の髪が――

†

鎖の感触で目が覚めた。
工事現場あたりでよく見かける、うっすらと錆びた鋼製の鎖だ。それに両腕を縛られた姿で、暁古城は、安っぽいパイプ椅子に無理やり座らせられていた。
「なんだ……これ……？」
開ききらない瞼を瞬かせながら、古城は困惑顔で頭を上げる。
中世の城館を連想させる、古色蒼然とした部屋だった。不揃いな自然石を積み上げた壁が、ずっしりした質量を感じさせて息苦しい。石壁に穿たれた小さな窓からは、血の色に似た赤い夕陽が射しこんでいる。敷き詰められた絨毯も色褪せた深緋色。見覚えのない部屋だ。

「手錠？」
肌に食いこむ冷たい金属の感触に、古城は低いうめき声を洩らした。どうやら両腕だけでなく、背中側に回された左右の手首も椅子に固定されているらしい。ハリウッド映画などでよく見かける姿勢だ。組織を裏切ろうとしたチンピラが、捕まって拷問されるときのポーズである。
どういうことだよ、と混乱しながら、古城は必死に身体をよじる。
しかし鎖が緩む徴候はなかった。世界最強の吸血鬼、などという馬鹿げた体質を持つ古城の腕力でも振り解けない。単なる鉄の鎖ではなく、魔術的な強化が施されているのかもしれない。
それでも諦めきれずに、古城はしつこく暴れ続ける――と、鎖の軋む音が気に障ったのか、近くにいた誰かが、不機嫌そうに目覚める気配があった。
「ん……？　なに？　なんの音？」
「浅葱？　浅葱か!?」
古城は無理やり首を巡らして、声の方向へと視線を向ける。
縛られた古城と背中合わせになる位置に、椅子に座る少女の姿が見えた。明るく染めた華やかな髪型に、センスよく飾り立てた制服。見慣れた藍羽浅葱の後ろ姿である。
しかし椅子に縛りつけられているのは、彼女も同じだ。違うのは、彼女を固定しているのが鎖ではなく、細身のロープということくらいだろうか。もちろん非力な女子高生の浅葱に、そ